

揖保郡太子町

亀田遺跡 (第2分冊)

— 亀田遺跡Ⅰ地点の調査 —

太子竜野バイパス関係 埋蔵文化財調査報告書

平成12年11月

兵庫県教育委員会



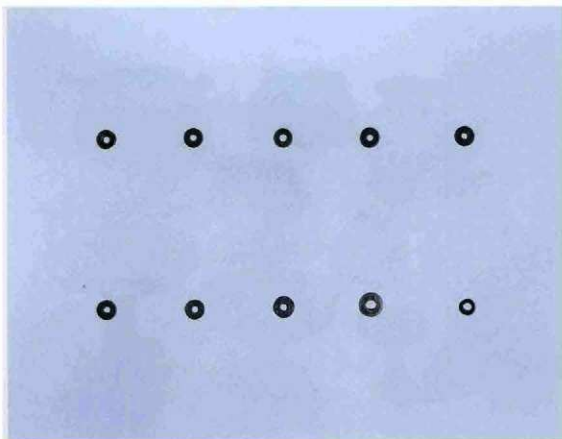
弥生時代埋設土器



SH20 一括出土弥生土器



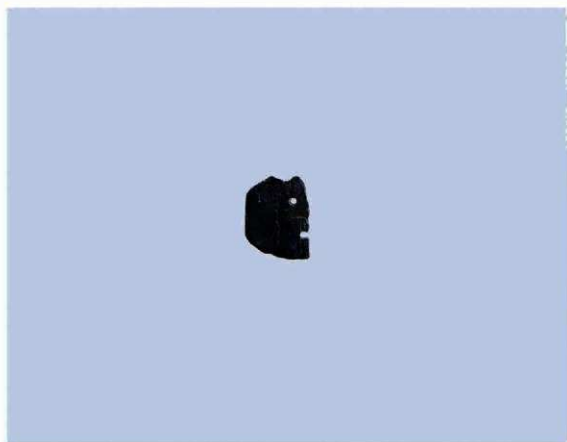
SD1003 流路出土の古墳時代の土器



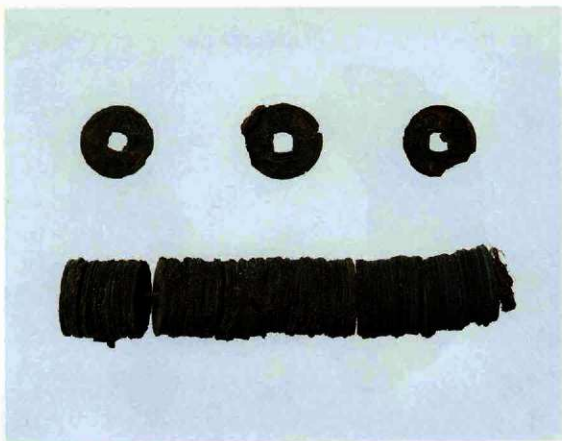
土師器甕内出土の石製小玉



石製子持ち勾玉と翡翠製勾玉



有孔石製品



銅銭結束状況



角杯

本文目次

第6章 No. I地点の遺構

第1節 No. I地点の概要	(別府)	107
第2節 上層遺構	(深江)	108
第3節 竪穴住居	(高木・深江)	108
第4節 孤立柱建物	(高木・深江)	118
第5節 土坑・ピット	(高木・深江)	123
第6節 溝・流路	(高木・深江)	127
第7節 その他の遺構	(高木・深江・別府)	133

第7章 No. I地点の遺物

第1節 土器・土製品		135
1. 確認調査出土土器	(深江)	135
2. 全面調査出土土器		135
弥生時代の土器	(深江)	136
古墳時代の土器	(柏原)	150
奈良時代の遺物	(池田)	159
平安時代以降の遺物	(池田)	161
土製品	(別府)	167
第2節 石器・石製品・玉類	(高木)	168
第3節 金属器	(高木)	176
第4節 木器	(別府)	178

第8章 自然科学的分析の結果

第1節 亀田遺跡出土の管玉の産地分析	(薬科哲男)	180
第2節 亀田遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材産地分析	(薬科)	192
第3節 亀田遺跡から出土した木製品等の樹種	(バリノ・サーヴェイ株式会社)	204
第4節 亀田遺跡から出土した樫突の同定	(バリノ・サーヴェイ株式会社)	215
第5節 亀田遺跡から出土した銅製品の材質	(村上 隆)	219

第9章 まとめ

第1節 弥生時代の亀田遺跡 —土器様相及び周辺集落との係わりについて—	(深江)	221
第2節 亀田遺跡 —古墳時代のまとめ—	(柏原)	233
第3節 奈良時代以降の遺物について	(池田)	238
第4節 亀田遺跡の竪穴住居について	(高木)	244
第5節 亀田遺跡出土土器のまとめ	(高木)	248
第6節 亀田遺跡出土石庖丁の使用痕分析	(高木)	263

巻頭図版 (I 地点)

図版 1	上：弥生時代埋設土器 下：SH20一括出土弥生土器	図版 4	上：石製子持ち勾玉と翡翠製勾玉 下：有孔石製品
図版 2	上：SD1004流域出土の古墳時代の土器 下：土師器甕内出土の小玉	図版 5	上：銅銭結束状況 下：角杯

挿 図 目 次

第10図	花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル	181
第11図	碧玉及び碧玉緑岩の原産地と古墳(統縄文)時代の碧玉製管玉の原材料使用分布圏	182
第12図	亀田遺跡出土管玉(65897)の蛍光X線スペクトル	185
第13図	亀田遺跡出土管玉(65898)の蛍光X線スペクトル	185
第14図	碧玉原石のESRスペクトル(花仙、玉谷、猿八、土岐)	186
第15図	碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル	187
第16図	亀田遺跡出土管玉の信号(Ⅲ)のESRスペクトル	188
第17図	碧玉及び碧玉緑岩の原産地と弥生(統縄文)時代の碧玉製管玉の原材料使用分布圏	189
第18図	サヌカイト及びサヌカイト緑岩石の原産地	194
第19図	木材(1)	209
第20図	木材(2)	210
第21図	木材(3)	211
第22図	木材(4)	212
第23図	木材(5)	213
第24図	木材(6)	214
第25図	種実遺体	218
第26図	亀田遺跡出土銅製品の分析結果(左) 飛鳥池遺跡出土富本銭の分析結果の一例(右)	219
第27図	亀田遺跡出土銅製品	220
第28図	亀田遺跡出土土器の分類①	223
第29図	亀田遺跡出土土器の分類②	224
第30図	亀田遺跡出土土器の分類③	226
第31図	亀田遺跡出土土器の分類④	228
第32図	大津茂川流域及び周辺河川流域の前・中期集落	230
第33図	律令期の亀田遺跡	241
第34図	10世紀以降の亀田遺跡	242
第35図	竪穴住居中央土坑主軸の方位	244
第36図	上：プラン時期別の床面積度数分布 下：弥生中期住居間と床面積の相関	245
第37図	時期別竪穴住居配置図	246
第38図	石鏝の計測方法	248
第39図	石鏝の型式分類	249

第40図	石鎌の形態変移	249
第41図	石鎌重量の類型別度数分布	249
第42図	石鎌の型式別組成比	250
第43図	石鎌型式別長軸比	250
第44図	石鎌の型式分類	251
第45図	削器の計測方法	251
第46図	削器の長さとの重さの相関	252
第47図	楔形石器の型式分類	252
第48図	楔形石器類型別長軸比散布図と厚みの度数分布	253
第49図	敲石と磨石の長幅比	254
第50図	敲石の敲打位置の類型	254
第51図	石斧の計測方法	255
第52図	伐採斧の部分ごとの形態変移	255
第53図	石庖丁の計測方法	256
第54図	砥面の認識	256
第55図	亀田遺跡と石材産地	258
第56図	磨製石庖丁の使用痕強度分布図	264
第57図	顕微鏡写真	267

表 目 次

表27	古墳時代土器観察表 (1)	156
表28	古墳時代土器観察表 (2)	157
表29	古墳時代土器観察表 (3)	158
表30	古墳時代土器観察表 (4)	159
表31	出土遺物観察表 (奈良時代以降) (1)	163
表32	出土遺物観察表 (奈良時代以降) (2)	164
表33	出土遺物観察表 (奈良時代以降) (3)	165
表34	出土遺物観察表 (奈良時代以降) (4)	166
表35	出土遺物観察表 (奈良時代以降) (5)	167
表36	石鎌計測表	169
表37	打製石剣計測表	169
表38	石鎌計測表	170
表39	削器計測表	171
表40	楔形石器計測表	171
表41	磨製石斧計測表	172
表42	石庖丁計測表	173
表43	石錘・敲石・磨石計測表	173
表44	砥石計測表	174
表45	石皿・凹石計測表	174
表46	分割原石計測表	175

表47	玉類計測表	176
表48	耐銭銭貨一覧	177
表49	各珪玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	184
表50	亀田遺跡出土管玉の分析結果	186
表51	亀田遺跡出土管玉の分析結果	188
表52-1	各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	195
表52-2	各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	196
表52-3	各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	197
表53	岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果	198
表54	泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果	198
表55	和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果	198
表56-1	亀田遺跡出土サヌカイト製石器・剥片の元素比分析結果	199
表56-2	亀田遺跡出土サヌカイト製石器・剥片の元素比分析結果	200
表56-3	亀田遺跡出土サヌカイト製石器・剥片の元素比分析結果	201
表57	亀田遺跡出土のサヌカイト石器の原産地推定結果	202
表58	樹種同定結果	205
表59	時代別・用途別の種類構成	207
表60	種実同定結果	216
表61	亀田遺跡出土銅製品の非破壊的手法による蛍光X線分析の結果	219
表62	陶磁器出土点数一覧（口縁部あるいは底部に残るもののみ）	239
表63	器種別出土点数	256

図版目次

図版1	亀田遺跡No. I 地点全体図	図版37	土坑4
図版2	上層遺構1	図版38	土坑5
図版3	上層遺構2	図版39	土坑6
図版4	土層堆積状況図	図版40	土坑7
図版5	亀田遺跡微地形図	図版41	土坑8
図版6	竪穴住居配置図	図版42	柱穴・井戸1
図版7	竪穴住居1	図版43	井戸2
図版8	竪穴住居2 SH07建て替え変遷図	図版44	流路・溝1
図版9	竪穴住居3	図版45	溝2
図版10	竪穴住居4	図版46	溝3
図版11	竪穴住居5	図版47	溝4
図版12	竪穴住居6	図版48	溝5
図版13	竪穴住居7	図版49	溝6
図版14	竪穴住居8	図版50	埋設土器1
図版15	竪穴住居・SH20遺物および炭化材出土状況	図版51	埋設土器2
図版16	竪穴住居・SH20遺物および炭化材出土状況	図版52	埋設土器3

- 図版17 竪穴住居 9
 図版18 竪穴住居10
 図版19 竪穴住居11
 図版20 竪穴住居12
 図版21 竪穴住居13
 図版22 竪穴住居14
 図版23 竪穴住居15
 図版24 竪穴住居16
 図版25 掘立柱建物配置図
 図版26 掘立柱建物 1
 図版27 掘立柱建物 2
 図版28 掘立柱建物 3
 図版29 掘立柱建物 4
 図版30 掘立柱建物 5
 図版31 掘立柱建物 6
 図版32 掘立柱建物 7
 図版33 掘立柱建物 8
 図版34 土坑 1
 図版35 土坑 2
 図版36 土坑 3
 図版73 古墳時代の土器 2 (流路)
 図版74 古墳時代の土器 3 (流路)
 図版75 古墳時代の土器 4 (流路・包含層)
 図版76 奈良時代の土器 1 (井戸・土坑)
 図版77 奈良時代の土器 2 (土坑・溝・流路)
 図版78 奈良時代の土器 3 (流路・包含層)
 平安時代以降の土器 1 (ピット)
 図版79 平安時代以降の土器 2 (土坑・溝・流路)
 図版80 平安時代以降の土器 3 (包含層)
 図版81 打製石鏃 1
 図版82 打製石鏃 2・磨製石鏃・打製石剣 1
 図版83 打製石剣 2・磨製石剣・石鏃・削器 1
 図版84 削器 2
 図版85 削器 3
 図版86 削器 4
 図版87 削器 5
 図版88 削器 6・楔形石器 1
 図版89 楔形石器 2
 図版90 楔形石器 3
 図版91 磨製石斧 1
 図版92 磨製石斧 2
 図版93 磨製石斧 3
 図版53 埋設土器 4
 図版54 埋設土器 5
 図版55 上層水田と土器出土状況
 図版56 下層水田及び構状遺構
 図版57 地震痕跡
 図版58 確認調査出土土器
 図版59 弥生時代の土器 1 (竪穴住居)
 図版60 弥生時代の土器 2 (竪穴住居・土坑)
 図版61 弥生時代の土器 3 (土坑)
 図版62 弥生時代の土器 4 (土坑)
 図版63 弥生時代の土器 5 (土坑)
 図版64 弥生時代の土器 6 (土坑)
 図版65 弥生時代の土器 7 (土坑・ピット)
 図版66 弥生時代の土器 8 (ピット・埋設土器)
 図版67 弥生時代の土器 9 (埋設土器・溝)
 図版68 弥生時代の土器 10 (溝)
 図版69 弥生時代の土器 11 (溝・流路)
 図版70 弥生時代の土器 12 (流路・包含層)
 図版71 弥生時代の土器 13 (包含層)
 図版72 古墳時代の土器 1 (竪穴住居・土坑・溝・流路)
 図版114 木器 3 (流路)
 図版115 木器 4 (流路)
 図版116 木器 5 (流路)
 図版117 木器 6 (流路)
 図版118 木器 7 (流路)
 図版119 木器 8 (流路)

- 図版94 磨製石斧4・磨製石庖丁・石錐
図版95 礫石・磨石1
図版96 礫石・磨石2, 砥石1
図版97 砥石2
図版98 砥石3
図版99 砥石4
図版100 石皿・凹み石
図版101 台石
図版102 分割原石1
図版103 分割原石2
図版104 ナイフ形石器・玉類・石製品
図版105 土製品1 (土器・有孔円盤・不明品)
図版106 土製品2 (樽形・分銅形・皮袋形)
図版107 金属器
図版108 銅銭1
図版109 銅銭2
図版110 銅銭3
図版111 銅銭4
図版112 木器1 (ピット)
図版113 木器2 (ピット・土坑)

写真図版目次（I地点）

- 図版1 遺跡遠景（南から）
No. I地点全景（東から）
- 図版2 A・D区全景（真上から）
A区全景（東から）
A区東半部全景（南から）
- 図版3 A区流路西遺構群（東から）
A区流路東遺構群（北から）
A区流路上面遺構群（北から）
- 図版4 B-1・4区（東から）
B-4区南端遺構群（北東から）
B-2区（東から）
- 図版5 B-2区（南から）
B・C-1区（西から）
- 図版6 B-3区（北から）
B-3区（西から）
B-3区南半（東から）
- 図版7 B-7, 8区（北から）
B-7, 8区（南から）
B-7区上面遺構群（西から）
- 図版8 C区北半遺構群（南から）
C区（南から）
- 図版9 D区（東から）
D区（南から）
- 図版10 D-5, 7区（南から）
D-4, 6区（東から）
D-4, 6区（北から）
- 図版11 D-4区南半（北東から）
左：E区東半（西から）
右：E区西半（東から）
E区全景（南から）
- 図版12 F区全景（南から）
F区西半（東から）
- 図版13 SH01（西から）
SH02, 03（南から）
SH04（西から）
- 図版14 SH05検出状況（西から）
SH05（西から）
SH05中央土坑（東から）
- 図版15 SH06（北から）

- SH07 (東から)
SH09, 10 (南から)
- 図版16 左: SH09周壁溝内石筭出土状況 (南から)
右: SH10内土坑セクション (南から)
SH11 (北から)
SH12 (南から)
- 図版17 左: SH12内土坑上面土器、及び竈出土状況 (西から)
右: SH12床面古墳時代土師器出土状況 (西から)
SH13 (西から)
SH14 (北から)
- 図版18 SH15 (南から)
SH16 (北から)
SH17 (西から)
- 図版19 左上: SH15中央土坑 (西から)
右上: SH17作業風景
左下: SH17中央土坑 (西から)
右下: SH18中央土坑 (西から)
SH18 (西から)
SH18と排水溝 (北西から)
- 図版20 SH19検出状況 (北西から)
SH19 (北東から)
左: SH19中央土坑 (南東から)
右: SH20作業風景
- 図版21 SH20検出状況 (西から)
SH20炭化材・遺物出土状況 (西から)
- 図版22 SH20炭化材配置状況
SH20 (西から)
- 図版23 SH中央土坑 (東から)
SH21～23 (東から)
SH21検出状況 (西から)
- 図版24 SH21 (南から)
SH21中央土坑 (南から)
SH22・23 (北から)
- 図版25 左: SH21中央土坑 (東から)
右: SH22・23中央土坑 (西から)
調査区北東掘立柱建物跡群 (西から)
- 図版26 SB01 (西から)
SB02 (南から)
SB03 (南から)
- 図版27 SB04 (南から)
SB05 (西から)
SB10 (南から)

- 図版28 SB11 (南から)
SB13 (西から)
SB14 (南から)
- 図版29 SB15 (南から)
SB17 (北から)
SB18 (北から)
SB17・18 (西から)
- 図版30 左上: SK207 (北東から)
右上: SX06 (西から)
左下: SK357 (南から)
右下: SK363 (南から)
SK458 (北から)
左: SK455 (西から)
右: SK455 (南東から)
- 図版31 左: SK458 (東から)
右: SK459 (北から)
SK251 (西から)
左上: SK251 (北東から)
右上: SK251セクション (西から)
SK418 (南から)
- 図版32 SK401弥生土器出土状況 (西から)
下段: 出土状況アップ
- 図版33 左: SK402弥生土器出土状況 (東から)
右: SK402棺材出土状況 (東から)
左: SK402弥生土器完備状況 (東から)
右: SK403 (東から)
SK411 (東から)
- 図版34 左上: SK411出土状況アップ
左下: SK419出土状況アップ
右: SK420 (南から)
左上: SK404 (西から)
右下: SK412 (南西から)
左下: SK111 (東から)
右下: SK410 (西から)
下段左: SP548 (西から)
下段中: SP151上面 (西から)
下段右: SP151下面 (西から)
- 図版35 SE101 (南から)
SE601 (南から)
SE201 (南から)
- 図版36 SE301セクション (東から)
SE301敷石・梓材検出状況 (東から)

- SE301定掘状況（東から）
- 図版37 SE301井戸枠内埋土セクション（東から）
ST01（北から）
左：ST01棺身（西から）
右：ST02（北から）
- 図版38 ST03（東から）
ST04（南から）
ST05（南東から）
- 図版39 ST06（東から）
ST06断ち割り状況（南から）
左：ST06（南上から）
右：ST06完掘状況（南から）
- 図版40 左：ST07（南から）
右：ST07確埋積状況（西から）
ST08（西上から）
左：ST08曝除去後状況（西から）
右：ST09（西から）
- 図版41 流路東端セクション（西から）
SD1001（北西から）
SD1002西肩製塩土器出土状況（南から）
- 図版42 SD1002西肩セクション（南から）
SD1002南半（北東から）
左：SD1001セクション（西から）
右：SD1002南端②西側セクション（南から）
- 図版43 SD1002②セクション（南西から）
SD1002①北側セクション（南東から）
SD1003（南から）
- 図版44 SD1003①北端セクション（南から）
SD1003②中央セクション
手前わずかに遺存する柵（南から）
SD1003③南端セクション（南から）
左上：SD1005⑤セクション（東から）
左下：SD1006④セクション（東から）
右：SD1003古墳時代土師器出土状況遠景（南西から）
- 図版45 SD1003古墳時代土師器出土状況（東から）
左：古墳時代土師器出土状況（南から）
右：掘削作業風景
SD326遺物出土状況（北から）
- 図版46 左：SD289遺物出土状況（南から）
右：SD602遺物出土状況（東から）
左：SD236遺物出土状況（南から）
右：SD455遺物出土状況（南から）

- 左上：SD262（北から）
 左中：SD318（北から）
 左下：SD401（西から）
 右上：SD608（西から）
 右下：SD402（南から）
- 図版47 上層水田面（北から）
 左：上層水田畦畔肩部分
 須惠器出土状況（北から）
 右：上層水田畦畔肩部分
 須惠器出土状況近景
 下層水田面（南東から）
- 図版48 SD1003内橋脚状遺構（南から）
 SD1003内橋脚状遺構（東から）
 SD1003内橋脚状遺構断面割り状況（南から）
- 図版49 SD1004（南から）
 左：噴砂の調査
 右：噴砂断面割り断面
 銅銭出土状況
- 図版50 確認調査出土土器1
 図版51 確認調査出土土器2・
 弥生時代の土器1（竪穴住居）
- 図版52 弥生時代の土器2（竪穴住居）
 図版53 弥生時代の土器3（竪穴住居）
 図版54 弥生時代の土器4（竪穴住居・土坑）
 図版55 弥生時代の土器5（土坑）
 図版56 弥生時代の土器6（土坑）
 図版57 弥生時代の土器7（土坑）
 図版58 弥生時代の土器8（土坑）
 図版59 弥生時代の土器9（土坑）
- 図版60 弥生時代の土器10（土坑・ビット）
 図版61 弥生時代の土器11（ビット）
 図版62 弥生時代の土器12（埋設土器）
 図版63 弥生時代の土器13（埋設土器・溝）
 図版64 弥生時代の土器14（溝）
 図版65 弥生時代の土器15（溝）
 図版66 弥生時代の土器16（溝・流路）
 図版67 弥生時代の土器17（流路）
 図版68 弥生時代の土器18（流路）
 図版69 弥生時代の土器19（流路・包含層）
 図版70 弥生時代の土器20（包含層）
 図版71 弥生時代の土器21（包含層）
 図版72 古墳時代の土器1（竪穴住居・土坑・水田）

- 図版73 古墳時代の土器2 (溝)
- 図版74 古墳時代の土器3 (流路)
- 図版75 古墳時代の土器4 (流路)
- 図版76 古墳時代の土器5 (流路)
- 図版77 古墳時代の土器6 (流路)
- 図版78 古墳時代の土器7 (流路)
- 図版79 古墳時代の土器8 (流路)
- 図版80 古墳時代の土器9 (流路)
- 図版81 奈良時代の土器1 (井戸・土坑)
- 図版82 奈良時代の土器2 (土坑)
- 図版83 奈良時代の土器3 (土坑・溝)
- 図版84 奈良時代の土器4 (流路・包含層)
- 図版85 平安時代以降の土器1 (ピット)
- 図版86 平安時代以降の土器2 (土坑・溝)
- 図版87 平安時代以降の土器3 (流路)
- 図版88 平安時代以降の土器4 (包含層)
- 図版89 平安時代以降の土器5 (包含層)
- 図版90 石鎌 (打製・磨製)
- 図版91 尖頭器・打製石剣
磨製石剣 (銅剣型・鉄剣型)・石鎌
- 図版92 削器1
- 図版93 削器2
- 図版94 削器3
- 図版95 削器4 楔形石器1
- 図版96 楔形石器2・磨製石斧1 (伐採斧)
- 図版97 磨製石斧2 (伐採斧・加工斧)
- 図版98 磨製石斧3 (加工斧)
- 図版99 磨製石斧4 (加工斧)・磨製石庖丁・石錘1
- 図版100 石錘2・敲石1
- 図版101 敲石2
- 図版102 磨石
- 図版103 砥石1
- 図版104 砥石2
- 図版105 凹石・石皿
- 図版106 分割原石1
- 図版107 分割原石2
- 図版108 台石・ナイフ形石器・石帯
石製紡錘車・盤状石製品・石鍋
- 図版109 土製品1 (上:土鍾, 下:有孔円板)
- 図版110 土製品2
- 図版111 金属器1
- 図版112 金属器2

- 図版113 銅銭1
- 図版114 銅銭2
- 図版115 銅銭3
- 図版116 銅銭4
- 図版117 木器1 (ビット・土坑)
- 図版118 木器2 (流路)
- 図版119 木器3 (流路)
- 図版120 木器4 (流路)
- 図版121 木器5 (流路)

第6章 No. I地点の遺構

第1節 No. I地点の概要

No. I地点は太子・竜野バイパスの南側の地区で、「D」字形をしたインターチェンジ部分と、県道の西側の大津茂川までの拡幅部のE区に分かれる。インターチェンジ部はAからD区と現在の水路が流れるF区があり、No. II地点に比べるとゆるやかに西に向かって下っている地形であり、近世以降の水田造営による削平も比較的少ない。

遺構面は基本的に1面で検出されているが、調査区の南東、SD1001、1002の周辺では平安時代以降とそれ以前の2面に分かれて遺構面が検出された。また、西側の沖積地では水田跡が複数面で検出された。東半部の扇状地地形でも洪水砂が被っている部分があるが、比較的小規模で部分的なものである。洪水砂から出土する土器も、弥生時代後期から古墳時代前期に限られるものや平安時代の土器が含まれるものなど時代的な差も見られる。

西端のE区では洪水砂を被った平坦面と畦畔の高まりを検出しており、更に下層は旧河道と思われたが、調査範囲が狭小であるため下層までは調査できなかった。上層で検出できた水田跡からは打製石剣などが出土しているが、時期を決定するには至らない。

インターチェンジ部の西端にあたるD区は沖積地地形となり、旧河道・流路や水田跡が検出された。

旧河道・流路中にはしがらみ遺構や橋状遺構も検出されている。水田は2面で検出され、上面では方位を南北にもつ大畦畔が伴っている。また、下層水田はいわゆる不定形小区画水田である。畦畔の横や流路内から完形の土器がまとめて出土しており、何らかの祭祀の痕跡として捉えることができよう。これらは古墳時代のもと考えられる。その他にも竪穴住居跡21～23の西側で検出された小溝群は弥生時代の畝状遺構の可能性が考えられる。

弥生時代の遺構はほぼ全面にわたって検出された。竪穴住居跡は調査区の中央にまとめて分布しているが、西側に行くほど小型化する傾向がある。平面形態が円形のものや隅円方形のものが見られ、所謂「いちまる」タイプの中央土坑をもつものが多い。1～4回の建て替えが見られるものがある。また、突出部をもつ住居跡も見られる。この内SH20は弥生時代の中期の焼失住居であり、多くの土器が残されていた。埋設土器も多く検出された。いくつかは土器棺として認定できそうであるが、中には土器の中に磔を詰め込んだものや、同一土坑内に板材を立てたものなど特異なものも見られる。

古墳時代の遺構は調査区北辺で布留式土器併行期の竪穴住居跡が、調査区西端に当たるD区北半では、流路中の囲や、祭祀的行為とみられる土師器の一括廃棄、水田跡などが検出された。ただ当地点において古墳時代の遺構は全体的に希薄であり、包含層からの遺物も相対的に少ない。分布の中心はバイパスの下から北側にかけて広がるものと考えられる。

奈良～平安時代の遺構は調査区東半B-8区付近を中心にみられ、井戸、土坑、掘立柱建物などがある。また、SD1002の肩からは大量の製塩土器が須恵器の坏類とともに廃棄されていた。

掘立柱建物跡が検出されたのは、調査区の東半にあたるB-8区からC区に集中している。出土遺物に乏しく時期の決定ができないものもあるが、これら掘立柱建物の時期は律令期～13世紀におよぶと考えられる。

中世の遺構は調査区南端、特に南東隅に集中している。A・H区とB・C区南半にあたる部分になる。

復元できた掘立柱建物はわずかであるが、流路埋没後に営まれたピットや溝、耕作による鋤溝などが検出されている。このほか鋸鉄の埋納もみられた。

また、遺構ではないが地震痕跡が検出されている。流路SD1003の東側で検出された噴砂痕跡は切り合い関係から貞観十年七月の播磨大地震による可能性が高く、山崎断層の影響が約15km南の地まで達していたことがうかがわれる。

出土した遺物は特徴的なものとして、弥生時代では分銅形土製品、木製高杯未製品、打製石剣、大型のサヌカイト剥片、古墳時代では、角杯、子持勾玉、奈良時代では銅製の巡方などがある。また時期は特定できないが皮袋形土製品などがある。また、遺構を伴わないが、旧石器時代ではナイフ形石器、縄文時代では縄文晩期の土器片や、石鏃などがみついている。

第2節 上層遺構

本調査における遺構については、遺跡が沖積地上に立地する関係上、複数の遺構面が想定されるものの、後世の削平や土壌化等による影響から、実態としてはほぼ同一面での検出がされている。しかし、部分的には土石流等の二次的堆積により、明らかに複数の遺構面が確認できた。ここで検出した遺構面の下層には、別の古い時期の遺構が存在していることから、調査の工程上除去せざるを得ない。従って、除去した遺構のみを図示して解説を加えた。また、流路の埋土上で検出し、除去した遺構についても同様に取り扱った。ここで検出した遺構は、便宜上「上層遺構1・2」と呼称する。

上層遺構1 (図版2 写真図版7)

検出状況 平成6年度に調査したB-7地区に位置する。東西に流れる溝 (SD1001) の南側の、土石流による硬泥じり堆積層上で検出した。

遺構 検出した遺構は全てピットである。

出土遺物 検出したピット中、P47では陶器製の鉢 (290) が、P274では須恵器小皿 (293) と土師器小皿 (294) が出土している。

上層遺構2 (図版3)

検出状況 平成6年度に調査したA-3地区に位置する。南北に流れる溝 (SD1002) の埋土上に検出した。

遺構 検出した遺構は、ピット及び土坑、そして溝である。

出土遺物 検出したピット中、P151では土師器小皿 (287)・白磁碗 (288)・土師器鍋 (289)、P152では青磁碗片 (285)、P156では青磁碗片 (286) が出土している。

以上、上層遺構1・2については、層位的にも出土遺物からも中世の遺構である事が分かった。

第3節 竪穴住居

SH01 (図版20 写真図版13)

検出状況 西半および北半のほとんどを後世の地形改変により削平されている。

規模・形態 平面は円形を呈するものと考えられるが、全体の規模はわからない。

屋内施設 周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝 住居跡の遺存するところでは、全周している。床面での幅8～15cm、床面からの深さ約13～18cmである。

柱穴 総数5基を検出したが、主柱穴と特定し得たものはない。ピットの掘り方は径18～35cm、床面からの深さで15～22cmの規模である。

出土遺物 埋土中から土器片がわずかに出土している。

SH02 (図版24 写真図版13)

検出状況 調査区北端に位置する。調査区外へと広がっている。SH03と切り合って検出した。

規模・形態 平面は方形を呈し、4.23×4.53mである。

屋内施設 周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝 東側のコーナー部分で一部確認した。南壁から西壁にかけては検出できなかった。床面での幅13～25cm、床面からの深さ約6cmである。

柱穴 総数9基を検出したが、主柱穴を特定できなかった。ピットの掘り方は径25～40cm、床面からの深さで5～15cmの規模である。

出土遺物 埋土中から多量の土器片が出土しているが、後世の遺物の混入も多い。

SH03 (図版24 写真図版13)

検出状況 調査区北端に位置する。約半分が調査区外へと広がっている。SH02と切り合って検出した。

規模・形態 平面は方形を呈し、3.95×4.40mである。

屋内施設 周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝 一部途切れるが、壁に沿って巡っている。床面での幅15～34cm、床面からの深さ約10cmである。

柱穴 総数4基を検出したが、主柱穴を特定できなかった。ピットの掘り方は径32～42cm、床面からの深さで5～10cmの規模である。

出土遺物 埋土中から多量の土器片が出土しているが、後世の遺物の混入も多い。甕(9)、鉢(10)を図化している。

SH04 (図版23 写真図版13)

検出状況 西半を後世の地形改変により削平されている。約半分を検出した。

規模・形態 平面は方形を呈する。南北方向で4.30mを測る。

屋内施設 周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝 掘り方が遺存していないため、周壁溝の遺存によって住居跡を確認した。床面での幅11～26cm、床面からの深さ約6cmである。

柱穴 総数11基を検出したが、主柱穴は特定できなかった。ピットの掘り方は径26～55cm、床面からの深さで17～36cmの規模である。

出土遺物 ピットからわずかに土器片が出土しているが、時期を特定できるものはない。

SH05 (図版7 写真図版14)

検出状況 西端を後世の地形改変により削平されている。ほぼ全体を検出した。周壁溝の検出状況から拡張が1度おこなわれたことがうかがわれる。

また、床面には、焼土および炭化材などが遺存しており、焼失したものと考えられる。

規模・形態 平面は円形を呈する。拡張前で径6.77m、拡張後では径7.32mを測る。

屋内施設 周壁溝・排水溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝 一部、後世のビットに切られているが、全周している。床面での幅は内側のもので15～33cm、外側のもので15～38cm、床面からの深さは内側、外側共に約12cmである。

排水溝 中央土坑と周壁溝を結ぶ形で検出した。検出面での幅は、中央土坑とのとりつき部分で東西共に32cm、東溝で最大40cm、西溝で最大48cmを測る。深さは約14cmである。

中央土坑 中央部で検出した。土坑0はいびつな長楕円形を呈し、長軸方向で202cm、短軸方向で152cm、床面からの深さ45cmを測る。土坑1は長楕円形を呈し、長軸方向で193cm、短軸方向で32cm、床面からの深さ13cmを測る。土坑0では2層と3層の境で炭を多く検出している。また、土坑1では埋土全体に炭が多く含まれていた。なお、土坑0から板状鉄弁の破片が出土している。また、土坑0と1間の両脇に対峙して2基のビット(P11、P12)が検出されている。その機能は測りがたいが、意図的に配置し構築してあるものと思われる。

柱穴 総数38基を検出したが、このうち主柱穴と考えられるのは10基である。すなわち、拡張前のものがP1-P2-P3-P4-P5-P6の6基、拡張後がP6-P7-P8-P9-P10の5基である。P6は共有したものと考えている。柱穴間距離は拡張前で最大がP1-P2間の2.56m、最小がP3-P4間の2.08m、平均柱穴間距離は2.40m、拡張後で最大がP6-P7間の3.06m、最小でP9-P10間の2.70m、平均柱穴間距離は2.85mである。P1は掘り方径31cm、床面からの深さ24cm、P2は掘り方径22cm、床面からの深さ8cm、P3は掘り方径36cm、床面からの深さ40cm、P4は掘り方径28cm、床面からの深さ37cm、P5は掘り方径26cm、床面からの深さ14cm、P6は掘り方径36cm、床面からの深さ17cm、P7は掘り方径38cm、床面からの深さ21cm、P8は掘り方径31cm、床面からの深さ28cm、P9は掘り方径24cm、床面からの深さ59cm、P10は掘り方径28cm、床面からの深さ31cmを測る。

出土遺物 床面および埋土中から土器片が出土しているが、図化できるものはなかった。中央土坑から板状鉄弁片(F1)が出土している。

SH06 (図版17 写真図版15)

検出状況 SH07の南東側約18mに位置する。遺構の南西側は流路に切られる。また、北半部は後世の削平によるものか、掘り方が確認できなかった。検出状況から、竪穴住居跡、あるいは溝状の遺構といった、複数の解釈がある。

規模・形態 平面は円形に近い隅円方形を呈すると考えられ、延長は復元南北870cm、東西910cmである。

屋内施設 周壁溝・土坑・柱穴を検出した。

周壁溝 屋内の南東側と西側の一部で検出した。床面での幅30～40cm、床面からの深さ20～50cmである。なお、この遺構については古墳時代の溝(図版48 SD602)の可能性があり、溝としての詳細は別項において記述している。

土坑 屋内中央からやや北よりで検出した。長方形を呈する土坑で、長辺115cm、短辺65cm、床面からの深さ23cmである。

柱穴 総数は32基を検出したが、主柱穴は検出できなかった。柱穴は大きいもので掘り方径50cm、床面からの深さ15cm、小さいもので掘り方径18cmを測る。

出土遺物 土器が殆ど周壁溝から出土した。出土土器は、二重口鉢蓋(172・173)・手形形土器(174)を出土し、5世紀後半のものと考えられる。

SH07 (図版8 写真図版15)

検出状況 中央部分は擾乱を受けている。周壁溝が少なくとも5条巡っていることから、4度建て替えがおこなわれたものと考えられる。推定される変遷を1～5で示した。また、ベースとなる土壌が礫を多量に含む層であったため、検出は困難であった。

規模・形態 平面は円形を呈する。規模については変遷図に従い、1～5期で見ていく。1期では径4.85×5.40m、2、3期では径6.25m、4期では5.10×6.42m、5期では9.50×7.32を測る。

屋内施設 周壁溝・排水溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝 平面円形に巡るものと考えられるが、いずれの溝も、若干四隅で角張るように見受けられる。以下、変遷図に従って周壁溝1～5で呼称する。周壁溝1は床面での幅14～40cm、床面からの深さ約9cm、周壁溝2、3は床面での幅16～40cm、床面からの深さ約7cm、周壁溝4は床面での幅18～48cm、床面からの深さ約15cm、周壁溝5は床面での幅16～30cm、床面からの深さ約9cmである。

中央土坑 中央部で2基検出した。

土坑1 平面形は楕円形を呈し、長軸方向で100cm、短軸方向で65cm、床面からの深さ14cmを測る。

土坑2 削平を受けているため、床面より低いレベルで検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸方向で90cm、短軸方向で65cm、床面からの深さ14cmを測る。

柱穴 総数53基を検出したが、このうち主柱穴と考え得るものは20基である。

1期はP1-P2-P3-P4の4基で、柱穴間距離は最大でP3-P4間の2.70m、最小でP1-P2間の2.40m、平均柱穴間距離は2.60mである。P1は掘り方径30cm、床面からの深さ39cm、P2は掘り方径38cm、床面からの深さ55cm、P3は掘り方径28cm、床面からの深さ44cm、P4は掘り方径25cm、床面からの深さ29cmを測る。

2、3期はP5-P6-P7-P8の4基で、柱穴間距離は最大でP8-P5間の2.38m、最小でP7-P8間の1.92m、平均柱穴間距離は2.60mである。P5は掘り方径40cm、床面からの深さ31cm、P6は掘り方径40cm、床面からの深さ31cm、P7は掘り方径48cm、床面からの深さ15cm、P8は掘り方径35cm、床面からの深さ16cmを測る。

4期はP9-P6-P10-P11-P12,13の5基である。検出はできなかったが、P12,13-P9間には本来1基柱穴があったものと考えている。このうちP12,13のいずれが妥当であるかは判断できなかったため両方の可能性を示しておく。よって、未検出のもの1基を含めた5本柱の建物と考えている。柱穴間距離は最大でP10-P11間の2.80m、最小でP11-P12間の1.70m、P12を選択しない場合はP6-P10間の1.98m、平均柱穴間距離はP12を選択した場合2.27m、P13を選択した場合2.44mである。P9は掘り方径45cm、床面からの深さ6cm、P10は掘り方径32cm、床面からの深さ19cm、P11は掘り方径20cm、床面からの深さ16cm、P12は掘り方径42cm、床面からの深さ19cm、P13は掘り方径29cm、床面からの深さ12cmを測る。

5期はP14-P15-P16-P17-P18-P19-P20の7基である。やはり検出はできなかったがP20-P14間に本来1基柱穴があったものと考えている。よって主柱穴は8本柱であったということになる。柱穴間距離は最大でP14-P15間の2.60m、最小でP17-P18間の1.65m、平均柱穴間距離は2.24mである。P14は掘り方径22cm、床面からの深さ6cm、P15は掘り方径35cm、床面からの深さ16cm、P16は掘り方径42cm、床面からの深さ28cm、P17は掘り方径32cm、床面からの深さ19cm、P18は掘り方径32cm、床面からの深さ20cm、P19は掘り方径21cm、床面からの深さ11cm、P20は掘り方径27cm、床面からの深さ23cmを測る。

出土遺物 埋土中から多量の土器片、サヌカイトチップなどが出土しているが、後世の遺物の混入も多い。有孔円盤(365)を図化した。

SH08 (図版17)

検出状況 調査区北端に位置する。上面は削平を受けているため遺存状況はきわめて悪い。

規模・形態 平面は東西方向にやや長い隅円方形を呈し、5.45×5.20mである。

屋内施設 排水溝・中央土坑・柱穴を検出した。

排水溝 中央土坑から北東方向にのびて壁に至る。床面での幅20~28cmである。検出面からの深さは2~3cmで、明確な掘り方は認められなかった。

中央土坑 中央部で検出した。平面形は不定形で、掘り方は皿状に窪んでおり明確な立ち上がりは見られない。長軸方向で210cm、短軸方向で50~70cmを測る。また床面からの深さは8cmである。

柱穴 総数11基を検出したが、主柱穴を特定することはできなかった。ピットの規模は、掘り方で径18~52cm、床面からの深さで16~45cmである。

出土遺物 土器の細片が出土しているが、いずれも図化にたえない。

SH09 (図版20 写真図版15)

検出状況 調査区中央北端に位置し、調査区外へと広がっている。さらに、SH10に切られているため、検出できたのは全体の1/4以下にとどまる。

規模・形態 平面は円形を呈するものと思われる。全体の規模は復元しながらいが、径8m前後はあるものと推定できる。

屋内施設 周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝 壁に沿って巡っている。床面での幅25~49cm、床面からの深さ約16cmである。

柱穴 総数7基を検出した。そのうち1基を主柱穴と推定した。P1は掘り方径43cm、床面からの深さは22cmを測る。

出土遺物 床面から柱状片刃石斧(S107)、磨製石鏃(S39)が出土している。また、弥生土器片、サヌカイト片もあるが、図化できなかった。

SH10 (図版21 写真図版15)

検出状況 調査区中央北端に位置し、SH09を切っている。一部は調査区外へと広がっているが、ほぼ全体を検出した。ただし、西半部はSD288、289と重なっている。

規模・形態 平面は南北にやや長い方形を呈し、5.25×5.07mの規模である。

屋内施設 周壁溝・土坑・柱穴を検出した。

周壁溝 床面での幅10～25cm、床面からの深さ20cmである。

土坑 2基検出している。

土坑1 西壁際の中央部に位置し、周壁溝を切る形で検出した。切り合い関係にあるとも捉えられるが、検出時に明確な埋土の差を認識できないことから、住居跡の施設と考えている。平面は長楕円形を呈し、127×56cm、一段深いところで104×44cmの規模である。検出面からの深さは20cmである。

土坑2 東壁際の中央部に位置し、周壁溝にとりつく形で構築してある。平面は楕円形を呈し、59×97cmを測る。床面からの深さは17cmである。

柱穴 総数14基を検出した。そのうち主柱穴と考えられるのは2基である。元来は4本の主柱穴があったものと想定したが、P1、P2に対応する柱は溝に切られているため検出できなかった。P1は掘り方径35cm、床面からの深さ23cm、P2は掘り方径25cm、床面からの深さ19cmである。

出土遺物 土器の細片が出土しているが、図化はしていない。

SH11・24 (図版23 写真図版16)

SH24

検出状況 調査区北端に位置する。約半分は調査区外へと続く。南西端をSH12に切られる。当初、屋内高床部を持つ1棟の住居跡と考えていたが、隅円方形の住居跡SH11と方形住居跡SH24が切り合って重なっているものと判断した。

規模・形態 平面形は方形を呈する。東西方向で一辺3.25mを測る。

屋内施設 周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝 床面での幅7～13cm、床面からの深さ5cmを測る。

出土遺物 埋土中から多量の弥生土器と土師器の破片が出土しているが、それぞれの住居に確実に伴うと判断できるような遺物は見られない。

SH11

規模・形態 平面形は隅円方形を呈する。一辺およそ4m程度の規模であると考えられる。

屋内施設 周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝 南辺の中央部で一部途切れる。床面での幅19～29cm、床面からの深さ約8cmである。

中央土坑 中央部で検出した。SH23によって削平されており、掘り方はほとんど遺存していない。土坑0は隅円の長方形を呈するものと思われる。短軸方向で54cm、検出面からの深さは3cmである。土坑1は長楕円形を呈するものと思われ短軸方向で24cm、検出面からの深さは2cmである。

柱穴 総数6基を検出したが、主柱穴となるものは特定できなかった。ピットの規模は、掘り方で径18～28cm、床面からの深さで16～30cmである。

SH12 (図版22 写真図版16)

検出状況 調査区北端に位置する。北側に隣接するSH11を切っている。全体を検出した。

規模・形態 平面は南北にやや長い方形を呈し、4.47×4.20mである。

屋内施設 周壁溝・土坑・柱穴を検出した。

周壁溝 北東隅および西壁際の南よりの一部で、途切れているためか、検出できない箇所があった。床面での幅11～33cm、床面からの深さ約10cmである。

土坑 東壁際中央部で検出した。周壁溝にとりつく形で構築してある。平面は円形を呈し、71×65cmを測る。床面からの深さは12cmである。埋土中には、こぶし大の礫が多量に混じていた。

柱穴 総数42基を検出したが、このうち配置状況から主柱穴と考え得るものは10基である。P1-P2.3-P4-P5とP6-P7-P8-P9の2通りの可能性が高いと考える。平均主柱穴間距離は前者で2.86m、後者で1.80mを測る。前者の柱間距離がやや広すぎるきらいがあることから、後者の組み合わせの方が妥当であろうか。P1は掘り方径30cm、床面からの深さ18cm、P2は掘り方径26cm、床面からの深さ12cm、P3は掘り方径28cm、床面からの深さ12cm、P4は掘り方径28cm、床面からの深さ15cm、P5は掘り方径33cm、床面からの深さ17cm、P6は掘り方径30cm、床面からの深さ45cm、P7は掘り方径35cm、床面からの深さ25cm、P8は掘り方径38cm、床面からの深さ13cm、P9は掘り方径28cm、床面からの深さ7cmを測る。

出土遺物 床面から出土した甕3個体(161,162,163)を図化した。

SH13 (図版21 写真図版17)

検出状況 後世の地形改変により削平されているため、ほぼ床面での検出となった。特に西半部は削平が著しいため消失している。

規模・形態 平面は方形を呈する。遺存している東壁で5.15mを測る。

屋内施設 周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝 床面での幅18～39cm、床面からの深さ約7cmである。

柱穴 総数6基を検出したが、主柱穴は特定できなかった。ピットの掘り方は径26～42cm、床面からの深さで12～30cmの規模である。

出土遺物 住居に確実に伴う遺物はない。

SH14 (図版10 写真図版17)

検出状況 後世の地形改変により削平されているため、遺存状況は悪い。SD290などに切られている。周壁溝の検出状況から、建て替えがおこなわれたことがうかがわれる。

規模・形態 平面はほぼ円形を呈し、7.30×7.86mの規模である。

屋内施設 周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝 2条検出した。外側のものは削平されている箇所を除けば、ほぼ全周する。内側のものは南端から東側へ向かって約1/6ほど検出したにとどまる。西端は外側の周壁溝に切られているようである。外側のもので床面での幅19～60cm、床面からの深さ約19cm、内側のもので床面での幅28～50cm、床面からの深さ約6cmである。

中央土坑 中央部で検出した。10土坑。土坑0は平面隅長方形形を呈し、170×103cm、床面からの深さ16cmを測る。土坑1は細長い楕円形を呈し、長軸方向に165cm、幅40cm、床面からの深さ6cmである。掘り方は皿状の断面形を呈している。埋土は炭を多く含んでいた。また、土坑0と土坑1の間で、意図的に配置されたと思われる2基のピット(P7,P8)が検出されている。P7は掘り方径35cm、床面からの深さ27cm、P8は掘り方径60cm、柱径直径35cm、床面からの深さ16cmを測る。

柱穴 総数32基を検出したが、このうち主柱穴と考え得るものはP1～P6までの6基である。ただP3-P4間の距離3.75mは、他と比較したとき飛び抜けて長いことから、この間にもう1基柱穴があったと考えるのが妥当である。おそらくSD290に切られているために、検出できなかったものであろう。すなわ

ち、元来の主柱穴は7基あったことになる。P3-P4間を除いた平均主柱穴間距離は2.24mを測る。P1は掘り方径35cm、床面からの深さ19cm、P2は掘り方径37cm、床面からの深さ35cm、P3は掘り方径30cm、床面からの深さ29cm、P4は掘り方径30cm、床面からの深さ20cm、P5は掘り方径25cm、床面からの深さ9cm、P6は掘り方径40cm、床面からの深さ37cmを測る。

出土遺物 ビットから土器細片が少量出土している。図化はできなかった。

SH15 (図版9 写真図版18)

検出状況 後世の地形改変により削平されているため、遺存状況は悪い。東端を後世の溝に切られている。

規模・形態 平面形態はいびつな円形を呈し、6.15×6.28mを測る。

屋内施設 周壁溝・排水溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝 床面での幅16~24cm、床面からの深さ約12cmである。

排水溝 2条検出した。

溝1は土坑0からそれぞれ東西方向にのびて、周壁溝に達する。東側は2股に分かれ、北東へのびる溝は壁まで達していない。床面での幅は12~38cm、ただし北東へのびる溝は最大48cmを測る。床面からの深さは11cmを測る。

溝2は2カ所を後世のビットによって切られている。土坑1の南東角から南東方向へ壁に向かってのびるが、壁まで達してはいない。床面での幅は8~20cm、床面からの深さは6cmを測る。

中央土坑 中央部で検出した。10土坑。土坑0は平面隅円方形様を呈し、105×94cm、床面からの深さ44cmを測る。掘り方は断面V字形を呈する。土坑1は隅円長方形を呈し、長軸方向に120cm、幅64cm、床面からの深さ15cmである。掘り方は逆台形の断面形を呈する。埋土は炭を多く含んでいた。

柱穴 総数18基を検出したが、このうち主柱穴と考え得るものは6基である。柱穴間距離は最大でP1-P2間の3.10m、最小でP4-P5間の1.95m、平均主柱穴間距離は2.61mを測る。P1は掘り方径28cm、床面からの深さ15cm、P2は掘り方径30cm、床面からの深さ8cm、P3は掘り方径49cm、床面からの深さ12cm、P4は掘り方径31cm、床面からの深さ25cm、P5は掘り方径40cm、床面からの深さ9cm、P6は掘り方径33cm、床面からの深さ15cmを測る。

出土遺物 弥生土器が出土しているが細片のため図化できなかった。

SH16 (図版10 写真図版18)

検出状況 後世の溝などによって切られている。

規模・形態 平面はいびつな円形もしくは多角形を呈するものと思われる。検出し得た範囲での周壁溝両端の直線距離で7.7mを測ることから、本来は8m以上の規模があったものと推測される。

屋内施設 周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝 約半周分が検出された。所々を後世のビットに切られている。床面での幅19~52cm、床面からの深さ13cmである。

柱穴 総数45基を検出したが、このうち主柱穴と考えられるのは5基である。平均主柱穴間距離は2.94mを測る。P1は掘り方径44cm、床面からの深さ34cm、P2は掘り方径43cm、床面からの深さ15cm、P3は掘り方径33cm、床面からの深さ13cm、P4は掘り方径45cm、床面からの深さ6cm、P5は掘り方径

40cm、床面からの深さ9cmを測る。

出土遺物 柱穴中から土器の細片が出土している。

SH17 (図版11 写真図版18)

検出状況 北端をSD297に切られる。周壁溝の検出状況から2度建て替えがおこなわれたものと推察される。

規模・形態 平面は円形を呈し、最大で直径5.60mを測る。

屋内施設 周壁溝を検出した。

周壁溝 3条検出した。周壁溝1・2は中心点を東西に20cmほどずらして切り合い、それを包むように外側に周壁溝3が巡る。

柱穴 総数9基を検出したが、このうち主柱穴と考えられるのは4基である。柱穴間距離は最大でP1-P2間の3.35m、最小でP4-P1間の2.25mである。平均主柱穴間距離は2.75mを測る。P1は掘り方径50cm、床面からの深さ39cm、P2は掘り方径37cm、床面からの深さ12cm、P3は掘り方径31cm、床面からの深さ54cm、P4は掘り方径40cm、床面からの深さ49cmを測る。

中央土坑 中央部で検出した。10土坑。土坑0は平面楕円形を呈し、121×78cm、床面からの深さ26cmを測る。掘り方は断面逆台形を呈する。土坑1は細長い葉巻形を呈し、長軸方向に172cm、幅39cm、床面からの深さ10cmである。掘り方は船底形の断面形を呈する。埋土は炭を多く含んでいた。

出土遺物 土器片がわずかに出土している。

SH18 (図版12 写真図版19)

検出状況 一部削平を受けているが、ほぼ全体を検出した。周壁溝の検出状況から1度建て替えたものと考えられる。

規模・形態 平面形はやや東西方向に潰れた円形を呈し、最大時で東西方向に6.26m、南北方向に5.85m、最小時で東西5.89m、南北5.46mである。

屋内施設 周壁溝・排水溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝 2条検出した。周壁溝1は、床面での幅18～32cm、床面からの深さ約12cm、床面での幅15～28cm、床面からの深さ13cmである。

排水溝 3条検出した。排水溝1は土坑0から西へ伸びて周壁溝に取り付け、同様に排水溝2は東へ伸びてやはり周壁溝へ取り付け。周壁溝1、2が結果として接した形で構築されているため、排水溝がどちらの周壁溝に取り付いていたのか判断できなかった。

排水溝3は中央土坑から南西方向へ取り付き屋外へと続いていく。北へ向かって大きく円弧を描きながら伸び、やや南へ蛇行して取束する。総延長は約16.8m。検出面での幅は33～54cm、床面からの深さ12cmを測る。排水溝4は排水溝2の西端南側に取り付き、周壁溝2に至るまで南東方向へ伸びる。床面での幅10～20cm、床面からの深さ5cmを測る。間仕切りのような機能も考えられる。

中央土坑 中央部で検出した。土坑0の平面形は楕円長方形を呈し、長軸方向で164cm、短軸方向で98cmを測る。また床面からの深さは30cmである。掘り方断面形は皿状を呈し、土坑1と隣接する側はなだらかに、その反対側はやや急に立ち上がる。土坑1は長楕円形を呈し、長軸方向で165cm、短軸方向で50cm、床面からの深さ10cmを測る。土坑1の埋土は褐灰色のシルト質極細砂で、下層には炭を多く

含む。

柱穴 総数23基を検出したが、このうち主柱穴と考え得るものは10基である。拡張前はP1.2—P3.4—P5—P6の組み合わせが考えられ、P1.2とP3.4についてはいずれが妥当であるか特定できないため、両方の組み合わせを可能性としてあげておく。拡張後はP7—P8—P9—P10の4本と考えられる。平均主柱穴間距離は拡張前で2.63m、拡張後で3.30mを測る。P1は掘り方径31cm、床面からの深さ37cm、P2は掘り方径37cm、床面からの深さ30cm、P3は掘り方径28cm、床面からの深さ8cm、P4は掘り方径28cm、床面からの深さ41cm、P5は掘り方径24cm、床面からの深さ35cm、P6は掘り方径23cm、床面からの深さ12cm、P7は掘り方径35cm、床面からの深さ29cm、P8は掘り方径36cm、床面からの深さ41cm、P9は掘り方径34cm、床面からの深さ41cm、P10は掘り方径42cm、床面からの深さ14cmを測る。

出土遺物 土器片が少なからず出土しているが、いずれも細片のため図化はしていない。

SH19 (図版13 写真図版20)

検出状況 調査区西半に位置する。分割しておこなった2回の調査区にまたがっているため、西端の一部を検出できなかった。

規模・形態 平面形は隅円方形を呈し、南東隅は張り出す。東西方向に4.52m、南北方向に4.32mである。

屋内施設 周壁溝・排水溝・張り出し部・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝 張り出し部分では張り出した壁に沿って巡っているが、隅円方形のラインでも浅い溝が認められた。主をなすのは張り出しに沿って巡る方の溝と考えられる。床面での幅19～42cm、床面からの深さ3～8cmである。

中央土坑 中央部で検出した。土坑0の平面形は隅円長方形を呈し、長軸方向で124cm、短軸方向で63cmを測る。また床面からの深さは30cmである。掘り方断面形はV字形を呈する。土坑1は長楕円形を呈し、長軸方向で130cm、短軸方向で40cm、床面からの深さ8cmを測る。土坑1の埋土は褐灰色のシルト質極細砂で下層には炭を多く含む。

柱穴 総数13基を検出したが、このうち主柱穴と考え得るものは3基である。4本柱の建物であったと思われるが、残る1基は検出できなかった。P1は掘り方径36cm、床面からの深さ31cm、P2は掘り方径44cm、床面からの深さ37cm、P3は掘り方径48cm、床面からの深さ34cmを測る。平均主柱穴間距離は2.60mである。

出土遺物 弥生土器片が出土しているが、図化はできなかった。

SH20 (図版14～16 写真図版20～23)

検出状況 SH21の東側約5mに位置する。遺構全体及び西側に伸びる排水溝部分が後世の地形改変等により削平されている。屋内における垂木等の炭化材及び焼土、二次焼成を受けた土器等の状況から、焼失住居であることが看取できる。

規模・形態 平面は隅円方形を呈し、南北490cm、東西550cmである。北西隅には、周壁溝外側の掘り方から43cm、幅95cmの長方形の張り出しを持つ。

屋内施設 周壁溝・中央土坑・柱穴・排水溝を検出した。

周壁溝 住居跡内を全周しているが、北西隅の張り出し部付近で、若干内側へ入る。床面での幅16～

35cm、床面からの深さ5～15cmである。

中央土坑 はば中央部で検出した。平面形が長方形を呈する土坑（北側）と細長い楕円形状の土坑（南側）からなる、所謂「10」土坑の形態をとり、両土坑は浅い凹みを持って一体化し、また排水溝とも連結している。北側の土坑は、各辺43cm×74cmの長方形で、床面からの深さ13cmである。また、南側の土坑は、長軸140cm、短軸55cmの楕円形で、床面からの深さ8cmである。

柱穴 総数は14基を検出したが、この内主柱穴と考え得るものが5基である。平均主柱穴間距離は、2.64mを測る。P1は掘り方径33cm、床面からの深さ15cm、P2は掘り方径26cm、床面からの深さ37cm、P3は掘り方径33cm、床面からの深さ21cm、P4は掘り方径32cm、床面からの深さ19cm、P5は掘り方径30cm、床面からの深さ10cmを測る。

排水溝 中央土坑に連結して、屋外へ抜け、西方向の地形的に低い方へ伸びる。延長は、削平により不明だが、幅は19～30cm、検出面からの深さ15cmである。

出土遺物 埋土中에서도特に床面直上において、多量の土器、サヌカイト製の石器及びチップなどが出土しており、焼失という出土状況からその一括性の高さがかがわれる。出土遺物の代表的なものに、土器では、壺（16～19・24）、甕（25）、無頸壺（20・22・23）、底部（21）、高杯（26～29）、ミニチュア土器（30）で、石器では石鏃（S19・S33）などがある。

SH21（図版18 写真図版23、24）

検出状況 調査区西平、SH20の西に位置する。平面的にはほぼ全城を検出できたが、掘り方の遺存状況は悪く、ほとんど床面だけが残っていた。

規模・形態 平面は東西に潰れた円形を呈し、東西方向で4.80m、南北方向で4.48mを測る。

屋内施設 周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝 床面での幅16～30cm、床面からの深さ約9cmである。

中央土坑 中央部で検出した。土坑0の平面形は卵形を呈し、長軸方向で100cm、短軸方向で57cmを測る。また床面からの深さは31cmである。掘り方断面形は皿状を呈し、土坑1と隣接する側はなだらかに、その反対側はやや急に立ち上がる。土坑1は長楕円形を呈し、長軸方向で156cm、短軸方向で46cm、床面からの深さ12cmを測る。土坑1の埋土は黒褐色のシルト質極細砂で炭を多く含む。

柱穴 総数4基を検出しており、主柱穴に相当するものと考えられる。柱間距離は最大でP2～P3間の2.65m、最小でP3～P4間の2.08m、平均主柱穴間距離は2.41mを測る。P1は掘り方径38cm、床面からの深さ49cm、P2は掘り方径40cm、床面からの深さ42cm、P3は掘り方径30cm、床面からの深さ46cm、P4は掘り方径27cm、床面からの深さ24cmを測る。

出土遺物 床面、中央土坑などから弥生土器が出土している。図化したのはいずれも床面から出土した甕（9・107）である。

第4節 掘立柱建物

SB01（図版26 写真図版26）

検出状況 西側は後世の削平を受けて消失している。

形状・規模 N13°Eに棟軸方向をとり、桁行3間以上、梁行3間の掘立柱建物である。南側桁行方向で

3.48m、東側梁行方向で4.48mを測る。平均柱穴間距離は、桁行方向で1.74m、梁行方向で1.49mである。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方径26～44cm程度である。検出面からの深さは26～51cmを測る。

出土遺物 掘り方内から古墳時代の須恵器片、時期不明の土師器片が出土している。

SB02 (図版26 写真図版26)

検出状況 調査区北東に位置する。東端を後世の地形改変により削平されている。

形状・規模 N25°Eに棟軸方向をとり、桁行4間、梁行3間以上の側柱建物である。西側桁行方向で7.50m、南側梁行方向で5.67mを測る。平均柱穴間距離は、桁行方向で1.73m、梁行方向で5.24mである。

柱穴 掘り方の平面形は円形が主体をなす。掘り方の径は40～73cm、検出面からの深さは24～54cmを測る。

出土遺物 掘り方内から古墳時代の須恵器片、時期不明の土師器片が出土している。

SB03 (図版26 写真図版26)

検出状況 東側と北側を後世の擾乱のため消失している。

形状・規模 N33°Eに棟軸方向をとり、桁行4間、梁行2間の側柱建物である。西側桁行方向で8.03m、南側梁行方向で4.04mを測る。平均柱穴間距離は、桁行方向で1.87m、梁行方向で1.81mである。面積は32.4㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は隅円方形が主体をなすが、円形のものも混在する。隅円方形の柱穴の規模は不揃いで、1辺52～70cm、円形の柱穴の規模は掘り方径40～50cm程度である。検出面からの深さは14～49cmを測る。

出土遺物 掘り方内から須恵器、土師器の細片が出土している。

SB04 (図版27 写真図版27)

検出状況 全体を検出した。

形状・規模 N37.5°Eに棟軸方向をとり、桁行6間、梁行3間の側柱建物である東側桁行方向で10.86m、南側梁行方向で5.25mを測る。平均柱穴間距離は、桁行方向で1.81m、梁行方向で1.75mである。面積は50.1㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈する。掘り方の径は36～67cm程度である。検出面からの深さは18～52cmを測る。

出土遺物 掘り方内から中世の須恵器片、土師器の鍋、弥生土器が出土している。

SB05 (図版28 写真図版27)

検出状況 調査区北東に位置する。

形状・規模 N59°Wに棟軸方向をとり、桁行5間、梁行2間の側柱建物である。南側桁行方向で9.41m、西側梁行方向で4.20mを測る。平均柱穴間距離は、桁行方向で1.78m、梁行方向で1.92mである。面積は34.1㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は隅円方形が主体をなすが、円形のものも混在する。隅円方形の柱穴の規模は

不揃いで、1辺55～67cm、円形の柱穴の規模は径50cm程度である。検出面からの深さは23～59cmを測る。

出土遺物 掘り方内から備前焼の摺り鉢片が出土している。他にも古墳時代の須恵器、土師器が多数出土しているが、いずれも細片である。

SB06 (図版29)

検出状況 調査区の東側に位置する。周辺ではピットを多数検出しており、詳しい先後関係は把握できないが、これらのピットと重なって検出した。

形状・規模 N11°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間の側柱建物である。東側桁行方向で6.25m、北側梁行方向で4.25mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で2.03m、梁行方向で1.94mである。面積は23.6㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈し、径37～49cm、検出面からの深さは50～62cmを測る。

出土遺物 出土していない。

SB07 (図版29)

検出状況 調査区の東側に位置する。周辺ではピットを多数検出しており、これらのピットと重なっている。

形状・規模 N25°Wに棟軸方向をとり、桁行4間、梁行3間の総柱建物である。西側桁行方向で10.27m、北側梁行方向で7.47mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で2.5m、梁行方向で2.4mである。面積は72㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方径24～45cm、検出面からの深さは13～32cmを測る。

出土遺物 須恵器、土師器の細片が出土している。

SB08 (図版30)

検出状況 SB06の南側約20mに位置する。位置的にSB09と重複するが、切り合い関係はない。また、南側を流路で切られている。

規模・形態 N66°Wに棟軸方向をとり、桁行3間、現状で梁行1間である。北側桁行方向で6.65m、西側梁行は現状で3.47mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で2.01m、梁行方向で3.00mである。面積は現状で23.08㎡である。

柱穴 掘り方の平面形はほぼ円形である。規模は35～55cmである。いずれの柱穴についても柱痕を確認することができ、その径は18～30cmである。

出土遺物 土師器細片が出土している。

SB09 (図版30)

検出状況 SB06の南側約20mに位置する。位置的にSB08と重複するが、切り合い関係はない。また、南側を流路で切られている。

規模・形態 N63°Wに棟軸方向をとり、桁行4間、現状で梁行1間である。北側桁行方向で7.94m、西側梁行現状で3.92mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.90m、梁行方向で3.64mである。面積は現状で31.12㎡である。

柱穴 掘り方の平面形はほぼ円形である。規模は25～45cmである。数基の柱穴で柱痕を確認することができ、その径は20～22cmである。

出土遺物 平安時代の所産と見られる須恵器が出土している。細片のため図化できなかった。

SB10 (図版30 写真図版27)

検出状況 他のピットと重なって検出した。

形状・規模 N18°Eに棟軸方向をとり、桁行2～3間、梁行3間の側柱建物である。東側桁行方向で5.35m、北側梁行方向で4.63mを測る。平均支柱穴間距離は、桁行方向で2.36m、梁行方向で1.31mである。面積は18.6㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は隅円方形が主体をなす。隅円方形の柱穴の規模は不揃いで、1辺47～85cm、検出面からの深さは12～45cmを測る。

出土遺物 古墳時代の須恵器、弥生土器などが出土している。須恵器の細片が目立つ。

SB11 (図版31 写真図版28)

検出状況 他のピット溝などと重なり合っている。図上にて確認、復元した。

形状・規模 N18.5°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間の側柱建物である。西側桁行方向で4.38m、北側梁行方向で3.64mを測る。平均支柱穴間距離は、桁行方向で1.31m、梁行方向で1.6mである。面積は12.5㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方径40～60cm、検出面からの深さは6～20cmを測る。

出土遺物 古墳時代と思われる須恵器片の他、土師器、弥生土器の細片が出土している。

SB12 (図版31)

検出状況 調査区中央北端で検出した。建物中央に後世の暗梁が通っているため、梁の中央に本来あったはずの柱が検出できなかった。

形状・規模 N5.5°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間と考えられる側柱建物である。東側桁行方向で5.8m、北側梁行方向で4.42mを測る。平均支柱穴間距離は、桁行方向で1.8m、梁行方向で2.03mである。面積は21.9㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方径22～40cm、検出面からの深さは5～32cmを測る。

出土遺物 掘り方内から弥生土器が出土している。

SB13 (図版31 写真図版28)

検出状況 他のピット、溝と重なり合って検出された。

形状・規模 N26°Eに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間の側柱建物である。西側桁行方向で4.44m、中央梁行方向で3.92mを測る。平均支柱穴間距離は、桁行方向で1.91m、梁行方向で1.72mである。面積は13.14㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は隅円方形が主体をなすが、円形のものも混在する。隅円方形の柱穴の規模は1辺40～72cm、円形の柱穴の規模は径60cm程度である。検出面からの深さは10～38cmを測る。

出土遺物 古墳時代の所産と思われる須恵器、および土師器の細片が出土している。

SB14 (図版31 写真図版28)

検出状況 調査区中央北寄りに位置する。SH13,14を切っている。

形状・規模 N10.5°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間の側柱建物である。東側桁行方向で7.32m、南側梁行方向で5.64mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で2.23m、梁行方向で2.45mである。面積は32.8㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は隅円方形が主体をなす。柱穴の規模は1辺60～100cm、検出面からの深さは11～40cmを測る。

出土遺物 古墳時代の須恵器の他、土師器、弥生土器の細片が出土している。

SB15 (図版32 写真図版29)

検出状況 調査区のほぼ中央部に位置する。SH07を切る。

形状・規模 N17.5°Eに棟軸方向をとり、桁行4間、梁行4間の総柱建物である。南北方向で8.74m、東西方向で8.9mを測る。平均主柱穴間距離は、南北方向で2.10m、梁行方向で2.17mである。面積は72.6㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈し、径25～40cm、検出面からの深さは9～26cmを測る。

出土遺物 掘り方内から須恵器碗(298)、土師器小皿(299)などの他、須恵器片が出土している。

SB16 (図版32)

検出状況 SB15の南に隣接し、棟軸方向もほぼ一致することから、同時に併存していた可能性も考えられる。

形状・規模 N11°Eに棟軸方向をとり、桁行4間、梁行2間以上の総柱建物である。西側桁行方向で9.02m、北側梁行方向で3.88mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で2.19m、梁行方向で1.80mである。面積は31.5㎡である。

掘り方の平面形は円形を呈し、径25～35cm、検出面からの深さは15～23cmを測る。

出土遺物 掘り方内から奈良時代の須恵器碗が出土している。その他、古墳時代の須恵器および土師器の細片がみられる。

SB17 (図版33 写真図版29)

検出状況 調査区南端に位置し、調査区外へさらに伸びているものと考えられる。北辺から東辺にかけて、L字形に溝が巡っており、雨落ち溝と思われる。

形状・規模 N10°Eに棟軸方向をとり、桁行2間以上、梁行2間の側柱建物である。東側桁行方向で現存値4.22m、北側梁行方向で4.96mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.97m、梁行方向で2.33mである。また、溝は検出面での幅20～40cm、検出面からの深さ5cmである。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈し、径25～35cm程度である。検出面からの深さは5～26cmを測る。

出土遺物 掘り方内から奈良時代の所産と思われる須恵器片が出土している。

SB18 (図版33 写真図版29)

検出状況 調査区南端に位置し、調査区外へとさらに続く。SB17と棟軸をほぼ揃えて西側に隣接しており、同時に併存していた可能性が強いと考えられる。

形状・規模 N11°Eに棟軸方向をとり、桁行2間以上、梁行3間の総柱建物である。南北方向で現存値2.28m、東西方向で7.28mを測る。平均支柱穴間距離は、東西方向で2.31mである。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈し、径25～35cm程度である。検出面からの深さは15～40cmを測る。

出土遺物 奈良時代の須恵器および土師器が出土している。

第5節 土坑・ピット

土坑

SK207 (図版34 写真図版30)

検出状況 調査区北東端に位置し、南端を現代の暗渠によって切られている。埋土を取り除くと径10cm大の礫と土器が散り込まれたような状況で出土している。性格については不明である。

形状・規模 ほぼ南北方向に主軸をとる。平面は溝状に伸びる長方形を呈し、長軸方向で現存値96cm、短軸方向で40cmを測る。検出面からの深さは20cmで、断面はほぼ長方形を呈している。

出土遺物 弥生土器の甕(52)を図化している。

SX06 (図版34 写真図版30)

検出状況 調査区中央西よりに位置する。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模 平面は円形的一端を切り取ったような弓形を呈する。SD289を切って重なり、南端をSD343に切られる。長軸方向で62cm、短軸方向で50cmを測る。検出面からの深さは13cmで、断面は浅い碗形を呈している。

出土遺物 弥生土器の甕(83)を図化している。

SK357 (図版34 写真図版30)

検出状況 調査区中央西よりに位置する。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模 平面は楕円形を呈する。長軸方向で70cm、短軸方向で58cmを測る。掘り方は2段になっており、外側の掘り方に内接するかたちで50×38cmの楕円形の土坑が構築されている。検出面からの深さは11cmである。断面は二重の逆台形を呈している。

出土遺物 弥生土器の壺(78)を図化している。

SK356 (図版34)

検出状況 調査区中央西よりに位置する。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模 平面は隅円の長方形様を呈する。長軸方向で60cm、短軸方向で47cmを測る。掘り方は皿状を呈する。検出面からの深さは10cmである。

出土遺物 弥生土器の台付鉢(113)を図化している。

SK455 (図版35 写真図版30)

検出状況 調査区北西端、SD1003の西岸に位置する。SD463と西端を接する。

形状・規模 平面は隅円の長方形を呈する。検出当初SD463に接するところまで掘り方が伸びている

ように思われたが、掘り進めると長軸方向で274cm、短軸方向で148cmの規模になった。掘り方は4辺の壁がほぼ垂直に掘られている。検出面からの深さは46cmである。

出土遺物 弥生土器の壺(72、73)を図化している。

SK458 (図版35 写真図版31)

検出状況 調査区西よりのSD1003の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。

規模・形態 平面は三角形の不定な楕円形を呈する。長軸方向で300cm、短軸方向で234cmを測る。検出面からの深さは40cmを測る。断面は逆台形状を呈する。

出土遺物 出土遺物の中で大型の甕(79)と、高杯の脚部(80)を図化している。

SK251 (図版35 写真図版31)

検出状況 調査区東半中央に位置する。南端をSD1001に切られる。遺存状況は悪い。

形状・規模 平面は長楕円もしくは長方形気味の形態である。長軸方向で4.35m、短軸方向で2.00mを測る。掘り方は皿状を呈する。検出面からの深さは12cmである。

出土遺物 土師器の坏、皿、蓋(254~260)を図化している。

SK359 (図版35 写真図版31)

検出状況 調査区北端中央に位置する。東側をSK358に切られる。

形状・規模 平面は円形を呈するものと思われる。径1.96mを測る。掘り方はほぼ垂直に掘り込まれている。検出面からの深さは45cmである。

出土遺物 須恵器の短頸壺(261)を図化している。

SK401 (図版36 写真図版32)

検出状況 調査区南西よりのSD1003の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。掘り方が明瞭さに欠けるが、集中する土器群の検出状況からは一括性の高さがうかがえる。

規模・形態 平面は弧線形状の不定な楕円形を呈する。長軸方向で約310cm、短軸方向で約144cmを測る。検出面からの深さは20cmを測る。断面は浅い弧状を呈する。

出土遺物 出土遺物は多量の遺物が一括廃棄された状況下において、図化できたものは限られた点数である。広口壺(31・32・48)、直口壺(36)、甕(33)、台付き無頸壺の白部(34・35)、高杯の杯部(37・38)、器台(39)を図化している。

SK402 (図版37 写真図版33)

検出状況 調査区南西よりのSD1003の東側、及びSD401の北側に隣接した所に位置する。また、SD402と切り合い関係にある。埋設土器を思わせる甕の脚部(45)をはじめとする土器群の検出状況からは、一括性の高さがうかがえる。また、甕(45)の埋土下層には炭化物が堆積し、遺構北側床面には長軸方向に沿って木材(W4)を検出した。

規模・形態 平面は隅円長方形の楕円形を呈する。長軸方向で195cm、短軸方向で109cmを測る。検出面からの深さは33cmを測る。断面は不定な逆台形状を呈する。

出土遺物 出土遺物の中で土器は、広口壺(40・41)、直口壺(42)、甕(43・44・45)、高杯(46)を図化している。また、木器(W4)も図化した。

機能・用途 埋設土器を思わせる甕や、床面で検出した木材等から、調査段階で木棺墓の可能性も提示されたが、断定には至っていない。しかし、遺構の隅に大型の土器を配置した様な検出状況からは、何か意図的なものを感じざるを得ず、単なる土器廃棄土坑とは異なるものと考えたい。

SK403 (図版37 写真図版33)

検出状況 調査区南西よりのSD1003の東側に位置する。若干後世の溝等の影響を受けている。

規模・形態 平面は不定な楕円形を呈する。長軸方向で約63cm、短軸方向で約46cmを測る。検出面からの深さは10cmを測る。断面は丸みを帯びた逆台形状を呈する。

出土遺物 広口壺(47)を図化している。

SK363 (図版38 写真図版30)

検出状況 調査区中央よりのSH14の北西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はないが、若干後世の溝による影響を受けている。

規模・形態 平面は不定な円形を呈する。直径約75cmを測る。検出面からの深さは11cmを測る。断面は浅い楕円状を呈する。

出土遺物 壺の底部と考えられる(81)を図化している。

SK415 (図版38 写真図版31)

検出状況 調査区北西よりのSD1003の東側に位置する。ST04と切り合い関係にあり、ST04を切る。

規模・形態 平面は不定な楕円形を呈する。長軸方向で約85cm、短軸方向で約63cmを測る。検出面からの深さは12cmを測る。断面は浅い楕円状を呈するが、削平により明確でない。

出土遺物 把手付き直口壺(57)、高杯(58)を図化している。

SK418 (図版39 写真図版31)

検出状況 調査区北西よりのSD1003の東側に位置し、SK415・417の南東側に隣接する。他の遺構との切り合い関係はないが、後世のピットに若干影響を受けている。

規模・形態 平面は西側で隅円長方形形状を成す不定な楕円形を呈する。長軸方向で約430cm、短軸方向で約250cmを測る。また、土坑内ほぼ中央には、西側でやや窄まる隅円長方形の土坑を持ち、長軸方向で274cm、短軸方向で東側が約92cm、西側が約50cmを測る。検出面からの深さは上段で16cm、下段で20cmを測る。断面は上段で浅い逆台形状を呈する。

出土遺物 把手付き直口壺(60)、高杯(61・62)を図化している。

機能・用途 土坑中央の隅円長方形形状の掘り方は、木棺墓あるいは土壙墓を想定するに、非常に魅力的な形態を呈している。もし、埋葬施設として考えれば、出土した遺物は棺上祭祀として認識する事もできる。しかしながら、現段階での埋葬施設としての積極的な評価は困難と考え、言明は避ける。

SK411 (図版40 写真図版33)

検出状況 調査区西よりのSD1003の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。

規模・形態 平面は南側の掘り方が明瞭さを欠くが、不定な隅円長方形を呈する。長軸方向で約290cm、短軸方向で約180cmを測る。検出面からの深さは23cmを測る。断面は浅い逆台形状を呈するが、特に南側は削平により明確でない。

出土遺物 広口壺 (54)、短頸壺 (53)、鉢 (55)、方形透かしを持つ台付き鉢の台座 (56) を図化している。本遺跡における遺構出土の遺物の中では、最も古い時期に相当するものと考えられる。

SK419 (図版40 写真図版34)

検出状況 調査区北西よりのSH15の北西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。

規模・形態 平面は北側の掘り方が明瞭さを欠くが、隅円長形状の不定な楕円形を呈する。長軸方向で約87cm、短軸方向で約75cmを測る。検出面からの深さは21cmを測る。断面は北側で若干の段を持つが、ほぼ逆台形状を呈する。

出土遺物 広口壺 (63・64)、甕 (65) を図化している。

SK420 (図版40 写真図版34)

検出状況 調査区中央より北側のSH15の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。

規模・形態 平面は南側の掘り方がやや幅広い、靴底状の不定な楕円形を呈する。長軸方向で156cm、短軸方向で56cmを測る。検出面からの深さは7cmを測る。断面は浅い逆台形状を呈する。

出土遺物 甕 (66) を図化している。

SK404 (図版41 写真図版34)

検出状況 調査区南西端に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。土坑の壁面は被熱しており、底面では炭が広がっている。埋土は灰と炭を多く含む焼土塊もみられる。断定する要素にはかけるが、火葬墓の可能性をあげておきたい。

形状・規模 平面は長方形を呈する。長軸方向で2.76m、短軸方向で1.52mを測る。掘り方はほぼ垂直に掘り込んでいる。検出面からの深さは20cmである。

出土遺物 壺状石製品 (S156) を図化している。

SK110 (図版41 写真図版34)

検出状況 調査区南端中央に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模 平面は隅円方形を呈する。長軸方向で112cm、短軸方向で103cmを測る。掘り方は2段掘りになっており、西半部に楕円形に深く掘り下げた箇所がある。断面は逆台形を呈している。検出面からの深さは28cmである。

埋土は炭を大量に含み、壁面は被熱している。

出土遺物 何も出土していない。

SK111 (図版41 写真図版34)

検出状況 調査区南端中央に位置する。南東側をSK109に切られる。

形状・規模 平面は長方形を呈する。長軸方向で106cm、短軸方向で76cmを測る。検出面からの深さは10cmである。掘り方はほぼ直角に掘り込んでいる。土坑内は炭が埋積しており、壁面は強く被熱している。

出土遺物 何も出土していない。

SK112 (図版41 写真図版34)

検出状況 調査区南端中央に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模 平面は隅円長方形であったと思われるが、現状では東側はやや外へ張り出す。長軸方向で103cm、短軸方向で87cmを測る。検出面からの深さは13cmである。掘り方はほぼ直角に掘り込んでいる。土坑内は炭が埋積しており、壁面は強く被熱している。

出土遺物 何も出土していない。

ビット

C区 P548 (図版42 写真図版34)

検出状況 調査区南半中央に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模 やや隅円方形気味の掘り方で、検出面で一辺30cm、底面では径15cmを測る。検出面からの深さは30cmである。

出土遺物 弥生土器の脚付き鉢 (90) を図化している。

A区 P151 (図版42 写真図版34)

検出状況 調査区南東に位置する。SD1002の埋没後に営まれた遺構である。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模 平面は不定形で東西に長い三角形様である。長軸方向で55cm、短軸方向で35cmを測る。掘り方はほぼ垂直に掘り込んでいる。検出面からの深さは28cmである。

出土遺物 土師器の鍋、皿、白磁の甕 (287～289) を図化している。

第6節 溝・流路

SD1001 (図版44 写真図版41・42)

検出状況 平成5年度の調査で検出した。南北方向に、ほぼ等高線に沿って流れ、SD1002をはさんで西に流れる。流路、SD1002、SE201などと切り合い関係にある。

形状・規模 幅は約5.5mで、深さは検出面より50cmである。断面は逆台形を呈する部分が多い。

出土遺物 須恵器の蓋 (269) などが出土している。

SD1002 (図版44・45 写真図版41～43)

検出状況 平成5年度および6年度の調査にまたがって検出した。調査区東半部をやや西へ振りながら南流する。南端では2股に分岐しているが、土層を観察した限りでは、東側の本流が埋没した後、西

側の流路へと移ったものと考えられる。SD1001などと切り合い関係にある。また、埋土は後世の遺構面となっていた。

形状・規模 幅は6～10.2m、また、西側の小流路で2.4～3.0m、深さは検出面より40～120cmである。断面は小さい流路では逆台形を呈するが、本流部分では逆凸形を呈しており、いくつか流れの単位が認められる。

出土遺物 SD1001との合流点付近の西側で大量の製塩土器および須恵器・土師器、下層からは子持ち勾玉が、また南半からは陶器、磁器類が出土している。特に、製塩土器は大型の焼土塊を伴って大量に廃棄されている状況であった。

流路 (図版44 写真図版41)

検出状況 SD1001、SD1002などと直交し、東西方向に流れる。西半では2股に分かれている。現代においても調査区の東にある溜め池からの導水路として機能していたものである。

形状・規模 幅は3.5～8m、2条に分かれてからは1.5～2mほどである。深さは検出面より1.0mである。断面は逆台形を呈する部分が多い。

出土遺物 流路東端部で弥生土器の台形土器(144)、西側の2条に分かれた中州上で須恵器の蓋(266)、鉢(267)、土師器の環(270)などが出土している。最終の埋土中からは青磁碗(321・322)が出土している。

SD1003 (図版46 写真図版44・45)

SD1003は南北に流れる幅3～6mの流路であるが、位置によって状況がかなり異なっている。上流部分は黒色粘土によって埋没しているが、遺物はほとんど含まれていない。但しサヌカイトの大型剥片石器(S15)が機械掘削の際に出土している。中程の溝幅が次第に細くなる部分では、黒色粘土上から打ち込んだ細い丸太杭2列と、流れに直交する方向で数枚の板材が検出された。湿地化した流路を渡るための簡便な橋状遺構であろう。周辺から出土した土器から古墳時代前期以降の所産と思われる。この橋状遺構より下流側からSD1003の堆積構造が変化している。すなわち黒色粘土下層に砂層が堆積しており、多くの遺物が出土するようになる。土師器小型丸底壺や高環、小型手づくね土器が一括してほぼ完全に近い状態で出土しており、周辺からは滑石製白玉も出土している。古墳時代の祭祀の一端が伺われる。但し、SD1003からは6世紀まで下る須恵器も出土しており、埋没した時期は古墳時代の後半であろう。分岐或いは合流するSD1005でも同様の状況である。SD1003の更に下流側になると弥生土器の出土がめだってくる。特にSD1003-2は流路というよりは溜まり状の落ち込みを呈しており、弥生時代中期の遺物のみが出土している。木製高杯未成品(W30)とそのモデルとも思える台付鉢形土器(156)などが出土している。

SD1004 (図版47 写真図版49)

D区ではSD1004やSD1003などの河道や流路が検出された。SD1004は最大幅が10mにも及ぶためNo.Ⅱ地点で検出された旧河道の延長が検出されたものと当初考えていた。ところが、調査の結果、深さが検出面から1m以下と浅く、底には杭を打ち込み横木をわたしており、更に西南部では一段高くなり、細い溝で下方へと続いていることが判明した。また、出土した土器も古墳時代後期までのものに限られて

いることから、旧河道というよりも古墳時代の人工的な水路あるいは溜池状の遺構と判断した。底に打ち込まれた杭は、先端を上流側に向けてように斜めに打ち込まれており、溝を横断するように列をなしている。それに長いもので3m以上の横木をわたしている。横木や杭の端部には切り込みを持つものも見られ、両者は緊縛されていたものと思われる。更に横木に斜めに立てかけるように材が置かれており、断面形態は合掌形になる。これらの井堰の上には草本類の植物遺体が確認されているが、編まれていた状況は確認できない。刈り取った草木を被せて水流を防止したものと推定できる。用いられた材は広葉樹で、枝は取り払われているものの樹皮は残されている。図化できなかったが、使用痕の著しいこん棒状の「かけや」が出土しており、杭を打ち込む作業に用いられたと推定できる。この井堰は1基だけではなく、おそらく4基以上作られたと考えられ、用いられた材や検出状況から、作られた時期を異にするものと思われる。周辺からは完形の須恵器や勾玉などが出土しているが、一部が井堰の下からも出土していることから、時期差が同われる。これらの井堰は流れの方向に対して斜めに設けられており、水流を南側の水田に導く機能を有していたものであろう。SD1004の南側の肩部にいくつかの突出部が認められることもそれを裏付けている。井堰の中で西南部の小溝に直交するように打ち込まれた杭列は非常に痛みが激しい。本来はこの位置で水流をダムアップしていたものが、水田面の上方向への拡大成いは形態の変化により、井堰の位置を移動させていたものと思われる。揖保川の upstream では、現在でも毎年流れに杭を打ち込み井堰を作って水田に水を引いているという。この遺構も同様に年毎に設置している可能性もあるが、前代のもを完全に撤去しない理由としては、水流の勢いを弱める機能や、河道から直接引いた水の温度を上げるための機能も有していたからであろう。SD1004の南西端に設けられた小溝は壁が垂直に立ち上がっており、非常に固い地山を掘り込んでいる。木製の鰐先が地山に食い込んだまま出土している。余分な水量を排水する機能と、元々はこの溝をせき止めて水流をダムアップしていたものと思われる。

SD1005 (図版46 写真図版44)

検出状況 平成6年度の調査で検出した。SD1003の西側に取り付く形で検出された、東西方向に流れる溝である。合流地点において欄状遺構の痕跡が認められた。

形状・規模 幅は約4mで、取り付く部分では5mに広がっている。深さは検出面より65cmを測る。断面は楕形を呈する。

出土遺物 弥生土器片が出土しているが、いずれも細片のため図化できなかった。

SD1006 (図版46 写真図版44)

検出状況 平成6年度の調査で検出した。SD1005と同様SD1003の西側に取り付く形で検出された、東西方向に流れる溝である。

形状・規模 幅は約2mで、深さは検出面より35cmである。断面は逆台形を呈する。

出土遺物 弥生土器片が出土しているが、いずれも細片のため図化できなかった。縄文土器の深鉢の破片(124)が1点混っていた。

SD501 (図版47)

検出状況 県道の西側の調査区E地区西側に位置する。

形状・規模 幅は約6mで、深さは現状で検出面より70cmである。

出土遺物 全く出土していない。

SD502・503 (図版47)

検出状況 県道の西側の調査区E地区東側に位置する。ほぼ等高線に沿う形で、やや西に振りながら南流する。調査区北壁付近では、2つの溝として明確に分流しているが、調査区内で曖昧になり、一つの溝となっている。他の遺構との切り合い関係はない。

規模・形態 断面からSD502の幅は600cm、深さは検出面より95cmを測る。SD503の幅は 520cm、深さは検出面より50cmを測る。断面形は2つの溝共にはぼ逆台形を呈する。

出土遺物 本遺構からの遺物の出土は無かった。

SD326 (図版48 写真図版45)

検出状況 調査区中央C3区に位置する。SD290に切られており、そこから分岐するような形で検出された。西に流れ緩やかに曲がって南流する。南半ではSD401や残条かの小溝と切り合っているが、確実な先後関係を把握することはできなかった。

形状・規模 幅は57～108cm、深さは検出面より10～13cmである。断面は逆台形もしくは皿形を呈する。

出土遺物 弥生土器の壺 (117) 甕 (118)、鉢 (119)、高坏 (120, 121, 122) などが出土している。

SD602 (図版48 写真図版46)

検出状況 調査区中央より南側のF-1区東側に位置する。北側のC地区に続くものだが、調査段階では検出ができなかった。また東西流路に切られており、遺構の残存はあまり良くない。

規模・形態 平面は遺構の形状と周辺の精査から円形に復元可能な弧状を呈する。幅は24cm、深さは検出面より9cmを測る。

出土遺物 遺構の残存状況が悪いながら、比較的良好な状態で遺物が出土した。何れも5世紀後半代の土師器で、二重口縁壺 (172・173)、手焙り彩土器 (174) を図化している。

機能・用途 調査段階において、円形状に復元可能な遺構であることから円形の竪穴住居という認識を持ち、報告段階でも竪穴住居 (SH06) として図示している (図版17 写真図版15)。遺構の形状については、調査段階での認識に立ち、円形になるものと考えている。しかしながら、遺構に確実に伴伴するであろう出土遺物が土師器ということ踏まえると、竪穴住居と断定するには抵抗がある。従って、本報告では溝という方向性も含めて報告する。

SD236 (図版48 写真図版46)

検出状況 調査区中央C2区に位置する。ほぼ等高線に斜行しやや西へ振りながら南流する。SD241に切られており、ほかにも多数のビットおよび小溝と重なっている。

形状・規模 幅は20～30cm、深さは検出面より35cmである。断面は逆台形を呈する。

出土遺物 弥生土器の壺 (105) が出土している。

SD289 (図版48 写真図版46)

検出状況 調査区中央C-2区に位置する。等高線に斜行しやや西へ振りながら南流する。SD290に近接し平行して流れる。北側はさらに調査区外へと伸びていくものと思われる。北端ではSH10によって切られ、南端ではSH14を切っている。

形状・規模 幅は50～70cm、深さは検出面より30cmである。断面は西側の壁が直立し、東側は皿状に緩やかに立ち上がる。

出土遺物 弥生土器の甕 (110, 111)、把手付き直口壺 (108) などが出土している。

SD455 (図版48 写真図版46)

検出状況 調査区西端D-5区に位置する。SD1003とSD1004に挟まれた部分を等高線に沿って斜行しやや西へ振りながら南流する。北側はSD1004に取り付く。

形状・規模 幅は40～80cm、深さは検出面より35cmである。断面は逆台形状を呈する。

出土遺物 板材 (W5) が出土している。

SD02 (図版49)

検出状況 平成6年度の調査で検出した。調査区南東端に位置する。南北—東西—南北と馬蹄形に屈曲しつつ巡る。両端とも調査区外南へと延びており、全体を検出できていない。SD03に着られる。また西側の溝にはSD04が取り付いているが、切り合い関係は確認できなかった。

形状・規模 幅は約0.4mで、深さは検出面より0.1mである。断面は台形から長方形を呈する。

出土遺物 土師器の環 (103) などが出土している。

SD107 (図版49)

検出状況 平成6年度の調査で検出した。東西方向に延びる浅い溝で、埋土は淡い褐色を呈する砂質土であった。ピットをいくつか切って検出された。畚の瀬溝と考えられる。

形状・規模 幅は約0.2mで、深さは検出面より5～10cm程度である。断面は皿状を呈する。

出土遺物 青磁碗の破片 (309) が出土している。

SD241 (図版49)

検出状況 平成6年度の調査で検出した。東西方向に延びる。SD236,SD239,SD240のほか、ピットをいくつか切って検出された。埋土は灰色の細砂～粗砂である。

形状・規模 幅は約1.0mで、深さは検出面より8～10cmである。断面は台形を呈する。

出土遺物 須恵器の環 (263) などが出土している。

SD608 (図版49 写真図版46)

検出状況 調査区中央より南側のF-1区に位置する。東西流路に沿う形で西流して、一部東西流路との切り合い関係を持つ。

規模・形態 断面から幅は114cm、深さは検出面より33cmを測る。断面形は上層に浅い掃鉢状の掘り方で段を持ち、下層にかけて逆台形状を呈する。

出土遺物 弥生土器が出土している。鉢（104）を図化している。

SD305（図版49）

検出状況 平成6年度の調査で検出した。南北方向に延びる。SD301ほか東西方向に走る2本の溝溝に切られる。

形状・規模 幅は約0.5mで、深さは検出面より15cmである。断面は台形を呈する。

出土遺物 弥生土器の壺（112）などが出土している。

SD262（図版49 写真図版46）

検出状況 平成6年度の調査で検出した。南北方向に延びる。浅い皿状の掘り方で幅広の溝である。SH07を切ってつくられているが、南半は削平を受けて消失している。

形状・規模 幅は約1.7mで、深さは検出面より8～12cmである。断面は皿状を呈する。

出土遺物 土師器の碗（264）、須恵器の短頸壺（265）などが出土している。

SD318（図版49 写真図版46）

検出状況 平成6年度の調査で検出した。南北方向に延びる。A地区で検出されたSD09と同一の溝である可能性が高い。

形状・規模 幅は約0.5mで、深さは検出面より8m程度である。断面は皿状を呈する。

出土遺物 弥生土器の壺（114）などが出土している。

SD321（図版49）

検出状況 平成6年度の調査で検出した。南北方向に延び、東へ緩やかにカーブしていく。SD313,314,319,349などと重なり錯綜して検出されているため、詳しい前後関係は押さえられなかった。比較的短期間に何度も掘り直された溝の1本と考えられる。

形状・規模 幅は約0.5mで、深さは検出面より8～11cmである。断面は皿状を呈する。

出土遺物 弥生土器の高杯（115）などが出土している。

SD324（図版49）

検出状況 平成6年度の調査で検出した。西へと緩やかに湾曲して南北方向に延びる。

形状・規模 幅は約0.25mで、深さは検出面より5cm程度である。断面は皿状を呈する。

出土遺物 弥生土器の無頸壺（116）などが出土している。

SD401（図版49 写真図版46）

検出状況 調査区西よりのD-4区に位置し、掘り方の東側が調査区中央のC地区にあって西流し、西側がSD1003に合流する。他の遺構との切り合い関係では、SH18の北側を切っている。

規模・形態 断面から幅は105cm、深さは検出面より34cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。

出土遺物 弥生土器が出土している。大型の甕（106）を図化している。

SD402 (図版49 写真図版46)

検出状況 調査区西よりのD-7区に位置し、SH21・22・23の西側において南流し、南側でSD401との切り合い関係を持つ。

規模・形態 断面から幅は63cm、深さは検出面より22cmを測る。断面形は漏斗状を呈する。

出土遺物 須恵器が出土している。坏身(171)を図化している。

第7節 その他の遺構

井戸

SE601 (図版42 写真図版35)

検出状況 調査区中央より南側のF-1区に位置し、やや西に振り南流するSD1002と東西流路が交差する部分の南西側にある。他の遺構との切り合い関係はない。

規模・形態 掘り方の平面はほぼ円形に近い楕円形を呈する。長軸方向で125cm、短軸方向で105cmを測る。井戸の内部施設は石組みで構築しており、人頭大の角礫をやや方形に近い円形に組んでいる。検出面からの深さは井戸中央の最深部で65cmを測る。石組みは現状で四段積みで検出した。

出土遺物 本遺構からの遺物の出土は無かった。

SE101 (図版42 写真図版35)

検出状況 平成6年度の調査で検出した。調査区南西端に位置する。上部は後世の削平によって消失しており、基底部のみ遺存している。

形状・規模 掘り方の平面はいびつな円形を呈する。長軸方向で130cm、短軸方向で125cmを測る。検出面からの深さは30cmである。

構造 石組みの井戸で50cm大の礫を用いている。残存しているのは基底石だけで、南東側の1石は抜かれてなくなっている。元来5石で構成されていたものと考えられる。

出土遺物 何も出土していない。

SE301 (図版43 写真図版35)

検出状況 平成6年度の調査で検出した。SD333と重なって検出されたが、切り合い関係ははっきりしない。一つの掘り方内に2箇所井戸枠の痕跡を認めた。

形状・規模 掘り方の平面は楕円形を呈する。長軸方向で4.3m、短軸方向で3.8mを測る。掘り方は周縁を浅く皿状に掘りくぼめているが、井戸枠は直立して掘られている。

井戸枠1 掘り方は長軸方向で156cm、短軸方向で140cmを測る。この底面ですらに1辺60cm程度の隅円方形の掘り方があり、井戸枠を設置したものと考えられる。元来横棧の板組井戸枠が設けられていたと考えられ、南東側では板材と裏ごめの礫が認められた。検出面からの深さは78cmである。

井戸枠2 掘り方は長軸方向で87cm、短軸方向で71cmを測る。検出面からの深さは52cmである。桶のタガが遺存していた。

出土遺物 土師器の坏(226,227)、高坏(228)を図化している。

SE201 (図版43 写真図版35)

検出状況 調査区南東部に位置する。SD1002に南西側を切られる。

形状・規模 平面は楕円形を呈する。検出面で長軸方向3.31m、短軸方向2.35mを測る。掘り方は直立ぎみに掘っており、断面逆台形を呈する。検出面からの深さは1.85mである。

構造 30～40cm大の礫を用いた石組みの井戸である。ほぼ崩落しており、遺存していたのは南端の一部分のみであった。

出土遺物 全く出土していない。

水田遺構 (図版55・56 写真図版47)

SD1004の南側で検出された水田は2面ある。上面では方位を南北にもつ大畦畔が伴っており、東側に突出した小畦畔をもつ。大畦畔は幅約2.0m、高さが0.1m内外の規模をもつ。大畦畔がSD1004に接する位置から5点の須恵器杯身と杯蓋が口縁を上に向けた状態で出土した。内容物は肉眼では認められず、すでに失われたものと思われる。水田水口に伴う祭祀の一形態を示すものであろう。当初の上層水田はSD1004埋没後のものと考えていたが、井堰遺構周辺から出土した土器にもほぼ同時期と思われるものも含まれるため、この上層水田にもSD1004が伴うものと考えられる。この上層水田を取り払った下層から薄い極細砂層で埋没した下層水田が検出された。この水田跡は、所謂不定形小区西水田である。十数枚の水田が直交或いは三叉状に繋がる小畦畔によって区画されているが、ほぼ平坦にもかかわらず細かく区画しており、畦畔もやや湾曲している。器表面の痛んだ土師質の土器小片しか出土していないため、時期を判別することが困難であり、SD1004、或いはSD1003に伴う時期か、水田の形態から見て更に遡った弥生時代のものの可能性も残される。また、SD1003と竪穴住居跡21～23に挟まれた地点で検出された約0.5mの距離をおいて並行に走る小溝とそれに直交する小溝群は、弥生土器片のみが出土しており、弥生時代の畠の遺構の可能性を考えている。

地震痕跡 (図版57 写真図版49)

流路SD1003の東側では、黒褐色極細砂質の面に灰白色の細砂や中砂で充填された地割れの痕跡が多数検出された。断割りの結果、地割れは約30cm下層の礫混じり中砂層まで達しており、この層或いは更に下層の細砂一中砂層が液状化を起こした噴砂痕跡であることが判明した。検出された噴砂痕跡は最大でも幅10cm以下、長さも5m弱の規模で、南北方向或いはやや南西方向に走っている。各々の平面形態や分布の状態は西側に中心をもつ弧状を呈しており、古墳時代後期には軟弱なシルトによって埋没したと思われる西側のSD1003にむかって、部分的な地滑りを起こしたことに起因する可能性を示している。検出された痕跡のうち一部のは、弥生時代のもので想定される柱穴埋土にも及んでいる。また、一部では噴砂痕跡検出面を覆う浅い落ち込みに溜まった灰色シルト中から平安時代以降のものであると思われる土器小片が出土している。このことから、これらの地割れ・噴砂が引き起こされたのは弥生時代から平安時代にかけての時代であると推定される。兵庫県域に被害を与えた地震の記録はこの播磨国噴砂痕跡は貞観十年七月の播磨大地震による可能性が高く、山崎断層の影響が約15km南の地まで達していたことがわかれる。

第7章 出土遺物

第1節 土器・土製品

1. 確認調査出土土器（1～8）

1・3・4は、所謂水差しであり、本項では把手付き直口壺と呼称する。1は、最大径を中位に持つ球体を呈する胴部に、やや開きながら立ち上がる口縁部を有する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には3条の凹線文が巡る。断面長方形の把手は、胴部上位の口縁部に近接した部分に、口縁部とほぼ平行して取り付けられる。器面調整は、胴部外面上半部を縦方向主体のハケメ、下半部をヘラミガキで仕上げ、内面上半部を縦方向のハケメ、下半部をヘラミガキである。口縁部はヨコナデだが、内面には横方向のハケメが残る。3は、底部を欠損するが、大きく中位に張りを持つ算盤玉状の胴部で、微妙に内規しながら開く口縁部を有する。口縁端部は、僅かに上端に面をなす。口縁部外面には、4条の凹線文が巡る。断面長方形の把手は、胴部上位の口縁部に近接した部分に、口縁部の立ち上がりよりやや開き気味に取り付けられる。器面調整は、胴部外面の上半部をハケメ、下半部をヘラミガキで、内面の上半部をハケメ、下半部をイタナデである。口縁部はヨコナデである。4は、最大径を中位に持つ算盤玉状の胴部で、直上に立ち上がる口縁部を有する。口縁端部は細身に丸くおさめる。端部外面には1条の凹線状の沈線を施す。やや丸味を帯びた断面長方形の把手は、胴部上位の口縁部に極めて近接した部分に、やや外傾気味に取り付けられる。器面調整は、胴部外面上半部をハケメ、下半部をヘラミガキで、内面をヘラケズリ、後上半部をナデである。口縁部はヨコナデである。

2は、高杯の杯部である。緩やかな屈曲部に断面方形の突起を有する水平口縁で、口縁端部はやや開きながら垂下して外端に面をなす。器面調整は、外内面を放射状のヘラミガキで、口縁部外面を横方向のヘラミガキである。また、内面をヨコナデで仕上げる。

5は、甕である。器形は、胴部最大径を上部に持つ細身の卵倒形を呈し、屈曲の強い「く」字状口縁部を有する。口縁端部は、上方に並張して面をなす。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメの後下半部にヘラミガキ、内面を上半部に縦方向のハケメで、下半部にヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデである。

6は、甕である。器形は、球体を呈する胴部で、「く」字状口縁を有するもので、口縁端部はほぼ直上に並張して面をなす。器面調整は、外面をタタキの後ハケメ、内面を上半部に斜め方向のハケメで、下半部にヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデである。

7は、大型の台付き鉢である。器形は、やや外反しながら短く開く台部に、屈曲部から短く立ち上がる受け口状の鉢部を有する。口縁部は片口状で、口縁端部は僅かに肥厚して面を成す。台部上位外面には、2条の凹線文が巡る。器面調整は、鉢部外内面を縦及び横方向の細かなヘラミガキで仕上げ、台部外面をヨコナデ、内面をケズリである。

8は、須恵器の棧碗である。器形は、高台を持つもので、回転ヘラケズリによる明確な稜を体部中位まで施し、僅かに口縁部で外反する。器面調整は、高台部付近を回転ナデ、口縁部から内面にかけて、丁寧な回転ナデで仕上げる。

2. 全面調査出土土器

弥生時代の土器

竪穴住居出土土器（9～30）

SH21（9）

9は直口壺である。胴部中位に最大径を持つ卵形を呈し、窄まりの強い口縁部は短く開く。口縁端部は、やや肥厚して面をなす。胴部中位外面には列点文を施す。器面調整は、胴部外面を縦方向を主体とするハケメ、内面をハケメで、下半部にイタナデである。上半部には指頭圧痕が残る。また、口縁部はヨコナデである。

SH03（10・11）

10は、甕である。下半部を欠損するが、器形は胴部中位に最大径を持つ球体を呈する。口縁部は、やや外反する「く」字状を呈し、口縁端部で僅かに肥厚して面をなす。器面調整は、胴部外面をタタキ、内面を横方向のヘラケズリで、口縁付近内面に指頭圧痕も残る。また、口縁部はヨコナデである。

11は、鉢である。器形は、丸味を帯びた平底からやや内凹しながら開くものである。口縁端部は、胴身に丸くおさめる。器面調整は、内面をイタナデで仕上げるが、外面は磨滅のため不明である。

SH09,10（12）

12は、高杯の脚部である。脚部は、中空の柱状部で、ラッパ状に開くものである。端部はやや外側へ肥厚して面をなす。柱状部外面には、内区に斜行文を有するヘラ掻き銀歯文を施し、裾部外面には、貫通しない三角形透かしを施す。器面調整は、端部付近をヨコナデで、内面をヘラケズリである。

SH17（13・14）

13は、甕あるいは無頸壺の口縁部である。口縁部は、稜の鈍い「く」字状を呈し、口縁端部はやや肥厚しつつ上方に拡張して面をなす。端面には、ヨコナデによる沈線状の凹みが巡る。器面調整は、胴部外内面共に縦方向のハケメで、口縁部ヨコナデである。

14は、台付き鉢の鉢部である。鉢部は、口縁部で屈曲して短く開く受け口状のもので、口縁端部は内側へ微妙に肥厚して上端に面をなす。器面調整は、外面横方向のヘラミガキ、内面をナデである。口縁部はヨコナデである。また、台部外面はイタナデであろう。

SH20（15～30）

15は、広口壺である。器形は、胴部最大径を中位に持つ球形に近い卵倒形を呈する。口縁部は、内傾気味に短く直口する頸部から大きく外反するものである。口縁端部は、上方に拡張しつつ垂下して面をなす。頸部外面には3条の凹線文が巡る。器面調整は、胴部外面をヘラミガキ、内面をナデで、口縁部をヨコナデである。

16は、大型の広口壺の口縁部であろう。口縁部は、緩やかなラッパ状を呈し、口縁端部は肥厚して面をなす。頸部外面には、現状で6条の凹線文が巡り、一部に指頭圧痕凸帯を模した、押圧による列点文を施す。器面調整は、外内面にナデ及びヨコナデである。

17は、小型の広口壺である。器形は、胴部最大径を中位に持つ丸味のある算盤玉状を呈し、口縁部は、直口気味の立ち上がりから大きく外反する短頸のもので、口縁端部は微妙に拡張して面をなす。胴上半部から頸部外面にかけて粗い波状文を施す。器面調整は、胴下半部内面にイタナデが見える。

18は、広口壺である。胴部は張りが小さく、口縁部は緩やかに開くラッパ状を呈する。口縁端部は、下方に強く拡張して面をなす。器面調整は、胴部外面を横方向のハケメ、内面をケズリ及びイタナデで仕上げる。また、口縁部はヨコナデである。

19は、壺の胴部であろう。器形は、胴部最大径を上位に持つ卵圓形を呈する。器面調整は、外面を上半部にハケメで、下半部にヘラミガキ、内面をイタナデで指頭圧痕が顕著に残る。

20は、大型の把手付き注口付き無頸壺である。器形は、胴部最大径が中位よりやや上にある球形に近い算盤玉状を呈する。口縁部は、外側へ断面三角形に拡張して上端に面をなす。口縁部下には、把手及び注口を対照的に配する。器面調整は、胴部中位から上位外面を横方向、下位を縦方向のヘラミガキで仕上げ、内面を縦方向のハケメである。また、把手及び注口共にユビナデである。

21は、大型器種の底部である。平底の底面から大きく開くものである。器面調整は、外面を底面に近い部分で縦方向、上位になるにつれて横方向を主体とするヘラミガキで仕上げる。

22は、大型の鉢あるいは無頸壺である。器形は、胴部最大径を中位よりやや下に持つ、胴張りのものである。口縁部は「く」字状を呈し、口縁端部は肥厚しつつ上方に拡張して面をなし、端面に2条の擬凹線文が巡る。器面調整は、胴部外面をハケメ、内面をケズリである。また、口縁部はヨコナデで、内面には指頭圧痕が残る。

23は、台付き無頸壺である。台部は短く開き、端部で外側へ僅かに拡張して面をなす。台部上位には4箇所の円孔を施す。無頸壺は、胴部中位に最大径を持つ算盤玉状を呈する、「く」字状口縁を有するもので、口縁端部は上方につまみ出して面をなす。器面調整は、台部と胴部外面をヘラミガキ、内面をナデである。また、口縁部及び台端部はヨコナデである。

24は、直口壺である。器形は、胴部上位に最大径を持つ卵圓形を呈し、短く開く口縁部を有する。口縁端部は上端で面をなす。器面調整は、胴部外面を上半部にハケメで、下半部にヘラミガキ、内面をケズリで、上半部に指頭圧痕が顕著に残る。また、口縁部はヨコナデである。

25は、甕である。器形は、胴部上位に最大径を持つ卵圓形を呈し、外傾度が強く後の鈍い「く」字状口縁を有する。口縁端部は上方へつまみ出して面をなし、1条の沈線が巡る。器面調整は、胴部外面をハケメ、内面をヘラケズリで、上半部にハケメと指頭圧痕が残る。また、口縁部はヨコナデである。

26・27は、小型の高杯である。26は、屈曲部から短く開く受け口状の口縁部を有する杯部と、中空の柱状部から小さくラッパ状に開く脚部からなる。杯部の口縁端部外面には、1条の沈線が巡る。脚部の裾付近には、3箇所の円孔を施す。器面調整は、脚部外面をヘラミガキ、内面をケズリで、口縁端部と脚端部は、ヨコナデである。27は、脚部である。中空の柱状部からラッパ状に開くものである。器面調整は、外面をヘラミガキ、内面をケズリである。

28・29は、高杯である。28は、比較的大型のもので、屈曲を持たずに立ち上がる受け口状の口縁を有する杯部と、中空の柱状部からラッパ状に開く脚部からなる。口縁部は、口縁端部にかけて肥厚して面をなす。また、脚端部は肥厚して面をなし、裾部に16箇所の円孔を施す。器面調整は、脚部外面をヘラミガキ、内面をナデで、シボリ痕が顕著に残る。杯部はナデ及びヨコナデであろう。29は、やや低脚の中形で、屈曲して内傾気味に立ち上がる受け口状の口縁部を有する杯部と、裾部で大きく外反するラッパ状に開く脚部からなる。口縁部は、端部で僅かに肥厚して上端で面をなし、口縁部下外面ではヨコナデによる1条の沈線を施す。また、脚端部は上下に拡張して面をなす。器面調整は、外面を脚部に縦方向、杯部に横方向のヘラミガキで、脚部内面をケズリ、杯部内面をナデで仕上げる。また、口縁部と脚端部付近はヨコナデである。

30は、ミニチュア土器である。器形は、受け口状口縁を有する高杯を模したものと考えられる。器面調整は、杯部及び脚部内面に指頭圧痕が見えることから、ユビナデで仕上げたものと考えられる。

土坑 (31~82)

SK401 (31~39・48)

31は、広口壺の口縁部である。口縁部は、短く外反するもので、口縁端部は上下方に拡張して面をなす。器面調整は、ナデ及びヨコナデである。

32は、広口壺の口縁部である。口縁部は、外反しながら直口気味に開いて屈曲し、上端に水平面を持ちつつ大きく垂下して外端に面をなすものである。外端面には、方向の異なる上下二列の羽状列点文を施した後、2条の凹線文を巡らし、更に9個1単位の竹管を施した円形浮文を貼付する。また、頸部外面には現状で3条の凹線文が巡る。器面調整は、ナデ及びヨコナデである。

33は、甕である。胴部中位に最大径を持ち、口縁部は稜の鈍い「く」字状口縁を有する。口縁端部は僅かに肥厚して面をなす。器面調整は、胴部外面にヘラミガキが見えるが、磨滅により不明である。

34は、台部である。上部には、無頸壺か鉢が付くであろう。短く開く台部で、端部は僅かに丸味を持って肥厚する。台部上位には円孔4箇所を施す。器面調整は、磨滅のため不明である。

35は、台付き鉢の台部であろう。短く開く台部で、端部は僅かに肥厚して面をなす。台部上位には円孔4箇所を施す。器面調整は、台部外面をヨコナデ、内面をイタナデである。また、鉢部底面の内面にはヘラミガキが見える。

36は、把手付きの直口壺である。口縁部は欠損している。器形は、胴部上位に最大径を持つ卵倒形を呈する。把手は、口縁部の屈曲部に近接して、器面に対して垂直に取り付けられる。器面調整は、胴部外面の上半部をハケメ、下半部をヘラミガキで、内面上半部をハケメ、下半部をヘラケズリである。

37・38は高杯の杯部である。37は、屈曲部に断面台形状の突起を持つ水平口縁で、口縁端部は垂下気味に肥厚して外端に面をなす。器面調整は、ヨコナデである。38は、屈曲して内傾気味に直口する受け口状の口縁部である。口縁端部は、微妙に肥厚して上端に面をなす。口縁部下外面にはヨコナデによる1条の沈線が巡る。器面調整は、内面に横方向のヘラミガキが見えるが、その他は磨滅により不明である。

39は、器台である。大きくラッパ状に開く裾部で、口縁端部は外側へ肥厚して面をなす。外面には、胴部に現状で7条の凹線文が巡る他、裾部にかけて6条、5条、3条を単位とする凹線文が一定の間隔をもって巡る。また、裾部付近には、推定4箇所の円孔を施す。器面調整は、ナデ及びヨコナデである。

48は、大型の広口壺の口縁部である。口縁部は緩やかにラッパ状に開くもので、口縁端部は一部欠損するが、肥厚して面をなす。頸部外面には、沈線化した6条の退化凹線文が巡る。器面調整は、ナデ及びヨコナデで、内面に指頭圧痕が残る。

SK402 (40~46)

40・41は、広口壺である。40は、外反しながら短く開く口縁部で、口縁端部は上下方に拡張して外端に面をなす。頸部外面には、2条の凹線文が巡る。器面調整はヨコナデである。41は、やや内傾気味に直口して、端部付近で強く外反するものである。口縁端部は、下方へ肥厚して面をなし、外端面に円形浮文を貼付する。器面調整はナデ及びヨコナデである。

42は、直口壺である。器形は、胴部中位に最大径を持つ球体を呈し、屈曲の弱い口縁部は、外反気味に直口する。口縁端部は微妙に肥厚して上端に面をなす。胴部中位外面には、刺突列点文を施す。器面調整は、胴部外内面共に縦方向のハケメで、下半部内面をイタナデである。また、口縁部はヨコナデである。

43は、甕である。器形は、卵倒形を呈するものであろう。口縁部は、稜の鈍い「く」字状を呈し、口

縁端部は僅かに肥厚して面をなす。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメで、口縁部をヨコナデで仕上げ上げる。

44は、大型の甕か鉢の口縁部である。口縁部は、「く」字状を呈する。口縁端部は、肥厚して面をなし、端面に3条の凹線文が巡る。器面調整は、胴部外内面共に縦方向のハケメで、口縁部内面には横方向のハケメが残る。また、口縁部はヨコナデである。

45は、甕の胴部である。器形は、胴部中位よりやや上に最大径を持つ卵倒形を呈するものである。器面調整は、外面を縦方向のハケメの後、下半部にヘラミガキを施し、内面を下半部にヘラケズリで、上位に横方向のハケメである。また、中位には指頭圧痕が顕著に残る。

46は、高杯の杯部である。器形は、屈曲部に断面台形状の突起を有する水平口縁を呈し、口縁端部は、外傾気味に短く垂下する。器面調整は、下半部外面を縦方向、上半部外面から口縁部を横方向のヘラミガキで仕上げ上げる。内面は磨滅のため不明である。

SK403 (47)

47は、広口壺である。器形は、胴部中位に最大径を持つ球体を呈する。口縁部は、直口気味に立ち上がる頸部から短く外反し、口縁端部は上方に拡張しつつ垂下して面をなす。端面には3条の凹線文が巡る。外面には、頸部から胴上半部にかけて波状文と直線文とを交互に施文する。器面調整は、胴部外面を上半部と底部付近で縦方向、中位で横方向のヘラミガキを施し、内面をナデで、上位には指頭圧痕も残る。また、口縁部はヨコナデである。

SK404 (49)

49は、小型の高杯である。器形は、内傾気味に立ち上がる機状の杯部と、中空の短い柱状部からラッパ状に開く脚部とからなる。口縁部は、端部を細身に丸くおさめ、口縁部下外面に1条の沈線状の凹みを持つ。脚端部は、上方へ僅かに拡張して面をなし、裾部には4箇所の円孔を施す。器面調整は、ナデ及びヨコナデである。

SK104 (50・51)

50・51は底部である。50は、小振りの平底から大きく外傾気味に開くので、球体を呈する壺の底部と考えられる。器面調整は、外内面共にハケメで、底面付近外面には指頭圧痕が残る。51は、底面からそのまま立ち上がる平底のものである。器面調整は、外面をタタキで、底面付近にハケメと指頭圧痕が残る、内面をイタナデで、一部ハケメが残る。

SK207 (52)

52は、甕である。器形は、下半部を欠損するが、ほぼ球形を呈すると思われる。口縁部は、「く」字状で、端部はやや細身に面をなす。器面調整は、胴部外面をナデ、内面をケズリで、一部ハケメが残る。また、口縁部はヨコナデである。

SK411 (53~56)

53は、短頸の直口壺である。器形は、胴張りの算盤玉状を呈するものと考えられるが明確でない。口縁部は、外傾気味に短く開き、口縁端部にかけて肥厚して、上端に面をなす。口縁部下外面には、2条の指頭圧痕凸帯が巡り、頸部から胴上半部外面にかけて直線文と波状文を交互に施文する。器面調整は、胴部外面をナデ、内面を横方向のハケメの後ナデで、頸部内面には指頭圧痕が顕著に残る。また、口縁部はヨコナデである。

54は、広口壺である。頸部から短く外反する口縁部で、口縁部は上下方に拡張して面をなし、端面に

は波状文を施す。頸部外面には、単位及び方向共に不定な波状文が見える。器面調整は、外面を縦方向、内面を横方向のハケメで、後にナデである。また、口縁部はヨコナデである。

55は、大型の鉢である。内彎気味に短く立ち上がるもので、口縁端部は肥厚して上端に面をなす。端面には、ほぼ隙間無く凹形浮文を貼付する。口縁部下外面は、断面三角形の凸帯を3条貼付してキザミを施し、2本1単位の棒状浮文を10箇所程貼付する。器面調整は、外面を横方向のミガキ、内面をハケメの後にナデで、口縁部付近はヨコナデである。

56は、台部である。上部の器體が不明だが、鉢ではないかと考える。台部は、短くラッパ状に開くもので、端部はやや外側へ強く肥厚して面をなす。台部中央には、5箇所の方形状透かしを施す。器面調整は、外内面共にハケメだが、磨滅のため不明である。

SK415 (57・58)

57は、小型の把手付き直口壺である。器形は、胴部上位に最大径を持つ肩張りの卵倒形を呈し、口縁部は弱い屈曲を持って直口する。口縁部外面は現状で3条の擬凹線文が巡り、胴部上位外面には刺突列点文を施す。また、把手は、口縁部付近にあり、口縁部に対してほぼ水平に長く伸びる断面楕円形を呈するものである。器面調整は、胴部外面を中位に横方向、下位に縦方向のヘラミガキで、内面を縦方向を主体とするイタナデである。胴部中位内面には指頭圧痕が残る、口縁部はヨコナデである。

58は、小型の高杯である。器形は、直口気味に立ち上がる機状の杯部と、円筒状に近い柱状部に、屈曲して短く開く裾部を持つ脚部からなる。口縁端部は丸くおさめ、脚端部は上方へ僅かに拡張して面をなす。器面調整は、外面及び杯部内面をヘラミガキで、杯部底面の内面をイタナデ、脚部内面をケズリである。また、脚端部外面には指頭圧痕が見える。

SK417 (59)

59は、広口壺である。器形は、胴部中位に最大径を持つ球体を呈する。口縁部は、直口する頸部から短く外反し、口縁端部は上下方に拡張して面をなす。端面には3条の擬凹線文が巡る。胴部中位外面には、2列の形骸化した刺突列点文を施す。器面調整は、胴部外面にヘラミガキで、口縁部はヨコナデである。また、胴部内面は磨滅のため不明である。

SK418 (60～62)

60は、把手付き直口壺である。器形は、胴部中位に最大径を持つ球体を呈する。口縁部は、把手側の指かけ部のみが残る。把手部は、断面楕円形で、器面と直交気味に取り付く。器面調整は、胴部外面を上半部でハケメで、下半部でヘラミガキ、内面をハケメで、上位に指頭圧痕が残る。また、口縁端部付近はヨコナデである。

61は、高杯の杯部である。杯部は、屈曲してやや外傾しつつ立ち上がる受け口状の口縁部を呈する。口縁端部は、肥厚して上端に面をなし、端面に2条の擬凹線文が巡る。器面調整は、外内面共にヘラミガキを施す。

62は、高杯の脚部である。脚部は、中空の柱状部からラッパ状に開くもので、端部は上下方に大きく拡張して面をなす。器面調整は、外面をミガキ、内面をケズリで、強いシボリ痕が残る。

SK419 (63～65)

63・64は、広口壺である。63は、緩やかな窄まりから屈曲気味に短く外反する口縁部である。口縁端部は肥厚して外端に面をなし、端面に波状文を施す。頸部外面には、直線文と波状文をヘラ描き施文する。器面調整は、内面をハケメで、指頭圧痕が残る。64は、強い窄まりからやや外反しながら開く口縁

部で、口縁部端部にかけて更に多く外反して上部に面を持つ。口縁端部は、肥厚しつつ僅かに上方へ拡張して面をなし、端面に羽状列点文を施す。器面調整は、外面を縦方向、内面を横方向のハケメである。

65は、大型の甕の口縁部である。口縁部は、「く」字状を呈し、口縁端部は上方により強く拡張して面をなす。器面調整は、胴部外面をハケメで、口縁部はヨコナデである。

SK420 (66)

66は、甕である。下半部を欠損するが、器形は胴部中位よりやや上に最大径を持つ卵倒形を呈するものであろう。口縁部は「く」字状を呈し、口縁端部は肥厚して面をなす。器面調整は、胴部外面をハケメ、内面をイタナデで、指頭圧痕も残る。また、口縁部はヨコナデである。

SK338 (67)

67は、広口壺である。器形は、胴部中位に最大径を持つ胴張りのもので、口縁部は直口気味の頸部から屈曲気味に外反する。口縁端部は、肥厚しつつ上方にやや拡張して面をなす。端面には、波状文を施す。また、胴部外面には波状文を施す。器面調整は、胴部外面をハケメ、内面をナデで、指頭圧痕も残る。また、口縁部はヨコナデである。

SK443 (68)

68は、直口壺である。器形は胴部上位に最大径を持つ卵倒形を呈する。口縁部は開き気味に立ち上がり、口縁端部は上端に面をなす。口縁部下外面には1条の凹線が巡る。器面調整は全体にナデで、胴部上位外面には指頭圧痕が残る。また、口縁部はヨコナデである。

SK453 (69~71)

69は、広口壺である。器形は、胴部中位よりやや上に最大径を持つ、胴張りの卵倒形を呈する。口縁部は、強い窄まりの頸部から短く外反する。口縁端部は、外傾気味に下方へ拡張して面をなす。端面には、3条の縦凹線の上に棒状浮文を貼付する。胴部外面には、波状文と直線文を交互に施文する。器面調整は、外面を頸部にハケメ、胴部中位に横、下に縦方向のヘラミガキである。また、内面を胴下半部にケズリ、上半部にハケメで、指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデである。

70は、小型の甕である。器形は、胴部上位に最大径を持つ卵倒形を呈し、口縁部は屈曲の強い「く」字状である。口縁端部は、上方へ強く肥厚して面をなす。胴部外面には2列の列点文を施す。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメ、内面をケズリで、上位に工具痕が顕著に残る。また、口縁部はヨコナデである。

71は、甕である。器形は、胴部中位よりやや上に最大径を持つ卵倒形を呈する。口縁部は、「く」字状を呈し、口縁端部は上方に強く肥厚して面をなし、4条の縦凹線が巡る。胴部中位外面には、刺突列点文を施す。器面調整は、胴部外面をタタキの後縦方向のハケメ、下半部にヘラミガキを施し、内面を横方向のケズリで、上位に指頭圧痕が残る。また、口縁部はナデである。

SK455 (72・73)

72は、直口壺である。器形は、卵倒形に近いものであろう。口縁部は、種の鈍い屈曲から開きながら立ち上がり、口縁端部は僅かに肥厚して上端に面をなす。口縁部外面には、2条1単位の凹線文が2箇所回り、胴部中位に刺突列点文を施す。器面調整は、外面をタタキの後に縦方向のハケメ、内面を縦方向のハケメの後ナデで、指頭圧痕が残る。また、口縁部はヨコナデである。

73は、大型の受口壺である。器形は直口壺に近い。口縁部は、やや外反しつつ上部で内湾気味に立ち上がる受け口状で、口縁端部の一部が外反して片口を呈する。口縁端部は、肥厚して上端に面をなす。

口縁部下外面には3条の凹線文が巡り、頸部屈曲付近には指頭圧痕凸帯を貼付する。また、胴部上位には列点文が残る。器面調整は、外面を胴部上位以上から口縁部に縦方向、それ以下に横方向のハケメで、内面を縦横及び斜行のハケメである。また、口縁部はヨコナデである。

SK56 (74~77)

74・75は、甕である。74は、胴部中位に最大径を持つ球体に近い卵倒形を呈する。口縁部は、外反気味の「く」字状で、口縁端部は肥厚しつつ上方へ僅かにつまみ出して面をなす。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメの後に下半部にヘラミガキ、内面をハケメと中位以下にケズリで、指頭圧痕も残る。また、口縁部はヨコナデである。75は、胴部上位に最大径を持つ卵倒形を呈する。口縁部は、やや稜の鈍い「く」字状で、口縁端部は上方へつまみ出して面をなす。器面調整は、胴部外面をタタキの後に縦方向のハケメ、下半部にヘラミガキを施す。胴部内面は上位にハケメが見えるが、磨滅のため不明である。また、口縁部はヨコナデである。

76は、短頸の甕となろう。器形は、胴部中位に最大径を持つ球形を呈する。口縁部は、強い窄りからやや開きながら短く立ち上がる。口縁端部は、微妙に肥厚して面をなす。器面調整は、胴部外面を右上がり、及び横方向のタタキ、内面を縦方向のハケメである。また、口縁部は外面にハケメの後にヨコナデである。

77は、高杯の杯部である。杯部は、屈曲部に断面台形状の突起を有する水平口縁で、口縁端部は大きく垂下して外端で面をなす。器面調整は、外面にヘラミガキが見える以外は、磨滅により調整不明である。

SK57 (78)

78は、小型の甕台であろう。筒状の胴部から大きく外反する受け部である。端部はやや肥厚して外端に面をなし、端面に2条の擬凹線文が巡る。受け部には、不定の円孔を施し、胴部外面には6条の凹線文が巡る。器面調整は、ナデ及びヨコナデである。

SK58 (79~80)

79は、大型の甕である。器形は、胴部上位に最大径を持つ卵倒形を呈する。口縁部は、微妙に内彎する「く」字状で、口縁端部はやや上下方に拡張して面をなす。端面には2条の擬凹線文が巡る。器面調整は、胴部外内面共にハケメで、内面には指頭圧痕が残る。また、口縁部はヨコナデである。

80は、高杯の脚部である。脚部は、中空の柱状部からラッパ状に開くものである。端部は、上下方に拡張して面をなし、端面に1条の凹線が巡る。柱状部外面には、6条と8条の退化凹線が巡り、裾部には、上下2箇所円孔を施す。器面調整は、外面をヘラミガキ、内面をケズリで、柱状部内面にはシボリ痕が顕著に残る。

SK63 (81)

81は、大型器種の底部である。大きく開く底部は、底面の厚みが非常に薄い。器面調整は、外面をヘラミガキ、内面をハケメである。

SK64 (82)

82は、甕である。器形は、胴部中位に最大径を持つほぼ球形を呈し、口縁部はやや外反する「く」字状である。口縁端部は、上方へ微妙につまみ出して面をなす。胴部外面には、縦2列の爪形の圧痕を施す。器面調整は、口縁部をヨコナデする以外は磨滅のため不明である。

SX06 (83)

83は、広口甕である。器形は、胴部中位に最大径を持つ算盤玉状を呈し、口縁部は短く外反する。口

縁端部は、上方へ拡張して面をなす。頸部から胴上半部の外面には、直線文と波状文を交互に施し、中位に刺突列点文を施す。器面調整は、胴部外面を下半部にヘラミガキ、内面下半部をケズリで、頸部内面には指頸圧痕が残る。また、口縁部はヨコナデである。

4. ビット (84~93)

SP02 (84~86)

84は、広口壺の口縁部である。口縁部は、円筒状にのびる頸部から緩やかに外反するもので、口縁端部は上方へ僅かに拡張しつつ若干垂下して面をなす。端面には、波状文を施す。器面調整は、外面を縦方向、内面を横方向のハケメで、後にナデ及びヨコナデである。

85は、受口壺の口縁部である。口縁部は、やや外反する頸部から屈曲して立ち上がるもので、口縁端部は肥厚して上端に面をなす。屈曲部外面には1条の凹線文が巡る。器面調整は、外面を縦方向、内面を横方向のハケメで、後にナデ及びヨコナデで仕上げる。

86は、大型器種の下半部である。小振りの底部から細身に立ち上がるものである。器面調整は、縦方向のヘラミガキ、内面を縦方向を主体とするケズリである。

SP176 (87)

87は、直口壺である。器形は、胴部中位に最大径を持つ球形を呈し、口縁部は短く直口する。口縁部下と頸部の外面には、それぞれ4条と2条の凹線文が巡る。器面調整は、外内面に縦方向のハケメで、内面下半部にイタナデ、上半部に指頸圧痕が残る。

SP222 (88)

88は、小型の付付き鉢である。器形は、短く緩やかに開く台部と、受け口状の口縁部を持つ鉢からなる。鉢部は、口縁端部で肥厚して上端に面をなし、一部外反して片口状をなす。口縁部下外面には、4条の凹線文が巡る。台部上位外面には、3条の退化凹線文が通り、円孔を4箇所施す。器面調整は、ナデ及びヨコナデである。

SP484 (89)

89は、広口壺の範疇であろう。器形は、胴部中位に最大径を持つ球体を呈する。口縁部は、短く直口気味の頸部から大きく外反する。口縁端部は上下方へ僅かに拡張して面をなし、端面には2条の縦凹線文が巡る。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメで、他は磨滅のため不明である。

SP548 (90)

90は、小型の付付き鉢であろう。器形は、横の鈍い「く」字状口縁部を有する球形の胴部に、低く大きく朝顔形に開く台部を持つ。口縁端部及び脚端部は、細身に丸くおさめる。器面調整は、外面をハケメで、僅かにタキが見える。脚部にはヘラミガキである。また、口縁部はヨコナデである。

SP856 (91)

91は、把手付き直口壺である。緩い屈曲の口縁部で、微妙に内彎しつつ直行する。口縁端部は、細身に丸くおさめる。口縁部外面には、5条の凹線文が巡る。断面長方形の把手は、口縁部付近やや立ち気味に付す。器面調整は、ナデ及びヨコナデである。

SP858 (92)

92は、蓋形の器種であろうか。平坦な天上部からやや開くものである。器面調整は、外面をヘラミガキ、内面をイタナデである。

SP1009 (93)

93は、底部である。底部は、小振りの平底から開くものである。器面調整は、内面をケズリあるいはイタナデである。器種は壺と考える。

5. 埋設土器 (94～102)

ST01 (94・95)

94は、大型の甕である。器形は、胴部上位に最大径を持つ卵倒形を呈する。口縁部は「く」字状で、口縁端部は外側へ強く肥厚して面をなす。器面調整は、胴部外面をタタキの後ハケメ、内面をイタナデである。また、口縁部はヨコナデである。身となる土器(95)の蓋となる。

95は、広口壺であろう。器形は、胴部上位に最大径を持つ肩張りの卵倒形を呈し、頸部で強く窄まり、緩やかに開く。口縁部外面には現状で1条の凹線文が巡る。器面調整は、胴部外面を上半部で縦及び横方向のハケメ、下半部でヘラミガキで、内面を下半部でハケメ、上半部でイタナデで、粘土接合痕が見える。身となる土器である。

ST07 (96)

96は、口縁部を欠損するが広口壺である。器形は、胴部中位に最大径を持つ算盤玉状を呈する。胴部外面には、直線文と波状文を施す。器面調整は、外面を縦方向のハケメ、下半部にヘラミガキで、内面をハケメ、下半部にケズリである。

ST08 (97)

97は、口縁部を欠損するが広口壺である。器形は、胴部中位に最大径を持つ算盤玉状を呈する。胴部外面には、直線文と波状文、及び列点文を施す。器面調整は、胴部外面を下半部でヘラミガキで、内面を横方向のハケメで、指頭丘痕が顕著に残る。

ST05 (98)

98は、口縁部を欠損するが広口壺である。器形は、胴部上位に最大径を持つ細身の卵倒形を呈する。胴部外面には、波状文と直線文を施す。器面調整は、外面を胴部上半にハケメ、下半部にヘラミガキで、内面をヘラケズリである。

ST09 (99)

99は、大型の甕である。器形は胴部上位に最大径を持つ卵倒形を呈し、口縁部は「く」字状である。口縁端部は上下方に拡張して面をなし、3条の縦凹線文が巡る。器面調整は、胴部外面下半部にヘラミガキが見える。

ST03 (100)

100は、口縁部及び底部を欠損するが、壺形の器種と考えられる。器形は、胴部中位よりやや上に最大径を持つ球形をなす。器面調整は、外面を上半部に縦方向のハケメ、下半部にヘラミガキで、内面を上半部にハケメ、下半部にヘラケズリである。

ST04 (101)

101は、直口壺である。器形は、胴部上位に最大径を持つ細身の卵倒形を呈し、やや内彎しつつ短く直行する口縁部を持つ。口縁端部は細身に丸くおさめ、口縁部下外面には1条の凹線文が巡る。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメ、内面をヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデである。

ST06 (102)

102は、甕である。器形は、胴部上位に最大径を持つ卵倒形を呈し、口縁部は稜の鈍い「く」字状で、口縁端部は上方に拡張して面をなし、2条の縦凹線文が巡る。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメの

後に、下半部にヘラミガキ、内面を横方向を主体とするヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデである。

6. 溝 (103~123)

SD02 (103)

103 は、脚付き無頸蓋の無頸蓋部であろう。器形は、胴部中位に最大径を持つ算盤玉状を呈する。口縁部は、外側へ断面三角形に張り出して上端に面をなす。器面調整は、外面を縦方向のヘラミガキで、内面を横方向のイタナデである。また、口縁部はヨコナデである。

SD08 (104)

104 は、大型の鉢部であろうか。器形は、内彎しつつ立ち上がるものである。口縁端部は、僅かに肥厚して上端に面をなし、端面には2条の凹線文が巡る。外面には、3条の退化凹線文が巡る。器面調整は、外面に横方向のヘラミガキが見える。

SD36 (105)

105 は、甕である。器形は、胴部中位以下を欠損するが、卵倒形を呈するものと考えられる。口縁部は、やや稜の鈍い「く」字状で、口縁端部は肥厚しつつ上下方に拡張して面をなす。端面には、3条の縦凹線文が巡る。器面調整は、ナデ及びヨコナデである。

SD01 (106・107)

106 は、大型の甕あるいは鉢である。口縁部は、「く」字状を呈し、口縁端部は肥厚しつつ僅かに拡張して面をなす。端面には、2条の縦凹線文が巡る。器面調整は、胴部外面を縦方向、内面を横方向のハケメで、胴部上位内面には指頭圧痕が残る。また、口縁部はヨコナデである。

107 は、甕である。器形は、胴部上位に最大径を持つ、細身の卵倒形を呈する。口縁部は、稜の鋭い「く」字状で、口縁端部は上方へ強く拡張して面をなす。端面には3条の凹線文が巡る。器面調整は、胴部外面をハケメの後底部付近にヘラミガキを施し、内面を上位付近までヘラケズリで、指頭圧痕が残る。また、口縁部はヨコナデである。

SD89 (108・110・111)

108 は、把手付き直口甕である。屈曲の緩い口縁部は、内彎気味に直口する。口縁端部は細身に丸くおさめる。口縁部外面には、6条の凹線文が巡る。断面長方形の把手は、口縁部付近に口縁部とほぼ並行に取り付く。器面調整は、ナデ及びヨコナデで、胴部内面には指頭圧痕も残る。

110・111 は、大型の甕である。110 は、胴部上位に最大径を持つ卵倒形を呈する。口縁部は、短く立ち上がる「く」字状で、口縁端部は微妙に肥厚して面をなす。端面には2条の縦凹線文が巡る。口縁部外内面及び胴部上位には、焼成後穿孔があり、口縁部側のものは何れも貫通しない。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメ、内面をケズリである。また、口縁部はヨコナデである。111 は、胴部上位に最大径を持つ卵倒形を呈する。口縁部は、短く立ち上がる「く」字状で、口縁端部は僅かに肥厚して面をなす。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメ、内面をナデで、口縁部はヨコナデである。

SD64 (109)

109 は、甕である。器形は、胴部中位よりやや上に最大径を持つ、球形に近い卵倒形を呈する。口縁部は稜の鋭い「く」字状で、口縁端部は肥厚して面をなす。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメ、内面をイタナデで、一部に指頭圧痕も残る。

SD105 (112)

112 は、広口壺である。器形は、胴部上位に最大径を持つ肩張りの卵倒形を呈する。口縁部は、窄まりの強い頸部から短く外反し、口縁端部は上方に拡張して面をなす。口縁部外面には、3条の凹線文が巡り、胴部上位外面には列点文を施す。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメの後、下半部にヘラミガキで、内面をハケメの後、横方向のイタナデである。また、口縁部はヨコナデである。

SD113 (113)

113 は、大型の台付き鉢であろう。鉢部が殆ど欠損するため全体の器形は不明である。短く開く台部で、鉢部は粘土円盤を充填して底面を成形する。台端部は面を持つ。台部上位外面には、2条の凹線文が巡る。器面調整は、鉢部外面をヘラミガキで、台部外面をヨコナデ、内面をヘラケズリである。

SD118 (114)

114 は、広口壺の口縁部である。口縁部は大きく外反し、口縁端部はやや上方へ拡張しつつ外傾気味に垂下して面をなす。端面には、3条の凹線文が巡る。口縁部内面には、羽状の刺突列点文を施す。器面調整は、ナデ及びヨコナデである。

SD121 (115)

115 は、小型の高杯の脚部である。器形は、ほぼ中央の柱状部から短くラッパ状に外反するものである。端部はやや肥厚して面をなす。柱状部と裾部には小さな円孔を施し、上位と中位及び下位外面に3条1単位の沈線文の退化凹線文が巡る。器面調整は、ナデ及びヨコナデである。

SD124 (116)

116 は、無頸壺である。器形は、内傾気味に立ち上がる鉢状を呈するもので、口縁部は内側に強く突出する。口縁下と屈曲部外面には、それぞれ1条と2条の凹線文が巡る。器面調整は、外面をナデ、内面をハケメの後、ナデで、口縁部付近等はヨコナデである。

SD126 (117~122)

117 は、広口壺である。口縁部は短く外反し、口縁端部は上下方に拡張して面をなす。器面調整は、ナデ及びヨコナデである。

118 は、甕の下半部であろう。小振りの平底から細身に立ち上がる胴部である。底部には、穿孔を施す。器面調整は、内面を横方向のハケメの後ヘラケズリである。底部付近外面には指頭圧痕が残る。

119 は、台部である。台部は、短くラッパ状に開くものである。端部は、肥厚しつつ若干上方へ拡張して面をなす。裾部には貫通しない小さな円孔状の刺突文を施す。器面調整は、外面をヘラケズリ、内面をケズリで、端部をヨコナデである。

120 は、高杯の杯部である。杯部は、屈曲を緩い受け口状の口縁部をもつもので、端部は外傾気味に面をなす。屈曲部外面には2条の凹線文が巡る。器面調整は、外面をヘラケズリで、内面をナデ及びヨコナデである。また、口縁部はヨコナデである。

121 は、高杯の脚部である。脚部は、中空の柱状部からラッパ状に開くもので、脚端部は外傾気味に上下方に拡張して面をなす。裾部には円孔を施す。器面調整は、外面をヘラミガキ、内面を横方向のケズリである。また、端部はヨコナデである。

122 は、小型の高杯の脚部である。脚部は、中空の柱状部からラッパ状に開くもので、脚単部は上方に拡張して面をなす。器面調整は、外面をヘラミガキで、内面を横方向のケズリである。

SD402 (123)

123 は、広口壺である。器形は、胴部中位に最大径を持つ肩張りのもので、口縁部はやや直口気味に

立ち上がる頸部から短く外反する。口縁端部は僅かに上下方へ拡張して面をなす。胴部上位外面は、直線文と波状文を施す。器面調整は、外面をヘラミガキで、内面をケズリあるいはイタナデである。また、口縁部はヨコナデである。

7. 流路 (124~144)

124 は、縄文土器の深鉢の口縁部である。口縁部は外反して、端部は細身に面をなす。端部は、外端部にキザミを施す。外面には、縦2列の「コ」字状キザミを施す。器面調整は、外面に二枚貝条痕を施す。また、内面をナデである。

125 は、小型の壺の胴部である。器形は、胴部中位に最大径を持つ算盤玉状を呈する。器面調整は、胴部外面を上位と下位に縦、中位に横方向のヘラミガキを施し、内面をナデである。

126 は、高杯の脚部である。脚部は、中空の柱状部からラッパ状に開くもので、脚端部は大きく上下方に拡張して面をなす。柱状部外面には、12条と9条の沈線条の退化凹線文が巡る。器面調整は、外面をヘラミガキで、内面を横方向のケズリである。また、脚端部をヨコナデである。

127 は、両把手付きの直口壺である。口縁部は、開き気味に直口するもので、口縁端部は肥厚して上端に面をなす。口縁部外面には、波状文と6条の凹線文が巡り、胴部外面にも波状文を施す。断面長方形の把手は、口縁部付近に口縁部とほぼ平行に取り付く。器面調整は、ナデ及びヨコナデで、内面にはハケメが見える。

128 は、受口壺の口縁部である。強い窄まりの口縁部は、外反しながら強く内彎して立ち上がり、口縁端部は微妙に肥厚して上端に面をなす。外面には、口縁下と屈曲部及び頸部にそれぞれ1条、1条と2条の凹線文が巡る。器面調整は、外面を縦方向のハケメ、内面を横方向のハケメで、指頭圧痕も残る。また、口縁部はヨコナデである。

129 は、大型の甕の胴部である。器形は、胴部上位に最大径を持つ卵形である。外面には、横3列の刺突列点文を施す。器面調整は、外内面にハケメを施し、上位外面に横方向のヘラミガキを施す。

130 は、大型の鉢である。器形は、内彎気味に立ち上がる受け口状の口縁部を持つものである。口縁端部は、肥厚して上端に面をなす。屈曲部外面には4条の凹線文が巡る。器面調整は、外面を縦方向、内面を横方向のヘラミガキを施す。

131 は、把手付き脚付き鉢である。器形は、中空の柱状部を持つ脚部にやや内彎する鉢部を持つもので、口縁部は丸くおさめる。断面楕円形の把手は鉢部中位から脚部上位に取り付く。器面調整は外面をヘラミガキで、後はナデ及びヨコナデ等である。

132 は、甕である。器形は、胴部上位に最大径を持つ細身の卵形を呈する。口縁部は、稜が鈍く屈曲の強い「く」字状で、口縁端部は上下方に拡張して面をなす。端面には、2条の縦凹線文が巡る。胴部外面には、線状の列点文を施す。器面調整は、胴部を上半部に横、下半部に縦方向のハケメ、内面を下半部にケズリで上半部に指頭圧痕が残る。また、口縁部はヨコナデである。

133 は、小型の甕である。器形は、胴部上位に最大径を持つ卵形を呈する。口縁部は、稜が鈍く、強く屈曲する「逆L」字状に近いもので、口縁端部は上方へややつまみ出して面をなす。胴部上位外面には、列点文がめぐる。器面調整は、胴部外面をハケメの後にヘラミガキ、内面をケズリで、指頭圧痕も残る。また、口縁部はヨコナデである。

134 は、高杯の脚部である。脚部は、中空の柱状部に、屈曲する裾部を持つ。裾部付近位に、貫通するものやしないものも合わせて円孔を施す。器面調整は、外面をヘラミガキ、内面をケズリで仕上げる。

135 は、高杯の脚部である。裾部はラッパ状に開くもので、やや外側へ拡張して面をなす。裾部外面には、内区に斜行文を施すへう描き鋳文を有す。器面調整は、外面をヘラミガキである。

136～138 は、器台である。136 は、真っ直ぐ延びる胴部とやや内傾気味に開く裾部からなる。裾端部は、肥厚して面をなす。胴部には円孔を施し、胴部及び裾部外面に現状で6条と19条の凹線文が巡る。器面調整は、外面をヨコナデ、内面をナデで、指頭圧痕が顕著に残る。137 は、強い窄まりの胴部から大きくラッパ状に外反する受け部からなる。口縁端部は、上方に拡張しつつ垂下して面をなす。端面には、3単位の波状文を施した後に円形浮文を貼付する。胴部中位には円孔を施し、外面に13条と現状で9条の凹線文が巡る。器面調整は、外面をヨコナデ、内面を微細なヘラミガキで仕上げる。138 は、大きく外反する受け部である。口縁端部は、上下方に拡張して面をなす。端面には、刺突列点文を施した後に太い竹管形の円形浮文を貼付する。器面調整は、外面にハケメだが、磨滅のため不明である。

139 は、短頸壺の口縁部である。口縁部は、強く窄まる頸部から大きく外反する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には、3条の指頭圧痕凸帯を貼付し、頸部外面に直線文と波状文を施す。器面調整は、磨滅のため不明である。

140 は、甕である。器形は、胴部のほぼ中位に最大径を持つ卵倒形を呈する。口縁部は屈曲して大きく外反し、口縁端部は細身に丸くおさめる。器面調整は、胴部外面を横方向を主体とするタタキの後に下半部にイタナデで、内面を縦横のタタキの後にイタナデである。また、口縁部はヨコナデである。

141 は、壺の底部である。器形は、小振りの平底から球体を呈する胴部を持つ。胴部下位には円孔を一箇所穿つ。外面は、赤色化粧土を塗布して、横方向を主体とするヘラミガキを施す。また、内面の調整はイタナデで仕上げる。

142 は、縄文晩期の深鉢の口縁部であろう。外傾気味の口縁部は、端部で細身に丸くおさめる。口縁部下には丸身で垂れ気味の断面三角凸帯を貼付し、凸帯下にキザミを施す。器面調整は、外面に条痕を施す。

143 は、小型の壺である。器形は、胴部中位に最大径を持つ玉葱状を呈し、底部は極小振りの平底である。口縁部は、強い窄まりから短く大きく開く。口縁端部は、上方へ僅かに肥厚して面をなす。器面調整は、外面をナデ、内面をハケメで、粘土接合痕及び指頭圧痕が顕著に残る。また、口縁部はヨコナデである。

144 は、台形土器である。脚部を欠損するので全形は不明である。器面調整は、磨滅のため不明である。

8. 包含層 (145～160)

145 は、大型の台付き壺である。器形は、胴部中位よりやや下側に最大径を持つ算盤玉状を呈する胴部に、短く外反する口縁部が付く壺形土器と、短く大きく開く台部とからなる。口縁端部は、上下方に拡張して面をなし、台端部は肥厚して面をなす。器面調整は、外面を壺上半部にハケメ、下半部でヘラミガキで、内面をイタナデである。台部外面はナデ、内面をケズリである。また、口縁及び脚はヨコナデである。

146 は、広口壺の口縁部である。大きく外反する口縁部で、口縁端部は上下方へ僅かに拡張して面をなす。端面は、間隔の狭い波状文を施す。器面調整は、内面にヘラミガキが見える。

147 は、広口壺の口縁部である。口縁部は僅かに開きながら立ち上がる頸部から口縁端部付近で屈曲気味に外反する。口縁端部は上下方に拡張して面をなす。頸部外面には、5条の凹線文が巡る。器面調

整は、ナデ及びヨコナデである。

148 は、台付き無頸壺の台部であろう。台部は短く開くもので、端部は上下方でも特に下方に強く拡張して面をなす。鉢部は底面の粘土円盤が剥離しており、外面には把手の痕跡が残る。器面調整は、外面をイタナデの後にヘラミガキで、台部内面を横方向のケズリである。

149 - 150 は器台である。149 は裾部である。裾部は僅かに開くもので、端部は微妙に肥厚して面をなす。外面には4条の沈線化した凹線文が巡り、鋸歯文状の線刻文様を施す。器面調整は、外面をハケメの後にナデで、内面をナデである。150 は、強く窄まる胴部から、あまり外反せずに開く受け部からなり、端部付近で僅かに外反する。端部は、肥厚しつつ上方につまみ出して面をなす。端部には、3条の凹線文が巡り、円形浮文を貼付する。胴部には円孔を施した痕跡が見える。器面調整は、外面を縦方向のハケメで、内面をハケメの後、受け部付近に横方向のヘラミガキである。

151 は、広口壺である。器形は、胴部中位に最大径を持つ算盤玉状を呈し、底部は平底にやや丸みを帯びる。口縁部は、強い窄まりから短く開き、口縁端部にかけて大きく屈曲して上端に面を持つ。口縁端部は、下方に肥厚して面をなす。外面には、頸部に2条の凹線文が巡り、胴上半部に波状文と直線文を交互に施文する。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメの後、下半部にヘラミガキで、内面を横方向のハケメの後、下半部にヘラケズリである。また、口縁部は縦方向のハケメの後ヨコナデである。

152 は、長頸壺である。器形は、胴部上位に最大径をもつ肩張りの卵倒形を呈する。口縁部は、あまり屈曲せずに窄まり、微妙に外反しながら直口気味に立ち上がる。口縁端部は細身に丸くおさめる。器面調整は、胴部外面をナデで、内面をイタナデである。また、口縁部付近はヨコナデである。

153 は、鉢である。器形は、胴部上位に最大径を持つもので、口縁部は屈曲の緩い「く」字状から細身に大きく外反する。器面調整は、胴部外面にヘラミガキが見え、内面をナデで、口縁部付近をヨコナデである。

154 は、短頸壺の口縁部である。口縁部は短く開くもので、口縁端部は内側へ僅かに拡張して面をなす。外面には3条の指頭丘痕文凸帯を貼付する。器面調整は、ヨコナデである。

155 は、ミニチュア土器である。口縁部が欠損するが、短頸壺と考えられる。器形は、胴部上位に最大径を持つ肩張りの卵倒形を呈する。器面調整は、外面にハケメが見えるが、磨滅のため不明である。

156 は、台付き無頸壺である。器形は、短くラッパ状に開く台部と、内側しつつ立ち上がる鉢状のものからなる。台部の端部は外傾気味に上方へ拡張して面をなす。無頸壺は、口縁端部で内側へ僅かに拡張して上端に面をなし、口縁部下に組孔を2個1単位で施す。また、口縁部外面には5条の凹線文が巡る。器面調整は、外面を下半部に縦方向、中位に横方向のヘラミガキで、内面を無頸壺にイタナデ、台部にケズリである。また、口縁部と台端部はヨコナデである。

157 は、脚付き無頸壺である。口縁部と脚部は欠損するが、無頸壺の器形は、胴部中位で大きく張り出す算盤玉状を呈する。器面調整は、横方向を主体とした丁寧なヘラミガキ、内面をハケメの後、上半部にナデで、頸部付近内面に成形時のシボリ痕と指頭丘痕が顕著に残る。

158 は、手握ねのミニチュア土器である。器形は、内傾気味に立ち上がる鉢状を呈する。器面には、指頭丘痕が顕著に残る。

159 は、大型の台付き鉢の台部である。台部は、短く若干開くもので、端部は面を持つ。台部上位外面には、2条の凸帯が、巡るが、これは幅広の粘土帯を貼付した後に、ヨコナデによって2条の凸帯となしている。器面調整は、鉢部の底面付近外面をヘラミガキで、台部ヨコナデである。

160 は、甕である。器形は、胴部中位に最大径を持つ球体を呈する。口縁部は、屈曲の緩い「く」字状から微妙に外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。胴部上位には、焼成後穿孔を2箇所持つ。器面調整は、外面を上半部に縦方向、下半部に横方向のハケメ、内面を横方向のハケメで、指頭圧痕が残る。

古墳時代の遺物

1. 概要

当該時期の遺構が少ない影響から、遺物の点数はNo.Ⅱ地点と比べてわずかであった。報告した土器では土師器の占める割合が高く、大小の器形とともに、遺存状況の良い資料が多い。壺・甕・高杯のほか、手焙形土器・ミニチュア土器が出土した。須恵器は主要な器種である蓋、杯をはじめ、高杯、壺などもあるが、全体の出土量は少ない。

以下、それぞれの遺物を種別・器種ごとに分類して、観察を加える。なお亀田Ⅱ地点と同じく、遺物の調整は後掲の観察表に一括して、特記事項のみ触れる。

2. 須恵器

A. 蓋 (167・168・169・211・213・214・215・216・218・219)

10点を図化した。たちあがりを持つ杯や高杯に対応する形態で、天井部にツマミを持つものが2点(216・219)ある。稜線や口縁端部の形態、天井部外面の調整などの特徴から、2類に分類した。

a. A類 (167・168・169・211・213・215・218)

天井部と体部の境に、稜線を持つものである。稜線はいずれも鈍化がすすみ、凹線状をなす。

天井部は中央が隆起してドーム状となるものが多い。外面の調整は、大半が回転ヘラケズリである。169は回転ヘラ切りの後に粗い回転ナデ、167は天井部中央が回転ヘラ切りのまま未調整で、周囲に回転ナデを加える。また168・215では、天井部の内面に同心円の当て具痕が残る。

体部は屈曲して垂下するもの(169・211)と、外傾して開くもの(167・168・215)がある。また、213・218は内湾気味にのびる。

口縁端部はいずれも内傾する。167・169を除いて、内面に明瞭な段を持つ。

b. B類 (214・216・219)

稜線はほとんど消失し、体部の屈曲は見られなくなる。天井部から緩やかに湾曲しつつ、口縁部へといたる。

天井部外面には、いずれも回転ヘラケズリが施される。214では粗く簡略化しており、ヘラ切りの痕跡が遺存する。なお219の天井部では、焼成に伴う歪曲が認められた。

口縁端部は、216が内傾してわずかに段をなし、214・219が丸くおさめる。

B. 杯 (165・170・171・212)

図化した4点は、いずれも良好な遺存状態であった。点数が少ないため、土器ごとに状況を記述する。

165は、平坦な底部からわずかに屈曲して体部をなす。受部は明瞭に突出、たちあがりは内傾し、外反

気味に口縁へいたる。口縁端部は丸くおさめている。底部外面には、丁寧な回転ヘラケズリを施す。

170は、底部から緩やかに湾曲する体部を持つ。たちあがりは長く、受部の突出も明瞭だが、鋭さは失われる。たちあがりは湾曲しながら口縁部へ続く。受部との境界は不明瞭。底部外面は回転ヘラ切り未調整、内面の中央には同心円の当て具痕が認められる。

171は、底一休部の形態が165と類似する。ただ器壁は全体に厚く、受部の突出も明瞭さに欠ける。たちあがりは内傾して、口縁部で軽く屈曲する。口縁端部は丸くおさめる。底部外面は回転ヘラケズリ、内面は中央に同心円の当て具痕をとどめる。

212はたちあがりが短く、受部の突出もなくなる。たちあがりは、受部から屈曲して直立気味に口縁へいたる。口縁端部は丸くおさめる。底部外面は回転ヘラ切りの後、粗い回転ナデで調整する。

C. 高杯 (217・220)

皿状の形態をなすもの(217)、杯部にたちあがりを受部を持つもの(220)が1点ずつ出土した。

217の杯部は、平坦な底部から体部が内湾してたちあがる。口縁部は器壁を減じ、外反気味となる。底部の外面では脚部外側に沿ってカキメを施す。口縁と体部の外面では、境界にそって凹線を1条、その下方に帯描波状文をめぐらす。内面は杯底部の中央に同心円の当て具痕が残る。脚部は欠損するが、杯底部外面の剥離痕から3方向のスカシを持つことがわかる。

220は器壁が厚く、口縁端部や受部端部にも鋭さが無い。たちあがりはほぼ直立して口縁端部にいたる。端部は内面にわずかな段を有する。脚部は円筒状の脚柱部から大きく外反させて裾部を成形、端部は方形を意識する。スカシは持たない。

D. 器台 (209)

大型の器台で、皿の一部が破片化して出土した。皿部分の口縁および底部は遺存していない。

外面には、3条の凹線が等間隔で配される。凹線で区切られた4区画のうち、上2つには帯描波状文を2列並べて埋める。また下2つの上側区画には銅文を刻む。最も下側の区画は無文だが、脚の接続部分と見られる剥離痕がある。

剥離痕は器壁に沿って長方形をなす。出土した部位では1箇所が遺存するのみで、脚の間隔や本数は不明。

E. 角杯 (224)

1点出土した。口縁の一部を欠損するが、器形の全容は把握できる。底部は平坦で、体部から口縁に向けて円錐に開く。底部側の3分の1程度において、器形全体が片側へ屈曲する。

口縁の端部と底面は、ヘラケズリを施して平滑にする。また口縁の内面には、粘土を継ぎ足した痕跡が残る。底面は屈曲を強調するために厚いケズリを加え、その影響を受けた器壁は、屈曲する側が極端に薄くなる。

体部外面にヘラミガキを加えて器面を整えるものの、調整は粗雑な印象を受ける。

F. 臺 (210・223)

2点を図化した。うち1点は把手のみ遺存する。

210は丸底の直口臺で、ほぼ完形の状態出土した。口縁は頸部から大きく開く。体部は肩が張り、底

部は尖り気味となる。

頸部は、途中でわずかな屈曲があるものの、ほぼ真っ直ぐ口縁端部に達する。口縁端部は丸くおさめらる。頸部の屈曲部分では、外面に凹線を加えて2条の突帯状に作り出す。

223は、「L」字状に曲がる把手部分だけが遺存する。把手部分は粘土塊を手づくねで成形した後、ヘラ状工具で表面を整える。屈曲部分の上下には縦方向の切りこみを加えている。基部では体部の器壁がわずかに残り、外面はタタキ、内面は同心円の当て具痕が認められる。

3. 土師器

A. 壺 (161・166・172・173・175・176・177・178・179・180・181・182・183・184・187・188・189・205・221)

19点を図化した。中～小形の直口壺・広口壺・短頸壺が大半を占める。大型品は、いずれも局部の遺存で、二重口縁壺の口縁部、ならびに体～底部のみ遺存するものがある。

a. 直口壺 (178・176・179・183・177・175・221)

口縁が斜め上方向へ真っ直ぐたちあがるもの。器高が7～9cmの小型品と、10cmを超える中型品にわかれる。

底部はいずれも丸い。重心が低めで、安定感のあるものが多いなか、177・178は尖り気味となる。体部は外方へ張りだし、緩やかに径を減じながら肩部をなす。そのまま頸部で「く」の字状に反転、真っ直ぐ口縁部にいたる。179・187は肩から頸部にかけてのクビレがわずかで、變もしくは短頸壺に近い形態となる。口縁端部は、187がわずかに外反、他は丸くおさめている。175・178・179の体～肩部・頸～口縁部には、分割成形の痕跡とみられる粘土の継ぎ目痕が残る。

体～底部の外面にはハケメが認められる。いずれも器面の状態が悪いため最終調整は不明瞭だが、さらにナデを加えている可能性が高い。内面はヘラケズリもしくは板ナデで調整する。ケズリは肩部上端まで及ばず、肩部から頸部にかけて、口縁部を成形する際の調整痕（ユビオサエ、ナデ）をとどめるものが多い。頸～口縁部はヨコナデで仕上げる。177は外面、178・187は内外面を、それぞれハケメで調整した後に、粗いナデを加える。

b. 広口壺 (187・188・184・182・161)

口縁が緩やかに外反するもの。底部は丸底 (182・184)、平底 (188) および平底気味のもの (161・187) が見られた。体部はいずれも球形で、肩部にかけて丸く膨らむ。182・187・188は器面に粘土接合痕が認められる。

182・184は口縁に向けて明瞭に外反しているが、161・184・187は極めてわずかで、直口壺に近い。口縁端部は丸くおさめらるもの (161・187) と端面を意識して成形するものがある。182は端面に沿ってヨコナデを施し、面を整える。188の端面には縦方向の刻みを配する。184は内傾して端面を水平にする意識がうかがえる。

底～体部の外面はヘラミガキまたはハケメで調整し、さらに肩部付近をヨコナデで消す。一方内面は、ヘラケズリまたは板ナデで調整する。肩部内面には、頸～口縁部を充足した際のユビナデ、ユビオサエが見られる。口縁部は最終調整にヨコナデを用いるものが多いが、182・184はヨコナデが薄く、ハケメ痕を器面にとどめている。

c. 短頸壺 (180・181・205)

体部から直立する口縁を持つもの。いずれも法量が小さい。

180・181は形態や調整手法に共通点が多い。底～体部は緩やかな球形、肩部は短く、体部からわずかに内湾するだけで頸部となる。頸部は外方へ開き気味にのび、途中で屈曲して直立したまま、口縁へ達する。口縁端部は丸くおさめる。

205は頸部が極端に短く、無頸壺に近い粗製の壺である。体部の膨らみは直線的で、平坦な底部から「く」の字状に屈曲して頸部へいたる。口縁は短く直立、端部は丸くおさめる。

180・181の調整は、外面の底～体部をハケメ、肩部以上をナデで仕上げる。また頸部付近にはユビオサエの痕が残る。一方内面は、底～体部がヘラケズリ、頸～口縁部には横方向のハケメを逃ねる。

205は手づねで成形した後、部分的にユビナデ・ユビオサエを加える。

d. 二重口縁壺 (166・173・172)

口縁が頸部から大きく外反し、途中で内側に屈曲した後に再び外反する。166は口縁～肩部、172は口縁部、173は頸～肩部のみがそれぞれ遺存する。

166は頸部から口縁にかけて短く外反し、直立に近く屈曲する。屈曲後は緩やかに外反して口縁端部へといったる。

172は口縁の屈曲がわずかで、斜め上へ真っ直ぐのびて端部にいたる。

173は丸みを帯びた肩部から、短く直立する頸部を有する。口縁は大きく開くが、屈曲部分以上は欠損するため、詳細不明。

e. 不明 (189)

平底の壺で、底～体部が遺存する。体部は直線的にたちあがり、内傾気味に湾曲して肩部へいたる。底部中央には焼成後に施した、径2.8cmの穿孔がある。

外面は体部をハケメ、底部付近をナデで調整する。体部下半の外面には焼成時のひび割れが見られ、底部は黒化する。内面にはハケメの調整痕が明瞭に残る。

B. 甕 (162・163・190・191・192・193・194・195・196・197・198・204・206・207)

円化したものは14点で、甕形の全容をとどめるものが多い。球形の体部に斜め外方へのびる短い口縁がつく。肩～頸部にかけて、分割成形による粘土の継ぎ目痕をとどめるものが多い。

すべて丸底で、体部にかけては緩やかに丸みを帯びるが、190・191・193・198など、長胴化の傾向が認められるものもある。球形の体部を持つ207では、体部の中心より少し上で、焼成後の穿孔を施す。197は肩部が体部の中心よりも高い「怒り肩」になる。頸部は「く」の字状に屈曲する。191は少し長めの頸部を持つ。

口縁は、外反気味に端部へといったものが多いなか、真っ直ぐ口縁端部にいたるもの(162・192・195)、内湾気味のもの(193)、途中で内側に屈曲を持つもの(206・207)も存在する。しかし形態の差異はわずかで、おおむね直線に近づきつつある。また口縁端部は丸くおさめるものが多くなり、端面を整える意識は希薄となる。191・194は外側へ屈曲気味に拡張させる。192ではわずかに上下を拡張させ、端面を方形に整える。193は内傾して内側がわずかに肥厚する。

底部から体部にかけて、外面はほとんどがハケメで調整する。そのまま最終調整とするものが多く、さらにナデが認められたものは、162・190・192である。191はタタキの後、粗い板ナデを加えている。

198は底部外面がすりへり、使用痕を顕著にとどめている。

ほとんどの土器で、内面にはヘラズリが施される。器壁を減ずるため積極的に施されるものと、板ナデに近い微弱なものが見られる。底部中央にはヘラズリが及ばず、整形時のユビオサエ痕をとどめるものも多い。197は、さらにユビオサエ・ユビナデを加えてヘラズリの痕跡を消している。また195では、ヘラズリの後、体部下半にハケメを加える。

肩部内面には、口縁部成形に際するユビオサエ、ユビナデをとどめるものが多い。204ではハケメ、192では丁寧なユビナデを施して、さらに調整を加える。195は、頸～肩部の外面にタタキを施す。粘土の継ぎ目痕によってタタキの範囲が限られるため、頸部の屈曲を作り出すための調整痕と考えられる。

頸～口縁部は、内外ともにヨコナデを施す。丁寧なものが多いなか、一部では先行するハケメが器面に遺存している。また194の内面は、ヨコナデを加えずにハケメで仕上げている。

C. 高杯 (164・199・200・201・202・203・208・222)

8点を図化した。そのうち形態の全容がわかるものは5点、164は脚部のみ、200は杯部のみが遺存する。199は脚の裾部を欠損する。

杯部はそれぞれ、杯体部の屈曲具合に違いが見られる。緩やかにたちあがり、屈曲のないものもあるが、調整で体部と底部の境界を意識する。

明瞭な屈曲を持つのは208で、杯底部の先端が外側へ突出し、屈曲部分で突帯状をなす。体部は内湾気味で、口縁付近がわずかに外反する。外面は、底部が縦方向のヘラミガキ、体部以上がヨコナデで調整する。

201も屈曲が直線的だが、屈曲部分は突出せず、曲がり具合も多少ゆるめになる。ほぼ直線にたちあがり、口縁付近で軽く外反する。外面では、底部中央から斜め方向に施されるハケメが屈曲部分以上でナデ消され、新たに横方向のハケメを加える。

203では底部から緩やかに内湾して、体部との境界に屈曲がなくなる。外面の調整は底部・体部ともに斜め方向のハケメを施すが、屈曲にあたる部分には横方向のハケメを1条めぐらして、器面に意識をとどめる。口縁部は外反して、端部を丸くおさめる。

200は杯部のみが遺存する。底～体部は皿状をなし、口縁部の外反もわずかとなる。

口縁端部は丸くおさめる。底部と体部の境界には凹線状の溝が1条めぐるが、割れ口の断面に粘土の継ぎ目が認められ、体～口縁部以上を充足する際の強いナデと考えられる。

202の杯部も200とほぼ同様の形態だが、口縁部の外反はさらにわずかとなる。口縁端部も厚い。底部・体部の境界をなす凹線状の溝はわずかとなるが、底部に中央から斜め方向のハケメ、体部以上に丁寧なヨコナデを施して、外面調整で明確な違いを見せる。

199は底部から碗状にたちあがる体部を持ち、緩やかに外反して口縁にいたる。底部と体部の境界は器形から完全に消滅。外面の調整も、底部付近のナデが多少粗くユビオサエ痕が遺存する程度で、明瞭な差はない。

222は杯部が浅い皿状をなす。底部から緩やかに内湾して口縁端部にいたり、体部における屈曲や調整の違いは認められない。口縁部は肥厚して、端部は丸くおさめる。

脚部は脚柱部から大きく開く裾部が特徴的で、形態だけでなく調整上でも両者を区別するものが多い。

208は脚柱部が円柱状をなし、裾部でラッパ状に開く。途中わずかに屈曲をみせて、端部にいたる。端

部は丸くおさめる。外面の調整は、脚柱部が縦方向のヘラミガキの後、上部を斜め方向のユビナデで消す。裾部はハケメの後でヨコナデ。一方内面は、脚柱部がナデ、裾部がハケメの後で端部付近をヨコナデする。

201・202・203は脚柱部が円錐をなし、裾部で大きく開く。脚柱部と裾部は調整でも違いが認められる。脚柱部は、202が板ナデ、203がハケメ、201がハケメの後で板ナデをそれぞれ施すが、裾部ではヨコナデで調整する。202・203では、屈曲を境に脚柱部の調整を明瞭にナデ消している。また内面も、脚柱部下端にはヘラケズリか板ナデ、裾部内面にはハケメとそれぞれに違いが認められる。裾端部は202・203が丸くおさめる。203は外反気味となる。201は内傾し、ナデを加えて端面を整える。なお裾部を欠損する199も、脚柱部の状況から、ほぼ同様の形態と考えられる。

222は脚柱部から緩やかに開きながら裾部にいたる。端部は内側に肥厚して端面にはわずかに方形への意識がある。調整は外面が摩滅のためはっきりしない。内面では、裾部において強いヨコナデが認められる。

脚部のみが遺存する164は屈曲を持たず、脚柱部から裾部まで「ハ」の字に開く。裾部外側には微弱な凹線を施し、端面は垂下する。全体に摩滅気味で、調整は不明瞭だが、外面が脚柱部を板ナデ、裾部をナデ。内面は裾部に横方向のハケメが認められる。調整の境界付近に、円形のスカシを3方向に穿つ。

D. ミニチュア土器 (185・186)

2点を図化した。いずれも底部から体部にかけて湾曲、緩やかにちあがる。頸部のクビレはほとんどなく、短く外反して口縁をなす。規模や形態などから、広口の壺を模したものであろう。

調整は、手づくねで大まかな形を作った後、頸部外面や底部内面にユビオサエを加えて細部を整える。成形後は全体に粗いナデを施す。

E. 手焙形土器 (174)

図化したのは1点だけで、頭一体部が部分的に遺存する。頭部は緩やかなドーム状をなし、前面が体部にかけて半円状に開口する。口部分の端面には竹管文を施す。体部側では2列見られるが、頭部側は摩滅のため1列しか確認できなかった。体部は円筒状で、外面では頭部との境に断面三角形の突帯を1条めぐらせる。内湾しながら底部へいたると考えられるが、欠損しており詳細は不明。

全体に摩滅・霽面の剥落が著しく、調整不明な箇所が多い。外面では、頭部の口部分をヨコナデ、突帯の上部を縦方向のヘラミガキで調整する。内面は頭部・体部ともハケメの後にナデを施す。体部との境界付近には粘土の継ぎ目が遺存する。

内面に煤などは付着していなかった。

第27表 古墳時代土器観察表(1)

No.	種別	器種	出土遺構	口径	器高	底径	観察
167	須恵器	蓋	水田	14.0	5.35		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部が回転ヘラ切り後、周囲を回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。
168	須恵器	蓋	水田	14.95	4.95		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリ。内面は天井部に同心円の当て具痕、その後口縁～底部に回転ナデ。
169	須恵器	蓋	水田	14.4	4.9		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部が回転ヘラ切りの後、粗い回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。
211	須恵器	蓋	SD1004	12.25	4.65		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。
213	須恵器	蓋	SD1004 井関	13.8	4.6		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。
214	須恵器	蓋	SD1004	14.15	4.75		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部がヘラ切りの後、粗い回転ヘラケズリ。内面は回転ナデの後、天井部にユビオサエ。
215	須恵器	蓋	SD1004 北平	14.7	5.25		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部がヘラ切りの後、粗い回転ヘラケズリ。内面は天井部に同心円の当て具痕、その後口縁～底部に回転ナデ。
216	須恵器	蓋	SD1004 井関	13.05	4.8		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリの後、ツマミ貼り付け。内面は回転ナデの後、天井部に多方向に仕上げナデ。
218	須恵器	蓋	SD1004 南平	13.4	4.25		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。
219	須恵器	蓋	SD1004 北平	13.2	4.65		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリの後、ツマミ貼り付け。内面は回転ナデ。
165	須恵器	杯	SK208	12.6	4.45		外面は、口縁～体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ後、底部中央に一方の仕上げナデ。
170	須恵器	杯	水田	13.0	5.4		外面は、口縁～体部に回転ナデ、底部が回転ヘラ切り未調整。内面は、底部中央に同心円の当て具痕、その後口縁～底部に回転ナデ。
171	須恵器	杯	SD402	13.6	5.5		外面は、口縁～体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリ。内面は、底部中央に同心円の当て具痕、その後口縁～底部を回転ナデ、底部中央に仕上げナデ。
212	須恵器	杯	SD1004 北平	12.3	4.9	8.05	外面は、口縁～体部に回転ナデ、底部が回転ヘラ切り後回転ナデ。内面は回転ナデ後、底部中央に仕上げナデ。
217	須恵器	高杯	SD1004	15.5	6.0		外面は口縁～杯体部にココナデ、杯体部にカキメ、脚柱～裾部にココナデ。内面は杯部にココナデの後、杯底部で一方の仕上げナデ。脚柱～裾部に回転ナデ。
220	須恵器	高杯	SD1004	12.6	10.1	11.2	外面は口縁部に回転ナデ、杯体部にナデ、杯底部にカキメ。内面は杯底部に同心円の当て具痕、その後口縁～底部を回転ナデ。
210	須恵器	壺	SD1004 井関	10.0	13.8	12.65	外面は、口縁～肩部に回転ナデ、体～底部にタタキの後、体部のみココナデ。内面は口縁～頸部に回転ナデ、肩部以下は完形のため観察できず。
223	須恵器	壺	包含層	7.75	5.0	2.25	外面は、把手部分を手づくねの後、ヘラ状工具で面取り、ユビオサエ。体部にタタキ。体部内面は同心円の当て具痕。
224	須恵器	角杯	包含層	8.6	13.4	3.2	外面は、口縁部に不定ヘラケズリ、体～底部にヘラミガキ、底面に不定ヘラケズリ。内面は口縁部がヘラ状工具でオサエ、体部にナデ、底部が手づくねのまま未調整。

第28表 古墳時代土器観察表(2)

No.	種別	器種	出土遺構	口径	器高	底径	観 察
209	須恵器	器台	SD1004		15.55		体部外面はヨコナデ、下部で方向を変える。内面は上部にヨコナデ、下半部にヨコナデ・板ナデの後、ユビオサエ。
161	土師器	壺	SH12	8.0	9.6		外面は口縁部ヨコナデ、頸～底部にナデ。内面は口縁部にヨコナデ、肩部以下は定形のため調整不明だが、底部中央にユビオサエ痕をみとめる。
166	土師器	壺	SK249	15.65	9.5		外面は口縁～頸部にヨコナデ、肩部は摩滅のため調整不明。内面は口縁～頸部にヨコナデ、肩部にヘラケズリ。
172	土師器	壺	SD602	18.5	4.65		口縁部は、内外ともヨコナデ。
173	土師器	壺	SD602	14.05	12.9		外面は口縁～頸部にハケメの後ヨコナデ、肩部にハケメ。内面は口縁部にヨコナデ、頸部にヘラケズリ、肩部にナデ。
175	土師器	壺	SD1003東肩	8.2	8.2	8.6(測)	外面は口縁～頸部にヨコナデ、肩～体部にハケメ、底部にユビオサエ。内面は口縁～頸部にヨコナデ、肩部にナデ、体～底部にヘラケズリ。
176	土師器	壺	SD1003東肩	6.9	7.3		外面は口縁～頸部にヨコナデ、肩～底部にハケメの後、ナデ。内面は口縁～頸部にヨコナデ、肩部にナデ、体～底部にヘラケズリ。
177	土師器	壺	SD1003東肩	8.0	9.1		外面は口縁～頸部がハケメの後ヨコナデ、肩～底部がハケメの後ナデ。内面は口縁～頸部にヨコナデ、肩部がハケメの後ユビオサエ、体～底部にヘラケズリ。
178	土師器	壺	SD1003	8.2	9.2		外面は口縁～頸部がハケメの後ヨコナデ、肩～底部がハケメの後ナデ。内面は口縁～頸部がハケメの後ヨコナデ、肩～底部にヘラケズリ。
179	土師器	壺	SD1003東肩	9.4	9.0		外面は口縁～頸部ヨコナデ、肩～体部がハケメの後ナデ。底部にユビオサエ。内面は口縁～肩部にヨコナデ、体～底部に弱い板ナデ。
180	土師器	壺	SD1003東肩	6.8	9.2		外面は口縁～肩部がナデの後ユビオサエ、体部にナデ、底部がハケメの後ナデ。内面は口縁～頸部にハケメ、肩部にナデ、体～底部にヘラケズリ。
181	土師器	壺	SD1003東肩	7.1	8.7	8.7	外面は、口縁～肩部がナデの後ユビオサエ、体～底部にハケメ。内面は、口縁～頸部にハケメ、肩部がヘラケズリした後ユビオサエ、体～底部にヘラケズリ。
182	土師器	壺	SD1003東肩	8.2	9.9		外面は、口縁～体部がハケメの後ヨコナデ、体～底部がナデの後ユビオサエ。内面は口縁部がハケメの後横ナデ、肩部にユビオサエ、体～底部にヘラケズリ。
183	土師器	壺	SD1003東肩	11.3	12.3		外面は、口縁～頸部がハケメの後ヨコナデ、肩～底部にハケメの後、体～底部をナデ。内面は口縁～頸部にハケメ、肩部にナデ、体～底部にヘラケズリ。
184	土師器	壺	SD1003東肩	12.1	14.7		外面は、口縁～底部にハケメの後、頸～体部をユビナデ。内面は口縁部にハケメ、肩部にユビオサエ、体～底部にヘラケズリ。
187	土師器	壺	SD1003	11.9	15.8		外面は口縁部にヨコナデ、肩部にナデ、体部に板ナデ、底部にナデ。内面は口縁部にヨコナデ、肩部にナデ、体～底部に板ナデ。
188	土師器	壺	SD1003東肩	11.2	16.9	4.6	外面は口縁～頸部がハケメの後ヨコナデ、肩部にナデ、体～底部に板ナデ。内面は口縁部にナデ、肩部にユビオサエ、体～底部にヘラケズリ。
189	土師器	壺	SD1003		17.25	8.8	外面は体部にハケメ、底部にナデ。内面は体～底部にハケメ。

第29表 古墳時代土器観察表(3)

No.	種別	器型	出土遺構	口径	器高	底径	観 察
205	土師器	壺	SD1004	7.1	6.7		内外面とも、手づくね成形の後、ユビナデ・ユビオサエ。
221	土師器	壺	包含層	8.35	11.4	1.9	外面は口縁部にヨコナデ、頸～肩部がハケメの後ヨコナデ。内面は口縁～頸部にヨコナデ、肩部以下は調整不明。
162	土師器	甕	SH12	15.8	21.5	1.55	外面は口縁部にヨコナデ、頸～底部がハケメの後、ナデ。内面は口縁部にヨコナデ、頸部にナデ、肩～底部にヘラケズリ。
163	土師器	甕	SH12	13.3	14.05		内外面とも、厚減のため調整不明。外面は、口縁部にヨコナデ、肩～底部にハケメ。内面はヘラケズリの痕跡がわずかに遺存。
190	土師器	甕	SD1003東層	14.9	25.8	23.35	外面は口縁部にヨコナデ、肩～底部がハケメの後、丁寧な板ナデ。内面は口縁部にヨコナデ、肩～底部にヘラケズリ。
191	土師器	甕	SD1003	16.85	32.8	27.8	外面は口縁部にヨコナデ、肩部に板ナデ、体～底部がタタキの後、粗いナデ。内面は口縁部にヨコナデ、肩部にナデ、体～底部にヘラケズリの後、底部中央をユビオサエ。
192	土師器	甕	SD1003	14.65	26.0	25.6(脚)	外面は口縁部にヨコナデ、頸～底部がハケメの後、ナデ。内面は口縁部にヨコナデ、肩～底部にユビナデ、体～底部にヘラケズリ。
193	土師器	甕	SD1003(西側)3区	17.6	23.5		外面は口縁部にヨコナデ、肩～底部にハケメ。体～底部には張付着して調整不明。内面は口縁部にヨコナデ、肩部にユビオサエ、体～底部にヘラケズリ。
194	土師器	甕	SD1003東層	15.8	23.35	24.25	外面は口縁部がハケメの後、粗いヨコナデ、肩～底部にハケメ。内面は口縁部にハケメ、肩～底部にヘラケズリ。
195	土師器	甕	SD1003	15.4	17.0		外面は口縁部にヨコナデ、頸～肩部にタタキ、体～底部にハケメ。内面は口縁部がハケメの後ヨコナデ、肩～底部にヘラケズリの後、体～底部をハケメ。
196	土師器	甕	SD1003	16.7	10.7		外面は口縁部にヨコナデ、肩～底部がハケメの後ヨコナデ。内面は口縁部にヨコナデ、肩部にナデ、体部にヘラケズリ。
197	土師器	甕	SD1003(最北部)	15.1	19.5	21.4	外面は口縁部にヨコナデ、肩～底部がハケメの後ナデ。内面は口縁部にヨコナデ、肩～底部がヘラケズリの後ユビオサエ。
198	土師器	甕	SD1003(西側)3区	18.0	31.5	25.7	外面は口縁部にヨコナデ、肩～底部にハケメ。底部は厚減のため調整不明。内面は口縁部にヨコナデ、肩部にユビオサエ、体部にヘラケズリ、底部がユビオサエの後ナデ。
204	土師器	甕	SD1004	9.7	10.5		外面は口縁部にヨコナデ、頸～底部にハケメ。内面は口縁部にヨコナデ、肩部にハケメ、体～底部にヘラケズリ。
206	土師器	甕	SD1003	12.85	17.35	17.55(脚)	外面は口縁部にヨコナデ、肩～底部にハケメの後、肩部および底部をなで。内面は口縁部にヨコナデ、肩部にナデ、体～底部にヘラケズリ。
207	土師器	甕	SD1004	15.8	29.0		外面は口縁部にヨコナデ、肩～底部にハケメ。内面は口縁部にヨコナデ、肩部にユビオサエ、体～底部にヘラケズリ。
164	土師器	高杯	P-765	17.75	12.5		外面は脚柱部に板ナデ、裾部にナデ。内面は脚柱部が未調整、裾部にハケメ。
199	土師器	高杯	SD1003(西側)3区	14.75	8.95		外面は口縁～体部にヨコナデ、杯底部にユビオサエ、脚柱部にヘラミガキ。内面は口縁～杯底部がハケメの後ヨコナデ、杯底部の粘土充填部分にナデ、脚柱部にヘラケズリ。

第30表 古墳時代土器観察表(4)

No.	種別	器種	出土遺構	口径	器高	底径	備 考
200	土師器	高杯	SD1003東厨	17.3	6.6		外面は口縁～杯体部にヨコナデ、杯底部がハケメの後ナデ。内面は口縁～杯体部にヨコナデ、杯底部にナデ。
201	土師器	高杯	SD1003東厨	16.7	12.9	11.8	外面は口縁部にハケメ、杯体部がハケメの後ナデ、杯底～脚柱部にハケメ、裾部にヨコナデ。内面は口縁～杯体部にハケメ、杯底部にナデ、脚柱部の下半をヘラケズリ、裾部がハケメの後ヨコナデ。
202	土師器	高杯	SD1003東厨	17.35	14.6	12.55	外面は口縁～杯体部にヨコナデ、杯底部にハケメ、脚柱部にヘラミガキ、裾部にヨコナデ。内面は口縁～杯体部がハケメの後ナデ、杯底部にナデ、脚柱部にヘラケズリ、裾部にハケメ。
203	土師器	高杯	SD1003東厨	19.65	14.8	12.5	外面は口縁部にナデ、杯体～底部にハケメ、体部の屈曲部分に横方向のハケメ、脚柱部にハケメ、裾部にヨコナデ。内面は口縁～杯底部がハケメの後ナデ、脚柱部下にヘラケズリ、裾部にヨコナデ。
208	土師器	高杯	SD1004井園	16.25	11.5	10.55	外面は口縁～杯体部にヨコナデ、杯底部にヘラミガキ、脚柱部がヘラミガキの後ナデ、裾部がハケメの後ナデ。内面は口縁～杯底部にヨコナデ、脚柱部にナデ、裾部がハケメの後ヨコナデ。
222	土師器	高杯	包含層	18.2	14.4	10.45	外面は口縁～杯底部にナデ、脚柱部に板ナデ、裾部にナデ。内面は口縁～杯底部にヨコナデの後、杯底部中央を仕上げナデ、脚柱部に板ナデ、裾部にナデ。
185	土師器	ミニチュア土器	SD1003東厨	4.6	3.7		内外面とも手づくね成形の後、部分的にナデ・ユビオサエ。
186	土師器	ミニチュア土器	SD1003東厨	4.2	3.1		内外面とも手づくね成形の後、部分的にナデ・ユビオサエ。
174	土師器	手船形土器	SD602	11.1	13.55		外面は頸部にナデ、一部でヘラミガキ。体部が摩滅のため調整不明。内面は頸部にハケメの後、一部をユビオサエ・ナデ。体部がハケメの後ナデ。

奈良時代の遺物

C区D457 225 土師器 杯 回転台土師器である。底部はヘラ切りである。

C-2区SE301 226・227 土師器 杯 回転台土師器である。底部はヘラ切りである。

228 土師器 高杯 脚部は面取りが行われ、脚端部は内側に丸く巻き込む。

B-7区SK220 流路(SD1002)の埋没過程にほぼ一括に投棄されたものである。

229～233 須恵器 杯A 杯AⅡである。

234～239 須恵器 杯B 杯BⅡである。

240 須恵器 稜碗 稜はやや甘い。

241 須恵器 杯B蓋 縁部はほとんど屈曲しない。端部もゆるやかに屈曲して下方に長く延びる。

242・243 須恵器 皿A 242は口縁部が底部から内湾しながら立ち上がるもので、端部は丸みをもつ。底面に墨書があるが判読できない。243は大型の皿である。口縁部はやや内湾しながら立ち上がり、端部はやや外反する。端面は上を向き、平坦である。

244 須恵器 皿B 大型の皿である。底部からすどく屈曲して上方に立ち上がる。端面は上を向き平坦である。

- 245 須恵器 水瓶 外面はヘラミガキが施されている。頸部の細さから水瓶と考えられる。
- 246 須恵器 甕 口縁部は短く外反する。口縁部端面は外方を向くが、口縁部内面の押さえがきついため面状になっている。
- 247 須恵器 甕 底部は平底で、ヘラにより切り抜かれた蒸気穴をもっている。穴は中央に円形のもの1つ、外側に不整形円形ものが5つと推定される。胴部中位に2条の沈線が施され、その上に牛角状の把手を貼り付けている。
- 248 土師器 杯 手づくねの土師器である。口縁端部は内側に巻き込んだようになり、沈線をなしている。
- 249 土師器 甕 口縁部は大きく開き、端部は丸みをもつ。
- 250~252 土師器 製塩土器 厚手の焼塩土器である。胎土に白色砂粒を多く含む。
- A区SK101 253 須恵器 杯G h 体部下半はあまり丸みをもたない。
- B区SK251 254~258 土師器 杯 回転台土師器である。254~257は体部から口縁部にかけて直線的に開く。ナダが強いためか凹凸が大きい。258は手づくねの土師器である。体部から口縁部にかけて丸みをもつ。
- 259 土師器 皿 手づくねの土師器である。口縁部はやや外反しながら外側に開く。
- 260 土師器 蓋 笠形で縁部に屈曲をもたない。つまみの中央はへこんでいる。
- B-1区SK203 262 須恵器 甕 116と同様に楕円形の蒸気孔をもっているが、底部に高台をもっている。
- C-3区SK359 261 須恵器 無頸壺 長頸壺の頸部を切り取ったような形態をしている。器形は楕円形に歪んでいる。
- C区 SD401 263 須恵器 杯B 杯BⅢである。
- C-2区 SD262 264 土師器 碗 高い高台をもつ碗である。体部から口縁部にかけて直線的に開く。
- 265 須恵器 短頸壺 口縁部は体部から緩やかに曲がり上方へ延びる。
- F区流路 266 須恵器 積碗蓋 高い環状つまみをもつ蓋である。縁部は屈曲をもち、端部は下方に突出している。内面中央部にヘラ記号「11」がある。器形はかなり歪んでいる。
- 267・268 須恵器 杯B 267は大型で器高の高い杯BⅠである。268は杯BⅢである。
- B区 SD1001 269 須恵器 杯B蓋 縁部の屈曲は緩やかで、端部は丸みを帯びている。つまみは宝珠形である。
- 270 土師器 杯 口縁端部は内側に巻き込むように膨らみ、沈線状になる。
- A区 SD1002 271 須恵器 杯A 杯AⅣである。体部下半にやや丸みをもつ。
- 272 須恵器 積碗 体部中位で稜をもち、口縁端部はほぼ水平に外反している。
- D区 SD1003 273 土師器 碗 手づくねの土師器である。丸底の底部から口縁部にかけて内押しで立ち上がる。
- 274 土師器 壺 手づくねの土師器で、ミニチュアの壺である。
- 275 土師器 甕 長胴の甕である。体部中位で最大径をもつ。口縁部は外反し、端部は尖り気味になっている。
- 包含層 276 須恵器 杯G h 体部下半に丸味をもっている。

- 277 須恵器 杯A 杯AⅣである。体部は底部から直線的に立ち上がる。
- 278 須恵器 皿B 大型の皿である。
- 279 須恵器 皿A 口縁端部は内側に巻き込んだようになり、沈線をなしている。
- 280 須恵器 皿 変器型の皿である。高めの輪高台をもち、口縁端部が外反する。
- 281・282 須恵器 円面碗 281は大型の蹄脚碗である。碗部と脚部が連続して成形されている。脚上端部の脚節は2条以上ある。282は中型の圈足碗である。

平安時代以降の遺物

- A区P72 283 備前 播鉢 備前Ⅴ期の播鉢である。端面に3条の凹線が施されている。
- A区P100 284 須恵器 碗 体部下半は丸味をもち、口縁部にかけて直線的に開く。東播系須恵器である。
- A区P152 285 青磁 碗 森田・横田分類の同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類である。
- A区P156 286 青磁 碗 森田・横田分類の能泉窯系青磁碗Ⅰ-3類である。口縁端部はやや玉縁状に肥厚している。
- A-3区P151 287 土師器 小皿 手づくねの土師器である。
- 289 土師器 鍋 口縁部は頸部で外側に大きく屈曲し、やや内湾しながら立ち上がる。
- 288 白磁 碗 森田・横田分類の白磁碗Ⅴ類である。口縁端部は外反する。
- B-7・9区 P47 290 土師器 鍋 口縁部は玉縁状に肥厚している。硬質の焼成である。
- B-7・9区 P340 291 備前 播鉢 備前Ⅴ期の播鉢である。端面に3条の凹線が施されている。播り目は7本である。
- B区P650 292 備前 播鉢 備前ⅤB古期の播鉢である。播り目は7本で、横方向にも施されている。
- B-7区P274 293 須恵器 小皿 底部糸切りの小皿である。
- 294 土師器 小皿 手づくねの土師器である。口縁部は丸みをもち、全体的に歪んでいる。
- B-7区P1001 295 回転台土師器である。底部はへら切りである。
- B区P356 296 森田・横田分類の同安窯系青磁碗Ⅲ-1類である。
- C区P283 297 白磁 碗 森田・横田分類の白磁碗Ⅱ類である。輪には細かい貫入が入っている。
- C-2区P1053 298 須恵器 小碗 小型の碗である。
- C区P572 299 土師器 小皿 回転台土師器である。底部はへら切りである。
- B区SK250 300 備前 播鉢 備前ⅤB新期の播鉢である。播り目は7本である。
- 301 青磁 碗 能泉窯系細連弁文碗である。底部は蛇の目輪はぎである。釉色はやや黄味がかっている。
- B区SK209 302 土師器 三足付鍋 口縁部は頸部で大きく屈曲して直線的に外側に開く。
- 303 青磁 皿 能泉窯系の青磁皿である。口縁部はフリル状になり、口縁部内面に3条の沈線と見込み沈線が施されている。
- B-1区SK206 304 土師器 鍋 口縁部は鉄鍋を模して、逆L字に屈曲している。
- C区SK311 305・306 須恵器 碗 底部に凹みをもない。155のロクロ目はやや強い。西播系須恵器と思われる。
- C区SK333 307 須恵器 碗 底部に凹みをもない。西播系須恵器と思われる。
- 308 土師器 皿 手づくねの土師器である。手の字状の口縁を持っている。

B区SD107 309 青磁 碗 龍泉窯系青磁碗である。底部は蛇の目軸はぎで、見込みに花文のスタンプがある。

A-3区 SD1002 310 須恵器 碗 やや大きいサイズで、しっかりとした平高台をもつ。

311 土師器 小皿 口縁部は丸みをもち、全体的に歪んでいる。

312 土師器 羽釜 口縁部はわずかに内湾しながら上方に立ち上がる。しっかりとした鋳をもつ。

313 瓦質土器 三足付羽釜 球形の体部で口縁部もそのまま内傾しながら立ち上がる。口縁部は丸い。

314 緑釉陶器 底部 底部糸切りの平高台である。耳皿あるいは小碗であろう。須恵質の胎土にやや濃緑色の釉が薄く施されている。底部には施釉されていない。京都産で、9世紀後半～10世紀前半のものである。

315・316 白磁 碗 315は森田・横田分類の白磁碗VorⅧ類である。口縁部は外反して、水平になる。見込みに口縁部内面に沈線をもつ。316は森田・横田分類の白磁碗Ⅷ類である。

317・318 白磁 皿 336は森田・横田分類の白磁皿Ⅲ類である。見込みに割花文をもつ。335は森田・横田分類の白磁皿Ⅳ-2類である。

319-320 青磁 碗 361は森田・横田分類龍泉窯系青磁杯Ⅰ-1類である。357は森田・横田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類である。

F-1区流路 321 青磁 碗 森田・横田分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類である。

B-1区流路 322 青磁碗 森田・横田分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5・d類である。見込みに「金玉満堂」のスタンプが押されている。

D-7区SD1004 268 土師器 鍋 口縁部は頸部で緩やかに屈曲して外反する。端部はやや尖り気味となっている。

包含層 324 須恵器 碗 体部は丸く、口縁部はわずかに外反する。

325 緑釉陶器 杯 底部が平底で、体部に丸みを持つ杯形の形態と考えられる。類例は少ない。軟質灰白色の胎土に、淡緑色の釉が全面施されている。京都産で、9世紀代のもと考えられる。

326 緑釉陶器 底部 碗あるいは皿の底部である。高台は蛇の目高台である。焼成は須恵質で、釉は薄い。京都産で、9世紀後半から10世紀前半のもと考えられる。

327 備前 壺 備前Ⅳ期の壺である。肩部に4本1単位の櫛波状文がめぐる。口縁部は外側に丸く膨らませた程度である。

328 備前 播鉢 備前Ⅴ期の播鉢である。備目は13本である。

329 備前 甕 備前ⅣB新期の甕である。玉縁状の縁部に1条の凹線状のくぼみをもつ。

330 常滑 甕 外面に格子状のスタンプが施される。

331-339 白磁 碗 335は森田・横田分類の白磁碗Ⅲ類である。331・332・336は森田・横田分類の白磁碗Ⅳ類である。333・338は森田・横田分類の白磁碗Ⅴ類である。333は口縁部を外反させ、内面に櫛描文、外面に罽目文をもつ。338は見込みに沈線をもつ。334は森田・横田分類の白磁碗VorⅧ類である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。端部は丸みをもつ。337は森田・横田分類の白磁碗Ⅷ類である。見込みに太めの沈線をもち、目跡を残している。339は森田・横田分類の白磁碗Ⅷ類である。

340・341 白磁 皿 340は森田・横田分類の白磁皿Ⅵ類である。体部から口縁部にかけて内湾しながら開き、端部はやや尖り気味となる。341は体部下平以下が露胎で、見込みに沈線をもつ。胎土は白色で、釉色はやや青みがかったり。

342・343 青白磁 合子 菊花を型押しした合子の身である。釉色は342が青白く、343はやや緑色が強い。

344～349・352 青磁 碗 344・345は森田・横田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類(割花文碗)である。346は森田・横田分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5類(連弁文碗)である。347は龍泉窯系青磁類連弁文碗である。348は森田・横田分類の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。露体部が赤変している。349は森田・横田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-V・c類である。釉色は黄緑色で、見込みに花文のスタンプがある。352は森田・横田分類同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類である。

350 青磁 小碗 森田・横田分類の龍泉窯系青磁小碗Ⅲ-3類である。

351 青磁 杯 森田・横田分類の龍泉窯系青磁杯Ⅲ-1類である。

353・354 青磁 皿 森田・横田分類の同安窯系青磁皿Ⅰ-2類である。354の底部には墨書「天・」がある。

355 染付 皿 中国製(景德鎮窯)の染付である。底部は基范底である。時期は16世紀後半である。

第31表 出土遺物観察表(奈良時代以降)(1)

No.	器種	器形	地区	遺構名	口径	器高	底径	調査および備考
225	土師器	杯	C	P457	(12.5)	3.7	7.3	内外面とも回転ナデ、見込み・底部は摩滅
226	土師器	杯	C-2	SE301	(12.1)	4.5	7.06	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
227	土師器	杯	C-2	SE301	13.3	3.3	8.5	内外面とも回転ナデ、見込みは仕上げナデ、底部はヘラ切り後ナデ
228	土師器	高杯	C-2	SE301	-	(6.5)	(10.0)	脚部下半はコナデ、脚部上半外面は縦方向のヘラケズリ
229	須恵器	杯A	B-7	SK220	(12.8)	3.25	(9.05)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
230	須恵器	杯A	B-7	SK220	(12.4)	3.45	(8.0)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ、板状底痕あり
231	須恵器	杯A	B	SK220	(12.35)	3.5	(7.4)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
232	須恵器	杯A	B-7	SK220	12.75	3.6	(8.2)	内外面とも回転ナデ、見込みに仕上げナデ、底部はヘラ切り後ナデ
233	須恵器	杯A	B-7	SK220	(12)	3.55	(7.2)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
234	須恵器	杯B	B-7	SK220	(13.05)	5.05	8.7	内外面とも回転ナデ、見込みに仕上げナデ、底部はヘラ切り後ナデ、ツメ形底痕、ヘラ記号「X」あり
235	須恵器	杯B	B-7	SK220	(13.1)	4.5	(9.4)	内外面とも回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ
236	須恵器	杯B	B-7	SK220	(13.5)	4.65	(8.7)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
237	須恵器	杯B	B-7	SK220	(13.15)	4.4	(9.3)	内外面とも回転ナデ、見込みに仕上げナデ、底部はヘラ切り後ナデ、ツメ形底痕あり
238	須恵器	杯B	B-7	SK220	(12.4)	4.1	(8.6)	内外面とも回転ナデ、見込みに仕上げナデ、底部はヘラ切り後ナデ
239	須恵器	杯B	B-7	SK220	12.8	3.4	10.1	内外面とも回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ後ナデ
240	須恵器	横碗	B-7	SK220	(18.8)	5.2	(7.9)	内面-外面上半は回転ナデ、外面下半は回転ヘラケズリ、底部はヘラ切り
241	須恵器	蓋	B-7	SK220	(23.85)	(1.7)	-	頂部は手持ちヘラケズリ、縁部内外面はコナデ、内面中央部はナデ
242	須恵器	皿A	B-7	SK220	(23)	2.58	-	内外面とも回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、底面に墨書あり
243	須恵器	皿A	B-7	SK220	(28.65)	(4.20)	(23.50)	内外面とも回転ナデ、見込みに仕上げナデ、底部はヘラ切り後ナデ

第32表 出土遺物観察表(奈良時代以降)(2)

No.	器種	器形	地区	遺構名	口径	器高	底径	調整および備考
244	須恵器	皿B	B-7	SK220	(36.6)	(8.05)	(32.6)	内面～外面上半は回転ナデ、外面下半は回転ヘラケズリ(板ナデ)
245	須恵器	水甌	B-7	SK220	-	(13.9)	7.9	内面は回転ナデ、外面はミガキ、底部は回転ヘラケズリ
246	須恵器	甕	B-7	SK220	(41.7)	(18.45)	-	口縁部は内外面とも回転ナデ、体部外面は平行タキ後カキ目、体部内面は同心円当具痕
247	須恵器	甌	B-7	SK220	-	(15.4)	(14.8)	内面は横方向の板ナデ後指オサエ、部分的に縦方向板ナデ、外面は回転ナデ、下端部のみ回転ヘラケズリ、底部は板ナデ
248	土師器	杯	B-7	SK220	(18.2)	3.25	(12.7)	体部内外面はココナデ、底部内外面はナデ
249	土師器	甕	B-7	SK220	(25.65)	(7.38)	-	口縁部は内外面ともココナデ、体部外面はタテハケ、体部内面は板ナデ
250	土師器	製塩土器	B-7	SK220	(12.2)	(8.6)	-	内外面とも指オサエ、ナデ
251	土師器	製塩土器	B-7	SK220	12.8	(7.1)	-	内外面とも指オサエ、ナデ
252	土師器	製塩土器	B-7	SK220	12.1	(10.4)	-	内外面とも指オサエ、ナデ
253	須恵器	杯Gh	A	SK101	(10.9)	(3.85)	-	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
254	土師器	杯	B	SK251	13.2	3.6	7.75	体部内外面は回転ナデ、体部外面下半に指痕旺盛、底部内外面はナデ
255	土師器	杯	B	SK251	(12.9)	3.4	(6.3)	外面は摩滅
256	土師器	杯	B	SK251	(13.4)	3.3	(9.4)	体部内外面は回転ナデ、底部内外面はナデ
257	土師器	杯	B	SK251	(13.5)	2.8	(9.1)	体部内外面はココナデ、底部内外面はナデ
258	土師器	杯	B	SK251	14.2	2.65	9.75	体部内外面は回転ナデ、底部内外面はナデ
259	土師器	皿	B	SK251	16.05	(1.85)	(14.1)	口縁部内外面はココナデ、底部内外面はナデ
260	土師器	蓋	B	SK251	15.9	3.1	-	端部内外面は回転ナデ、頂部・内面中央部はナデ
261	須恵器	無頸壺	C-3	SK359	-	10.2	7.6	内面～外面上位は回転ナデ、外面下位～底部は手持ちヘラケズリ、口縁はヘラケズリで楕円形を呈する
262	須恵器	甌	B-1	SK203	-	(4.2)	(18.8)	内外面とも回転ナデ
263	須恵器	杯B	C	SD401	14.45	4.6	11.2	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
264	土師器	碗	C-2	SD262	(15.0)	(6.0)	(8.0)	体部内外面は回転ナデ
265	須恵器	短頸壺	C-2	SD202	10.2	(7.7)	-	内面～口縁部外面は回転ナデ、体部外面は回転ヘラケズリ後、回転ナデ
266	須恵器	椀蓋	F-1-2	流路	-	(3.3)	(19.8)	外面～縁部内面は回転ナデ、内面中央部はナデ、ヘラ記号
267	須恵器	杯B	F-1-1	流路	(17.1)	7.5	(11.1)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
268	須恵器	杯B	F-1-1	流路	(13.15)	4.8	(10.6)	内外面とも回転ナデ、見込みは仕上げナデ、底部はヘラ切り後ナデ
269	須恵器	杯B蓋	B-2	SD1001	14.15	2.2	-	頂部は回転ヘラケズリ、縁部内外面は回転ナデ、内面中央部はナデ
270	土師器	杯	B-2	SD1001	14.7	3.4	-	内外面ともココナデ、底面は不定方向の指ナデ、見込みはナデ
271	須恵器	杯A	A-3	SD1002	12.4	3.6	7.9	内外面とも回転ナデ、見込みは仕上げナデ、底部はヘラ切り後ナデ
272	須恵器	椀	A-3	SD1002	(15.7)	5.15	(9.3)	口縁部内外面は回転ナデ、見込みは仕上げナデ、体部下半は回転ヘラケズリ、底部はナデ
273	土師器	碗	D-7	SD1003	12.75	5.15	4.4	口縁部内面はココナデ、見込みは仕上げナデ、底部はナデ、外面は摩滅
274	土師器	壺	D-4	SD1003	-	(5.7)	-	外面は縦方向ミガキ、内面はハケ後ナデ

第33表 出土遺物観察表(奈良時代以降)(3)

No.	器種	器形	地区	遺構名	口径	器高	底径	調整および備考
275	土師器	甕	D-7	SD1003	(17.25)	(34.35)	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面上位はヨコハケ、中位はハケ後ナデ、下位はタテハケ
276	須恵器	杯A	C	包含層	(11.0)	3.9	6.7	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
277	須恵器	杯A	C-2	包含層	12	3.3	-	内外面とも回転ナデ、底面はヘラ切り
278	須恵器	皿B	C-3	包含層	(26.8)	(5.65)	21.6	内外面とも回転ナデ、見込みに仕上げナデ、底部はヘラ切り後回転ナデ、ツメ彫り痕あり
279	須恵器	皿A	C-2	包含層	(17)	1.85	(13.5)	内外面とも回転ナデ、見込みに仕上げナデ、底部はヘラ切り後ナデ
280	須恵器	皿	C-2	包含層	13.4	1.9	6.4	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
281	須恵器	円面硯	D-4	包含層	-	(4.2)	(20.8)	台部内面・底面は回転ナデ、脚部・台部内面はヘラズリ
282	須恵器	円面硯	B-7-8	包含層	(16.8)	(1.4)	-	内外面とも回転ナデ
283	備前	摺鉢	A	P72	-	(2.8)	-	内外面とも回転ナデ、備前V期
284	須恵器	碗	A-6	P100	15.6	5.0	5.0	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り、束埔寨
285	青磁	碗	A	P152	-	(2.7)	-	森田・横田分類同安楽系青磁碗Ⅰ-1b型
286	青磁	碗	A	P156	(15.7)	(4.3)	-	森田・横田分類同安楽系青磁碗Ⅰ-3型
287	土師器	小皿	A-3	P151	8.6	1.5	-	外面は摩耗
288	白磁	碗	A	P151	(16.5)	6.4	5.5	森田・横田分類白磁碗Ⅴ類
289	土師器	鍋	A-3	P151	(32.7)	(14.7)	-	口縁部外面はヨコナデ、体部外面上半はタテハケ後ナデ、体部外面下半はヨコハケ、内面はヨコハケ
290	土師器	鍋	B-7-9	P47	(27.3)	(7.85)	-	内面一口縁部外面はヨコナデ、体部内面は丁寧なヨコナデ、体部外面は平行タタキ
291	備前	摺鉢	B	P340	(33.4)	(6.35)	-	内外面とも回転ナデ、摺り目7本、備前V期
292	備前	摺鉢	B	P650	(30.2)	(7.7)	-	内外面とも回転ナデ、摺り目7本、備前ⅣB古期
293	須恵器	小皿	B-7	P274	7.7	1.62	4.7	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り
294	土師器	小皿	B-7	P274	8.4	1.5	-	内面一口縁部外面はヨコナデ、底部外面はナデ、指オサエ
295	土師器	小皿	B-7	P1001	7.4	2.3	3.5	内外面とも回転ナデ、見込みに仕上げナデ、底部はヘラ切り後ナデ
296	青磁	碗	B	P356	-	(1.05)	5.8	体部外面下位以下露胎、森田・横田分類同安楽系青磁碗Ⅲ-1型
297	白磁	碗	C	P283	(15.9)	(3.3)	-	内外面とも施釉、森田・横田分類白磁碗Ⅱ類
298	須恵器	小碗	C-2	P1053	(8.8)	3.4	4.15	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り
299	土師器	小皿	C	P572	9.2	1.65	6.0	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
300	備前	摺鉢	B	SK250	(29.8)	(11.45)	(13.6)	内外面とも回転ナデ、底部はナデ、摺り目7本、備前ⅣB新期
301	青磁	碗	B	SK250	-	(3.8)	6.2	蛇の目輪はぎ、龍泉窯系細連弁文青磁碗、15C
302	土師器	三足付鍋	A	SK209	(28.35)	(8.55)	-	口縁部外部はヨコナデ後指オサエ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケ
303	青磁	皿	B	SK209	(12)	(2.1)	-	龍泉窯系青磁皿
304	土師器	鍋	B-1	SK206	(34)	(9.05)	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ、底部外面はナデ、指オサエ
305	須恵器	碗	C	SK311	(15.1)	5.55	6.0	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り
306	須恵器	碗	C	SK311	-	(4.8)	(5.05)	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り
307	須恵器	碗	C	SK333	(14.8)	5.12	5.3	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り

第34表 出土遺物観察表 (奈良時代以降) (4)

No.	器種	器形	地区	遺構名	口径	器高	底径	調整および備考
308	土師器	小皿	C	SK333	(10)	(1.4)	(5.2)	口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はナデ、指オサエ
309	青磁	碗	B	SD107	-	(31.5)	6.0	蛇の目輪はぎ、龍泉窯系青磁碗、見込みに花文のスタンプあり、15C
310	須恵器	碗	A-3	SD1002	15.2	6.7	6.7	内外面とも回転ナデ、火際あり、底部は糸切り、板状圧痕あり、西播系
311	土師器	小皿	A-3	SD1002	8.45	1.65	-	口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はナデ、指オサエ
312	土師器	羽釜	A-3	SD1002	(27.1)	(12.15)	-	外面はタテハケ、内面はヨコハケ
313	瓦質土器	三足付羽釜	A-3	SD1002	(21.8)	(9.5)	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はヨコハケ、底部外面はナデ、指オサエ、外面に煤付着
314	緑釉陶器	底部	A-3	SD1002	-	(1.35)	4.2	底部は回転糸切り
315	白磁	碗	A-3	SD1002	(17.6)	(4.7)	-	体部外面下位以下露胎、森田・横田分類白磁碗VorⅢ類
316	白磁	碗	A-3	SD1002	-	(4.3)	(6.6)	体部外面下位以下露胎、森田・横田分類白磁碗Ⅲ類
317	白磁	皿	A-3	SD1002	-	(0.9)	(3.95)	底面のみ露胎、森田・横田分類白磁皿Ⅲ類
318	白磁	皿	A-3	SD1002	(9.7)	2.55	(6.0)	口縁部、体部外面下位以下露胎、森田・横田分類白磁皿Ⅲ-2類
319	青磁	碗	A-3	SD1002	-	(1.95)	(5.75)	高台外面(部分的に登付まで)まで施釉、森田・横田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類
320	青磁	碗	A-3	SD1002	(15.8)	(4.95)	-	森田・横田分類龍泉窯系青磁杯Ⅰ-1類
321	青磁	碗	F-1-1	流路	(12.4)	(2.1)	-	森田・横田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類
322	青磁	碗	B-1	流路	-	(1.85)	(6.4)	高台外面まで施釉、見込みに「金玉調堂」のスタンプ文あり、森田・横田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5-d類
323	土師器	甕	D-7	SD1004	24.55	18.6	-	口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリ、体部外面は厚減
324	須恵器	碗	A	包含層	(15.05)	6.3	(5.1)	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り
325	緑釉陶器	杯	C-3	包含層	-	(1.9)	(5.0)	全面施釉か
326	緑釉陶器	底部	A-3	包含層	-	(1.35)	5.6	全面施釉
327	備前	壺	A-2	包含層	(14.2)	(16.35)	-	内外面とも回転ナデ、備前Ⅴ期
328	備前	搦鉢	A-2	包含層	(21.4)	9.45	(12.4)	内外面とも回転ナデ、底部はナデ、搦目13本、備前Ⅴ期
329	備前	甕	F-1-2	包含層	(33.05)	(11.5)	-	口縁部内外面は回転ナデ、体部外面はハケ、体部内面は板ナデ、備前ⅤB前期
330	常滑	甕	A-2	包含層	-	-	-	内面は横方向板ナデ、外面はナデ、格子タキ状スタンプあり
331	白磁	碗	C	包含層	16.9	6.5	7.1	森田・横田分類白磁碗Ⅴ-1類
332	白磁	碗	C-3	包含層	(16.4)	(4.65)	-	体部外面下位以下露胎、森田・横田分類白磁碗Ⅴ-1類
333	白磁	碗	C-3	包含層	(15)	(2.93)	-	内外面とも施釉、森田・横田分類白磁碗Ⅴ類
334	白磁	碗	C-1	包含層	(17)	(4.7)	-	内外面とも施釉、森田・横田分類白磁碗VorⅢ類
335	白磁	碗	C	包含層	-	(2.25)	(5.6)	外面露胎、森田・横田分類白磁碗Ⅲ類
336	白磁	碗	A-3	包含層	-	-	6.75	外面露胎、森田・横田分類白磁碗Ⅳ類
337	白磁	碗	B-8	包含層	-	(2.1)	(6.9)	部分的に登付まで施釉、森田・横田分類白磁碗Ⅲ類、見込みに目跡
338	白磁	碗	C-1	包含層	-	(3.3)	(6.0)	高台以下露胎、森田・横田分類白磁碗Ⅴ類

第35表 出土遺物観察表(奈良時代以降)(5)

No.	器種	器形	地区	遺構名	口径	器高	底径	調整および備考
339	白磁	碗	D	包含層	-	(2.0)	(6.6)	外面露胎、森田・横田分類白磁碗Ⅱ類
340	白磁	皿	C-2	包含層	(10.9)	2.3	(3.5)	体部外面下位以下露胎、森田・横田分類白磁皿Ⅱ類
341	白磁	皿	A-3	包含層	-	(1.0)	(3.05)	体部下位以下露胎
342	青白磁	合子	C-1(南端)	包含層	(4.9)	(2.1)	-	かえり部分のみ露胎
343	青白磁	合子	C-1(南端)	包含層	(4.1)	1.8	(4.4)	かえり部分の外面のみ露胎
344	青磁	碗	A-3	包含層	(16.1)	(3.9)	-	森田・横田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類
345	青磁	碗	A-3	包含層	(15.65)	(4.9)	-	森田・横田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類
346	青磁	碗	B-7(南半)	包含層	(3.05)	(4.7)	-	森田・横田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5類
347	青磁	碗	B-8(西端)	包含層	-	(2.95)	-	龍泉窯系青磁細連文碗
348	青磁	碗	A-2	包含層	-	(2.45)	5.3	高台外面まで施釉、露体部は赤変、森田・横田分類龍泉窯系青磁碗Ⅱ類
349	磁器	碗	B-1	包含層	-	(2.1)	(5.55)	高台内面まで施釉、森田・横田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-V・c類
350	青磁	小碗	A-3	包含層	-	(1.95)	-	森田・横田分類龍泉窯系青磁小碗Ⅲ-3類
351	青磁	杯	B-7	包含層	-	(2.4)	(4.5)	頸付のみ露胎、森田・横田分類龍泉窯系青磁杯Ⅲ-1類
352	青磁	碗	A-3	包含層	(13)	(2.0)	-	森田・横田分類同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類
353	青磁	皿	A-6	包含層	-	(1.05)	(5.8)	底面のみ露胎、森田・横田分類同安窯系青磁皿Ⅰ-2類
354	青磁	皿	A-6	包含層	-	(1.1)	(4.6)	森田・横田分類同安窯系青磁皿Ⅰ-2類、底面に墨書「天・」
355	染付	小皿	B-8	包含層	(10.1)	(2.75)	(3.2)	底面は葛物底、景徳鎮窯(16世紀後半)

土製品

356~363は土鍾で、漁網用として用いられていたものと思われる。356~360は土師製の紡錘管状のもので358がP-326の柱根から出土した他は包含層からの出土である。361~363は両端穿孔棒状土鍾と呼ばれるもので、361は土師質、362・363は須恵質に焼成されている。粘土紐を棒状に丸め、両端を切断し、側面の同一方向から穿孔したのち、焼成している。363は両端を切断したままで調整を施していない。362・363はSD1002西岸から出土しており、この付近からは製塩土器等も出土しており、現在の海岸線から約7km内陸にもかかわらず海の生産用具がまとまって出土した特異な遺構である。両端穿孔棒状土鍾は九州や山陰からも出土するが、瀬戸内を中心として分布している。小型のものであるが主に海で使われ、弥生時代後期から出現し、13世紀頃まで見られるものである。

364~367は土師質の有孔円盤で、紡錘車として用いられたものであろう。364~366は弥生土器と思われる破片を円盤状に加工し、両面或いは片側から穿孔して作っている。367はやや大型のもので、他のものと異なり、当初から有孔円盤として作られたものであろう。365は整穴住居SH07から、367はSH17から出土している。

368はD-5区のSD1003下層から出土しており、両端が欠損しているが平面形態がやや湾曲した長方形の土師質の土製品である。下面は平滑に調整されているが、上面は溝状に抉れており、粘土の鏝が残されている。側面は粘土が剥がれたような面を呈しており、全容を伺うことはできない。黒褐色を呈する胎土には炭化材や種子様のものが観察され、スサ入りの粘土を用いたものであろう。移動式の竈の部分か或いは何らかの銚型の可能性もある。

369は円盤状の土製品で、やや偏った円形的一端がわずかに窪んだ平面形態を呈している。表面にはユビ押さえの痕跡を残すものの平滑に仕上げられており、表裏とも黒斑が見られる。包含層からの出土であるため所収時期も不明である。

370は製塩土器等が出土したSD1002西岸から出土している。こぶし大の大きさで、依形を呈しており、非常に肉厚の中空で作られている。長側面の1ヶ所に焼成前の穿孔が見られるが、穿孔に直行する側面が失われており、他に粘土の継ぎ目がないことから、その欠損部分を最後に閉じたものであろう。短側面内側の調整は、欠損部分から近い側はユビ押さえの痕跡が著しいが、近い側は丁寧にナデている。欠損部分に別の孔が存在した可能性がある。器表面内外共ユビ押さえの痕跡が顕著で、丁寧な調整は施されていない。土師質に焼成されており、内外の対応する位置に黒斑が見られる。笛・鈴の可能性を考えたが、肉厚で作りが粗雑である。同じ遺構から出土した製塩土器や土鍾のような、海の生産用具の一種であらうか。

371は分銅形土製品である。C-2区、P943から出土している。大半が失われているが、挟り込み部の上側に穿孔が2ヶ所見られ、表面には植物の茎と思われる管状を呈した施紋具によって円周に沿った形で4列の刺突紋を施す。施紋具は多くの場合圧迫されて縦長となっている。裏面はユビナデによる成形痕が残される。小型のものであるが、中央部はやや肉厚となる。上側縁部によく見られる貫孔は見られない。372は竹管紋を施した土器片を再加工したもので、一部に円弧を作りだしている。分銅形土製品の亜種であらうか。

373は皮袋形土器で、半分近くを失っている。内面の特に片側に刷毛目が残されており、刷毛によって調整された円形の粘土板をあたかも餃子を作るように丸めて閉じたものである。縦じ代は指で押さえて突出させており、縦じ代の逆側に口縁部を設けていた痕跡が残り、単なる孔ではなく、突出した口縁部を有していたものであろう。川西市栄根遺跡でも古墳時代前期の類似品が出土している。

第2節 石器・石製品

本遺跡からは、1369点に及ぶ石器または石製品が出土している。このうちNo.1地点からは803点である。ここでは、器種別に報告をおこなう。

狩猟具・武器

石鏃

1類 平基式石鏃 (S1~S7)

15点出土した。7点を図化した(S7)は飛び抜けて大型であるが、尖頭器にしては、身幅が狭く、平面形態もたとえば(S6)と相似形をなしていることから、石鏃に分類している。

全長20.1~60.0、全幅13.3~25.3、重さは0.9~14.4gを測る。

2類 凹基式石鏃 (S8,S9)

13点出土した。2点を図化した。小分類の内訳はB類が2点、D類が2点あり、縄文時代の所産と考えられる。E類は6点で、作用部縁辺が直線的なものと、外湾して全体が砲弾形になるものの2種類がある。全長19.9~44.2、全幅7.4~19.4、重さは0.7~4.0gを測る。

第36表 石鏢計測表

(単位: mm, g)

No.	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	産地	先端角	持ち幅	持ち長さ	類型
1	20.1	15.2	3.8	0.9	C-3	包含層	金山	41	—	—	1
2	22.5	15.6	5.2	1.3	A-2	包含層	金山	35	—	—	1
3	27	16.7	4.6	1.8	B-4	包含層	金山	36	—	—	1
4	27.5	17.1	5.3	2	B-4	包含層	金山	54	—	—	1
5	37.1	20.8	5.5	3.2	E-3	流路	金山	66	—	—	1
6	31.3	15.3	4.7	2.1	C-3	SH18	金山	60	—	—	1
7	60	25.3	10.3	14.4	C-3	包含層	金山	57	—	—	1
8	23.1	19.4	5.4	1.6	B	P-18	二上山	46	2.9	14.1	2
9	28.6	17	4.1	1.5	D	SH21	金山	56	1.6	—	2
10	33.2	13	4.7	1.9	C-3	包含層	金山	45	—	—	4
11	41.1	15.2	5.9	3.1	C-2	包含層	金山	66	—	—	4
12	34	(11)	5	2	C-3	SH20	金山	—	—	—	4
13	42.6	14.9	6.8	3.1	A-6	包含層	金山	43	—	—	4
14	(29.5)	15	5.6	2.2	B-8	SH05	金山	37	—	—	4
15	31	11.2	4.8	1.4	C-2	包含層	二上山	35	—	—	4
16	45.5	17.7	7.8	3.6	C-2	包含層	金山	16	—	—	4
17	24	13.7	4.5	1.1	D-2・3	包含層	金山	58	—	—	3
18	22	13.1	4.4	1.1	C-1	包含層	金山	68	—	—	3
19	33.1	16.2	2.8	1.7	D	SH20	金山	65	—	—	5
20	32.5	16.1	5.9	2.8	C	包含層	金山	47	—	—	5
21	41	18.3	5.1	3	C-3	SD-326	金山	70	—	—	5
22	42.1	20.5	8.1	6.3	C-3	SK-343	金山	81	—	—	5
23	38.8	19.2	6.6	4.1	C-1	P-956	金山	75	—	—	5
24	38.5	18.7	4.2	2.5	D-5	包含層	金山	64	—	—	5
25	26.5	15.2	3.5	1	D-2・3	包含層	金山	64	—	—	5
26	34.1	19.7	4.1	2.1	D-6	SD-1006	金山	73	—	—	5
27	30.1	22	3.5	2.1	A-6	包含層	金山	89	—	—	5
28	31	20.2	6.1	2.6	D-1	包含層	金山	78	—	—	5
29	32.6	21.5	4.5	2.1	C-3	SD-326	金山	52	—	—	5
30	31.5	(19)	3.8	1.8	B-8	SH05	金山	52	—	—	5
31	40	24.1	5.8	4.8	C	SH11	金山	36	—	—	5
32	34.5	21.4	5.2	3	B-4	包含層	金山	63	—	—	5
33	(40.2)	25.5	4.7	4.8	D	SH20	金山	65	—	—	5
34	28.4	23.2	5.2	3.2	C-2	SH07	金山	54	—	—	5
35	48.1	15.2	9	3.9	C-3	SH11	二上山	40	—	—	5
36	36.7	14	8	3.7	C-3	包含層	二上山	42	—	—	5
37	(24.6)	22.1	3.7	1.6	D	SH20	金山	—	—	—	不明
38	(31)	18	6.5	4	B-8	SH05	金山	—	—	—	不明
39	50.1	18.3	4.3	5.3	C-2	SH09	粘板岩	—	—	—	5
40	41	12.9	4.6	2.5	D	SH20	粘板岩	—	—	—	4

第37表 打製石剣計測表

(単位: mm, g)

No.	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	石材産地	先端角
42	72.5	30.5	10	32.6	C-2	包含層	金山	—
43	138.2	35.6	13.5	66.7	E-2 西端	包含層	金山	—

3類 円基式石鏃 (S17,S18)

4点出土した。2点を図化した。

全長18.0～32.6、全幅13.1～21.5、を測る。重さは1.1gが3点と2.1gのものが1点ある。

4類 尖基式石鏃 (S10～S16)

18点出土した。7点を図化した。(S14)は基部を欠失するが、おそらくこの類型におさまるものと考えられる。(S15)は二上山産である。

全長18.6～45.5、全幅11.0～19.6、重さは1.0～4.3gを測る。

5類 有茎式石鏃 (S19～S36)

57点出土した。18点を図化した。二上山産のものは5点ある。切っ先が約30度以下と鋭く細身で逆刺の甘いもの、切っ先が約50度以上で、幅広かつ鋭い逆刺を作り出すもの、その中間形態のものがある。

全長21.6～57.7、全幅11.0～25.5、重さは1.0～9.0gを測る。

その他の石鏃 (S37,S38)

(S37,S38)はいずれも焼失住居SH20の床面から出土している。製作途中段階、もしくは失敗品と考えられるものである。

磨製石鏃 (S39,S40)

(S39)は有茎式石鏃で切っ先および基部を欠失する。表裏を平坦に研磨し縁辺に両面から刃をつけている。よって、断面形は六角形を呈する。(S40)は尖基式石鏃で切っ先を欠失している。両面に鋸を作り出しており、断面形は菱形を呈する。なお、作用部縁辺はさらに研磨の方向を変えて作り出している箇所も認められる。いずれも暗灰色の粘板岩製である。

打製石剣 (S41～S43)

(S41)は切っ先の破片である。全体像はわからないが、おそらく(S43)のような剣形を呈するものと思われる。(S42)は石剣の基部(柄部分)に相当するものと判断した。(S43)は完形品である。基部の端面には自然面が残る。石材は金山産のものを用いている。縦断面がゆるやかな「く」の字形を呈するのは、当然意図したものではなく石材の制約を受けたものと考えられる。作用部は連続した剥離によって調整されているが、基部側はエッジを潰してある。

加工具

石鏃 (S46～S51)

8点出土している。6点を図化した。(S46)はスポールを調整・加工したものの。右側面に劈断面を残す。切っ先はわずかに欠失している。鏃部分の摩滅は顕著ではない。(S47)は作用部のみの破片で、基部を破損したものと考えられる。

第38表 石鏃計測表

(単位: mm, g)

No.	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	通構	鏃部長さ	鏃部幅	鏃部厚さ
46	51	14.9	4.9	2.5	D-2・3	SK424	32.4	6.4	4.5
47	26	7.4	4.6	0.9	B-8	SH05	26	7.4	4.6
48	39.7	13	7	3	C-3	包含層	15.1	5.5	5.3
49	39.5	14.2	6.7	3.9	B-8	SH03	—	—	—
50	51.2	17	11.1	9.2	C-3	包含層	—	5.4	2.5
51	37	25.4	7	6.9	D-4	包含層	2	3.6	1.5

削器 (S52~S65,S67~S70)

一縁辺に連続した加工を施し、刃部を形成するもの。

62点出土した。18点を図化した。(S59) は表面の摩滅が著しいが、その成因については判断としない。(S69) は風化が著しいが、調整した剥離面の風化は他と変わらないことから、旧石器を再利用したものと考えられる。

第39表 削器計測表

(単位: mm, g)

No.	刃部形態	刃部調整	背縁処理	自然面	長さ	幅	厚さ	重さ	刃部幅	刃内	地区	遺構
52	直線刃	両面	無	有	64.5	49.5	8.6	21.5	55.9	80	D-7	下層水田面
53	直線刃	両面	無	有	65.1	59.3	9	31.6	52.2	70~80	A-2	SK101
54	直線刃	両面	無	無	56.7	45.4	11.6	31.3	37.2	106	C-3	包含層
55	直線刃	両面	無	無	93	81.1	13.5	97.8	64.8	65	B-1	包含層
56	直線刃	両面	無	無	59.5	49.5	6	17.4	44.4	60	D-4・6	SD1003 東野
57	外湾刃	両面	無	無	90.1	67.5	9	50.1	85.6	80	D-4	包含層
58	直線刃	両面	有	無	44.3	31.4	13.3	20	42.0	58	D-2・3	包含層
59	外湾刃	両面	有	無	93	38.5	12	50	130	50	C-3	
60	直線刃	両面	有	無	93.6	34.5	10.9	38.2	86.7	85	D	包含層
61	直線刃	両面	無	無	59.8	43.6	13.8	34.7	47.4	85	B-7	SD146
62	直線刃	両面	無	無	108.5	37	11	33.9	106	74	D-6	SD1002
63	直線刃	腹面	無	無	92.4	56.1	13.8	72.5	76.2	85	A-3	SD1002
64	直線刃	両面	有	有	71	79	12.3	92.8	66	63	C-3	包含層
65	直線刃	両面	有	有	117.5	87.8	20.2	189.1	40.0	110	D-1	包含層
66	内湾刃	両面	無	有	189.8	109.2	29.7	409.9	92.3	45	F-1	SD605
67	内湾刃	両面	無	有	108.2	64.7	19.6	130.2	75.7	82	B-2	流跡
68	内湾刃	両面	有	無	45.4	57.9	13.5	48.8	38.8	74	D-1	SH19
69	内湾刃	腹面	有	無	61.2	31.3	9.7	14.2	30.1	70	D	P-149
70	内湾刃	両面	有	無	67.7	43.8	13.5	48.5	64.8	77.8	D	包含層

楔形石器 (S71~S99)

382点出土している。そのうち28点を図化した。

第40表 楔形石器計測表

(単位: mm, g)

No.	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	類型
71	20.2	18.9	5	1.6	D	SH20	B1
72	24	23.9	6.3	2.7	C-3	SH20	B1
73	42	32	11.5	20.7	C-2	包含層	B1
74	32.9	47	7.7	15.1	D-4	包含層	B1
75	59	46.8	11	34.3	C-3	包含層	B1
76	58.4	50.8	16.9	57	C-3	包含層	B1
77	82.3	67.8	22.5	173	B-7	SD1002西岸	B1
78	138.2	35.6	13.5	96.7	B-2	流跡	B2
79	20.6	21.7	3.8	1.8	B-8	SH05	B1
80	24.7	22	3.6	1.6	C-2	SH07	B2L
81	24.2	48.4	7.1	8.2	C-3	包含層	B2L
82	30.6	38.6	6.9	8.9	B-8	SH05	B2L
83	23.2	29.2	4.7	2.8	B-8	SH05	B1
84	28.6	35.3	6	6.4	D	SH20	B2P
85	32	21.2	7.1	7	C-3	包含層	B2P
86	39.1	31.2	10.6	14.3	D-4	包含層	B
87	37.6	30	12.5	16.6	D	包含層	B2P
88	40	41.6	12.9	24.2	D-5	包含層	B2P
89	39.5	41.2	10.2	15.8	D-1	包含層	B2P
90	39	47.2	10.2	21.1	D-7	包含層	B2P
91	29.8	32.9	7.6	7.4	D	SH20	B2V
92	30.7	29.1	7.7	6	B-4	包含層	B2V
93	30	21.8	5.8	3.5	C-3	包含層	B2V
94	43.3	27.9	7.7	9.3	C	SD305	B2V
95	46.4	33.3	7.4	6.4	D-5	包含層	S1
96	42.9	26	8.6	6.4	D	SH20	B2V
97	31.5	37.5	8.6	12.9	—	包含層	B3
98	28.1	11.7	10.2	4.5	C-3	包含層	S2
99	35.4	13	10	4.5	D-4	包含層	B1

磨製石斧

大型蛤刃石斧 (S100~S105)

11点出土している。6点を図化した。

横断面形が楕円形を呈するものと、扁平な隅円長方形を呈するものがある。前者はいわゆる大型蛤刃石斧で幅厚比は0.49~0.89の範囲に収まる。(S100)は前後主面共に、深い窪みが形成されている。折損後の二次使用の痕跡と思われる。たとえば凹み石のような使われ方が考えられる。(S102~S104)は刃先の破片であるが、いずれも刃先は潰れている。(S102・103)は側面がやや平坦に仕上げられ、主面と側面は角を持ってつながるが、S104・105は側縁に明瞭な面を持たず、断面楕円形を呈する。(S102)は幅厚比が0.49と他の石斧に比べて極端に扁平な断面形態を有する。

柱状片刃石斧 (S106~S110)

出土した6点全てを図化した。(S106)は刃先の破片である。刃縁は潰れて面をなす。また、後主面と側面のなす角は敲打によって、窪みをなすほど潰れている。敲打に転用するなど二次的な利用がおこなわれたものであろう。(S107)はSH09の床面から出土している。ほぼ完形品であるが、刃先を欠失している。(S108)は主軸方向の節理に沿って主面に対して直角方向に割れたものである。刃先を含む、左側面の破片であるが、剥離面の周縁の角を潰しており、なんらかの二次的な利用がおこなわれたものと考えられる。(S109)は主軸方向の節理に沿って主面に対して平行する方向に割れている。基部と前主面を欠失している。(S110)は主軸方向に沿って袈裟懸けに割れた柱状片刃石斧の破片を用いて再加工した石斧である。このため、横断面形はいびつな台形を呈する。

扁平片刃石斧 (S111~S113)

出土した3点全てを図化した。(S111)は前主面に向かって左側が偏摩耗している。また、刃縁の中央部分は潰れて面をなす。(S112)は刃部の破片であるが、節理に沿って薄くはがれており、前主面を欠失している。

第41表 磨製石斧計測表

(単位: mm, g)

No.	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	刃幅	刃角	地区	遺構	石材
100	大型蛤刃石斧	(94)	54.5	48.5	383.62	—	—	C-1	包含層	閃緑岩
101	大型蛤刃石斧	(110.5)	61.3	44	466.41	—	—	B-7	SD1002西岸	閃緑岩
102	大型蛤刃石斧	(60)	67.2	32.8	206.6	62.5	80	D-2・3	包含層	閃緑岩
103	大型蛤刃石斧	(73.5)	66.2	(45.8)	337.65	62.2	62	B	流路	閃緑岩
104	大型蛤刃石斧	(74)	67.5	47.8	318.49	56.8	79	D-2・3	包含層	凝灰岩質凝灰岩
105	大型蛤刃石斧	(69.2)	66.6	53	278.77	43	85	C-3	包含層	閃緑岩
106	柱状片刃石斧	(85)	27.7	41.5	157.03	22.2	50	D-6	SD1003東屑	黒色片岩
107	柱状片刃石斧	209.5	39.5	45.5	862.25	—	—	C-2	SH09	黒色片岩
108	柱状片刃石斧	(107.4)	(16.3)	46.8	153.9	—	—	B-1	SK203	黒色片岩
109	柱状片刃石斧	(64.2)	(23.2)	(18.3)	52	—	75	C-2	包含層	黒色片岩
110	柱状片刃石斧	(107.3)	37.9	(21.9)	179.34	—	—	D	包含層	黒色片岩
111	扁平片刃石斧	78.9	48.2	15.6	131.4	—	45	A	P-6	蛇紋岩
112	扁平片刃石斧	(68.8)	44	(9)	13.2	38.3	45	D-4	SD1005	黒色粘板岩
113	扁平片刃石斧	68.8	44	9	53.66	—	36	C-3	包含層	閃緑岩

農具

石杓丁 (S114)

1点出土している。半分以上を欠失しており、かろうじて細孔が3/4ほど残存している。刃部は両面から研ぎだし、偏片刃に仕上げられている。

第42表 石杓丁計測表

(単位: mm, g)

No.	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	背縁 形態	刃部			紐孔					石材			
								形態	刃付け	刃角	紐孔 断面	穿孔 技法	穿孔 位置		内径		紐孔 間距離		
114	(62.9)	46	8.4	35.62	B	SH-03	—	横く外湾	偏片刃	外湾	楕形	—	52	—	—	7.7	3	5.9	黒色粘板岩

漁労具

石鍾 (S115・116)

4点出土したうち、2点を図化した。(S115)は断面V字形の溝を長軸に直交方向で巡らせて紐掛を作っている。また、両端は敲打によって面を形成しており、敲石として用いられたか、あるいは十字に縄を掛ける際の滑り止めとしての機能を持たせてあるのかもしれない。(S116)は両側面に2箇所ずつ対紐掛けのための窪みを作っている。両端は敲打による面が形成されており、(S115)と同様滑り止めなどの効果が推測される。片面の器表面中央部分にも敲打痕が集中することから、敲石として利用されたことが想定される。

加工具・調理具

敲石・磨石 (S117~134)

敲く道具、あるいは擦る道具、もしくは両者を併用するものである。27点出土したうち、18点を図化した。

第43表 石鍾・敲石・磨石計測表

(単位: mm, g)

No.	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	敲打部の位置	位置	石材
115	石鍾	116.5	69.3	73.6	860.7	D-4	包含層	—	—	花崗斑岩
116	石鍾	126.5	69.8	41.2	572.3	D-4	流路	—	—	流紋岩
117	敲石	109.5	48.1	43.7	364.7	C-3	包含層	A2	—	流紋岩
118	敲石	90.2	52.2	42	286.1	B-8	包含層	A2	—	流紋岩
119	敲石	72	46.1	37.8	177	D-4・3	包含層	A2 C	—	花崗斑岩
120	敲石	153.5	53.9	51.8	652.6	C-3	SD333	A2	—	安山岩
121	敲石	85.7	25.1	19.5	58.8	D-4~6	SD1005	A1	—	流紋岩
122	敲石	77.6	53.5	44.2	270.1	表採	—	A2 C	—	流紋岩
123	敲石	116	79.8	54.7	722.8	D	P-011	A1	—	流紋岩
124	敲石	72.5	57.9	41.5	237.5	D-4	SD1003	C	—	ひん岩
125	敲石	79.8	70.3	59.1	456.1	C-2	包含層	A2 B2 C	—	花崗岩
126	敲石	72.9	65.5	14.5	102.4	D-4	SD401	C	—	閃緑岩
127	敲石	98	112.8	28.8	484.7	C-1	包含層	C	—	花崗岩
128	敲石	45.2	37.6	29.2	69	D-1	包含層	C	—	流紋岩
129	敲石	51.8	40	38.9	121.8	D	P-7	C	—	花崗斑岩
130	磨石	77	65.3	36	246.4	D-4	包含層	—	—	閃岩母花崗岩
131	すり石	63.8	67.1	42.3	266.4	C-1	P-1079	—	—	流紋岩
132	すり石	124.6	27.6	38.8	177.2	A-2	SD1002	—	—	アブライト
133	すり石	44.6	34.8	28	58.2	C-3	包含層	—	—	流紋岩
134	すり石	155.5	110.5	82.8	2020	D-6	SD1003	—	—	花崗岩

砥石 (S135~142)

18点出土したうち、8点を図化した。

(S135~137)は小型品である。いずれも肌理の細かい凝灰岩を用いている。(S136)には石材を切断のための擦り切り痕が認められる。(S137)は左側面のほぼ中軸に断面V字形を呈する深い溝状の線条痕がある。(S138~141)は復元した大きさが20cm前後と推測される中型品である。(S139)はいびつな亜角礫をそのまま利用したものである。(S141)は肌理の細かい石質のものである。縁辺には剥離痕が観察されるが、何らかの目的を持っておこなわれているのか判別が付かない。線条痕は顕著に認められ、なかには断面V字形を呈する鋭いものも含まれる。また、摩滅の進んでいない剥離面に観察されるところもある。(S142)は40cmを超える大型品で、目の粗い砂岩を用いている。粗砥として利用されたものであろう。作業面全体に、目立てのための敲打痕が見られる。

第44表 砥石計測表

(単位: mm, g)

No.	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	砥面					石材
							数	砥面構成				
								表	裏	左側面	右側面	
135	58.5	40.8	11.8	40.5	A-2	包含層	1	1	0	0	0	石英斑岩
136	73.5	30.2	17	54	B-4	包含層	3	4	—	1	1	流紋岩
137	111	35	22.3	161.1	A-2	包含層	4	1	1	1	1	珪長質岩
138	144	93.8	37	497.8	B-7	SD1002西岸	1	2	—	—	—	黒色片岩
139	145	133	104.5	2820	E-1	SD502	1	1	—	—	—	凝灰質砂岩
140	129.5	120.4	51.1	966.3	A-3	包含層	3	1	1	—	2	珪長質岩
141	237.8	104	72.8	2040	D-7	包含層	4	2	1	1	2	凝灰岩
142	423.3	189	93.2	10020	C-3	包含層	3	1	—	1	1	凝灰質砂岩

石皿・くぼみ石 (S143~145)

凹み石が2点、石皿が7点出土している。凹み石は2点とも、石皿は3点を図化した。

(S143・144)ともに表面は複雑な起伏が認められる。(S145)は表面に細かい線条痕が発達しており、砥石として利用された可能性も考えられる。

第45表 石皿・凹石計測表

(単位: mm, g)

No.	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	敲打部			皿部		石材
								長さ	幅	深さ	長さ	幅	
143	石皿?	104	112.5	28.5	385.1	C-3	SD290	—	—	—	—	95.0	凝灰質砂岩
144	石皿	141	99.5	24.9	539.5	C-2	SE301	—	—	—	—	—	花崗閃緑岩
145	石皿	102.3	86.5	41.2	592.1	C-3	P-986	—	—	—	80.0	60.0	黒色砂質頁岩 (ホルンフェルス)
146	凹石	104.9	96.2	55	787.9	A	SK106	30.5	30	5.8	—	—	花崗岩
147	凹石	113.2	97	43.5	729.6	D-5	SD1003	35.5	32.7	3.4	—	—	凝灰質砂岩

台石 (S148)

3点出土したうち、1点を図化した。焼失住居跡 (SH20) から出土している。熱を受けているため表面の状態がよくない。長さ37.2cm、幅20.2cm、厚さ15.2cmを測る。作業面は平坦ではなく、緩い球面になっている。

分割原石 (S149~151)

素材となりうる剥片。なかでも (S151) は大型のもので、原産地で加工され、運び込まれたものと考えられる。

第46表 分割原石計測表

(単位: mm, g)

No.	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	石材
149	314	120.7	108.1	32.1	372.6	C-2	包含層	金山
150	372	169.2	122	21	516.8	B-7	SD1002	金山
151	606	306.1	356.2	47.3	3360	D-7	SD1003	金山

旧石器時代の石器

ナイフ形石器 (S152・153)

(S152) は、サヌカイト製の横長剥片素材の1側縁加工のナイフ形石器である。肉眼観察ではあるが、二上山付近産のサヌカイトであろう。ナイフ形石器の表面左側にかなり平坦な剥離面がみとめられることから、ナイフ形石器の素材となった剥片は、板状素材の石核から剥離したものと考えられる。また表面剥離面の観察では、この素材剥片が剥離された前の石核時における剥片剥離痕跡を複数認めることから、瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器であるとは断定できない。表面右側縁上半部の調整は背面側からで、下半部は腹面側からである。長さ60.0mm、幅15.4mm、厚さ7.1mm、重さ5.3g。

(S153) は、サヌカイト製のナイフ形石器(または台形石器)である。肉眼観察では、表面左側縁に腹面側からの細部調整を施す一方、右側縁は1面の剥離痕で構成され、折り取りによるものと推定する。素材剥片の詳細は不明であるが、縦横ともほぼ同等のすつまり剥片であろう。肉眼観察によると、四国金山・五色台周辺のサヌカイトを素材としているようである。長さ18.0mm、幅14.6mm、厚さ3.1mm、重さ0.8g。

石製品

紡錘車 (S154)

(S154) は紡錘車の破片である。上半部を欠失しており、側面から底面にかけて遺存している。現存値で直径4.5cm、厚さ0.8cm、孔径0.5cmを測る。

石帯 (S155)

大きさは4×5.2cm、厚さ7mmを測る。裏面には3カ所に紐通しの孔が穿たれる。現状では乳白色を呈するが、表面に所々暗緑灰色を呈する雲母が見られ、本来全面にこの色を呈していたものが、風化によって剥落した可能性も考えられる。

盤状石製品 (S156)

軟質の凝灰岩を用いたもので、強度が弱いため実用には耐えないと思われる。SK404から出土している。長さ67.9mm、幅16.3mm、厚さ9.1mm、重さ19.96gを測る。

石鏃 (S157)

石鏃の破片である。鏃の部分を削り落とし、端部の割れ口を研磨するなどの加工をおこない、内面を二次的に利用している。

玉類

勾玉 (T1)

SD1003内から出土した。表面は滑らかに仕上げられておらず、このため横断面形はやや角張った印象を与える。穿孔は基本的に一方からなされ、逆方向からは若干口径を広げてあるにすぎない。

子持ち勾玉 (T2)

SD1004西岸の一番底から出土した。頭部と尻部の直径差がなく、腹部で最大径を測る。子は背面の両端、両側面両端、腹面中央部の都合7カ所に削り出しによって作ってある。孔は直線的に開けられている。

白玉 (T3~12)

SD1003で一括出土した土師器の中から出土した。成形は雑で、側面には両側から削りだして弱い稜を作り出している。

第47表 玉類計測表

(単位: mm)

No.	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	石材
T 1	勾玉	31.5	9.2	19.2	6.9	D-7	SD1004井堰下	翡翠
T 2	子持ち勾玉	84.8	29.5	43	121.1	B-7	SD1002西岸底	滑石
T 3	白玉	4	3	1.5	0.08	D-4	SD1003東厨	滑石
T 4	白玉	4	1.7	1.4	0.04	D-4	SD1003東厨	滑石
T 5	白玉	4	2.1	1.3	0.05	D-4	SD1003東厨	滑石
T 6	白玉	4.2	2.4	1.3	0.06	D-4	SD1003東厨	滑石
T 7	白玉	4	1.8	1.4	0.04	D-4	SD1003東厨	滑石
T 8	白玉	4	2	1.3	0.05	D-4	SD1003東厨	滑石
T 9	白玉	3.9	1.8	1.4	0.04	D-4	SD1003東厨	滑石
T 1 0	白玉	5	3.2	2.1	0.12	D-4	SD1003東厨	滑石
T 1 1	白玉	3.3	3	1.3	0.04	D-4	SD1003東厨	滑石
T 1 2	白玉	4.4	3.8	1.2	0.09	D-4	SD1003東厨	滑石

第3節 金属器

板状鉄斧 (F1)

SH05中央土坑から出土している。現存値で長さ4.85cm、幅2.55cm、厚さ0.4cmを測る。刃は片刃である。

銅幣 (F2)

SE301の底から出土した。銅製。長さ3.2cm、幅3.3cm、厚み0.8cmを測る。四隅を鋭留めしてある。表面には5×9mmの長方形透かしがある。

鍔先 (F3)

SK251から出土した。現存値で縦14.4cm、横15.0cm、厚さ2.5cmを測る。横断面形は端部から中心部にかけて肥厚する。また装着のための袋部を有する。

釘 (F4~F9)

いずれも断面長方形を呈する。頭部についてはL字形に折り曲げるものがほとんどであるが、輪を形成するものが1点認められる。F4,5はともにA区P-93より出土した。F4は6本が壺着している。長さ6.4~7.5cm、太さはおよそ0.4cm四方~0.6cm四方である。

F5は現存値で縦6.8cm、幅0.85cm、厚さ0.75cmを測る。頭部を欠失している。

F6は現存値で縦6.1cm、幅1.05cm、厚さ0.45cmを測る。先端を欠失している。頭部は潰して形成している。

F7現存値で縦4.2cm、幅1.21cm、厚さ0.9cmを測る。先端を欠失している。頭部を折り曲げて形成している。

F8現存値で縦4.9cm、幅0.65cm、厚さ0.5cmを測る。先端を欠失している。頭部を折り曲げて形成する。

F9現存値で縦4.98cm、幅0.6cm、厚さ0.43cmを測る。先端と頭部を欠失している。

鑿状鉄製品 (F10)

刃部が作り出しであることから鑿状の工具であると判断した。刃は片刃に近いが反対側からも緩やかに研ぎだしてある。基部は欠失する。現存値で縦3.01cm、幅1.5cm、厚さ0.61cmを測る。

不明鉄製品 (F11・F16)

横断面形は一端が薄く徐々に肥厚する。刃部は作り出されていない。上下両端を欠失しており現存値で縦7.3cm、横4.35cm、厚さ0.85cmを測る。F16は刀子としてはやや分厚い。現存値で縦7.85cm、幅1.6cm、厚さ0.85cmを測る。

鉄線 (F12~14)

いずれも基部分である。F12は現存値で縦6.7cm太さは0.45cm四方、F13は現存値で縦8.05cm太さは1.6×0.85cm、F14は現存値で縦9.3cm太さは0.9×0.75cmを測る。

刀子 (F15,17)

F15は一端が薄く刃部と考えられるが、はっきりと作り出した形跡は認められない。現存値で縦9.25cm、横1.3cm、厚さ0.3cmを測る。F17は刃部が作り出しである。縦17.3cm、横2.13cm、厚さ0.43~0.49cm。

緋銭 (C1~C97) 銅銭

1連の緋銭として出土した銅銭である。いずれも中国銭で、621年初鑄の開元通寶から1433年初鑄の宣徳通寶まで24種97枚ある。

包含層 (C98) 銅銭

1094年初鑄の紹聖元寶(篆書体)である。

第48表 緋銭錢貨一覧

報告番号	銭貨名	国名	初鑄年	個数	備考	報告番号	銭貨名	国名	初鑄年	個数	備考
C1~8	開元通寶	唐	621	8		C47	治平通寶	北宋	1064	1	
C9	開元通寶	唐	845	1	紀地鉄	C48~54	熙寧元寶	北宋	1068	7	真書体1、篆書体5
C10	太平通寶	北宋	976	1		C55~68	元祐通寶	北宋	1078	14	行書体10、篆書体4
C11~13	至道元寶	北宋	996	3	真書体1、行書体2	C69~73	元祐通寶	北宋	1086	5	行書体3、篆書体2
C14、15	咸平元寶	北宋	998	2		C74~79	紹聖元寶	北宋	1094	6	行書体3、篆書体3
C16~18	祥符元寶	北宋	1009	3		C80	元符通寶	北宋	1098	1	
C19~21	祥符通寶	北宋	1009	3		C81~84	聖宋元寶	北宋	1101	4	行書体2、篆書体2
C22~24	天聖元寶	北宋	1023	3		C85、86	政和通寶	北宋	1111	2	分楷書体1、篆書体1
C25~39	皇宋通寶	北宋	1038	15	真書体9、篆書体6	C87	皇宋元寶	南宋	1253	1	
C40	至和元寶	北宋	1054	1		C88	洪武通寶	明	1368	1	
C41	嘉祐通寶	北宋	1056	1		C89~96	永樂通寶	明	1408	8	
C42~46	治平元寶	北宋	1064	5	真書体3、篆書体2	C97	宣徳通寶	明	1433	1	

第4節 木器

出土状況

亀田遺跡は扇状地から沖積地にかけて広がっている。扇状地を西流して縦断する流路や、沖積地を南流する大津茂川の旧河道が検出されることが確認調査でも判明していた。No.1地点の木器のうち、平安時代以降の包含層出土のもの以外は、流路・旧河道からの出土である。

(W1・2)は、平安時代以降の包含層から検出された。(W1)はマツ属複雑管束重属の小片で、一方の端が焼け焦げている。(W2)も同様のもので、樹脂分が多いことから松明や付け木に用いられたものと思われる。

(W3・4)は、D-3・4区のSD500内に設けられた杭列の水路から出土した。(W3)は針葉樹の付札である。幅約3.1cmの両側に切り欠きをもつ。墨書は認められない。W4は針葉樹の板目材を用いた直径約16.2cmの円形の曲物底板である。1面には幅約0.6cmの側板の痕跡が残されているが、結束のための小孔は見られない。他面は非常に平滑に仕上げている。

(W5~8)は流路から出土した。(W5)は針葉樹の角材で、断面は一辺約2.5cmの正方形につくる。(W6)はスギ材を年輪に沿って加工しているが、残りが悪く全容は不明である。削り抜きの幅や白の可能性もある。(W7)は、D-3・4区の流路内に設けられた杭列の一部で、マツ属複雑管束重属の丸太材を用いている。先端部は5方向から尖らせており、枝の部分も丁寧に削り落としている。樹皮は残存していないが、面取り等は見られない。(W8)は、E-1区から出土した杭である。樹皮を残しており、先端部は変則的な2方向から削って尖らせている。他端部は1方向から刃先が弧状を呈した刃物で平らに仕上げている。

(W9~20)は、調査区西端E-8・9区の旧河道から出土している。この旧河道からは様々な時代の遺物が出土しているが、主な時代としては飛鳥時代から平安時代にかけてのものである。埋没後は中世以降の水田として利用されていたようである。(W9)は、第2層から出土した舟形木製品である。スタジイのかなり大きな材から縦木取りして作られており、粗くではあるが、鋭利な刃物によって削りだしている。残存長約15.8cm、幅約6.0cm、高さ約4.3cm、内法の深さ約2.7cmを測る。底部は湾曲しているが、安定のためか平底となる。一端を失っているため、軸先か軸か判別がつかないが、その先端部分の上面には面を持っているが、舷側部分は薄く作られている。(W10)も第2層から出土した幅約3.8cm、厚さ約1.1cmのヒノキ柾目の板材である。片側の端辺を片面から削って薄くしており、角も丸く落としている。表面は丁寧に仕上げている。

(W11~13)は、第2層から出土した曲物底板である。(W11)は針葉樹の柾目材を用いており、直径約16.5cmで上面の角を削っている。4ヶ所に小孔を穿って側板結束に備えており、1ヶ所には椀皮が3重に巻かれている。この孔と対向する孔とを結ぶように毛引き線が引かれているが、円盤の中心は通らない。小孔を穿つ計画線であろうか。また、別方向の小孔は2ヶ所づつ穿たれており、内1ヶ所には目釘と思われる材が残存している。(W12)は、ヒノキの板目材を用いている。直径17~19cmの円盤が復元できる。側板結束の痕跡は残存していない。(W13)は、針葉樹の板目材を用いている。直径28~30cmの大形の円盤が復元できる。側板結束の小孔は上面は2ヶ所穿たれており、下面では1ヶ所に連結する。(W14)は、第2層から出土した。ヒノキの樹心を外した部分を用いて直方体を作りだしている。全ての角を斜めに落

とし、表面も平滑に仕上げている。一方の本口面には直線的な小さな段が観察され、鋸によって切断された可能性がある。(W15)は、E-8区旧河道下層から出土した。飛鳥時代のもと思われる。直径約11.5cmのヤブツバキの丸太材を用いている。一方の端部は5方向から粗く刃物を打ち込んで切断している。刃物は鋭利であるが、ツバキのような固い材を切断するために1方向で最高12回も打ち込んでいる。刃先は幅4.5 cm以上で、形状は緩やかに弧を描く。一部に刃溢れが認められる。他端部は側面から丁寧に面取りを行っており、丸くなった端面はひび割れの中までも磨滅しており、何かをすりつぶしたり、砕いたりする道具として使用されていたものと思われる。側面の一方には長さ2cm程度の非常に細かい鋭利な刃物の痕跡が無数に観察できる。その対向する下面には切り離し部に類した幅5cm程度の刃物を打ち込んで形状を変えている。接地面として安定させるためか、或いはこの面も粗い作業をおこなう台として用いられたものであろうか。側面にも細かい刃物傷が認められるものの少ない。本製品は作業台として転用されているが、本来の用途として杵の可能性もある。兵庫県山垣遺跡の竪杵や大阪府上田部遺跡の唐臼の杵もツバキを用いている。

(W16~20)は、E-8区旧河道東岸から不規則ながら岸に直行して打ち込まれた杭列で、簡易な構造物と思われ、杭には2時期あるものと思われ、W16は残存状態が悪いことから古い時期のものと考えている。一部樹皮を残したままのコナラ節の丸太材先端を1方向から樹心近くまで大きく落とし、そこで生じた角2ヶ所を更に削って先端を尖らせている。そのため1/3ほどは自然面が残っている。幅が5cmほどで刃先が緩やかに弧を描く鋭利な刃物で整形している。新しい時期のものと思われる。

(W17~20)は、全てマツ材を用いており、樹皮は残っていない。枝の部分は粗く落とすだけである。丸太材の細い方を全周から落として尖らせている。細かい整形であるため刃物の幅や先端の形状を復元することが困難であるが、全ての杭で幅約0.2 cmの刃溢れの痕跡を確認しており、同一の工具で一時に作成されたものと推定できる。川岸の斜面に打ち込まれた杭から流心に近い部分に打ち込まれた杭まであり一様ではないが、器表面の劣化の状況から深いものでは90cm以上打ち込まれたものも見られる。

【参考文献】木器集成図録 近畿古代編 奈良国立文化財研究所 1985

第8章 自然科学的分析の結果

第1節 亀田遺跡出土の管玉の産地分析

藤科哲男

(京都大学原子炉実験所)

はじめに

遺跡から出土する勾玉、玉、垂玉、管玉などの岩石名の推定は、一般的には肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のように思われているのが実態である。玉類の原材料としては滑石、軟玉（角閃石）、硬玉、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉、緑色輝灰岩（グリーンタフ）などが推測される。それぞれの岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどで、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、例えば緑色輝灰岩製管玉と岩石名が決められ、軟らかく加工が容易だと想像できても、実際の硬度、打撃亀裂性などを測定した上で考察しなければ、古代の管玉製作技術に関する資料として無意味である。地学の専門家でも、肉眼観察では、岩石名を間違えることは避けられないと指摘している。岩石名を決定することよりも、どこの産地の原石が使用されているか、産地分析がおこなわれて初めて、考古学に寄与できる資料となり、また産地分析の過程で岩石名決定に関係する情報も得られる。産地分析の結果から原材料産地が特定出来なくても得られた分析値を他の遺跡出土の玉類の分析値と相互比較することにより同じ組成の材料から作られた玉類の使用圏の情報が得られ、将来、原材料産地の調査が進めばこれら玉類の原材料産地は明らかになる。遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなく、何ヶ所かあるヒスイ（硬玉、軟玉）とか碧玉の原産地うち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。

玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法^①および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析をおこなった蛍光X線分析でおこなう元素比法^{②③}が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的におこなった研究は蛍光X線分析法と電子スピニング共鳴法を併用し産地分析より正確におこなった例^④が報告されている。石鏃などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。

(1) 石器の原産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。

(2) 玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリとして、精神的な面に重要な作用を与えようと考えられる。

従って、玉類の産地分析で、明らかになる玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれないし、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられ、石器の原産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析をおこなった遺物は、兵庫県揖保郡太子町に位置する亀田遺跡の弥生時代～中世時代の集落跡から出土した管玉2個で、産地分析の結果が得られたので報告する。

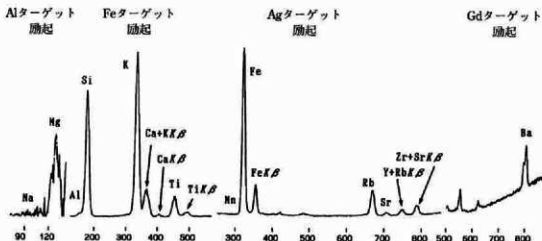
非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけないといけない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかくおこなってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のもが多くて、非破壊で産地分析がおこなえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している¹³⁾非破壊で分析をおこなう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析をおこなった。玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した¹⁴⁾。

碧玉原石の蛍光X線分析

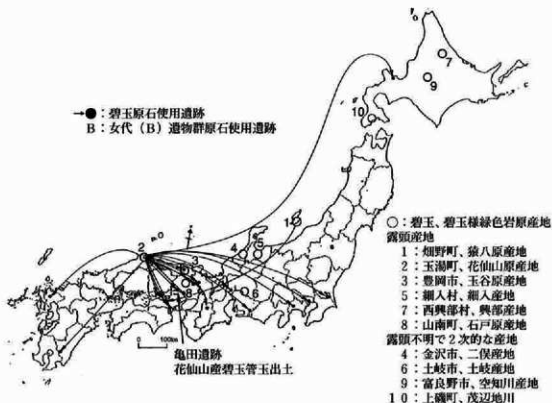
碧玉の蛍光X線スペクトルの例として島根県、花山山産原石を図10に示す。猿八産、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの図10で示されるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピーク高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いる。



第10図 花山山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル

碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を図11に示す。佐渡嶺八原産地は、①新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であつたらしく採石跡が何ヶ所も見られ、分析した原石は猿八の各地点から表採したものおよび地元で提供された原石などで、提供されたものの中には露頭から得られたものがありグリーンタフ層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であつた。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6～2.5の間のものは31個、2.5～2.4の間は5個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石の比重が2.6～2.3の範囲で違つても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶色系と緑色系の縞があるなど、多少色の違いがあつても組成上には反映されていない。出雲の花仙山は近世まで採掘がおこなわれた原産地で、所在地は②島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。産出する原石は濃緑色から緑色の緻密で、剥離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがつて比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619～2.600の間のものは10個、2.599～2.500は18個、2.499～2.400は7個、2.399～2.300は11個、2.299～2.200は11個、2.199～2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域が分析されている。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる組成の差はみられなかった。玉谷原産地は、③兵庫県豊岡市辻、八代谷、日高町玉谷地域で、産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑色系に茶色系が混じるものもみられ、これは佐渡嶺八原産石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡嶺八原産石より優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間



第11図 碧玉及び碧玉綠岩の原産地と古墳(統続文)時代の碧玉製管玉の原材料使用分布図

をかけて注意深くおこなう必要がある。分析した原石は、比重が2.644~2.600は23個、2.599~2.589は4個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は、④石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で、3個は同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。元素組成は他の産地の組成と異なり区別できる。この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は、⑤富山県婦負郡細入村割山定座岩地区のグリーンタフの岩脈に包塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が非常に軽く、分析した8個は2.25~2.12で、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、⑥愛知県土岐市地域で、赤色、黄色、緑色などが混じり合った原石が産出し、このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62~2.60の原石を碧玉として11個分析をおこなった。この原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地、⑦北海道紋別郡西興部村の碧玉原石は鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地、⑧兵庫県上郡山南町地区の安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑨北海道富良野市の空知川流域から採取される碧玉は濃い緑色で比重が2.6以上が4個、2.625が5個、2.524が5個である。碧玉の露頭は不明で河原の礫から採取するため、短時間で良質の碧玉を多数収集することは困難である。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑩北海道上磯郡上磯町の茂辺地川の川原で採取される碧玉で不均一な色の物が多く、管玉に使用できる色の均一な部分を大きく取り出せる原石は少ない。これら原石を原産地ごとに統計処理をおこない、元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り第49表に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一纏にしておこない、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている原石産地不明の碧玉製の玉の原材料で、玉作り行程途中の遺物が多数出土している。当初、原石産地を探索すると言う目的で、これら玉、玉材遺物で作った女代南B(女代(B))群であるが、同質の材料で作られた可能性がある玉類は最近の分析結果で日本全土に分布していることが明らかになってきた。また、宇木渡田遺跡の管玉に産地未発見の原石を使用した同質の材料で作られた管玉で作った未定C(未定(C))群をそれぞれ原石群と同じように使用する。古墳時代の管玉の碧玉原料として、岐阜県可児市の長塚古墳出土の管玉で作った長塚(1)、(2)の遺物群が追加された。この他、鳥取県の福部村多鈴池、鳥取市防己尾岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上であり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。最近、兵庫県香住町の海岸から採取された親指大1個の碧玉様の玉材は、貝殻状割面がみられる緻密な石質で少し青っぽい緑の石材で、玉の原材料になると思われる。この玉材の蛍光X線分析の結果では、興部産碧玉に似ているが、E S R信号および比重(2.35)が異なっているため、興部産碧玉と区別できる。

第49表 各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原 石 群 名	分析 個数	Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe
		$X_{av} \pm \sigma$	$X_{av} \pm \sigma$	$X_{av} \pm \sigma$	$X_{av} \pm \sigma$	$X_{av} \pm \sigma$
興 部	31	0.011±0.003	0.580±0.320	0.123±0.137	0.061±0.049	0.022±0.006
空知 A 1	10	0.049±0.017	1.044±0.299	2.308±0.556	0.484±0.096	0.052±0.012
空知 A 2	3	0.019±0.009	0.675±0.377	0.623±0.203	0.172±0.031	0.040±0.007
空知 B	2	0.066±0.001	3.927±0.267	0.088±0.004	0.089±0.003	0.283±0.034
釧 八	36	0.046±0.007	3.691±0.548	0.049±0.038	0.058±0.011	0.370±0.205
土 岐	51	0.006±0.004	0.361±0.131	0.072±0.063	0.098±0.063	0.023±0.005
玉 谷	27	0.025±0.009	0.625±0.297	0.110±0.052	0.476±0.104	0.045±0.014
花仙山 1	27	0.019±0.004	0.909±0.437	0.171±0.108	0.222±0.098	0.059±0.019
花仙山 2	33	0.023±0.003	1.178±0.324	0.157±0.180	0.229±0.139	0.065±0.015
纏 入	8	0.019±0.003	0.534±0.284	0.991±0.386	0.372±0.125	0.031±0.008
二 俣	4	0.043±0.001	2.644±0.183	0.337±0.079	0.158±0.009	0.312±0.069
石 戸	4	0.019±0.004	0.601±0.196	0.075±0.022	0.086±0.038	0.154±0.072
茂辺地川	4	0.031±0.002	1.847±0.246	0.077±0.024	0.222±0.052	0.021±0.021
女代南 B	68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.107±0.036	0.283±0.099
未定 C	58	0.030±0.028	4.416±0.618	0.013±0.013	0.207±0.034	0.589±0.130
長塚(1)	47	0.036±0.004	3.525±0.347	0.033±0.005	0.439±0.050	0.204±0.037
長塚(2)	45	0.028±0.007	2.659±0.122	0.010±0.004	0.064±0.003	0.719±0.065

原 石 群 名	分析 個数	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr
		$X_{av} \pm \sigma$	$X_{av} \pm \sigma$	$X_{av} \pm \sigma$	$X_{av} \pm \sigma$	$X_{av} \pm \sigma$
興 部	31	0.070±0.021	174.08±124.9	16.990±13.44	0.668±0.435	1.801±1.434
空知 A 1	10	0.108±0.042	4.658±2.044	0.438±0.089	15.676±4.311	0.054±0.041
空知 A 2	3	0.037±0.010	27.651±10.97	1.132±0.759	5.930±3.179	0.349±0.251
空知 B	2	0.455±0.010	2.281±0.278	1.035±0.104	0.235±0.084	0.129±0.022
釧 八	36	0.384±0.153	1.860±1.070	0.590±0.185	0.139±0.127	0.165±0.138
土 岐	51	0.096±0.025	43.067±23.28	4.056±2.545	0.271±0.308	0.159±0.180
玉 谷	27	0.151±0.020	6.190±1.059	0.940±0.205	0.192±0.170	0.158±0.075
花仙山 1	27	0.225±0.028	10.633±3.616	2.345±0.693	0.476±0.192	0.098±0.052
花仙山 2	33	0.219±0.028	12.677±2.988	2.723±0.519	0.472±0.164	0.132±0.071
纏 入	8	0.073±0.020	12.884±3.752	0.882±0.201	1.879±0.650	0.026±0.032
二 俣	4	0.338±0.039	1.495±0.734	0.481±0.176	0.697±0.051	0.088±0.015
石 戸	4	0.170±0.079	7.242±1.597	1.142±0.315	0.649±0.158	0.247±0.092
茂辺地川	4	0.190±0.052	5.566±1.549	0.980±0.044	0.300±0.032	0.171±0.051
女代南 B	68	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.065	0.214±0.097	0.171±0.047
未定 C	58	0.650±0.113	0.583±0.110	0.369±0.035	0.090±0.030	0.070±0.026
長塚(1)	47	0.361±0.040	2.756±0.473	0.980±0.110	0.472±0.083	0.379±0.143
長塚(2)	45	0.832±0.054	0.412±0.058	0.341±0.023	0.036±0.010	0.386±0.242

原 石 群 名	分析 個数	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr	比 重
		$X_{av} \pm \sigma$	$X_{av} \pm \sigma$	$X_{av} \pm \sigma$	$X_{av} \pm \sigma$
興 部	31	0.004±0.003	0.001±0.001	0.455±0.855	2.626±0.032
空知 A 1	10	0.078±0.152	0.019±0.005	0.003±0.007	2.495±0.039
空知 A 2	3	0.009±0.003	0.006±0.002	0.118±0.167	2.632±0.012
空知 B	2	0.015±0.002	0.022±0.004	0.123±0.010	2.607±0.001
釧 八	36	0.003±0.001	0.018±0.010	0.032±0.014	2.543±0.049
土 岐	51	0.001±0.001	0.001±0.001	0.072±0.160	2.607±0.009
玉 谷	27	0.006±0.003	0.016±0.003	0.054±0.021	2.619±0.014
花仙山 1	27	0.001±0.001	0.009±0.002	0.042±0.034	2.570±0.044
花仙山 2	33	0.001±0.001	0.009±0.004	0.035±0.025	2.308±0.079
纏 入	8	0.003±0.002	0.008±0.002	0.021±0.034	2.169±0.039
二 俣	4	0.007±0.002	0.043±0.010	0.043±0.023	2.440±0.091
石 戸	4	0.007±0.001	0.009±0.002	0.227±0.089	2.598±0.008
茂辺地川	4	0.003±0.008	0.016±0.001	0.132±0.069	2.536±0.033
女代南 B	68	0.011±0.004	0.026±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019
未定 C	58	0.002±0.001	0.101±0.019	0.019±0.016	2.646±0.023
長塚(1)	47	0.005±0.001	0.094±0.013	0.022±0.016	2.533±0.016
長塚(2)	45	0.004±0.001	0.047±0.004	0.024±0.013	2.569±0.003

X_{av} : 平均値, σ : 標準偏差値

女代南 B: 女代南道跡 (豊岡市) で使用されている原石産地不明の玉原石材料で作った群

未定 C: 宇木渡田道跡 (唐津市) で使用されている原石産地不明の碧玉で作った群

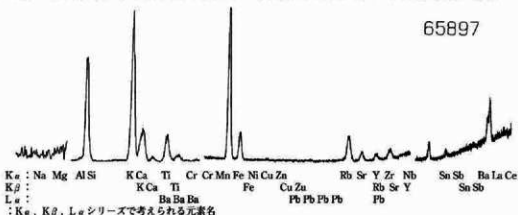
長塚(1), (2): 長塚古墳 (河見市) で使用されている原石産地不明の碧玉で作った群

亀田遺跡出土の管玉と国産碧玉原料との比較

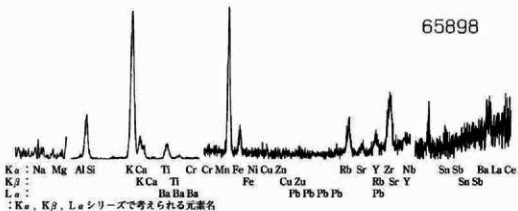
遺跡から出土した玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析でおこなっている。遺物の原産地の同定するために、(1)蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法でおこなう。(2)また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原料であると推測する方法も応用した。

蛍光X線法による産地分析

管玉の蛍光X線分析のスペクトルを図12・13に示し、比重および玉類の蛍光X線分析から原材料の元素組成比を求めて結果を表2に示す。管玉の石材を碧玉と分類するには遺物が、緻密で、蛍光X線分析でRb, Sr, Y, Zrの各元素が容易に観測でき、比重が約2.45以上を目安にしている。分析番号65897、65898番の管玉は緻密で、比重も2.5以上で、元素組成も碧玉の範囲(考古学で言う碧玉製管玉を基準にして決めた範囲)に入り、この石材を通称の碧玉と分類したが、これら分類は鉱物学に適用する厳密なものではないが、肉眼観察で判断した結果よりは科学的と推測される。これら管玉の原産地を分析するために元素組成比の結果を碧玉原石群(第49表)の結果と比較してみる。分析個数が少なく統計処理ができる群が作れなかった産地については、原石の元素組成比を管玉の組成と比較したが一致するものは見られなかった。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めておこなうホテリングT²検定¹⁰⁾により同定を行った結果、分析番号65897番の管玉の原産地は花仙山産地と同定され、女代南(B)遺物群、興部、猿八、花仙山、土岐、未定C、長塚遺物群の各群には非常



第12図 亀田遺跡出土管玉 (65897) の蛍光X線スペクトル



第13図 亀田遺跡出土管玉 (65898) の蛍光X線スペクトル

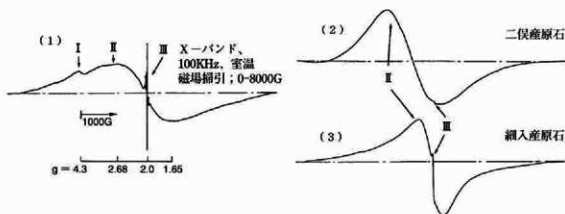
第50表 亀田遺跡出土管玉の分析結果

調査番号	分析番号	元 素 比							
		Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
920284	65897	0.014	1.197	0.220	0.187	0.041	0.179	13.068	2.333
930065	65898	0.029	3.243	0.010	0.105	0.254	0.273	1.845	0.503
JG-1 ^{a)}		0.020	4.343	0.800	0.231	0.110	0.262	3.989	1.044

調査番号	分析番号	元 素 比					重量 gr	比重
		Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr		
920284	65897	0.821	0.075	0.004	0.008	0.066	4.67446	2.528
930065	65898	0.127	0.149	0.011	0.027	0.056	0.13917	2.545
JG-1 ^{a)}		1.405	0.286	0.023	0.024	0.087		

a) : 標準試料, Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974).

1974 compilation of date on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192.

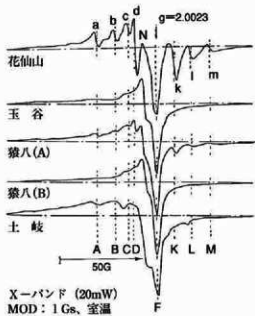


第14図 碧玉原石のESRスペクトル (花仙、玉谷、猿八、土岐)

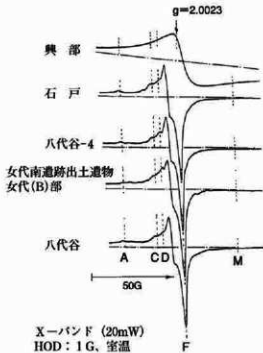
に低い確率になり、その原石でないことが証明された。また、分析番号65898番の管玉は女代南 (B) 遺物群に同定され、花仙山、興部、猿八、花仙山、土岐、未定C、長塚遺物群の各群には非常に低い確率になり、その原石でないことが証明された。これら群への帰属確率の結果を第50表に示した。また、より正確に産地を特定するためにESR分析を併用して産地分析をおこなった。

ESR法による産地分析

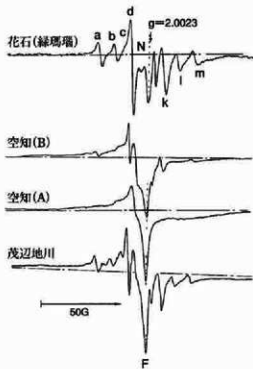
ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。第14図- (1) のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、g値が4.3の小さな信号 (I) は鉄イオンによる信号で、g値が2付近の幅の広い信号 (II) と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号 (III) で構成されている。第14図- (1) では、信号 (II) より信号 (III) の信号の高さが高く、第14図- (2)、- (3) の二俣、網入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。今回分析した玉類の中で信号 (II) が



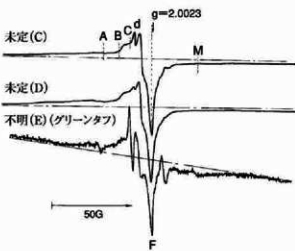
(1)



(2)



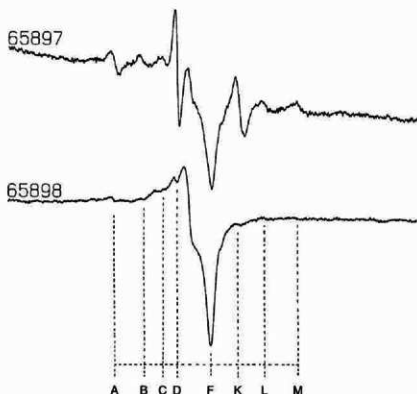
(3)



(4)

第15図 碧玉原石の信号(Ⅱ)のESRスペクトル

信号(Ⅲ)より小さい場合は、二保、細入産でないといえる。各原産地の原石の信号(Ⅲ)の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。第15図一(1)に花仙山、猿八、玉谷、土岐を第15図一(2)に興部、石戸、八代谷-A、女代(B)遺物群、八代谷および第15図一(3)に富良野市空知川の空知(A)、(B)、北海道今金町花石および茂辺地川の各原石の代表的な信号(Ⅲ)のスペクトルを示す。第15図一(4)には宇木渡田遺跡の管玉で作った未定C形と未定D形およびグリーンタフ製管玉によく見られる不明E形を示した。E S R分析では分析した玉作片および玉材片のE S R信号の形が、それぞれ似た信号を示す原石の産地の可能性が大きいことを示唆している。今回分析した管玉2個のE S R信号(Ⅲ)の結果を第16図に示す。分析番号65897番の信号(Ⅲ)は花仙山形で、65898番は女代南(B)群形に一致した。正確な原石産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法でともに同じ原産地に特定された場合のみ、その群の原石と同じ原石が使用されているとして総合判定原産地の欄に結果(第51表)を記した。



第16図 亀田遺跡出土管玉の信号(Ⅲ)のE S Rスペクトル
(65897:比重2.528, 65898:比重2.545)

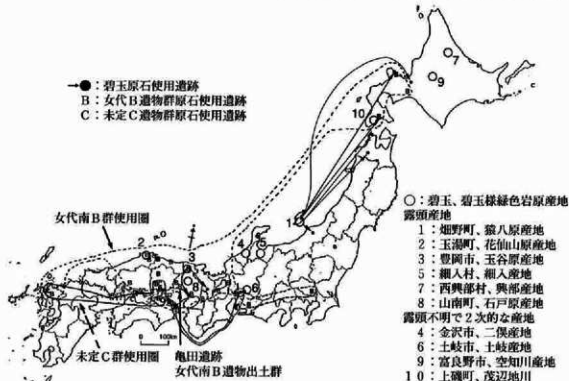
第51表 亀田遺跡出土管玉の分析結果

調査番号	分析番号	碧玉製玉類蛍光X線分析法による帰属確率							E S R信号形	総合判定原産地
		興部群	玉谷群	花仙山群	土岐群	猿八群	女代(B)群	未定(C)群		
920284	65897	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	6 %	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	花仙山	花仙山
930065	65898	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	0.007 %	33 %	<10 ⁻¹⁰ %	女代南(B)	女代南(B)群

920284:古墳形管玉:地区(No.Ⅱ-D-5(南半)),遺構(小P#経15cm P-1)、土層(埋土上層(噴灰V.N.S)),備考(第1面検出)
930065:弥生形管玉:地区(No.ⅡA-A-2)、遺構(住跡址?SH-14)、備考(表面検出中)

結 論

今回分析を行った亀田遺跡の管玉2個の蛍光X線分析の結果とESR分析を組み合わせた総合判定では、分析番号65897番の古墳形管玉管玉の原産地は花仙山産地と同定され、女代南(B)遺物群、興部、猿八、花仙山、土岐、未定C、長塚遺物群の原石でないこと、また、分析番号65898番の弥生形管玉は女代南(B)遺物群に同定され、分析番号65898番の弥生形管玉は女代南(B)遺物群に同定され、花仙山、興部、猿八、花仙山、土岐、未定C、長塚遺物群の原石でないことが、それぞれ証明された。分析で明らかになった古墳形管玉に使用された花仙山産原石の使用圏を本遺跡との関係をみるために以下に述べる。花仙山産原石は古墳時代になって、使用された原石で、未定C群、佐渡島猿八産原石製玉類の使用がみられず、女代南(B)群は花仙山産原石と同時に出土した遺跡は、徳島県板野町、蓮華谷古墳群Ⅱの3世紀末の2号墳と島根県安来市門生黒谷Ⅲ遺跡の4世紀末～5世紀初頭の管玉である。3世紀末から4世紀末にかけては女代南B群の管玉から花仙山産管玉に移行する過渡期的な時期と思われる、移行させた社会情勢の変革を推測しても産地分析の結果と矛盾しない。鳥根県東出雲町勝負遺跡の5世紀前半、安来市柳遺跡、奈良県橿原市曾我遺跡の5世紀、岡山県川上村下郷原和田遺跡の玉材の剥片には花仙山産原石が使用されていた。時期が進むに従って碧玉製管玉、勾玉は花仙山産原石製玉類の使用が広がり、余市町大川遺跡の7世紀、東京都板橋区赤羽台遺跡の6世紀、神奈川県海老名市本郷遺跡の8世紀、愛知県豊川市上野第3号墳の7世紀、大阪府高槻市塚原B42号墳6世紀末の管玉に使用されている(第11図)。京都府園部町垣内古墳の4世紀の鬘頭式石製盤の石材として、また兵庫県神戸市では4世紀初頭の天王山4号墳出土管玉、4世紀末の大蔵山3号墳の勾玉、管玉4世紀の堅田1号墳の勾玉、6世紀初頭の鬼神山古墳、西神33-A、6世紀前半の北神ニュウタウン、6世紀中葉の西ヶ谷遺跡、6世紀末の柿谷2号墳出土の管玉にそれぞれ花仙山産原石が使用されていた。兵庫県西宮町の箱塚4、5号墳、高川2号墳の6世紀後半の管玉に使用され、岡山市南崎天神遺跡の6世紀後半、斎富5、2号墳、徳島



第17図 碧玉及び碧玉緑色岩の原産地と弥生(統縄文)時代の碧玉製管玉の原材使用分布圏

泉坂野町蓮華谷4、5墳の6世紀末、佐賀県東脊振町吉野ヶ里遺跡の管玉にそれぞれ使用されていた。花山山産原石の使用の南限は、宮崎県新富町祇園原115号墳出土の6世紀の管玉になっている。

分析番号65898番の弥生形管玉は女代南(B)遺物群に同定された遺物の原石産地は、不明で、女代南B群の使用圏を見ると、弥生時代を中心に使用された原石で、豊岡市の女代南遺跡の中期の玉作り過程の石片、滋賀県の筑摩個、立花遺跡出土の管玉、神戸市の玉津田中遺跡の中期の石片、管玉には玉谷産と共に使用されていた。関東地方では埼玉県蓮田市宿下遺跡、東海地方では愛知県、朝日遺跡、新城市大宮の大ノ木遺跡の弥生時代の管玉に、畿内地域では東大阪市の巨摩、亀井、久宝寺北、久宝寺南遺跡で、また中国地方では、作用町の長尾・沖田遺跡の中期末の管玉、総社市の南溝手遺跡出土の弥生前期末~中期初頭の玉材、岡山市の南溝手遺跡および百間川原尾島遺跡出土の管玉、岡山県川上村下郷原和田遺跡の管玉、鳥取県羽合町の長瀬高浜遺跡の中期中葉の管玉、米子市の御建山遺跡尾高19号墳第2主体部出土の管玉、東広島市の西本6号遺跡の管玉に使用されている。四国地方では徳島県坂野町の蓮華谷古墳群Ⅱ、2号墳、3世紀末の管玉、香川県善通寺市の彼ノ宗遺跡の末期の管玉に使用され、九州地方では、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉、また宇木汲田遺跡の管玉に使用されていた。女代南B群の原石は糸魚川産ヒスイに匹敵する広い分布圏を示している。一方、南溝手遺跡の中前期葉の管玉片には、唐津市の宇木汲田遺跡の管玉で作った原石群の未定C群の原石が使用され、この未定C群は坂出市の龍川・五条遺跡の管玉、今治市の持田町3丁目遺跡の前期の管玉、大和町の尼寺一本松遺跡の管玉、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉、吉野ヶ里遺跡の南西サブトレ出土の管玉に使用されていたが、最近の調査で愛知県、朝日遺跡に伝播していることが明らかになり、今後の調査でさらに使用圏が拡大する可能性が推測される。また、猿八産原石が弥生時代に使用されている遺跡は、北海道余市町の大川遺跡および茂別遺跡の統縄文時代では女代南B群原石の管玉と共に使用され、江別市の大麻22遺跡出土の統縄文(後北C1式)の管玉に、七飯町の大中山13遺跡(統縄文)出土の管玉に使用され、佐渡島以北で主に使用されていることが明らかになっている。これら佐渡産碧玉、女代南B群の剥片出土遺跡は、豊岡市、米原町、福井県など日本海側で、これら玉類が日本海玉材原産地地方で作られ、これら玉類の使用圏からみて、日本海を交易ルートとし遠距離に伝播したと推測され、伝播には遺跡をリレー式に伝わる場合、また、産地から遠距離の遺跡に直接到達する場合などが考えられる。一方、未定C群は、玉作りの行程を示す石片、剥片としてが発見された遺跡が確認されていないため、推測は空論になるが、未定C群の管玉が韓国で作られ、西北九州地方および瀬戸内海ルートを通って愛媛県、香川県地方、岡山県、愛知県朝日遺跡へ流入したと推測しても産地分析の結果と矛盾しない(第17図)。これら、女代南(B)群、未定(C)群の原料を使用した管玉を出土する遺跡の中に、不明E形のESR信号を示すグリーンタフ製管玉も出土する遺跡があり、分析数を増やし管玉原料の組成の異同を明らかにすれば、古代の交易に関する情報が得られる可能性がある。玉類の産地分析の困難さは原石の入手で、産地同定を定量的に行う場合、統計処理の母集団(原石群)を作り、原石群の組成の変動を評価するため多数の原石が必要で、今後、佐渡島猿八産原石が佐渡島以南に本当に伝播していないかを調査し、女代南B群、未定C群、不明の管玉などの原石産地を明らかにし、これら不明の原石群を作ること、また、玉類に使用されている産地の原石が多い方が、その産地地方との文化交流が強いと推測できることから、日本各地の遺跡から出土する貴重な管玉を数多く分析することが重要で、今回行った産地分析は完全な非破壊である。碧玉産地に関する小さな情報であっても御提供頂ければ研究はさらに前進すると思われます。

参考文献

- 1) 茅原一也(1964)、長者が原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報)。長者ヶ原、新潟県糸魚川市教育委員会:63-73
- 2) 薬科哲男・東村武信(1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要 6:1-18
- 3) 薬科哲男・東村武信(1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。
橿原考古学研究所紀要「考古学論叢」,14:95-109
- 4) 薬科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学,16:59-89
- 5) Tetsuo Warashina(1992)、Allocation of Jasper Archeological
Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological
Science 19:357-373
- 6) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学,9:77-90

第2節 亀田遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材産地分析

藤科哲男

(京都大学原子炉実験所)

はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石遺物の石材産地推定をおこなっている^{1) 2) 3)}。地質時代に自然の力で移動した岩石の出発露頭を元素分析で求めるとき、岩石と露頭原石の組成が一致すれば、その露頭から流れた岩石であると言うことは、自然法則に従って流れたルートを証明できる。産地分析では「石器とある産地の原石が一致したからと言って、その産地のものと言い切れないが、一致しなかった場合その産地のものではないと言い切れる」が大原則である。人が移動させた石器の組成とA産地原石の組成が一致したからと言って、産地と出土遺跡の間に地質的関連性がないため、移動ルートが自然の法則に従って証明できず、その石器がA産地の原石と決定することができない。従って、石器原料と産地原石が一致したことが、直ちに考古学の資料とならない、確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなったが、B、C、Dの産地でないと証明がないために、A産地だと言い切れない。A産地と一致しなかった場合、結果は考古学の資料として非常に有用である。それは石器に関してはA産地と交流がなかったと言い切れる。考古学は、様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの素材があり一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な結果である。地質など自然科学の場合は、自然科学的方法（物理・化学的方法）に従って、産地を特定するが、分析装置を使用すれば科学的分析と誤解している科学者がみられるが、装置は物差しにすぎず、得られた結果を自然の法則に従って処理し産地を特定しなければならない。考古学者は考古学を基準にして、例えば産地が遺跡から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する。または原産地地方との交流が石器以外の他の遺物で証明されているなどの条件を考えて、石器の石質と一致する最も近い産地の原石を肉眼観察を基準にして推測する。この結果が信用される場合は、石質の一致よりも、産地との交流を推測しても考古学条件に無理がないためである。これは、遺跡から500m以上離れた産地の石材が石器と一致しても、遠距離の産地を言わず、近くの一致した産地しか言わないことから分かる。従って、実際に遠距離から伝播した原料でも、近くの産地のものとして処理している。日本中の産地の石材を観察すると、とても肉眼観察で産地を特定することはできないと思う。また地質学者に聞いても、とても肉眼観察で産地など特定できないと言う人が多い。石器原料の岩石名、産出産地を述べる場合客観的なデータに基づいて決定した結果を記さなければ、報告書全体が正確さを欠くように思われる。黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の操作も簡単である。石

器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。今回分析した遺物は兵庫県揖保郡太子町に位置する亀田遺跡出土の弥生時代～平安時代の集落跡から出土したサヌカイト製遺物116個について産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト原石の分析

サヌカイト両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。

塊状試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それをもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srをそれぞれ用いる。サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて32ヶ所の調査を終えている。第18図にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多く地点からは良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数々の群に分かれる。近年、丸亀市の双子山の南嶺から産出するサヌカイト原石で双子山群を確立し、またガラス質安山岩は細石器時代に使用された原材で普通寺市の大麻山南からも産出している。これらの原石を良質の原石を産出する産地および原石産地不明の遺物を元素組成で分類すると72個の原石群に分類でき、その結果を第52表に示した。香川県内の石器原材の産地では金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6個の群、城山群および双子山群に、またガラス質安山岩は金山奥池・五色台地区産は五色台群の単群に、大麻山南産は大麻山南第一、二群の2群にそれぞれ分類され区別が可能なことを明らかにした。金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円碟状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が第53表に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からは、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92%および88%と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。第54表に示す和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される。第55表に示す和歌山市梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、第53表・第54表のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心にした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から6%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、第54表のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気

によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。一方黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。今回分析した遺物の結果を第56表に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためK/Caの一変量だけを考え、分析番号65881番の遺物はK/Caの値が0.282で、二上山群の[平均値] ± [標準偏差] は、 0.288 ± 0.010 であるから、遺物と原石群の差を標準偏差値 (σ) を基準にして考えると遺物は原石群から 0.6σ 離れている。ところで二上山群の産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 0.6\sigma$ のずれより大きいものが54ヶある。すなわち、この遺物が、二上山群の原石から作られていたと仮定しても、 0.6σ 以上離れる確率は54%であると言える。だから、二上山群の平均値から 0.6σ しか離れていないときには、この遺物が二上山群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を金山東群に比較すると、金山東群の平均値からの隔たりは、約 17σ である。これを確率の言葉で表現すると、金山東群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 17σ 以上離れている確率は、1000兆の100倍分の1であると言える。このように、1000兆の100倍個に1個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、金山東群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は二上山群に54%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから二上山群の原石が使用されると同定され、さらに金山東群に対しては1000兆分の1%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たないことから金山産原石でないと同定される」。遺物が一ヶ所の産地（二上山群の産地）と一致したからと言って、例え二上山群と金山東群の原石は成分が異なっている、分析している試料は原石でなく遺物でさらに分析誤差が大きくなる不定形（非破壊分析）であることから、他の産地に一致



第18図 サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地

第52表-1 各サマサイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差

原産地	分析個数	元 素 比										
		K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca	
北海道	46	0.359±0.020	0.430±0.014	0.081±0.005	5.881±0.223	0.165±0.011	0.120±0.013	0.883±0.080	0.015±0.013	0.013±0.001	0.137±0.007	
	80	0.351±0.011	0.288±0.010	0.089±0.005	5.064±0.140	0.174±0.011	0.095±0.009	0.903±0.029	0.015±0.012	0.015±0.001	0.141±0.005	
群馬県	43	0.194±0.070	0.360±0.028	0.129±0.014	9.205±1.153	0.080±0.004	0.083±0.014	0.458±0.082	0.009±0.010	0.013±0.021	0.123±0.032	
	46	0.274±0.028	0.324±0.010	0.090±0.008	4.905±0.505	0.104±0.009	0.100±0.009	0.581±0.033	0.012±0.009	0.018±0.002	0.168±0.014	
神奈川県	40	0.092±0.005	0.285±0.009	0.166±0.009	12.406±0.332	0.023±0.006	0.111±0.008	0.483±0.023	0.005±0.007	0.012±0.001	0.012±0.001	
	93	1.576±0.055	0.227±0.011	0.038±0.004	0.766±0.025	0.277±0.020	0.031±0.013	0.504±0.024	0.035±0.009	0.052±0.003	0.660±0.025	
奈良県	51	0.288±0.010	0.215±0.006	0.071±0.006	4.629±0.270	0.202±0.012	0.065±0.009	0.620±0.022	0.024±0.010	0.019±0.001	0.144±0.005	
	26	0.484±0.023	0.325±0.025	0.056±0.004	4.069±0.148	0.298±0.021	0.055±0.012	0.706±0.025	0.038±0.010	0.023±0.001	0.194±0.009	
兵庫県	28	0.616±0.021	0.254±0.012	0.057±0.005	3.610±0.189	0.265±0.019	0.065±0.010	0.827±0.028	0.027±0.017	0.018±0.001	0.186±0.007	
	24	0.535±0.020	0.263±0.005	0.053±0.005	3.438±0.103	0.240±0.015	0.042±0.012	1.069±0.030	0.028±0.014	0.017±0.001	0.173±0.008	
香川県	18	0.309±0.017	0.154±0.005	0.056±0.007	3.350±0.261	0.130±0.012	0.061±0.033	0.574±0.021	0.012±0.007	0.018±0.001	0.159±0.008	
	28	0.457±0.011	0.251±0.007	0.053±0.005	3.574±0.122	0.311±0.019	0.043±0.016	0.970±0.033	0.038±0.015	0.015±0.001	0.149±0.005	
広島県	15	0.459±0.012	0.249±0.006	0.053±0.005	3.518±0.129	0.308±0.019	0.043±0.015	0.971±0.037	0.034±0.009	0.016±0.001	0.150±0.004	
	51	0.534±0.015	0.267±0.005	0.053±0.005	3.376±0.108	0.240±0.014	0.040±0.016	1.072±0.051	0.029±0.011	0.017±0.001	0.175±0.007	
愛媛県	25	0.397±0.009	0.239±0.004	0.069±0.005	4.619±0.127	0.277±0.012	0.069±0.011	1.145±0.029	0.031±0.013	0.015±0.001	0.130±0.004	
	24	0.488±0.012	0.229±0.004	0.079±0.005	4.617±0.126	0.316±0.017	0.057±0.011	1.186±0.033	0.029±0.015	0.017±0.001	0.155±0.005	
鳥取県	19	0.408±0.009	0.216±0.005	0.082±0.005	4.808±0.125	0.292±0.017	0.064±0.011	1.059±0.025	0.020±0.011	0.015±0.001	0.133±0.006	
	63	0.402±0.011	0.216±0.006	0.079±0.006	4.741±0.138	0.289±0.014	0.068±0.016	1.065±0.026	0.021±0.014	0.013±0.001	0.116±0.003	
徳島県	54	0.350±0.007	0.233±0.005	0.074±0.006	4.898±0.169	0.261±0.012	0.061±0.014	1.095±0.035	0.023±0.016	0.011±0.002	0.105±0.004	
	63	0.689±0.048	0.120±0.006	0.023±0.006	2.294±0.114	0.484±0.026	0.006±0.011	0.705±0.044	0.043±0.021	0.039±0.003	0.459±0.028	
高知県	39	0.705±0.069	0.146±0.008	0.040±0.008	2.837±0.189	0.473±0.050	0.023±0.015	0.941±0.052	0.028±0.021	0.020±0.002	0.251±0.024	
	34	1.006±0.032	0.119±0.005	0.032±0.007	2.396±0.099	0.683±0.027	0.014±0.026	0.768±0.027	0.031±0.023	0.027±0.002	0.350±0.012	
山口県	40	0.458±0.041	0.374±0.007	0.073±0.009	5.169±0.157	0.393±0.022	0.108±0.017	1.473±0.051	0.037±0.021	0.020±0.008	0.219±0.009	
	23	0.188±0.007	0.178±0.006	0.011±0.001	0.916±0.033	0.032±0.002	0.001±0.002	0.717±0.069	0.004±0.002	0.015±0.001	0.111±0.006	
徳島県	60	0.651±0.021	0.485±0.014	0.046±0.004	2.329±0.104	0.174±0.009	0.029±0.009	0.462±0.007	0.185±0.010	0.025±0.002	0.241±0.006	
	45	0.277±0.010	0.345±0.008	0.019±0.002	1.601±0.057	0.039±0.015	0.008±0.006	0.938±0.012	0.028±0.006	0.019±0.001	0.171±0.006	
山口県	29	0.323±0.019	0.363±0.031	0.019±0.001	1.607±0.060	0.059±0.009	0.003±0.005	0.399±0.043	0.025±0.009	0.021±0.001	0.171±0.006	
	25	1.116±0.051	0.472±0.022	0.037±0.005	3.228±0.060	0.245±0.011	0.023±0.009	0.524±0.014	0.246±0.013	0.038±0.003	0.391±0.021	

第52表-2 各サマスカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差

原産地	分析個数	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca		
福岡県 八女市	昭和池第一	50	1.825±0.041	0.644±0.024	0.053±0.007	2.125±0.053	0.433±0.039	1.077±0.017	1.477±0.049	0.044±0.022	0.050±0.003	0.500±0.012	
	第二	50	1.592±0.066	0.690±0.020	0.061±0.005	3.075±0.123	0.534±0.019	1.111±0.020	1.671±0.134	0.049±0.012	0.040±0.003	0.419±0.014	
	第三	50	1.144±0.009	0.724±0.036	0.078±0.009	2.919±0.099	0.625±0.048	0.121±0.026	2.820±0.114	0.072±0.020	0.070±0.026	0.817±0.040	
	第四	50	1.922±0.108	0.681±0.050	0.064±0.005	3.029±0.103	0.607±0.033	0.182±0.017	1.887±0.068	0.050±0.015	0.050±0.004	0.499±0.018	
	佐賀県	53	0.831±0.047	0.404±0.013	0.058±0.007	4.718±0.225	0.510±0.037	0.062±0.019	0.850±0.033	0.018±0.008	0.018±0.003	0.201±0.011	
熊本県	第一	23	0.834±0.055	0.396±0.016	0.065±0.010	5.342±0.317	0.596±0.047	0.081±0.028	0.869±0.046	0.242±0.023	0.018±0.005	0.262±0.014	
	第二	8	1.097±0.232	0.350±0.028	0.065±0.014	4.488±0.903	0.701±0.084	0.084±0.025	0.828±0.052	0.239±0.019	0.021±0.005	0.203±0.046	
	野山	42	1.287±0.051	0.340±0.013	0.058±0.010	3.643±0.225	0.784±0.036	0.081±0.022	0.824±0.033	0.265±0.032	0.038±0.009	0.458±0.050	
	梅松	62	0.765±0.034	0.314±0.011	0.067±0.009	5.323±0.244	0.548±0.036	0.075±0.021	0.691±0.034	0.208±0.023	0.014±0.002	0.174±0.007	
	寺山・岡本	30	0.629±0.043	0.310±0.010	0.070±0.008	5.600±0.323	0.489±0.029	0.068±0.017	0.644±0.032	0.192±0.018	0.013±0.001	0.157±0.010	
	西青田	17	0.458±0.019	0.331±0.005	0.068±0.010	7.489±0.249	0.307±0.024	0.081±0.015	0.958±0.032	0.106±0.010	0.023±0.002	0.227±0.016	
	松尾池	47	0.717±0.006	0.410±0.012	0.061±0.006	3.312±0.241	0.383±0.024	0.094±0.013	0.810±0.023	0.095±0.023	0.028±0.027	0.291±0.014	
	松尾池第一	40	0.970±0.032	0.330±0.009	0.066±0.007	3.683±0.122	0.431±0.021	0.076±0.016	0.554±0.023	0.110±0.021	0.034±0.003	0.377±0.012	
	松尾池第二	42	0.822±0.027	0.369±0.010	0.065±0.007	3.888±0.236	0.392±0.021	0.078±0.018	0.540±0.049	0.089±0.020	0.027±0.009	0.330±0.013	
	第一	41	0.675±0.016	0.380±0.010	0.073±0.007	4.690±0.218	0.346±0.021	0.075±0.012	0.582±0.065	0.087±0.013	0.024±0.007	0.280±0.011	
	第二	12	0.538±0.011	0.401±0.007	0.076±0.010	5.271±0.189	0.296±0.019	0.075±0.015	0.587±0.024	0.075±0.009	0.022±0.002	0.227±0.009	
	第三	12	0.538±0.011	0.401±0.007	0.076±0.010	5.271±0.189	0.296±0.019	0.075±0.015	0.587±0.024	0.075±0.009	0.022±0.002	0.227±0.009	
	第四	37	0.744±0.014	0.469±0.010	0.080±0.010	5.176±0.202	0.399±0.020	0.092±0.015	0.807±0.027	0.096±0.023	0.029±0.003	0.302±0.010	
	長崎県	串岳	28	1.111±0.118	0.140±0.009	0.058±0.020	1.650±0.226	0.236±0.043	0.041±0.027	0.486±0.038	0.052±0.022	0.050±0.005	0.607±0.059
		大田第一	19	1.072±0.092	0.144±0.008	0.041±0.006	1.776±0.132	0.253±0.014	0.015±0.013	0.497±0.018	0.065±0.015	0.049±0.003	0.587±0.018
		大田第二	30	0.784±0.092	0.345±0.026	0.069±0.008	4.561±0.236	0.675±0.132	0.230±0.028	0.727±0.053	0.299±0.039	0.015±0.003	0.188±0.021
		川瀬第一	13	0.594±0.048	0.328±0.013	0.068±0.010	7.759±0.411	1.114±0.104	0.348±0.031	0.989±0.071	0.496±0.041	0.012±0.001	0.144±0.010
川瀬第二		59	0.498±0.030	0.302±0.011	0.067±0.005	4.225±0.181	0.220±0.018	0.078±0.010	0.814±0.048	0.035±0.012	0.012±0.002	0.133±0.008	
福井第一		9	0.498±0.048	0.265±0.027	0.071±0.004	4.854±0.374	0.203±0.029	0.081±0.012	0.714±0.048	0.034±0.017	0.011±0.001	0.109±0.011	
福井第二		15	0.620±0.012	0.329±0.005	0.080±0.011	7.351±0.315	1.211±0.040	0.365±0.035	1.028±0.047	0.534±0.033	0.013±0.001	0.154±0.003	
崎針尾第一		25	0.512±0.014	0.317±0.006	0.084±0.011	7.157±0.312	0.941±0.037	0.301±0.027	0.874±0.043	0.431±0.033	0.011±0.002	0.128±0.004	
崎針尾第二		68	0.362±0.026	0.292±0.023	0.062±0.006	4.106±0.227	0.160±0.018	0.057±0.009	0.434±0.039	0.056±0.011	0.010±0.001	0.107±0.007	
駒崎第一		14	0.599±0.115	0.373±0.045	0.073±0.014	5.167±0.749	0.320±0.058	0.077±0.016	0.650±0.034	0.086±0.027	0.015±0.002	0.163±0.031	
駒崎第二	42	0.642±0.071	0.310±0.010	0.070±0.008	5.529±0.354	0.498±0.051	0.081±0.015	0.656±0.039	0.200±0.028	0.022±0.006	0.246±0.023		
熊本県	阿蘇第一	15	2.006±0.258	0.646±0.062	0.064±0.011	2.085±0.320	0.481±0.068	0.106±0.028	1.647±0.197	0.063±0.012	0.057±0.010	0.597±0.099	
	阿蘇第二	14	0.980±0.198	0.514±0.070	0.061±0.006	3.067±0.441	0.299±0.066	0.064±0.013	1.043±0.182	0.038±0.013	0.032±0.005	0.292±0.041	
	菊池	42	0.678±0.057	0.458±0.020	0.062±0.006	3.457±0.206	0.194±0.018	0.075±0.009	0.728±0.054	0.025±0.010	0.019±0.002	0.185±0.015	
	JG-1'	56	1.327±0.021	0.265±0.006	0.058±0.006	2.817±0.074	0.756±0.015	0.183±0.024	0.762±0.033	0.078±0.014	0.036±0.003	0.448±0.011	

平均値と標準偏差。* : ガラス質安山岩 a) : Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeeda, E. (1974). A compilation of data on the GSI geochemical reference samples JG-1 granulorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal* Vol.8 175-182.

第52表—3 各サマサイトの産産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地	分析個数	元 素 比									
		K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
北海道	35	0.352±0.029	0.291±0.021	0.094±0.012	5.376±0.721	0.170±0.015	0.103±0.016	0.874±0.101	0.018±0.011	0.017±0.021	0.156±0.090
石川県	39	0.478±0.016	0.596±0.012	0.067±0.053	5.228±0.168	0.160±0.010	0.110±0.015	1.282±0.033	0.031±0.008	0.025±0.017	0.228±0.075
愛知県	35	0.334±0.004	0.363±0.005	0.067±0.009	3.865±0.150	0.082±0.005	0.044±0.007	0.758±0.044	0.027±0.026	0.017±0.002	0.147±0.010
	35	1.016±0.022	0.582±0.012	0.043±0.005	4.187±0.141	0.477±0.019	0.088±0.020	1.722±0.058	0.058±0.026	0.032±0.009	0.557±0.021
大阪府	30	0.236±0.003	0.189±0.003	0.075±0.005	4.966±0.089	0.194±0.010	0.063±0.011	0.588±0.019	0.010±0.011	0.015±0.001	0.127±0.002
	30	0.310±0.003	0.203±0.003	0.062±0.004	3.734±0.074	0.228±0.016	0.059±0.010	0.610±0.021	0.011±0.012	0.017±0.001	0.147±0.002
	30	0.333±0.003	0.229±0.003	0.066±0.004	4.363±0.080	0.212±0.014	0.066±0.011	0.618±0.019	0.010±0.011	0.017±0.001	0.142±0.002
	30	0.340±0.003	0.228±0.003	0.065±0.005	4.305±0.085	0.208±0.010	0.069±0.009	0.628±0.015	0.010±0.010	0.016±0.001	0.136±0.002
	30	2.638±0.057	0.949±0.026	0.025±0.008	4.536±0.105	0.624±0.019	0.139±0.027	1.425±0.050	0.059±0.019	0.097±0.033	1.903±0.065
	30	0.600±0.005	0.287±0.004	0.046±0.004	3.077±0.094	0.363±0.014	0.048±0.012	1.088±0.022	0.022±0.016	0.028±0.002	0.256±0.004
	30	0.133±0.002	0.117±0.002	0.065±0.006	6.365±0.098	0.112±0.007	0.044±0.010	0.328±0.020	0.009±0.009	0.011±0.001	0.102±0.002
	33	0.361±0.004	0.253±0.004	0.053±0.007	3.105±0.070	0.238±0.006	0.063±0.014	0.684±0.025	0.027±0.008	0.018±0.001	0.170±0.004
	33	0.372±0.004	0.250±0.004	0.049±0.007	2.987±0.060	0.241±0.010	0.056±0.009	0.675±0.024	0.023±0.008	0.018±0.001	0.176±0.005
島根県	70	0.211±0.006	0.296±0.007	0.092±0.014	7.108±0.245	0.098±0.011	0.071±0.012	0.552±0.038	0.021±0.008	0.013±0.001	0.118±0.005
香川県	30	0.307±0.004	0.258±0.005	0.067±0.005	4.736±0.095	0.235±0.010	0.058±0.010	0.640±0.014	0.030±0.013	0.016±0.005	0.132±0.004
	60	0.684±0.012	0.248±0.006	0.066±0.012	4.139±0.128	0.429±0.019	0.077±0.022	1.178±0.040	0.058±0.013	0.025±0.002	0.362±0.007
高知県	37	0.610±0.017	0.223±0.004	0.079±0.005	1.528±0.120	0.325±0.016	0.063±0.017	1.151±0.028	0.019±0.014	0.024±0.002	0.193±0.006

注：向出遺跡、中ノ社遺跡、六ツ目遺跡、松ノ木遺跡、朝日遺跡、鬼虎川遺跡の遺物群の分析個数は1個の遺物の分析場所を定めて分析した回数であらわす。
平田遺跡、鹿の谷遺跡の遺物群の分析個数はそれぞれ2、3個の遺物の分析場所を定めて分析した回数であらわす。

第53表 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
岩屋第一群	20個	30%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	22	33	白峰群に一致
第三群	6	9	法印谷群に一致
＊	5	8	国分寺群に一致
＊	4	6	蓮光寺群に一致
＊	3	5	金山東群に一致
＊	2	3	和泉群に一致
＊	4	6	不明（どこの原石群にも属さない）

第54表 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
岩屋第一群	12個	17%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和泉群	9	13	＊、＊、＊
岩屋第二群	6	8	白峰群に一致
	4	6	二上山群に一致
	1	1	法印谷群に一致
	1	1	金山東群に一致
	39	54	不明（どこの原石群にも属さない）

第55表 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
和泉群	10個	48%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第一群	1	5	＊、＊、＊
岩屋第二群	10	48	不明（どこの原石群にも属さない）

しないとは言えない、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地（二上山群）に一致したと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を第52表の72個すべての原石群についておこない、低い確率で帰属された原石群を消していくことにより、はじめて二上山産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はK/Caといった唯一の变量だけでなく、前述した8ヶの变量で取り扱うので变量間の相関を考慮しなければならぬ。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。従って、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めておこなうホテリングのT²検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する^(4, 5)。産地の同定結果は1個の遺物に対

第56表-1 亀田遺跡出土スナスカイト製石器・剥片の元素比分析結果

分析 番号	元 素 比									
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
65881	0.282	0.215	0.074	4.512	0.210	0.106	0.654	0.043	0.016	0.154
65882	0.301	0.218	0.073	4.318	0.218	0.062	0.606	0.030	0.016	0.146
65883	0.376	0.206	0.081	4.187	0.224	0.075	0.608	0.038	0.019	0.160
65884	0.290	0.224	0.067	4.648	0.204	0.080	0.592	0.034	0.016	0.142
65885	0.390	0.233	0.058	3.960	0.207	0.081	0.658	0.031	0.014	0.142
65886	0.296	0.216	0.079	4.511	0.236	0.066	0.596	0.054	0.018	0.147
65887	0.335	0.222	0.032	4.161	0.242	0.066	0.662	0.040	0.017	0.148
65888	0.289	0.213	0.067	4.316	0.209	0.075	0.645	0.032	0.017	0.142
65889	0.286	0.223	0.076	4.735	0.213	0.083	0.665	0.019	0.012	0.130
65890	0.281	0.227	0.074	4.860	0.228	0.071	0.635	0.038	0.015	0.144
65891	0.312	0.227	0.071	4.406	0.200	0.078	0.661	0.011	0.023	0.148
65892	0.308	0.200	0.049	3.837	0.225	0.079	0.678	0.020	0.013	0.138
65893	0.461	0.210	0.091	4.735	0.308	0.060	1.190	0.048	0.021	0.208
65894	0.307	0.236	0.070	4.243	0.213	0.108	0.610	0.023	0.017	0.148
65895	0.279	0.221	0.072	4.701	0.218	0.063	0.632	0.011	0.019	0.144
65896	0.451	0.222	0.067	4.386	0.304	0.079	1.207	0.060	0.019	0.181
67470	0.440	0.224	0.063	4.295	0.310	0.092	1.229	0.022	0.021	0.165
67471	0.460	0.224	0.072	4.422	0.301	0.089	1.212	0.051	0.020	0.181
67472	0.474	0.228	0.076	4.400	0.325	0.072	1.153	0.047	0.019	0.189
67473	0.456	0.221	0.084	4.628	0.322	0.081	1.249	0.056	0.020	0.172
67474	0.666	0.264	0.054	3.375	0.385	0.059	0.910	0.040	0.024	0.244
67475	0.456	0.222	0.082	4.340	0.337	0.080	1.202	0.033	0.018	0.170
67476	0.504	0.237	0.066	4.508	0.292	0.069	1.204	0.044	0.018	0.152
67477	0.504	0.230	0.089	4.412	0.333	0.051	1.184	0.046	0.022	0.194
67478	0.442	0.221	0.082	4.572	0.308	0.055	1.181	0.030	0.021	0.179
67479	0.453	0.220	0.073	4.488	0.336	0.070	1.183	0.031	0.017	0.174
67480	0.459	0.225	0.078	4.515	0.332	0.095	1.255	0.029	0.017	0.170
67481	0.454	0.236	0.085	4.331	0.313	0.079	1.192	0.020	0.020	0.177
67482	0.446	0.218	0.091	4.582	0.309	0.064	1.179	0.021	0.019	0.169
67483	0.441	0.222	0.099	4.583	0.315	0.091	1.199	0.026	0.020	0.181
67484	0.515	0.228	0.077	4.614	0.322	0.090	1.227	0.039	0.020	0.175
67485	0.469	0.227	0.085	4.422	0.314	0.084	1.240	0.048	0.018	0.177
67486	0.452	0.232	0.082	4.578	0.345	0.083	1.215	0.033	0.017	0.188
67487	0.439	0.220	0.077	4.345	0.304	0.075	1.188	0.032	0.019	0.165
67488	0.446	0.224	0.095	4.565	0.312	0.077	1.236	0.029	0.021	0.184
67489	0.440	0.216	0.090	4.731	0.322	0.069	1.289	0.051	0.022	0.185
67490	0.440	0.226	0.067	4.487	0.300	0.043	1.205	0.028	0.020	0.181
67491	0.468	0.214	0.074	4.482	0.304	0.069	1.153	0.024	0.023	0.188
67492	0.518	0.225	0.075	4.125	0.311	0.069	1.147	0.034	0.017	0.176
67493	0.435	0.224	0.097	4.474	0.330	0.083	1.203	0.027	0.016	0.176
67494	0.448	0.227	0.068	4.483	0.281	0.095	1.233	0.038	0.021	0.176
67495	0.561	0.223	0.083	4.600	0.306	0.058	1.217	0.052	0.020	0.181
67496	0.449	0.228	0.073	4.591	0.315	0.121	1.252	0.015	0.019	0.173
67497	0.447	0.227	0.081	4.448	0.311	0.071	1.259	0.023	0.020	0.179
67498	0.463	0.222	0.080	4.530	0.323	0.050	1.234	0.041	0.021	0.173
67499	0.445	0.220	0.067	4.042	0.305	0.074	1.203	0.027	0.017	0.165
67500	0.489	0.221	0.080	4.568	0.296	0.093	1.237	0.031	0.021	0.181
67501	0.437	0.216	0.066	4.525	0.312	0.085	1.217	0.021	0.025	0.173
67502	0.459	0.227	0.067	4.251	0.316	0.055	1.196	0.037	0.020	0.173
67503	0.511	0.225	0.084	4.379	0.332	0.066	1.244	0.028	0.023	0.183

第56表-2 亀田遺跡出土サヌカイト製石器・剥片の元素比分析結果

分析 番号	元 素 比										
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca	
67504	0.444	0.221	0.084	4.477	0.340	0.072	1.203	0.019	0.020	0.172	
67505	0.448	0.222	0.078	4.444	0.328	0.056	1.215	0.041	0.019	0.186	
67506	0.450	0.216	0.068	4.329	0.320	0.069	1.163	0.013	0.020	0.171	
67507	0.466	0.230	0.083	4.424	0.302	0.065	1.214	0.024	0.019	0.184	
67508	0.463	0.216	0.068	4.372	0.323	0.055	1.244	0.047	0.023	0.183	
67509	0.447	0.219	0.071	4.558	0.291	0.102	1.237	0.023	0.018	0.181	
67510	0.460	0.225	0.073	4.264	0.341	0.034	1.223	0.029	0.019	0.183	
67511	0.460	0.227	0.078	4.494	0.300	0.066	1.256	0.021	0.021	0.176	
67512	0.461	0.226	0.070	4.476	0.327	0.040	1.242	0.023	0.020	0.173	
67513	0.452	0.219	0.072	4.403	0.309	0.044	1.252	0.034	0.019	0.177	
67514	0.450	0.230	0.076	4.372	0.293	0.068	1.156	0.038	0.019	0.178	
67515	0.448	0.225	0.087	4.457	0.336	0.044	1.173	0.022	0.020	0.179	
67516	0.444	0.221	0.061	3.908	0.317	0.075	1.223	0.023	0.018	0.177	
67517	0.453	0.220	0.078	4.357	0.314	0.064	1.241	0.020	0.018	0.183	
67518	0.460	0.224	0.070	4.288	0.286	0.084	1.175	0.059	0.021	0.177	
67519	0.467	0.224	0.080	4.320	0.291	0.074	1.240	0.046	0.023	0.186	
67520	0.437	0.223	0.077	4.580	0.319	0.089	1.205	0.061	0.019	0.171	
67521	0.449	0.224	0.078	4.358	0.309	0.088	1.188	0.038	0.021	0.177	
67522	0.454	0.223	0.068	4.535	0.323	0.076	1.221	0.045	0.020	0.170	
67523	0.446	0.225	0.100	4.500	0.328	0.076	1.256	0.036	0.022	0.169	
67524	0.430	0.217	0.082	4.586	0.345	0.068	1.218	0.033	0.020	0.175	
67525	0.449	0.220	0.094	4.444	0.323	0.032	1.212	0.030	0.018	0.175	
67526	0.461	0.229	0.095	4.671	0.317	0.060	1.216	0.044	0.019	0.185	
67527	0.453	0.229	0.078	4.492	0.333	0.053	1.215	0.031	0.019	0.162	
67528	0.595	0.217	0.078	4.535	0.308	0.060	1.190	0.034	0.019	0.175	
67529	0.445	0.215	0.073	4.771	0.320	0.043	1.216	0.028	0.017	0.179	
67530	0.455	0.229	0.068	4.424	0.314	0.081	1.197	0.035	0.019	0.171	
67531	0.450	0.228	0.073	4.247	0.318	0.067	1.192	0.027	0.020	0.175	
67532	0.455	0.226	0.076	4.753	0.328	0.079	1.288	0.023	0.023	0.173	
67533	0.455	0.223	0.087	4.673	0.329	0.080	1.249	0.036	0.019	0.174	
67534	0.473	0.225	0.095	4.583	0.319	0.046	1.219	0.024	0.018	0.185	
67535	0.453	0.223	0.065	4.488	0.323	0.058	1.177	0.017	0.018	0.180	
67536	0.456	0.224	0.079	4.429	0.302	0.067	1.171	0.042	0.019	0.172	
67537	0.467	0.221	0.074	4.543	0.311	0.086	1.162	0.027	0.023	0.190	
67538	0.447	0.227	0.088	4.581	0.357	0.075	1.243	0.043	0.017	0.178	
67539	0.460	0.230	0.094	4.561	0.317	0.076	1.223	0.030	0.019	0.179	
67540	0.442	0.224	0.099	4.843	0.333	0.065	1.227	0.040	0.018	0.182	
67541	0.439	0.227	0.075	4.389	0.312	0.069	1.189	0.027	0.017	0.171	
67542	0.450	0.216	0.083	4.631	0.301	0.077	1.261	0.041	0.018	0.179	
67543	0.451	0.224	0.092	4.594	0.329	0.098	1.199	0.022	0.024	0.171	
67544	0.518	0.226	0.073	4.516	0.316	0.082	1.168	0.056	0.019	0.181	
67545	0.457	0.227	0.108	4.543	0.324	0.091	1.198	0.027	0.019	0.178	
67546	0.453	0.226	0.093	4.744	0.342	0.097	1.265	0.034	0.020	0.175	
67547	0.427	0.218	0.087	4.491	0.321	0.073	1.251	0.033	0.019	0.168	
67548	0.460	0.220	0.074	4.808	0.337	0.092	1.279	0.045	0.023	0.183	
67549	0.455	0.224	0.105	4.702	0.327	0.085	1.245	0.043	0.024	0.185	
67550	0.441	0.228	0.082	4.405	0.311	0.086	1.201	0.022	0.019	0.173	
67551	0.443	0.220	0.077	4.530	0.314	0.057	1.215	0.032	0.020	0.165	
67552	0.430	0.212	0.072	4.319	0.317	0.039	1.188	0.014	0.018	0.169	
67553	0.442	0.219	0.098	4.559	0.312	0.104	1.218	0.042	0.019	0.183	

第56表-3 亀田遺跡出土サヌカイト製石器・剥片の元素比分析結果

分析番号	元 素 比										
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca	
67554	0.448	0.225	0.097	4.810	0.312	0.062	1.200	0.020	0.019	0.174	
67555	0.467	0.222	0.070	4.596	0.309	0.066	1.225	0.029	0.020	0.181	
67556	0.445	0.222	0.082	4.503	0.310	0.075	1.151	0.036	0.018	0.170	
67557	0.440	0.222	0.078	4.798	0.314	0.075	1.214	0.034	0.021	0.173	
67558	0.443	0.223	0.090	4.576	0.342	0.078	1.248	0.029	0.023	0.178	
67559	0.446	0.222	0.088	4.525	0.320	0.039	1.265	0.023	0.018	0.169	
67560	0.473	0.225	0.072	4.574	0.335	0.069	1.207	0.027	0.021	0.183	
67561	0.437	0.219	0.082	4.461	0.305	0.102	1.161	0.030	0.022	0.168	
67562	0.455	0.228	0.088	4.535	0.305	0.061	1.250	0.041	0.018	0.185	
67563	0.459	0.223	0.081	4.581	0.310	0.047	1.272	0.029	0.019	0.178	
67564	0.454	0.234	0.086	4.401	0.321	0.071	1.142	0.029	0.021	0.172	
67565	0.409	0.215	0.095	4.828	0.292	0.100	1.131	0.030	0.018	0.164	
67566	0.444	0.231	0.080	4.772	0.305	0.071	1.276	0.052	0.019	0.173	
67567	0.446	0.220	0.094	4.646	0.305	0.075	1.264	0.030	0.017	0.176	
67568	0.451	0.228	0.069	4.315	0.297	0.064	1.182	0.038	0.021	0.172	
67569	0.457	0.229	0.085	4.524	0.288	0.079	1.225	0.041	0.023	0.178	
JG-1	1.314	0.297	0.060	2.711	0.723	0.196	0.721	0.033	0.034	0.438	

JG-1: 標準試料—Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192 (1974)

して、サヌカイト製では72個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上「記入」を省略しているのみで、実際に計算しているため、省略産地の可能性が非常に低いことを確認したという重要な意味を含んでいる。すなわち、二上山群の原石と判定された遺物について、香川県金山原石とか佐賀県多久産、北海道旭山の原石の可能性を考える必要がない結果で、高い確率で同定された産地のみの結果を第57表に記入した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越え大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。原産地(確率)の欄にマハラノビスの距離D2の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている0.1%の確率に達しなかった遺物でこのD2の値が原石群の中で最も小さなD2値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低い、その原産地と考えてほぼ間違いないと判断されたものである。亀田遺跡の分析したサヌカイト製遺物について、測定面の風化した部分に、圧縮空気によって約20mmφの面積でアルミナ粉末を吹きつけ風化層を除き新鮮面を出して測定を行なうが、今回、石器については、新鮮面を出す面積を約10mmφ以内にしたため、風化面が少し分析される遺物があり、推定確率が低くなるもの、また産地が特定できなかったものもある。分析した16個のサヌカイト製遺物の各産地別使用個数は二上山産原石が11個で、金山東群が2個、分析番号65892番の遺物は向出遺跡のNo.49番の遺物の組成と一致することが判明した。また、分析番号65883,65887番の遺物は第52表に調査した以外の原産地の可能性が推測され、産地不明の遺物の分析場所を変えながら30回以上測定し、遺物群を作り、他の

第57表 亀田遺跡出土のサヌカイト石器の原産地推定結果

分析番号	遺物番号	器種	地区	原産地(確率)	判定
65881		打製石鏃	I-C-3	二上山(0.4%)	二上山
65882	S36	打製石鏃	I-C-3	二上山(3%)	二上山
65883	S35	打製石鏃	I-C-3		
65884		使用直ある剥片	I-A-7	二上山(37%)	二上山
65885		加工直ある剥片	I-A	二上山(0.1%)	二上山
65886	S15	打製石鏃	I-C-2	二上山(0.1%)	二上山
65887	S8	打製石鏃	I-B		
65888		打製石鏃	I-C, D	二上山(4%)	二上山
65889		打製石鏃	I-C-3	二上山(23%)	二上山
65890	S10	打製石鏃	II-B-8	二上山(1%)	二上山
65891		石鏃	II-A-3	二上山(0.2%)	二上山
65892	S31	石鏃	II-D-1	向出No.49遺物群(4%)	向出No.49遺物群
65893		楔形石器	II-B-7	金山東(2%)	金山
65894		打製石鏃	II-C-3・4	二上山(1%)	二上山
65895		剥片	I-C-3	二上山(70%)	二上山
65896	S151	分割原石		金山東(7%)	金山

注意：近年産地分析を行うところが多くなりましたが、判定根拠が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各遺跡の産地分析の判定基準を一定にして、産地分析を行っています。判定基準の異なる研究方法（土器様式の基準も研究方法で異なるように）にも関わらず、似た産地名のために同じ結果のように思われるが、全く関係（相互チェックなし）ありません。本研究結果に連続させるには本研究法で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察する必要があります。

遺跡で同じ原材が使用されているか判定するが、この2個については、風化面の影響も否定できないために、原産地の判定は保留する。二上山群に同定される原石は、奈良県二上山産地以外に、和泉・岸和田原産地から6%の確率で採取することができ、亀田遺跡の11個の二上山群の原石のみを和泉・岸和田原産地から全て採取する確率は0.06を11乗する確率で、限りなく0%に近い確率になり、和泉・岸和田原産地から採取された原石でないと切り切れ、従って奈良県二上山原産地から伝播した原石と推測された。また、金山産と同定された分析番号65893番の遺物は、岩屋原産地から5%、和泉・岸和田原産地から1%の低い確率で、拳大の大きさの円礫で採取されるため、この1個のみで考察すると、確率的には、両者原産地でないと切り切れない。例えば10個の遺物を分析して、全て金山産地に同定され、かつ岩屋、和泉・岸和田産の諸群（第53表、54表）に同定される遺物がなければ、岩屋、和泉・岸和田原産地から全て採取する確率は限りなく0%に近い確率になり、両原産地から採取された原石でないと切り切れる。しかし、分析番号65896番（三片が300mm×350mm×350mmで厚さが40mm～30mm）の金山産と同定された大型剥片が、切り出せる原石、または、自然に割れた崖産片としても、金山東群の組成の原石が採取できる産地の中では、金山原産地でのみ確認されている大きさであることから、この大型剥片は金山原産地から伝播した原材と推測した。分析番号65892番の遺物の向出No.49遺物群と元素比組

成が一致するサヌカイト原石は、和歌山県梅原産地から採取した121個の中にはみられず、和泉・岸和田産地より採取した223個の中に一致しないが似た組成のものが2個見られた。また、淡路島中南部の西淡町西路山地区海岸の116個の原石中、西淡町大崩地区の32個中、緑町庄田産地で11個中にも見られなかった。淡路島北部産地では、淡路町岩屋原産地の原石113個中にも一致する原石はなく、東浦町中持地区の39個の原石の中には分析誤差を考慮すれば一致する可能性のものが2個見られた。本遺跡で向出No.49遺物群と一致する遺物が確認されたことから、大阪府向出遺跡、東大阪市植附遺跡など以外に広い範囲に使用されている原材であることが推測される。二上山産、金山産、に加えて各遺跡で使用されている遺物群の各群使用頻度を求め、その使用頻度を決定された考古学的背景は古代の社会事情が関係していると思われる。また、分析番号67470～67569番の100個は無作為に選択した分析結果では金山東群に同定された遺物は97個で、岩屋産の原材が1個使用され、高知県松ノ木遺跡で使用されている松ノ木遺物群と同じ組成の原材が2個使用されていた。また松ノ木遺物群は島根県平田遺跡で使用されていることは確認されている。作動的に選んだ分析番号65881～65896の結果には二上山産原材が多く無作為に選んだ遺物には金山東産が圧倒的に多いが、岩屋産と松ノ木遺物群が見つかり新たな交易の可能性があったことが判明した。これは当然ながら遺跡の正確な性格は多数の試料を分析しなければ明らかにできないことを示した結果でもある。また他の遺跡についても調査を広げて、向出No.49遺物群、松ノ木遺物群の使用遺跡が見つければ、本遺跡との関連の可能性も考慮され、使用遺跡間の交易とか交流関係を明らかにできる可能性が推測される。

参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信(1975), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学, 8:61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977), (1978), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)。(IV)。考古学と自然科学, 10:11-53-81:33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信(1983), 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16:59-89
- 4) 東村武信(1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9:77-90
- 5) 東村武信(1980), 考古学と物理化学。学生社

第3節 亀田遺跡から出土した木製品等の樹種

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

亀田遺跡は、弥生時代から平安時代に至る集落跡が検出され、分銅形土製品や銅剣型石剣等の遺物が出土している。また、低地部では、主に弥生時代～古墳時代の桶脚や木製品等の木質遺物も多数出土している。

本報告では、これらの木製品等の木質遺物について樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、出土した木製品など40点である。このうち、試料番号19と32はプレパラートが送付されてきた。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に第57表に記した。

2. 方法

木片については、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートと送付されてきたプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する（第19図～24図）。

3. 結果

樹種同定結果を第57表に示す。木製品は、針葉樹6種類（マツ属複雑管束亜属・モミ属・スギ・コウヤマキ・ヒノキ・イヌガヤ）と広葉樹10種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・ツブラジイ・スダジイ・ヤマグワ・ヤブツバキ・サカキ・サクラ属・ムクロジ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複雑管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は広いものと狭いものがある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞が晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.)

コウヤマキ科コウヤマキ属

第58表 樹種同定結果

試料番号	登録番号	遺物名	時代・時期	樹種
1	920175-001	槽・盤	弥生時代	コウヤマキ
2	920284-004	杭	古墳時代～中世	マツ属複雑管束亜属
3	920284-005	板目材	古墳時代～中世	スギ
4	920284-16.1	着け木	古墳時代～中世	マツ属複雑管束亜属
5	930065-001	舟形木製品	古墳時代	スタジイ
6	930065-002	材	古墳時代	ヒノキ
7	930065-009	曲物	古墳時代	ヒノキ
8	930065-010	板材	古墳時代	ヒノキ
9	930065-068	用途不明丸太材	古墳時代	ヤブツバキ
10	930065-076	橋脚	古墳時代	コナラ属コナラ亜属コナラ節
11	930065-M1	橋脚	古墳時代	マツ属複雑管束亜属
12	930065-M3	橋脚	古墳時代	マツ属複雑管束亜属
13	930065-M5	橋脚	古墳時代	マツ属複雑管束亜属
14	930065-M6	橋脚	古墳時代	マツ属複雑管束亜属
15	940150-003	挟り込み材	古墳時代	コナラ属アカガシ亜属
16	940150-008	板目材	弥生時代中期	モミ属
17	940150-009	板材(極目)	古墳時代	ヤマグワ
18	940150-125	皿未製品	弥生時代中期	ムクロジ
19	940150-126	高坏未製品	弥生時代中期	イヌガヤ
20	940150-128	丸太材	古墳時代	ツブラジイ
21	940150-131	鐏?	弥生時代中期	コナラ属アカガシ亜属
22	940150-149	鐏	古墳時代	コナラ属アカガシ亜属
23	940150-151	不明	古墳時代	コナラ属コナラ亜属コナラ節
24	940249-012	加工丸太挟り	古墳時代	スタジイ
25	940249-020	杭	古墳時代	コナラ属アカガシ亜属
26	940249-034	杭	古墳時代	コナラ属アカガシ亜属
27	940249-135	柱根	時期不明	クリ
28	940249-043	杭	古墳時代	サカキ
29	940249-056	柄	古墳時代	ヒノキ
30	940249-070	田下駄(大足)	古墳時代	ヒノキ
31	940249-079	橋脚	古墳時代	サクラ属
32	940249-084	鐏	古墳時代	コナラ属アカガシ亜属
33	940249-097	棒状木製品	古墳時代	スギ
34	940249-104	槽・盤	古墳時代	ヒノキ
35	940249-105	槽・盤	古墳時代	ムクロジ
36	940249-117	椅子	古墳時代	ヒノキ
37	940249-119	横杭	古墳時代	サカキ
38	940249-136	柱根	時期不明	マツ属複雑管束亜属
39	940249-140	柱根	時期不明	クリ
40	940249-87	建築材	古墳時代	モミ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1～5細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められ、接線方向に配列する。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch f.) イヌガヤ科イヌガヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。樹脂細胞が早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され、分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個。放射組織は単列、1～10細胞高。

仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で孔圏部は1~3列、孔圏外で急激~やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものとの複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものとの複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1~4列、孔圏外で急激~やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

・ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) ブナ科シイノキ属

環孔放射孔材で、孔圏部は4~5列、孔圏外で急激~やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものとの集合~複合放射組織とがある。

・スタジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔放射孔材で、孔圏部は6~7列、孔圏外で急激~やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poir.) クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は1~4列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性II~III型、1~6細胞幅、1~50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・ヤブツバキ (*Camellia japonica* L.) ツバキ科ツバキ属

散孔材で、年輪のはじめにやや大きい道管が2~3列配列した後、単独または2~3個が複合して漸減しながら散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性II~I型、1~3細胞幅、1~20細胞高で、時に上下に連結する。柔細胞の縁辺部には大型の結晶細胞が顕著に認められる。

・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.)

ツバキ科サカキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2~3個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1~20細胞高。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2~8個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1~4細胞幅、1~30細胞高。

・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属

第59表 時代別・用途別の種類構成

時代・時期・用途	樹種	種類												合計			
		複雑管束亜属	モミ属	スギ	コウヤマキ	ヒノキ	イヌガヤ	コナラ	アカガシ亜属	ツブラジイ	スダジイ	ヤマグワ	ヤブツバキ		サカキ	ムクロジ	サクラ属
弥生時代中期	板目材		1														1
	皿未製品															1	1
	鏝?							1									1
弥生時代	高坏未製品					1											1
	槽・盤				1												1
古墳時代	椅子				1												1
	板材				1						1						2
	柄				1												1
	挟り込み材							1									1
	加工丸太挟り									1							1
	橋脚	4						1							1		6
	杭							2						1			3
	鍬							1									1
	鏝							1									1
	建築材		1														1
	材					1											1
	槽・盤					1										1	2
	田下駄(大足)					1											1
	舟形木製品										1						1
	不明							1									1
	棒状木製品			1													1
	曲物					1											1
	丸太材									1							1
	用途不明丸太材												1				1
	横植													1			1
古墳時代~中世	板目材			1													1
	杭		1														1
時期不明	着け木		1														1
	柱根		1						2								3
合計		7	2	2	1	7	1	7	2	1	2	1	1	2	1	2	40

環孔材で孔間部は1~3列、孔間外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~3細胞幅、1~40細胞高。柔組織は周囲状~連合翼状、帯状およびターミナル状。

4. 考察

樹種同定を行った木質遺物は、橋脚や柱根などの建築部材、鍬や鏝などの木製品があり、その用途は多岐にわたる。各木製品の時期別・用途別の種類構成を第59表に示す。

容器では、皿や高坏の未製品、槽・盤などが出土している。弥生時代中期とされる皿未製品はムクロジ、高坏未製品はイヌガヤに同定された。また、槽・盤は、弥生時代中期がコウヤマキ、古墳時代がヒノキであった。皿や高坏については、これまでも多くの樹種同定報告があるが(鳥地・伊東, 1988; 伊東, 1990)、ムクロジやイヌガヤが認められた例はほとんどない。これまでの例を見ると、ケヤキ、ヤマグワなどの広葉樹材が多く利用されている。とくに、西日本では、大阪で多くの調査例があるが、ヤ

マグワが最も多く利用され、材質・木目等を意識した用材選択が指摘されている(林ほか, 1988)。今回の結果は、周辺植生などを反映した、地域的な用材選択の可能性がある。槽・盤については、玉津田中遺跡で出土した弥生時代終末期の盤がケヤキ、長越遺跡で出土した古墳時代の盤がスギとヒノキに同定された例がある(島地, 1996; 島地・伊東, 1988)。長越遺跡の結果は、今回の古墳時代の樹種同定結果とも一致している。この結果から、古墳時代では槽・盤にスギやヒノキが多く利用されていたことが推定される。一方、弥生時代については、遺跡によって種類が異なっており、地域によって用材選択が異なっていた可能性がある。しかし、調査事例が少ないため、詳細は不明である。

弥生時代の鐮?、古墳時代の鎌・鐮は全てアカガシ亜属であった。鎌・鐮類については、これまでの調査でも西日本を中心にアカガシ亜属が多数出土している(島地・伊東, 1988; 伊東, 1990)。また、県内で行われた調査でも、時代に問わずアカガシ亜属が圧倒的に多い(島地, 1996; 島地・林, 1990, 1991)。これは、アカガシ亜属の強度、靱性などの材質を考慮した用材選択と考えられる。ここで鐮?も鐮だとした場合、用材選択の点からは調和的な結果といえる。

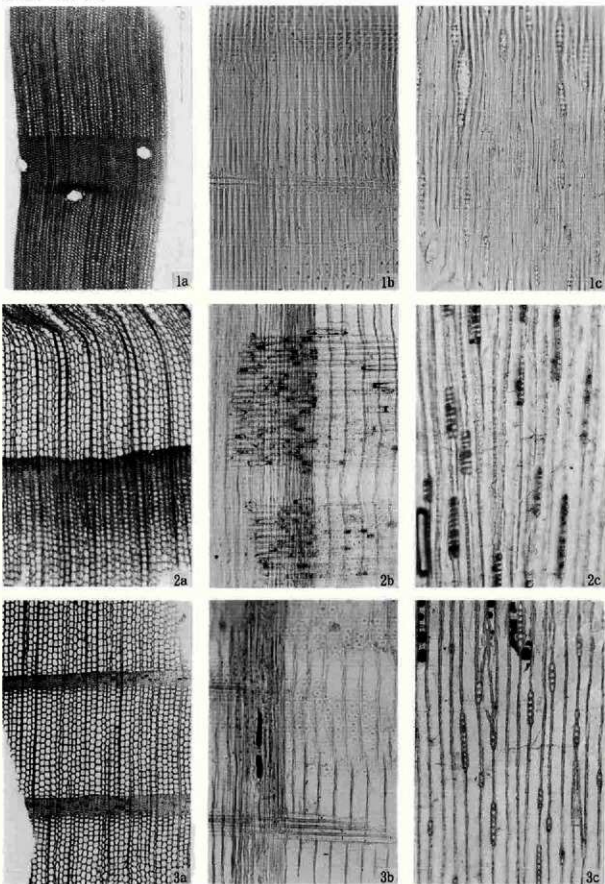
橋脚は、複雑管束亜属4点、コナラ節とサクラ属が各1点であった。このような橋脚については、岡山県百間川原尾島遺跡で弥生時代前期の橋脚列が出土している。その樹種同定結果(能城, 1995; パリノ・サーヴェイ株式会社, 1995)を見ると、アカガシ亜属、コナラ節、ヤブツバキなど、様々な種類が利用されているが、比較的強度の高い木材が多い。今回の結果を見ると、複雑管束亜属とアカガシ亜属は、共に強度に優れた材質を有し、複雑管束亜属では耐水性も高い。したがって、橋脚では強度や耐水性を考慮した用材選択が行われていたことが推定される。

その他の用途では、点数が少ないため、用材選択の傾向などは不明である。しかし、基本的にはこれまでの類別に一致しているものが多い。今後、周辺地域での類別を蓄積して、さらに詳細な用材選択を明らかにしたい。

引用文献

- 林 昭三・島地 謙・植田弥生(1988) 出土木製品の樹種(第4・5次)。「鬼鹿川遺跡調査概要Ⅰ 遺物編 木製品」, p.69-94, 財団法人 東大阪市文化財協会。
- 伊東隆夫(1990) 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ。木材研究・資料, p.91-189, 京都大学木材研究所。
- 能城修一(1995) 百間川原尾島遺跡から出土した弥生時代前期橋脚列の柱の樹種。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97「百間川原尾島遺跡4 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査X」, p.266-274, 岡山県文化財保護協会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1995) 百間川原尾島遺跡出土の木器樹種同定、種子同定。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97「百間川原尾島遺跡4 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査X」, p.290-301, 岡山県文化財保護協会。
- 島地 謙(1996) 玉津田中遺跡出土木製品の樹種。兵庫県文化財調査報告第135-6冊「神戸市西区 玉津田中遺跡 一第6分冊(総括編一)」, p.15-49, 兵庫県教育委員会。
- 島地 謙・林 昭三(1990) 山垣遺跡出土木製品の樹種。兵庫県文化財調査報告第75冊「山垣遺跡発掘調査報告書」, p.57-64, 兵庫県教育委員会。
- 島地 謙・林 昭三(1991) 七日市遺跡出土木製品の樹種。兵庫県文化財調査報告第72冊「七日市遺跡(Ⅰ) 一第3分冊一」, p.48-55, 兵庫県教育委員会。
- 島地 謙・伊東隆夫編(1988) 日本の遺跡出土木製品総覧。296p., 雄山閣。

第19回 木材 (1)



1. マツ属横管束東亞属 (試料番号2)

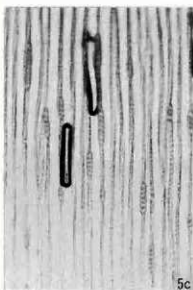
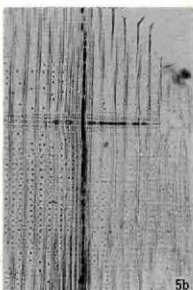
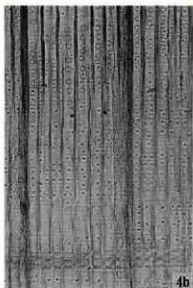
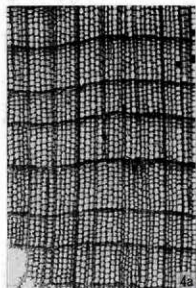
2. モミ属 (試料番号40)

3. スギ (試料番号3)

a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

第20図 木材(2)



4. コウヤマキ (試料番号1)

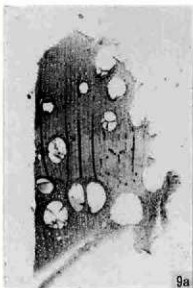
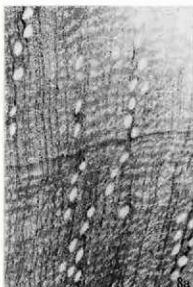
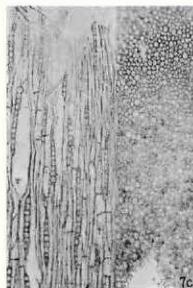
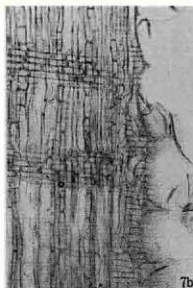
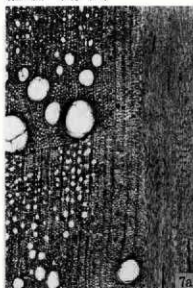
5. ヒノキ (試料番号8)

6. イヌガヤ (試料番号19)

a: 木口, b: 柱目, c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

第21図 木材 (3)



7. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (試料番号23)

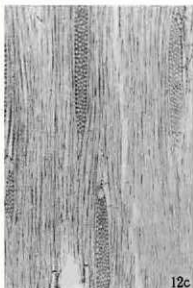
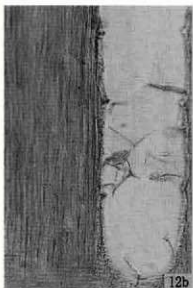
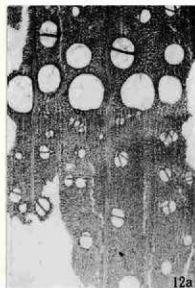
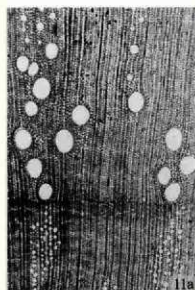
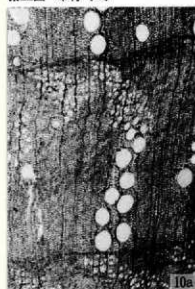
8. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号15)

9. クリ (試料番号39)

a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200 μm : a
200 μm : b, c

第22図 木材(4)



10. ツブラジイ (試料番号20)

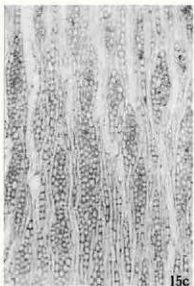
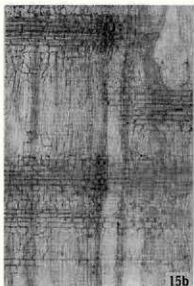
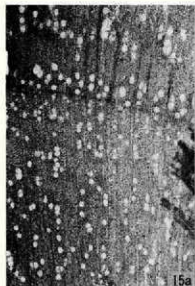
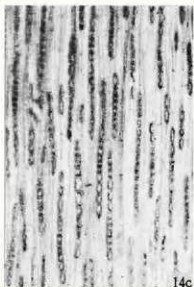
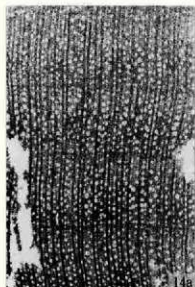
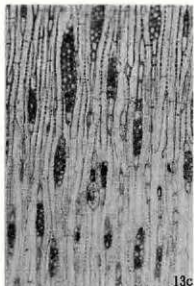
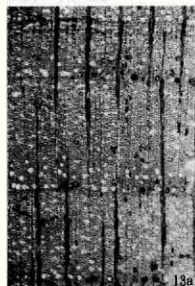
11. スダジイ (試料番号24)

12. ヤマグワ (試料番号17)

a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 μm : a
200 μm : b, c

第23図 木材 (5)



13. ヤブツバキ (試料番号9)

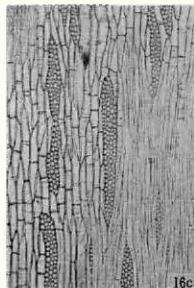
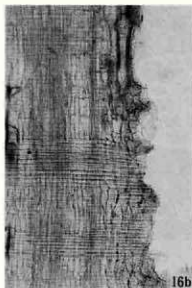
14. サカキ (試料番号37)

15. サクラ属 (試料番号31)

a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

第24図 木材(6)



16. ムクロジ (試料番号 18)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

第4節 亀田遺跡から出土した種実の同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

亀田遺跡(担保郡太子町所在)は、弥生時代を中心とする遺跡である。今回は、旧河道や流路から出土した種実遺体の種類を知り、植物利用に関する情報を得ることにある。

1. 試料

試料は、旧河道や流路から検出された種実遺体20点である。

2. 方法

双眼実体顕微鏡で観察し、同定可能な種実を分類・同定する(第25図)。

3. 結果

結果を第60表に示す。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

・マツ属複維管束亜属 (Pinus subgen. Diploxylon)

マツ科球果が検出された。円錐状卵型で、大きなもので4cm程度。柄はほとんどない。種鱗は長楕円状の矩形を呈し、先端部は肥厚する。先端部の肥厚は、不規則な4～5角形である。今回検出された個体は肥厚部が比較的薄く、その中央に短い突起があることからアカマツ (Pinus densiflora Sieb. et Zucc.) である可能性が高い。

・オニグルミ (Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana (Maxim.) Kitamura)

クルミ科

核が検出された。褐灰色で木質。非常に堅い。大きさは3.5cm程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが先端部は尖る。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。

・ナラガシワ (Quercus aliena Blume)

ブナ科コナラ属核斗が検出された。おわん型で直径2cm、高さ1cm程度。鱗片は互いに癒着して瓦状となる。肉厚で、鱗片の先は尖る。

・コナラ亜属 (Quercus subgen. Lepidobaranus sp.) ブナ科

果実が検出された。大きさは2cm程度。黒色で、表面は薄くてやや堅く、光沢がある。下端には、座についていた後が、褐色のざらつく部分としてのこる。花柱の下端部には輪状の模様のみられない。

・スモモ (Prunus salicina Lindl.)

バラ科サクラ属核 (内果皮) が検出された。黒褐色で偏平。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は浅いくぼみが不規則にみられる。

・モモ (Prunus pارسica Batsch) バラ科サクラ属

核 (内果皮) が検出された。褐色～黒褐色で大きさは3cm程度。核の形は楕円形でやや偏平である。基部は丸く大きな鱗点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

・カラスザンショウ属 (Fagala sp.) ミカン科

第60表 種実同定結果

番号	調査番号	地点名	遺標名	属名など	マン	オニ	コナ	ナラ	スモ	モモ	カラ	アカ	トチ	ムク	ブドウ	ツバ	エゴ	カナ	ヒョ	不明
					綱	グル	ラ	ガ	モ	モ	ザ	メ	ノ	ロ	ウ	キ	ノ	ム	ウ	
1	920284	II-D-3-4	流路内桧列						3	26										
2	930065	II-E-8-9	旧河道	第2層(下)						47										
3		II-D-3-4	旧河道	第2層						40										
4	940249	I-D-5	S R01																	多
5	940150	I-D-6	流路																	多
6	940150	I-D-6	植物遺体層	流路内落ち込み																多
7	940150	I-D-6	流路					1					4			5				
8	940249		旧河道2(西側)				11	20		2	1	3		3	2		9			11
9	930065	II-E-8-9	旧河道	第2層	3		5	14	7								8	1		
10	940249	I-D-7	旧河道	井場			13													
11	940150	I-D-4	流路8/9		1															

核が検出された。黒褐色。大きさは3mm程度。楕円形。表面には粗い亀甲状の網目模様のみられる。表面は、厚く堅い。

・アカメガシワ (*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.)

トウダイグサ科種子が検出された。大きさは4mm程度。黒色でY字型の小さな「へそ」があり、表面には小さな瘤状隆起を密布する。種皮は薄く硬い。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume.) トチノキ科

種子は効果で大きさは1cm程度。種皮は薄く硬い。表面には黒い艶のある部分と、黒褐色でざらつく部分とがある。果実も効果で、破片。大きさは4cm程度。黒褐色で3裂するたあの筋がある。肉厚で柔らかく、ざらつく。

・ムクロジ (*Sapindus Mukorossi* Gaerth) ムクロジ科ムクロジ属

種子の破片が検出された。黒色で、大きさは1cm程度。種皮は堅くて厚く、光沢がある。

・ツバキ (*Cammelia japonica* L.) ツバキ科ツバキ属

種子の破片が検出された。黒色で大きさは1cm程度。種皮は厚くてやや弾力がある。

・ブドウ属 (*Vitis* sp.) ブドウ科

種子が検出された。黒色。大きさは4mm程度。心臟形。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形に深くくぼんだ穴が存在する。背面には中央に「さじ」状の「へそ」があり、「へそ」回りはくぼんでいる。

・エゴノキ属 (*Styrax* sp.) エゴノキ科

核が検出された。灰黒色。側面観は楕円形、上面観は円形。長さ1cm程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に3本の浅い溝がある。核は厚く硬い。

・カナムグラ (*Humulus scandens* (Lour.) Merrill) クワ科カラハナソウ属

種子が検出された。黒色で凸レンズ状、大きさは3mm程度。側面の一端に心形の「へそ」が存在する。種皮は薄く光沢がありやや硬い。表面は細かく不規則な凹凸があり、ざらつく。

・ヒョウタン類 (*Lagenaria* sp.) ウリ科ユウガオ

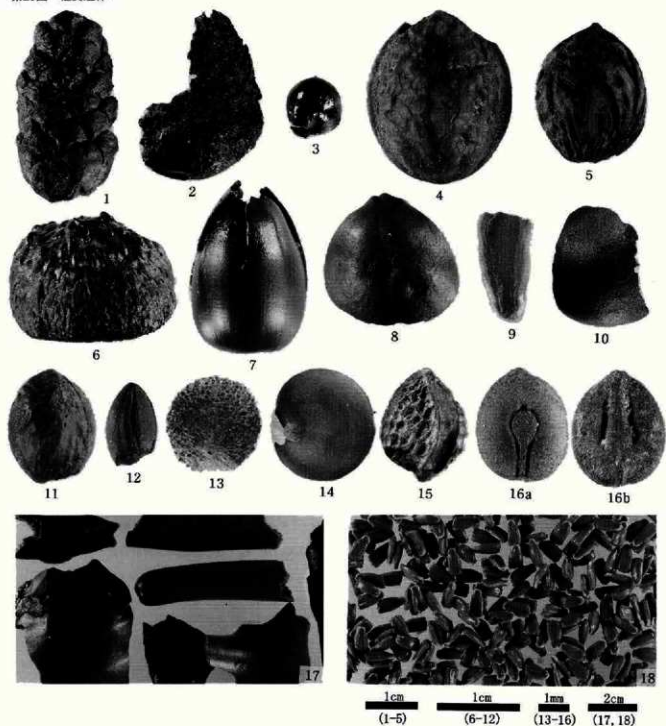
種子が検出された。大きさは1cm程度。褐色で肉厚。縁は肉厚で盛り上がっている。表面は厚くて柔らかく弾力があり、ざらつく。果皮は破片で検出される。褐色で肉厚。表面はやや光沢がある。内側には果肉が残っている。

4. 考察

検出された種実は木本類が多く、渡来植物をのぞけば周辺の山野に生育していたものが大部分であると思われる。これらの中には有用植物も多いが、食用のために破壊した痕跡がないことから、食用後の残液ではなく、自然に流路内に堆積した可能性が高い。周辺植生を反映する木本類は、マツ属（おそらくアカマツ）、オニグルミ、ナラガシワ、カラスザンショウ属、アカメガシワ、トチノキ、ムクロジ、ブドウ属、ツバキ、エゴノキ属がある。これらは、山中の森林よりも、河畔や、人里と森林の境界付近などの林縁部によくみられる種類であることから、そのような場所に生育していたものと考えられる。これらの種類の中には、オニグルミ、ナラガシワ、トチノキ、ブドウ属などの可食植物も多い。遺跡から至近距離にあったと考えられるこれらの植物は、当時食用として利用されていたと考えられる。またカナムグラは、開けた場所に先駆的に進入してくる植物で、開発された土地には普通に見られる種類である。このことから、遺跡内に生育していたものに由来すると思われる。栽培のため渡来した種類は、モモ、スモモ、ヒョウタン類がある。これらは、各地の遺跡で多数の報告例があるが、特に弥生時代以降急激に増加している。このことから、当時広く栽培され、利用されていたと考えられる。この中でも、ヒョウタン類は果肉や種子は果皮とともに出土していることから未製品である。ヒョウタン類を容器として利用するためには、水にさらして内容物（果肉や種子）を腐敗させて取り出す必要がある。流路内から検出されたこれらのヒョウタン類は、その過程にあったものかもしれない。また、果皮から推定される形状は、大きさが20cm程度のフラスコ状であると思われる。このような形状のものは、群馬県の新保遺跡などで出土しており、本邦各地の遺跡から出土するヒョウタン果実のなかでは、球形やギボシ形とともに一般的な形態であるとされている（藤下，1986）。

引用文献

藤下典之(1986) 新保遺跡より出土したウリ科植物の遺体。「新保遺跡1弥生・古墳時代大溝編一関越自動車道(新潟線) 地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集一本文編」, p - 62-70, 群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。



1. マツ属複維管束亜属 (試料番号6)
3. トチノキ (試料番号7)
5. モモ (試料番号3)
7. コナラ亜属 (試料番号8)
9. ヒョウタン類 (試料番号6)
11. スモモ (試料番号9)
13. アカメガシワ (試料番号8)
15. カラスザンショウ属 (試料番号8)
17. ヒョウタン類 (試料番号6)

2. トチノキ (試料番号7)
4. オニグルミ (試料番号11)
6. ナラガシワ (試料番号8)
8. ツバキ (試料番号7)
10. ムクロジ (試料番号8)
12. エゴノキ属 (試料番号9)
14. カナムグラ (試料番号9)
16. ブドウ属 (試料番号8)
18. ヒョウタン類種子

第5節 亀田遺跡から出土した銅製品の材質

第8章 第5節は
公開していません

第9章 まとめ

第1節 弥生時代の亀田遺跡—土器様相及び周辺集落との係わりについて—

1. はじめに

亀田遺跡は、発掘調査の結果、弥生時代から中世にかけての集落跡であることが分かった。

特に、弥生時代中期後半には竪穴住居等の遺構を調査区域で広く検出し、集落として大きく成長した事がうかがわれる。また、後期初頭には土器を廃棄した土坑等を検出しており、初頭までは集落が営まれるようだが、中期後半とは比較にならない程度遺構数の激減が見られ、集落としては明瞭さを欠いた状況を呈している。

ところで、西播磨域における弥生時代の集落遺跡の発掘事例を概観すると、中期中葉以降、後半を中心とする調査例が爆発的に増加する。しかし、逆に後期にはいと遺跡数は激減し、「集落が忽然と姿を消した。」ような妄想を抱く程である。それは、増加する発掘調査例にあって、以前より指摘されていたことであり、凡播磨弥生社会を特徴付ける一つの現象として、数々の検討もなされてきた。

本項では、中期後半から後期初頭にかけて営まれた亀田遺跡の弥生集落について、出土土器の時期及び様相を中心として、周辺弥生集落との関連について検討をおこなうことで、調査に携わったものとして、本遺跡に対する評価の方向性を示したい。

2. 出土土器の時期について

播磨における弥生社会の研究、特に土器の編年については、今里幾次氏の「播磨弥生式土器の動態」に代表されるが、現在でもその立点はその後の編年研究の基準となっている。今里氏の土器編年では、中期中葉から末葉の資料として、尾崎遺跡（熊野市）・川島遺跡（太子町）・八幡遺跡（姫路市）・八代深田遺跡（姫路市）などでの分析が行われた。結果、中期後半の土器については、「基本的には中部瀬戸内地域」の影響と畿内（特に摂津地域の）との影響を受けながら、「壺の口縁部内面に凸帯を巡らす」といった播磨独自の地域色を産出する事が知られており、多くの良好な調査例から、時期的・地域的特色を明示されている。

一方、後期の編年については、後期という時期が時間的に短く「良好な資料や遺跡例に恵まれない」こと、後期の土器の様相が「一般に無文化・粗製化・定型化することによって、変化の状態や、特徴の把握を看取するに困難」であったことから、細別が非常に困難であるとされている。特に、氏がまとめられた大中遺跡の土器の分析によって明らかとなった後期後半を除くと、中期末以降の空白を埋める後期前半の土器編年については、明確さを欠くものであった。

亀田遺跡で出土した弥生土器は、西播磨域の弥生集落の特徴的を表現するような状況であることは前述した通りである。本稿では、中期後半から後期初頭の出土土器について分類を試みた。分類に際して、遺構出土の土器の中でも非常に一括性の高いものについては、形式的に矛盾を生じない部分で同一区分内にまとめている。また、使用した資料については図化不可能なものであったり、図化したものでも形式的特徴に欠けるものなどは、その状況に従って除外したので、各時期によって器種構成にばらつきがあることをご容赦願いたい。

さて、本稿の分類における一つの指標となるものとしては、播磨域の弥生時代中期中葉から中期末、

そして後期への土器の様相として、凸帯文から凹線文への変化、更に無文化への移行といったことが挙げられる。特に、壺類は外面の凸帯文や櫛掻き文等の施文パターン、外内面の器面調整等、その変化が最も顕著に表れる器種と考えられる。そこで、壺類に限ってまとめると、下記の様に概ね5つの時期に分類が可能である。

- ・ 亀田1期：基本的には壺の頸部や口縁部に凸帯文を貼付する、凹線文出現以前である。短頸壺の口縁部下頸部外面につまみ出し指頭圧痕凸帯が貼付される。
- ・ 亀田2期：口縁部外端面凹線文（A種）を施す。広口壺の頸部外面には、凸帯文（断面三角形）を貼付し、指頭圧痕凸帯も残る。
- ・ 亀田3期：広口壺などの頸部の貼付け凸帯文が凹線文（B種）へと変わり、成立する。また、指頭圧痕凸帯は、少なくとも次段階までは残存するが、施文方法の変容等、退化が見られる。
- ・ 亀田4期：口縁部外端面や頸部の凹線文が退化し、掘凹線化するものも出現する。胴部外面に列点文を多用するものが目立ち、無文化していく。胴部内面は状半部にまでヘラケズリ調整を施すようになる。中・小型器種も増えるが、摂津系大型広口壺はこの時期まで残存する。
- ・ 亀田5期：広口壺は大型のものが見えなくなり、直口壺などに凹線文が見られなくなる。更に、小型化・無文化が進む。

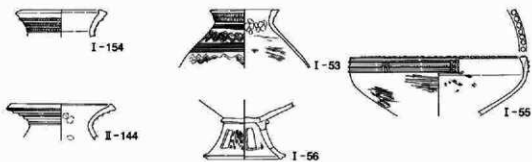
上記を踏まえて、各器種について分類を行った（第28図～第31図）。以下、各期の解説を加える。また、ここでは、亀田1期・2期を中期中葉、亀田3期を中期後葉、亀田4期を中期末葉、そして亀田5期を後期初頭～前半とする。

亀田1期 壺類では、短頸壺（I-154・I-53・II-144）が挙げられる。鉢では、口縁部が大きく内灣して、外面と外端面で凸帯文及び（棒状・円形）浮文で施文する（I-55）。台部（I-56）は、長方形透かしを施しており、瀬戸内地方の影響をうかがわせる。なお、I-53・55・56は土坑（I地点SK411）出土の極めて一括性の高いものである。

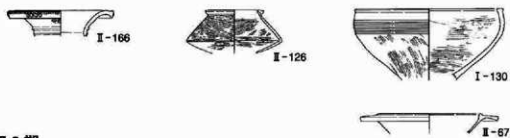
亀田2期 壺類では、広口壺（II-166）で、強く窄まる頸部から口縁部へと大きく外反する。頸部外面には凸帯文を有する。台（脚）付き無頸壺（II-126）は、算盤玉状を呈し、強い屈曲を持つ口縁部を有するものである。鉢（I-130）は、口縁部外面が凹線文へと移行している。高杯（II-67）は、水平口縁の端部がやや下方に肥厚するものである。

亀田3期 壺類では、広口壺（I-32・I-47・I-69・I-96・I-97・II-4・II-155）を挙げている。広口壺の器形は、胴部中に強い張りを持ち、口縁部で強く窄まるもの（I-69・I-96・I-97）、球形を成すもの（I-47）と分類される。口縁部は、やや開き気味に垂下するか、若しくは肥厚して、凹線文を施すものが主流となるが、羽状列点文を施すもの（II-155）や、直に垂下して所謂鋳形をなすもの（I-32）がある。直口壺については、開き気味に立ち上がる口縁部に凹線文を巡らす大型器種（II-195）、所謂水差し形土器で胴部中に強い張りを持ち、口縁部に凹線文を巡らす（I-3）と、口縁部に凹線文を持たず球形をなす（I-60）が挙げられる。また、屈曲して直口気味に立ち上がる受口壺（I-73）は、前時期から出現するものであり、頸部外面に指頭圧痕凸帯を巡らすなど、古い傾向を持つが、口縁部の屈曲の甘さから本時期にまとめた。

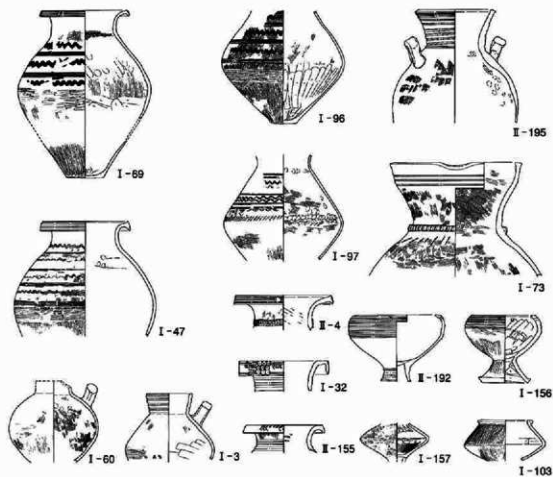
台（脚）付き無頸壺（I-156・II-192）は、内灣し鉢状を呈する有蓋のものと、算盤玉状の器形をな



亀田1期

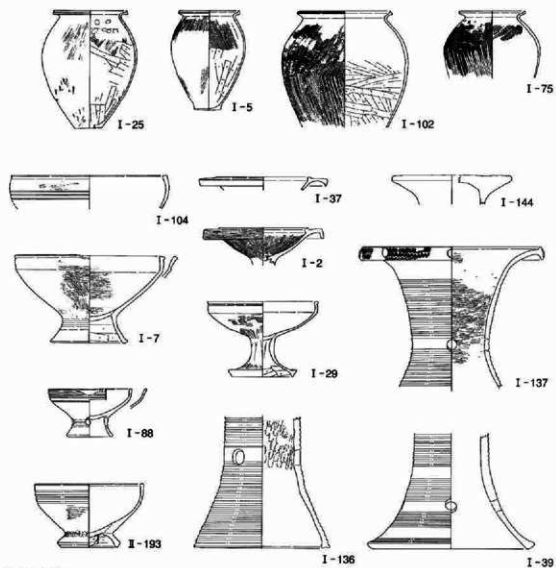


亀田2期

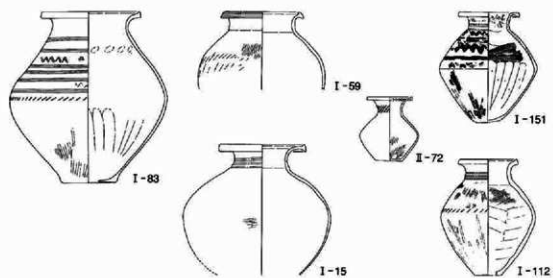


亀田3期

第28図 亀田遺跡出土土器の分類①



亀田3期



亀田4期

第29回 亀田遺跡出土土器の分類②

すもの (I-103・I-157) があり、前時期を継承するものと考えられる。

甕では、(I-5・I-25・I-75・I-102) を挙げている。全体の傾向としては、「く」字状口縁部の口縁端部が上下方に若干肥厚して面をなす事、胴部内面の底部から中位にかけて、ヘラケズリ及び強いイタナデで仕上げられる事などがうかがえる。器形のタイプは胴部最大径を中位にもち、比較的スマートなもの (I-5・I-25) と、胴部上位に最大径を持つ肩張りのもの (I-75・I-102) があり、後者は瀬戸内地方の土器の影響で出現したものと考えられる。

鉢は、台付きのものを含めて (I-7・I-88・I-104・II-193) をあげている。内彎する口縁部を持つ (I-104) は、前時期から継続するものである。台付き鉢 (I-7・I-88・II-193) は、口縁部が屈曲して直口気味に立ち上がるものがあり、台部の形態も裾部が開くものと内彎気味に踏ん張るものがある。

高杯では、水平口縁 (I-2・I-37) の内、(I-2) は口縁端部がやや肥厚し、前時期を継続するものである。また、受け口状に屈曲する口縁部を持つ (I-29) は、本時期から見られるものであろう。

器台は、鼓形の大型器種 (I-39・I-136・I-137) 等の形態については、胴部がしまって受部及び裾部へ外反する形態 (I-137) と、胴部が筒状を呈する形態 (I-39・I-136) があり、裾部にあっては、鉢の台部と同様、外反するものと内彎して踏ん張るものに分かれる。

台形土器 (I-144) は、低い残存率で全体のプロポーショナルが不明確だが便宜上この時期にまとめることとした。

亀田4期 甕の胴部に多用されてきた櫛描き波状文と直線文は、無文化傾向に呼応して退化し、施文のパリエーションに列点文の多用が目立つようになる。

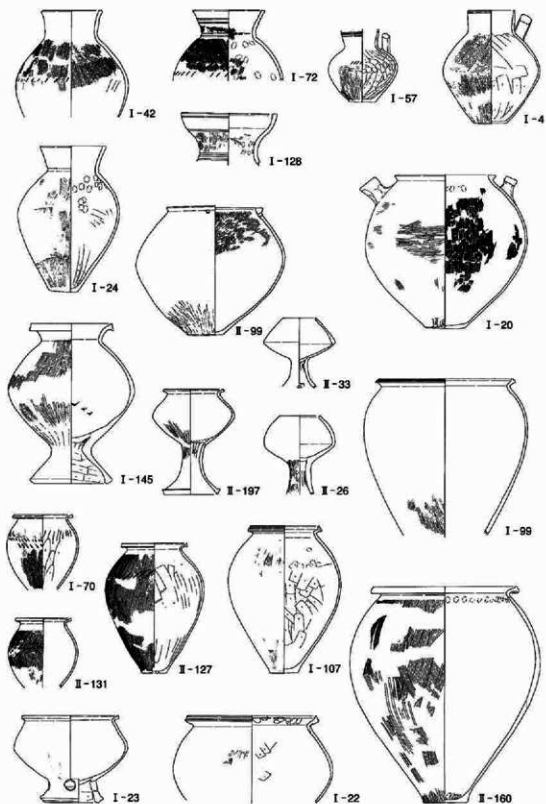
広口壺では、(I-15・I-59・I-83・I-112・I-151・II-72) をあげている。I-83 は、所謂摂津系の広口壺の形態をもつものであるが、上方につまみ出して面をなす口縁端部、また胴部上半部外面の退化した櫛描き文と中位に施した列点文等は、明らかに新しい傾向を持つ。また大型器種は、垂下口縁を持つもの (I-15・I-59) では、大きく外反するもの (I-15) と、直口気味に短く立ち上がる頸部をもつもの (I-59) に分かれる。中型器種の中では、大きく外反しながら上端に面をなす口縁部を持つ摂津色の強いもの (I-151) と、口縁部が屈曲気味に短く外反するもの (I-112) とに分かれ、後者は瀬戸内地方の影響のものとする。小型器種 (II-72) は、摂津系広口壺の系統を引くものである。

直口壺 (I-24・I-42・I-72) は、無文化が進んだ状態で、頸部及び口縁部外面の凹線文も退化し、沈線化する。また、把手付き直口壺 (所謂水差し形土器) についても、凹線文等の退化がうかがえる。

受口壺 (I-128) は、前時期に比して屈曲部の稜があまく、凹線文も沈線化している。

大型の無頸壺 (I-20・II-99) は、肩張りの僅かに算盤玉状を呈するものだが、特に後者は把手と注口を持つものである。白 (脚) 付き無頸壺では、前時期の系統を引く (II-26・II-33) と、上部が広口壺をなすもの (I-145) や、鉢状をなすもの (II-197) なすもの等、多様である。

甕は、大型器種 (I-99・II-160)、中型器種 (I-107・II-127)、小型器種 (I-70・II-131) をあげている。甕の器形は、全般的に胴部最大径を上位に持つ肩張りのものと、胴部最大径を中位に持つものがあり、比較的スマートである。胴部内面調整は上半部にまでケズリを施すものがあり、胴部外面調整では、全体をハケメで仕上げるものと、下半部をヘラミガキで仕上げるものが見られる。胴部内面のケズリ及び胴部外面全体のハケメは、器面調整上に見られる吉備地方の影響と考えられる。また、口縁端部には、肥厚あるいは若干つまみ上げた端面上に、複凹線文を巡らすものもあるが、沈線や無文のもの



亀田 4 期

第30図 亀田遺跡出土土器の分類③

のが多い。

鉢は、前時期と同様に端部が肥厚して上端に面をなす受け口状のものも継続するが、無頸壺あるいは甕と同様の「く」の字状口縁を持つもの（I-22・I-23）が見られる。器形は、胴部最大径を中位に持つ緩い算盤玉状を呈しており、台付きのものが多くようである。

高杯は、大型器種が前時期を継続して、水平口縁のもの（II-42・II-76）と、受け口状をなすもの（I-28・II-198）が見られ、受け口状のものは、屈曲部にシャープさを欠くものである。また、この段階では高杯の小型器種（I-26）が出現している。

器台は、胴部に凹線文を巡らした大型の鼓形器台が、無文化及び小型化の傾向にあり、次時期では大型のものが消滅している。ここでは、その過渡的状況にあるものとして、便宜的に（I-150）をあげている。

本時期の設定に当たっては、焼失住居（SH20 第2分冊図版14～16）出土の非常に一括性の高い資料が指標となっている（I-15・I-20・I-22・I-23・I-24・I-26・I-28）。

亀田5期 本時期は、出土数が激減しており、出土状況も土坑を除いては、流路などやや一括性に欠ける資料である。ただ、この段階を境にして、これに継続する資料が見られないため、亀田の弥生集落の終焉期としての設定が必要と考えた。

器種全体の傾向は、前時期に比して無文化が進んでいる状況がうかがえる。

壺は、広口壺・直口壺・短頸壺がある。広口壺（I-41）は、内傾気味に直口する頸部から大きく外反する口縁部を呈する。口縁端部には擬凹線文も施されておらず、円形浮文のみである。直口壺（II-25）は、口縁端部の肥厚が見られず、凹線文も沈線化している。短頸壺（I-152）は、僅かに外反する口縁部を持ち、胴部内面は縦方向のヘラケズリで仕上げている。

甕（II-43）は、やや丸味を持つ小型のもので、胴部上半には列点文を施すが、非常に粗い施文である。

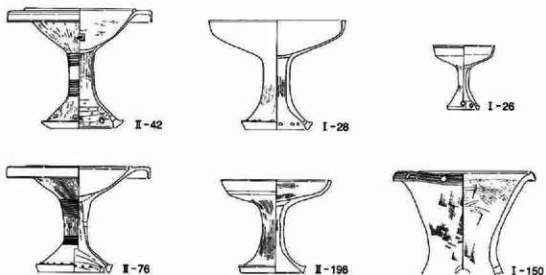
高杯は、大型器種の中で水平口縁を呈するものが消え、受け口状の器種のみになる。大型器種では、屈曲後立ち上がる外面上に擬凹線文を巡らす（II-22・II-20）があり、口縁上端部が外側へ大きく肥厚して面をなし、擬凹線文を巡らすもの（II-169）、大きく内側へ屈曲するもの（II-27）がある。また、小型器種では、長脚の（I-58・II-75）や底脚の（II-49）があり、やや碗状をなすものが現れる。

本時期に見られる高杯には、形態に多くのバリエーションが見え、（II-27）や（II-169）は備前などの吉備地方の土器の搬入、及びその影響を強く受けたものである。

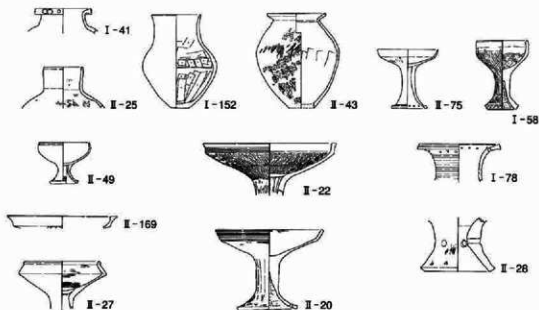
器台は、小型化・無文化が進みむ中で、退化した凹線文を巡らす（I-78）、鼓形を呈するものの器壁が厚く、施文のない（II-28）がある。

ここで、本時期の高杯（II-75）は、前時期の高杯（II-76）と同一土坑（II地点 SK03）内の出土である。一括土器の理念の一端を考えれば、同時期内にまとめるべきものとするが、廃棄に至るまでの時間差を考慮して敢えて分離した。一括廃棄遺構の出土遺物が、同時期の範疇であっても、必ずしも同型式ではないことを前提とした所以である。

以上、出土した弥生中期から後期までの土器について分類を試みた。では、亀田遺跡の弥生集落が営まれた時期の周辺地域の状況はどうであったのか。次項では、亀田弥生集落の発生から衰退に至る過程において、周辺集落の動向とその係わりについて述べる。



亀田4期



亀田5期

第31図 亀田遺跡出土土器の分類④

3. 亀田遺跡を取り巻く遺跡の状況について

前項で述べた出土土器の状況からも、弥生時代における亀田遺跡が中期後半に盛行し、後期初頭に衰退する事が理解出来る。また、亀田遺跡を取り巻く弥生集落の状況についても、ほぼ同様の展開を見せることも前述した。しかし、そこで展開していた集落が、全て同様のあり方であるかは、その立地や派生（母村から分村などへ集落が拡散していく状況）等により、若干異なる展開を示すものと考えられる。

そこで、中期後半の爆発的な集落のバックボーンとなる前期集落及び前期より継続する集落と、中期以降の集落状況を示す後期集落及び後期に継続する集落の内代表的なものを抽出した（第32図）。ここで

抽出しているのは、「揖保川を主流域となす集落」、「大津茂川を主流域となす集落」、「夢前川を主流域となす集落」である。それでは、亀田遺跡を取り巻く3流域の集落について見ていくことにしよう。

まず、揖保川流域では、揖保川本流域を中心とする右岸及び左岸に集落が成立する。ここでの弥生前期の遺跡は、揖保川上流域で分岐を持つ支流の林田川との間に形成された低位段丘上の門前遺跡が知られるが、集落として歴史的に拡大していくのは中期中葉以降である。特に、揖保川右岸の揖西地域では、支流である小犬丸川・古子川・中垣内川の3本の小河川が形成する平野上とその周辺の段丘上に集落が濃密に点在している。その中において、地域の中心付近に広がる中垣内川周辺の微高地上に形成された佐江遺跡は、隣接する清水遺跡と一体化した形で、現在のところこの地域において最も大きな集落と認識される他、拠点的な集落と位置づけられている。

また、その佐江・清水遺跡を中心として近隣微高地上及び段丘上に点在する同時期の集落（尾崎遺跡・竹万遺跡・小神南遺跡及び能子向イ山遺跡など）は、立地等の他、それぞれの独自性を以て展開しながら、極めて有機的な関係を持つ一体の集落群を形成していると言える。

その他、揖保川の支流である林田川中流域では、奥まった段丘上に寄井遺跡がある。寄井遺跡は、近隣の横内遺跡を拠点とする集落から分派したものと考えられるが、周囲を山塊で囲まれ、北面する集落の立地状況から、揖保川本流域右岸地域との関係性は薄いものと考えられる。

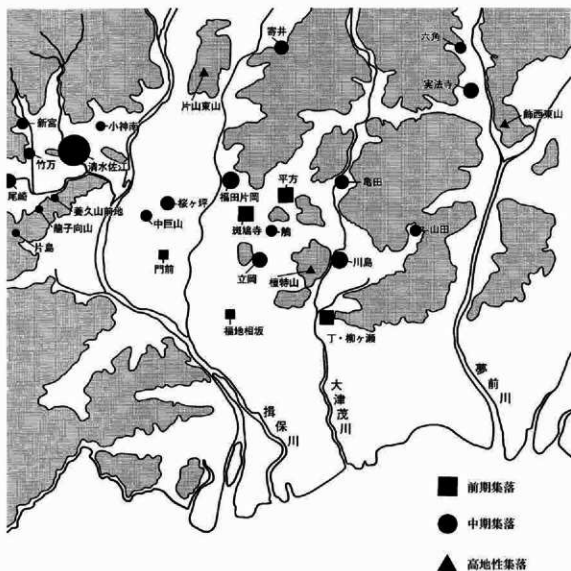
次に、大津茂川流域では、流域において段丘に隣接する部分で集落が点在している。ここでの弥生前期の遺跡としては、丁・柳ヶ瀬遺跡が知られ、中期前半まで継続する。中期の遺跡では、そのやや上流において川島川床遺跡・川島遺跡が中期中葉から成立しており、丁・柳ヶ瀬からの分枝であろうことはほぼ間違いない。流域における拠点集落と位置付けられよう。そして、川島遺跡の更に上流には亀田遺跡がある。亀田遺跡は東側に広がる山塊の谷地形から延びる扇状地上に形成された集落跡であり、大小の山塊に挟まれた、狭い小平野内に位置している。亀田遺跡は、川島遺跡と同流域にあって、ほぼ同一時期に営まれた集落であるが、流域内における集落分派は考えにくい状況である。

ここで、これまでの2河川の流域に属さない不明確な一帯がある。東側を林田川、西側を大津茂川に挟まれた微高地上に形成された集落群である。前期の遺跡としては、斑鳩寺遺跡及び平方遺跡、そして福地相坂遺跡があげられる。これらの遺跡は何れも中期後半まで継続する集落で、恐らく福田片岡遺跡や船遺跡、立岡遺跡などの集落へと分派していくと考えられるが、檜特山や立岡山等の独立丘陵を含めて、北側を山塊に囲まれた立地条件は、揖保川流域の氾濫の影響の状間に置かれた小平野における独自展開を助長したものと考えられる。また、大津茂川流域の集落でも非常に奥まった所に位置する亀田遺跡は、これらの集落からの分枝と考える向きが有力である。

最後に夢前川流域では、前述の様に上流域の状況は不明瞭であり、前期の遺跡についても母村として認識される大規模な集落は明確でない。また、中期の遺跡としては、上流域において実法寺遺跡及び六角遺跡があげられるが、両遺跡共に周囲を丘陵に挟まれ、非常に奥まった位置に形成されており、立地上やや孤立した感がある。

以上、各河川流域単位での遺跡について概観した。確かに、本流及びその支流にいたる河川は、集落の形成上の主要な条件となり、河川流域の程近くに点在している集落が多く見られる。しかし、3流域の遺跡の状況が、必ずしも同一の様相を呈していないことは、先に述べた流域の集落状況からも想定できる。

例えば、揖保川以西の清水・佐江遺跡を中心とする遺跡群は、その支流の微高地を中心として、周



第32図 大津曲川流域及び周辺河川流域の前・中期集落

圏を環状に巡る尾根上に小集落が点在し、非常に密度の高い一共同体を形成しているが、搦保川以東は非常に希薄である（ただし、搦保川以東の状況は、搦保川の氾濫などの影響が大きく、時期的に集落立地上の制限があった事が考えられる。また、ここでの前期集落が派生して、搦保川以西の中期後半集落の母体となったものと考えられる。また、斑鳩寺遺跡や平方遺跡などの前期から発生した集落等は、搦保川・大津茂川の両流域とは比較的隔絶した状況であり、北側丘陵と南側の独立丘陵に挟まれた平野内の微高地上にあって、独立した母集落が形成される条件を持っていたと想定される。

この様に、亀田遺跡を含めた周辺集落の立地は、各河川流域に形成された微高地上にポイントをおきながら、その集落及び集落群（共同体）は、大きな山塊や丘陵、及び平野内に点在する独立丘陵などの単位で構成されたと考えられ、流域集落全体が非常に多様な立地状況であったものと想定できる。

ところで、これまで述べてきた集落形態とは全く異質なものとして高地性集落が存在する。これは、丘陵独立丘陵の頂上部などの非常に高い所に形成される集落で、本地域での代表的な遺跡では、片山東山遺跡（竜野市）・檀特山遺跡（太子町）・飾西東山遺跡（姫路市）などがあげられる。これらの集落の内、片山東山遺跡と檀特山遺跡は、瀬戸内海の家島群島にある大山遺跡を眺望可能な位置にあり、平

野内においても周辺集落を見渡す（或いは周辺集落から見える）場所に立地しており、飾西東山遺跡は夢前川本流と支流との分岐点に張り出さす丘陵上という流域の平野において要衝を占める所に立地している。その性格については、「軍事的緊張に際して見張り台や築壇台を目的としたもの」と言う認識が大勢であるが、何れにせよ、恒久的な居住域として営まれたとは考え難い非日常的小集落である。岸本道昭氏は、この様な特殊な集落が「その散や立地から考えると単一の農業共同体が営んだものとは思えず、複数あるいは代表としての共同体から派遣される形で形成された集落であろう。」とされたが、それは母村集落からの派生あるいは分村を重ねて、爆発的に拡散した中期集落が、各々独立した集落を形成しながら、農業共同体を基盤とする紐帯を以て有横的な関係を保持していた事を示すものであろう。そして、これら中期の高地性集落は、後期にはいりそれまで強力な農業共同体を以て展開していた中期集落が姿を消すと、共同体の紐帯が崩壊し、それに呼応するように消滅してしまうのである。

4. まとめ

以上、亀田遺跡出土の弥生土器の時期的変遷と、周辺流域集落の状況について概観した。では、亀田遺跡の弥生集落がどのような集落であったか、本項でまとめてみる。

まず、その土器様相からは、集落が成立する中期中葉（亀田1期・2期）からピークをむかえる中期後葉・末葉（亀田3期・4期）は、畿内の要素が強うかがわれる。逆に、集落が衰退する後期初頭から前半（亀田5期）の土器については、瀬戸内の要素を持った土器が若干見られるが、明確な搬入土器は見受けられない。また、同時期の出土土器は、土坑内或いは流路内からの出土が殆どだが、その内土坑（Ⅱ地点 SK03）では、一括廃棄された土器群中に明らかに中期の土器が混在している。これは、後期初頭に移行していく段階にあって、なお前時期のものを継続使用していた結果であり、中期から後期への転換期において、他地域からの搬入文物に対してより積極的に触手をのばす程の集落ではなかったであろう。

次に、集落の位置づけとしては、前述の土器様相からも看取されるように、集落が成立した段階から畿内の色彩の濃い状況を示しており、同流域の下流にある川島遺跡などの出土土器の状況を見ると、瀬戸内地方の影響を強く持つものが多く含まれる。このことから、土器様相が同流域集落にあっても、必ずしも同様の影響を受けない事がうかがえる。また、集落が後期初頭で急激に縮小していく状況は、同時期に成立した周辺中期集落と同様の傾向にあるが、前述の様に集落の終焉時期に際して中期土器が廃棄されていることは、派生源である母村集落や他地域の中核集落などの集落展開から取り残された状況にあったと考えられる。つまり、亀田遺跡の弥生集落は、中期中葉に母村と考えられる平方遺跡周辺の集落から分派後、中期後半に急激に拡大していくが、決して一地域の中核を相う集落ではなく、共同体内における一派生集落として他地域からの諸影響をやや間接的に受け、母村集落の縮小・解体に伴って急激に縮小していったものと考えられる。

ただし、亀田遺跡がこの地に集落を成立させた意義は大きく、大津茂川の流域にあって、その周辺集落を見渡せる北端の一角にあり、また大津茂川をさかのぼって北方へ抜ける交通上及び流通上の要衝をおさえる立地を示している。それは、他の出土遺物中に畿内のな武器形祭器としての銅劍型磨製石剣と、瀬戸内地方の祭祀遺物としての分銅形土製品が見られる事からも、その片鱗をうかがわせるものと言えよう。そして、その様な意味では、むしろ夢前川上流域の六角遺跡や実法寺遺跡などの流通上の強い関係があったものとも想定できるのである。

以上、亀田遺跡の調査結果からその集落像の復元を試みたが、資料精査の不足や実証性にかかる理論など、筆者の無力さを露呈させる結果となった事は、誠に恥ずかしい限りである。しかし、この小稿を記した事が調査担当者としての一責務を果たしたと考えたい。

最後に本稿の執筆に際しては多くの方々からの協力を頂いた。敢えて記名は控えるが、この場を借りて謝意を表するものである。

参考文献

- 今里幾次 「播磨弥生式土器の動態 (一) (二)」『考古学研究』第15巻第4号・第16号第1号
考古学研究会 1969
- 山本三郎 「播磨中期弥生式土器の実態」『川島・立園遺跡』太子町教育委員会 1971
- 吉田 昇 「遺物」『播磨八幡遺跡』八幡遺跡調査会 1974
- 岸本道昭 「断絶の中期と後期」『大阪府埋蔵文化財協会 研究紀要3—設立10周年記念論集—』
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会 1995
- 松本正信 「第二章 第二節 鉄器・青銅器・イネの登場する時代」『太子町史 第一巻』
太子町史編集専門委員会 1996

第2節 亀田遺跡—古墳時代まとめ

古墳時代の遺物は土器（須恵器・土師器）が大半を占め、金属器・木器・玉類は極めて少量である。それぞれの地区で状況に違いが見られ、Ⅰ地区では自然流路・旧河道を中心に古墳時代前半の土師器がまとまった出土状況を示す一方、Ⅱ地区では竪穴住居址・掘立柱建物から古墳時代後期の須恵器の出土が目立つ。

これら古墳時代の土器は他の時期と比較して少なく、時間的な変遷を追跡するに十分とは言いがたい。比較的良好な状況であった、Ⅰ地区の自然流路（SD1003）から出土する土師器群と、Ⅱ地区の住居址から出土する須恵器について、状況の整理と若干の検討を加えて、まとめとする。

1. 古墳時代の出土遺物—土師器

古墳時代の土師器は、Ⅰ地区の自然流路・旧河道からまとまって出土している。中心は布留式土器併行期のもだが、個々の土器が示す年代感は、古墳時代初頭から6世紀代に至るまで幅広い。堆積した時期が長期にわたっているに加えて、顕著に摩滅の認められる遺物も目立つことから、周辺より流入した可能性を考慮しておく必要があろう。しかし、自然流路・旧河道から出土した土器のうち、SD1003東層で検出した土師器の一群は、ほぼ原位置を保った状態であった。これらの遺物について検討を加えて、年代の位置付けを試みる。

SD1003の東層では、12mの範囲にまとまって土器群が検出された。最上層の黒色粘土に続いて堆積する細～極細砂層に含まれ、土器群の上面を覆う堆積は粒径が粗く混入品の須恵器などが見られたが、土器群の検出面は比較的安定した状況であった。遺物は流路の影響などで移動した形跡もなく、ほぼ置かれた際の状況を保っている。土師器の壺・甕・高杯・ミニチュア土器で構成され、小規模な器種を中心に高い完形率を示していることから、土坑状の落ちこみに一括して投棄された状況が想定される。なお遺物の性格については、土器内および付近の土壌から滑石製白玉が10個（T3～T12）出土していること、穿孔された土器や祭祀用の形態であるミニチュア土器が認められることなどから、なんらかの祭祀行為と関連が考えられる。

以下、構成する土器を器種ごとに観察し、特徴を瞥見する。なお、細片化して図化・観察ができなかった土器片にも、ミニチュア土器など同じ意図で用いられたものが含まれている。検討を加えた土器がセット関係のすべてを構成するものでないことを、あらかじめ明記しておきたい。

a. 壺（Ⅰ地区175・176・177・179・180・181・183・184・188）

ほとんどが完形で出土した。大型品は含まれず、中型品が3個あるほかは小型丸底壺の範疇に含まれる小型品である。

中型品は、球形の体部をもつ広口の直口壺（Ⅰ-183・Ⅰ-184）と、口縁に刻みを設けた平底の広口壺（Ⅰ-188）で構成される。いずれも口縁は短めで、外反は少ない。

小型品は、扁球形の体部と大きく開く口縁を持つ。口縁の形態には多少の違いがあり、本報告ではⅠ-175・Ⅰ-176・Ⅰ-177・Ⅰ-179を直口壺、Ⅰ-182を広口壺、Ⅰ-180・Ⅰ-181を短頸壺として分類したが、いずれも小型丸底壺の系譜に連なると考えられる。頸～肩部の内外面に粘土組の接合痕跡をとどめ、底～体部の下半・体部の上半・頸部～口縁部を分割して整形し接合しているのが目立つ。

形態は丸底で球形の体部を有するなど、古墳時代前半の土師器が有する特徴を備えているが、口縁の外反が少なくなつて直口に近づきつつある。また小型品には、直立した口縁（I-180・I-181）を持つものが含まれている。調整では体部の外面をハケ/内面をケズリで調整しているが、特に外面のハケメを省略する傾向に注目したい。

b. 壺（I地区190・194）

いずれも遺存状態は悪い。体部から底部にかけて、内面はヘラケズリ、外面はハケメで調整する。外面のハケメは縦方向を主体とするが、個々のハケは不定方向に切り合いをもち、規則性が認められない。ハケメは口縁部に及び、194では内面にも横方向のハケメを施すが、最終的にはヨコナデで仕上げている。器形はナデ屑で、胴部最大径よりも器高が大きいなど、長胴化への傾向が顕著である。

c. 高杯（I地区200・201・202・203）

200のみ脚部を欠損するが、全体に遺存率は高い。調整にいくつかの違いはあるが、器形はほぼ一致している。口縁にかけて大きく開く杯部とラッパ状に開く脚部からなる。

体部と底部の境界における屈曲は、I-203では消失しているがI-200～202で顕著である。口縁端部はいずれもわずかに外反する。脚部は緩やかな裾広がりの形態をなすものの、脚柱部が柱状の形態をある程度保っており、裾部を分ける屈曲は内面で明瞭に認められる。

杯部は内外面ともにハケメ調整を施す。外面では屈曲部付近を境として、調整に変化が認められる。I-202は杯底部から口縁にかけて斜め方向のハケメを施してから、屈曲部～口縁にヨコナデを施してハケメを消す。またI-201・I-203では、屈曲部分に沿って横方向のハケメを1条巡らすなど、調整において体部と底部の違いを表現している。内面は口縁に沿って横方向のハケメを施し、端部付近はヨコナデを加える。また底部中央は不定方向のナデ・ユビオサエがあり、円盤充填技法との関連をうかがわせる。裾部は外面調整にばらつきがあり、ハケメと面取り状の縦方向のヘラケズリを施すものが見られる。一方内面は、脚柱部の下半にヘラケズリ、裾部内面はハケメを加えるものが多い。

以上の特徴から、「布留采高杯」の形態と位置づけられる。注意すべき点としては杯部の屈曲が僅かになることで、調整において口縁と底部の区別する意識があることも、年代感を考える一つの手がかりとなる。

d. ミニチュア土器（I地区185・186）

半球形の体～底部をなす。手ゾクネで成形し、全体に指頭痕をとどめる。外面には粗いナデを施して、仕上げている。広口の壺を模造したものであろうか、口縁付近をわずかに外反させている。

これらの土師器は、古墳時代前半のものとする事ができる。続いて細部の特徴をもとに、近畿地方における土師器編年との対応関係を考えてみる。

指標とする特徴には、高杯の杯部外面における屈曲が退化傾向にあることを挙げる。器面に明瞭な屈曲は持たず、稜線をとどめるものと見られないものが混在する。高杯の屈曲は布留式新相になり消失するとされるが、ほぼ同じ段階で出現する直立した口縁を持つ小型壺が含まれること、長胴化した櫛で屑の壺が見られること、なども新しく位置付けられる要素である。以上の特徴から、これらの土器群は布留式新相段階に併行するものと理解して、5世紀後半～6世紀初頭の所産と考えておきたい。

今のところ西播磨では、発掘調査された古墳時代の集落数が少なく、前期土師器の変遷を通観しうる事例も限られている。布留式土器に併行する様相としては、大中遺跡・長越遺跡などで古相にあたる資

料がまとまって出土するものの、新相に相当する良好な出土例は少ない。時期決定を裏付けるクロスチェックが不十分なだけに、今回の土器群についても、周辺において比較検討できる資料の蓄積を待って、再考する必要がある。

庄内式土器のルーツ論をきっかけに、播磨は古墳時代初期の土師器研究において注目を集めている。しかし後続する古墳時代前期の土器様相については、資料の蓄積が少なく、実態も不明な状態にある。Ⅰ地区SD1003出土の土器群は、その特徴から布留式新相に位置付けた。須恵器の出現直前の時期にあたり、土師器自体も韓式系土器の影響を受けた器形の変化が指摘されている。播磨では竜野市の尾崎遺跡を始めとして、韓式系土器の出土例も近年増加しつつあり、これらの土器群をとりまく状態についても、今後さらに多角的な検討が期待されよう。

2. 古墳時代の出土遺物—須恵器

Ⅱ地区において検出された古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物では、須恵器の出土が目立っている。特に竪穴住居では、床面付近から良好な遺存状態で出土していることから、集落の盛期を測る尺度とできよう。基準資料に須恵器蓋・杯を取り上げ、特徴の再整理とともに、出土量の少なかったⅠ地区との対応関係や、陶器古窯址群との併行関係を検討したい。

遺物の中心を占めるのは、口縁にたちあがりを受け部を有する杯身と、対応する蓋である。形式変化を追うためには、調整手法の変化にも配慮すべきではあるが、遺存状態から調整手法の全容を判定できないものも相当数あるため、「器形の変化」を分類の中心とした。

Ⅱ地区では、蓋・杯身ともそれぞれ4類に分類した。蓋では天井部と体部を分かつ稜線の状況に着目し、Ⅰ：稜線が突出するもの、Ⅱ：稜線が鈍化・退化して、凹線状となるもの、Ⅲ：稜線は消失するが屈曲は明瞭なもの、Ⅳ：稜線が消失し、底部から口縁に向けて緩やかなドーム状の形態をなすもの、に峻別した。

口縁端部の形態をみると、Ⅰ類では内傾して段を有するが、Ⅱ類では内傾するにとどまり、Ⅲ類で丸く納めるものが出現、Ⅳ類では丸く納めるものだけとなる。また天井部外面の調整では、Ⅰ類で天井部の広い範囲に密なヘラケズリを施しているが、Ⅱ・Ⅲ類では範囲の縮小やヘラケズリの粗雑化が進み、Ⅳ類にはヘラケズリを省略するものが認められる。

杯身は、たちあがりの器高全体に占める割合と口縁端部の形態を中心に、Ⅰ～Ⅳ類への分類を試みた。遺存状態が悪く器高全容を把握できないものについては、たちあがりの高さ、受け部ならびに口縁端部の形態から類推して、比定した。Ⅰ：器高に対してたちあがりが高く、占める割合は3～4割と高いもの。Ⅱ：たちあがりは器高に対して2割前後と長めだが、前類と比べて確実に縮小傾向にあるもの。Ⅲ：たちあがりだけでなく、器高そのものが縮小傾向となり、大きな口径に比べて扁平な印象を受けるもの。Ⅳ：器高に対する割合がⅠ割前後の短小なたちあがりを有するもの。なお、たちあがりが極端に形骸化して消失寸前の杯身や、蓋に宝珠ツマミが出現する時期の杯身は出土していない。

口縁端部は、Ⅰ類で口縁端部が内傾して明瞭な段を持つが、Ⅱ類には段を失って口縁端部も内傾するだけのものが目立つ。Ⅲ・Ⅳ類では段を持つものや内傾するものは減少し、丸くおさめるものが多くなる。底部外面の調整では、Ⅰがすべて回転ヘラケズリ、Ⅱ・Ⅲでは回転ヘラケズリが粗く、ヘラ切り未調整のものが少量認められる。Ⅳではヘラ切り未調整のものが主流となる。

蓋・杯身いずれの要素も漸次な変化ではあるが、おおむねⅠ→Ⅳ類で形態の退化・調整の簡略化がう

かがる。蓋の稜線が突出しなくなり、凹線下を経て消失する過程は、6世紀前半から7世紀初頭にかけての須恵器に一般的な傾向である。また口縁端部や天井部および底部の調整の変化も、同時期の須恵器に見られる特徴とおおむね合致しており、陶器古窯跡群の須恵器編年当てはめの場合、Ⅰ類はMT15・Ⅱ類はTK10・Ⅲ類はMT85・Ⅳ類はTK43の各窯式とほぼ併行すると考えられる。

またⅠ地区では蓋をA/Bの2類に分類したが、Ⅱ地区出土蓋との対応関係を整理すると、形態や調整の特徴からA類がⅡ類、B類がⅣ類に、それぞれ比定できる。また杯身については出土点数が少ないため分類を避けたが、Ⅰ-165・Ⅰ-17・Ⅰ-171=Ⅱ類・Ⅰ-212=Ⅳ類にそれぞれ該当する。

陶器編年への機械的な対応を図った結果、新たな問題が生じた。同一遺構において複数の類が出土する状況である。近接する類であれば過渡期塚相として把握することも可能だが、数多くの蓋・杯が出土したSH28ではⅡ-Ⅳ類の土器が混在している。新しい特徴を有する遺物が埋没段階で混入した状況も、調査において積極的に判断できる要素は見当らない。出土状況を見る限り、特徴の異なるものが同時併存したと理解することが、自然と考えられる。

分類の指標とした蓋の稜線は、古墳時代の杯蓋におけるメルクマールとして広く認識されており、古いものほど鋭く突出するが、時間を経るごとに退化して凹線化し、最後は稜線が鈍化して消滅する。しかし、これをそのまま時間列として当てはめることが必ずしも妥当とはいえない。器形の変化は漸次的であり、限定された時期のなかで、新古の特徴が混在することは十分にありうるからである。

ほぼ同時期の集落址と考えられる龍野市長尾谷遺跡でも竪穴住居から幅広い時期の遺物が出土している。報告書の中では整理段階での当惑とともに、竪穴住居の廃絶状況や遺物の廃棄に至るまでの保持状況についても可能性を考慮した上で、「遺物総体の検討によって時期を決めざるを得ない」と記されている。集落の状況に加えて、生産地からの影響も大きいであろう。陶器古窯跡群のような大規模生産地から一元的に供給を受けるのであれば、一生産地における変化が直接集落へも反映される。しかし複数の生産地から供給される場合は、各生産地における特徴差も考慮しておく必要がある。播磨の場合は中小規模の生産地が散在する状況にあり、複数の生産地からもたらされた可能性が高い。播磨国内における古墳時代の窯跡は、発掘調査がなされた事例が少なく、実態については疑問が残るものの、表採資料によれば稜線の有無や口縁端部の形態がいくつか混在する事例も多い。

亀田遺跡において出土した須恵器は、形態・色調・制作技法などいくつかの特徴がある。まず製作技法では、蓋の内面に同心円のスタンプ文を有するものが相当数認められる。押圧はいずれも複数回だが、対応するタキキ痕を認めたものは1例に過ぎず、粗い回転ヘラケズリにもかかわらず天井部外面にタキキの痕跡を看守できなかったものも多い。他の調整手法では、ヘラケズリの省略する過程において回転ヘラ切りの後にナデを施すものや、中央にヘラキリ痕跡をとどめたまま、その周囲だけを回転ヘラケズリするものが存在する。形態の特徴として、蓋の口縁端部付近における内面で凹線を巡らす(Ⅱ-291)もの、端部外面に縦方向の細かいキザミを付す(Ⅱ-220)ものがある。高杯ではいわゆる「長脚二段スカシ」が認められないほか、脚部内面に「かえり」状の突帯を巡らす(Ⅱ-210)ものが1点認められた。色調では、灰色の硬質な焼成のものとしてオーブ灰-緑灰色を呈するものがある。特徴のある形態や手法は、亀田遺跡に製品を供給した窯址を考える手がかりである。形態・色調にいくつかのバリエーションが認められる点は、当遺跡へ供給した生産地が複数にわたることを暗示するものかもしれない。

亀田遺跡の北側にあたる菅生川左岸の丘陵地には、峰相山窯跡群がある。消滅したのも多いが、6世紀後半～8世紀にかけての須恵器窯址、65基で構成される。生産開始期の窯は南部の青山付近に集中

し、その後7世紀代には太市付近、8世紀には打越付近と、生産の中心を北へ遷している。古墳時代の窯が集中する姫路市青山と亀田遺跡は、直線距離で2km程度の近接した位置にあり、その遺物がもたらされた可能性は高い。同古窯址群で現在のところ最古の窯跡とされる大岡窯跡（姫路市青山）では、TK10新段階（MT85）併行の須恵器が採集されている。以後、連続して操業した窯群の存在が知られるものの、未調査、または調査をまたずに消滅している。現在知られる表採資料のみで、製品の特徴を論ずるのは困難といわざるを得ないが、Ⅱ-291と同じく口縁内部に凹線を施す杯蓋が存在するなど、亀田遺跡で出土した遺物と共通点を持つ可能性は否定できない。

峰相山古窯址群で生産された土器は、姫路から太子町域の古墳や大津茂川下流の丁・柳ヶ瀬遺跡にもたらされた可能性が指摘されている。また亀田遺跡の北側にある太市中古墳群出土土器にも、峰相山の製品が認められる指摘（永井文献1997）もある。太市中古墳群は、6世紀の横穴式石室を中心とする古墳群で、古墳の造営時期は亀田遺跡の古墳時代集落と重なることから、近接する地域での生産地と性格の異なる2つの消費地（集落と墓地）の関連が注目される。今後詳細な同定が進むことを期待したい。

参考文献

- 米田敏幸「土師器の編年1・近畿」『古墳時代の研究』6、雄山閣（1991）
岸本道昭『長尾・小畑遺跡群』龍野市教育委員会（1999）
永井信弘『播磨における古墳時代須恵器の変遷』『小谷遺跡（第6次）』（1995）
永井信弘『峰相山窯跡群について（1）』『ひょうご考古』第3号 兵庫考古研究会（1997）
永井信弘『地方窯成立の一側面』『ひょうご考古』第5号 兵庫考古研究会（1999）
森内秀造『西播磨（2）—姫路市周辺—』『須恵器集成図録』第2巻近畿編Ⅱ 雄山閣（1996）
山田邦和『須恵器生産の研究』学生社（1998）

第3節 奈良時代以降の遺物について

土器を中心とした遺物の多くは流路、河道から出土したものが多く、あまりまとまった資料は少ない。遺跡の存続時期を示す。以下に比較的まとまった資料から取り上げる⁽¹⁾。

Ⅱ区ST04 須惠器杯G h (Ⅱ-11) は口径が小さく、7世紀後半頃のものと考えられる。土師器甕(Ⅱ-104・105)も口縁端部に面をもたず、比較的長胴であることから古い様相を示している。

Ⅱ-E-1区SK36 須惠器杯G h (Ⅱ-320) は口径が小さく、Ⅱ区土器相と同様7世紀後半頃のものであろう。

旧河道 遺物は橋脚付近の岸辺で、まとまって出土したものが多く(Ⅱ-391~416)。須惠器杯G hなどの供用器具のほかは非常に少ない。同じく大津茂川の下流に位置する丁・柳ヶ瀬遺跡での出土状況に類似している。杯G hは口径9~12cmであり、吉田ヶ谷窯の様相に近い。8世紀前半頃のものと考えられる。土師器甕は8世紀の西播地域に典型的な、口縁端部に面をもつものが現れている。

流路1 流路であるため一括性は乏しいが、豊富な器種が出土している(Ⅱ-322~382)。杯Aは西奥窯もしくはスコバ谷・新田B窯に近い。杯Bはスコバ谷・新田B窯に近い。8世紀後半と考えられる。

I-B-7区SK220 溝内に投棄された比較的一括性の高い資料である(I-229~252)。杯A、杯Bはスコバ谷・新田B窯にほぼ一致し、8世紀後半と考えられる。大型の皿A、皿B、外面にミガキが施された水瓶、甕、製塩土器などが含まれていることは特徴的である。

I-C-2区SE301 出土遺物はほとんど土師器のみで構成されている(I-226~228)。杯類は回転台土師器である。回転台土師器は西播地域では8世紀後半(本町遺跡)から見られるが、亀田遺跡では8世紀後半の須惠器に伴うものはないので、それに引き続く9世紀頃のものと考えたい。

I-B-2区SK251 出土遺物はほとんど土師器のみで構成されている(I-254~260)。杯類は回転台土師器である。I-C-2区SE1と同様に9世紀頃のものと考えられる。

これ以降のものはピットや包含層から出土したものが多く、まとまって出土したものはほとんどない。以下に各種別ごとに述べる。

須惠器は9世紀後半~13世紀頃にかけてのものが散漫に出土している。これらの須惠器は、相生市から熊野市西部に位置する揖西窯跡群で作られたと思われるものが多い。Ⅱ-453は底部へら切りの碗で、西後明7号窯に近い。9世紀後半頃のものと考えられる。I-310は底部へら切りの碗である。しっかりとした平高台をもつもので、入野6号窯に近い。10世紀前半頃のものである。同時期のものについては皿(I-280)などが出土している。Ⅱ-435やⅡ-455では平高台ははっきりしなくなる。緑ヶ丘窯跡群落矢ヶ谷支群のものに近い。10世紀後半から11世紀前半頃のものである。同時期のものには皿(Ⅱ-458)や双耳壺(Ⅱ-461)などが出土している。Ⅱ-476の須惠器碗は、I-298などの小碗とセットになると思われるもので、大陣原窯跡群のものに近い⁽²⁾。11世紀後半から12世紀初め頃のものである。Ⅱ-446の碗はⅡ-476より器高が低くやや新しい傾向を示す。12世紀前半頃のものと思われる。また、この時期には東播系須惠器が見られるようになる。碗(I-284)は揖西窯跡群で作られたものに比べて、体部下半が直線的であることが異なる。その他に東播系須惠器のこね鉢(Ⅱ-460)、甕(Ⅱ-462)が出土している。I-307は底部見込みの回みは消失し、底部のまるみもゆるくなる。竹原窯のものに近い⁽³⁾。12世紀後半から13世紀初め頃のものと思われる。東播系須惠器の碗(Ⅱ-439)も見込みの回みの消失したのが見られる。

土師器については出土量が少ないため、不明瞭な点が多い。供器具についてはⅡ-433、434のようなへら切りの小皿や埴などがⅠ-B-2区SK251、Ⅰ-C-2区SE301などで出土している回転台土師器に後続するものであろう。その後、12世紀以降にⅠ-287のような手づくねの小皿が見られるようになる。煮炊具については甕もしくは鍋と羽釜が見られる。8世紀頃の甕とは異なりⅡ-465などのように口縁部面の面がなくなり、まるみを帯びるものなどがみられる。12世紀ごろになるとⅠ-211などのように器高が低くなり、鍋となる。羽釜は10・11世紀頃の直立する口縁部の直下に厚手の鋳の付くもの(Ⅱ-436)がみられ、12世紀には球形の体部に薄手の鋳がつくもの(Ⅱ-468)が見られる。国産陶器は緑釉陶器、灰釉陶器、備前焼などが出土している。緑釉陶器は碗、杯などが出土しており、いずれも京都産のものである。灰釉陶器は瓶(Ⅱ-445)が出土しており、K-90号窯式のものである。緑釉・灰釉とも9世紀後半のものが多く出土している。備前焼はⅣ・Ⅴ期の播鉢、壺、甕が出土している。15・16世紀のものである。

貿易陶磁器は白磁、青磁、青白磁、染付などが出土している。白磁は碗Ⅷ類、Ⅸ類、Ⅹ類などが主体を占めており、12・13世紀を中心とするものである。青磁は龍泉窯系の調花文碗、蓮弁文碗などが主体を占め、13～16世紀までの幅広い年代をしている。当地域における貿易陶磁器の一般的な流入状況を示すものであろう⁽⁴⁾。

註

(1) 須恵器については以下の文献を参照した。

兵庫県教育委員会「相生市・緑ヶ丘窯址群」1986年、森内秀造・永井信弘「播磨とその周辺の須恵器」『古代の土器研究会第2回シンポジウム発表資料』1993年、永井信弘・小川真理子ほか「播磨」『古代の土器5-2 7世紀の土器(近畿西部編)』1998年

(2) 松本正信「大陣原古窯址群」『龍野市史 第4巻』1984年

(3) 龍野市教育委員会「竹原遺跡」1999年

(4) 岡田章一「兵庫県における土器からみた貿易陶磁」『中近世土器の基礎的研究Ⅰ』1996年

第62表 陶磁器出土点数一覧(口縁部あるいは底部の残るもののみ)

種 類	器形	分類	部位	合計	種 類	器形	分類	部位	合計
備前	播鉢	Ⅳ	口	10	白磁	皿	その他	底	1
備前	播鉢	Ⅴ		8	白磁	小壺		口	1
備前	壺	Ⅳ		2	龍泉窯系青磁	碗	I-1	口	6
備前	壺	Ⅴ		3	龍泉窯系青磁	碗	I-2	口	1
備前	甕	Ⅳ	口	2	龍泉窯系青磁	碗	I-2	底	2
白磁	碗	Ⅱ	口	3	龍泉窯系青磁	碗	I-3	口	1
白磁	碗	Ⅱ	底	1	龍泉窯系青磁	碗	I-4	口	6
白磁	碗	Ⅲ	底	6	龍泉窯系青磁	碗	I-5・a	口	7
白磁	碗	Ⅳ	口	47	龍泉窯系青磁	碗	I-5・b	口	2
白磁	碗	Ⅳ	底	21	龍泉窯系青磁	碗	I-5・c	底	2
白磁	碗	Ⅴ・Ⅷ	口	30	龍泉窯系青磁	碗	I-5・d	底	1
白磁	碗	Ⅴ-2	口	1	龍泉窯系青磁	碗	I-6	口	1
白磁	碗	Ⅵ	底	5	龍泉窯系青磁	碗	Ⅱ	底	2
白磁	碗	Ⅷ	底	5	龍泉窯系青磁	碗	その他	底	4
白磁	碗	その他	底	1	龍泉窯系青磁	小碗	Ⅲ-3	口	1
白磁	小碗	Ⅳ-1	底	1	龍泉窯系青磁	杯	Ⅲ-1	底	1
白磁	皿	Ⅴ	底	2	龍泉窯系青磁	皿		口	1
白磁	皿	Ⅵ	底	3	龍泉窯系青磁	碗	I-1	口	4
白磁	皿	Ⅶ	底	2	龍泉窯系青磁	碗	Ⅲ	底	1
白磁	皿	Ⅷ	口	4	龍泉窯系青磁	皿	I-2	底	5
白磁	皿	Ⅷ-1	底	1	青白磁	合子			2
白磁	皿	Ⅷ-2	底	1	染付	皿		底	2
白磁	皿	その他	口	11	合 計				224

奈良時代以降の遺構について

数多く検出されたピットについては、十分に建物を復元することはできず、復元できた建物も時期を特定できるものには限られている。特に、平安時代以降の遺構は、流路などを埋没させた東側の谷からの堆積が土壌化した層を遺構面とするため、検出は難しい。そのため、取り扱える資料は、非常に断片的であると言わざるをえない。わずかに検出された遺構と陶磁器の出土分布から遺跡の変遷を考えるとす。

7世紀

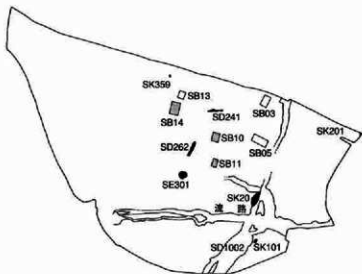
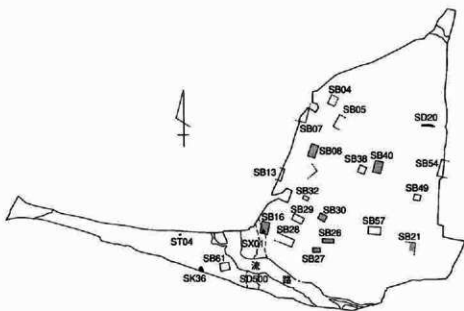
古墳時代後期から奈良時代にかけての時期は7世紀前半頃が空白期である。その後、7世紀後半にはⅡ区S T04やⅡ区S K36などが見られるが、出土土器・遺構ともに多くはない。比較的空閑地で墓などが設けられたものと思われる。Ⅱ区S T02のような横置き型の合口甕棺は県内では宮脇遺跡（龍野市）、高畑町遺跡（西宮市）で見られるのみである⁽¹⁾。

8～9世紀

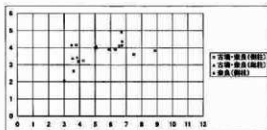
亀田遺跡では多数の掘立柱建物跡が検出されているが、このうち柱穴から杯A、杯B、かえりのない杯B蓋など奈良時代の土器が出土しているのは10棟である。そのほか、奈良時代もしくは古墳時代か特定できない須恵器の破片が出土している建物跡は16棟である。これらの建物から出土した土器は細片であるため、個々の建物に関しては細かい時期を特定することはほとんどできない。掘立柱建物は規模から見ると3種類程度の大きさが存在する。桁行4間もしくは3間、梁行2間で床面積が25～35㎡のもの、桁行3間、梁行3間で床面積が20㎡程度のもの、桁行3間もしくは2間、梁行2間で床面積が10㎡程度のものがあり、古墳時代に存在した床面積が35㎡以上の建物が存在する可能性は薄い。倉庫と考えられる掘立柱建物については、明瞭に奈良時代に属するものは存在しない。古墳時代と比べて極端に少なくなると考えてよいだろう。大津茂川の旧河道から出土した土器は8世紀前半を中心としたものであり、現河道から最も東に依ったのはこの時期までである。Ⅱ区では橋脚が架けられていた。Ⅰ区S D1002とⅡ区S D500は一連の溝と考えられ、古墳時代後期から存続していたものであるが、Ⅰ区S K220やⅡ区S X01などが見られるように、8世紀後半から9世紀にかけて埋没していったようである。Ⅱ区の流路は8世紀頃から流れ始めたようで、ある時期にはⅡ区S D500との交差点で堰状の施設を設けⅡ区S D500に水を流していたようである。この流路からは8世紀後半の土器が比較的多く出土している。Ⅰ区の流路は現代の用水路まで続いているため、当時から流れていたかどうかは判然としないが、Ⅰ区S D1002が埋まる頃には流れていた可能性が高い。9世紀になると、Ⅰ区では井戸（S E301）が確認される。Ⅱ区では灰釉陶器が副葬された木棺墓（S X01）が検出される。この木棺墓は掘方内の棺上に炭を敷きつめたもので、畿内周辺で流行した木炭塚墓、木炭敷墓の影響を受けたものであろう⁽²⁾。

建物の規模からすると小神戸原遺跡とほぼ同様で、一般的な集落と考えられる⁽³⁾。ただし、SB14やSE301を中心としたⅠ区の遺構群に関しては、遺物からみると8世紀には大形の皿や脚轆碗など比較的高級なものがあり、9世紀にも緑釉陶器や鈿帯・石帯などが出土していることから、一般農民と比べてややランクの高い性格のものであるかもしれない。

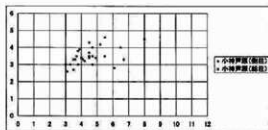
律令期にはこの地域は掛保郡（穀評）大田郷（里）に属していたと考えられる。大田郷は大津茂川中流城がその郷城と推定され、範囲内には下太田院寺、川島遺跡などが存在している。下太田院寺は、渡



網点は律令期の建物
 白抜きは古墳～律令期の建物
 黒塗りは律令期のその他の遺構

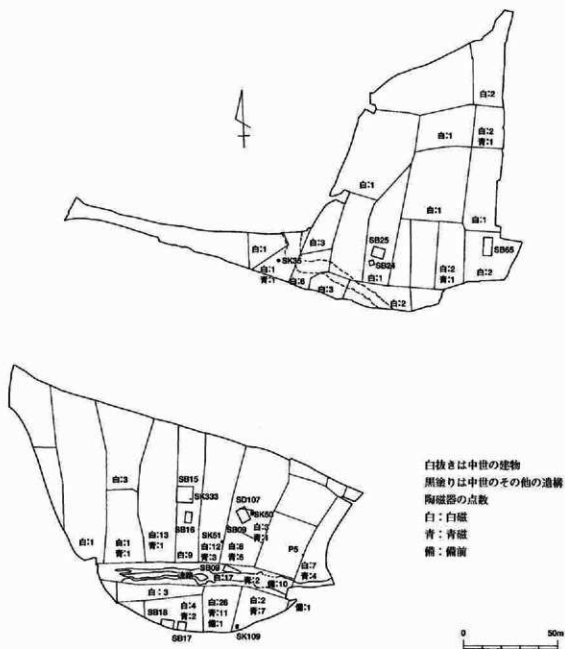


亀田遺跡の建物規模



小神原遺跡の建物規模

第33図 律令期の亀田遺跡



第34図 10世紀以降の亀田遺跡

来系氏族によって7世紀後半に創建され、8世紀後半まで補修、改築などが行われた。軒瓦に法隆寺式が採用されていることから、法隆寺との関連が深いものと考えられている。この周辺が郷の中心と考えれば、亀田遺跡はそれに次ぐ拠点と考えることができるだろう。

10・11世紀代

Ⅱ区でSB25やSB65などが認められる。SB25は3間×3間(床面積51.34㎡)の総柱建物、SB65は5間×2間(床面積48㎡)である。建物の周囲からは須恵器碗、須恵器双耳壺、土師器羽釜など10・11世紀代の遺物が多く出土しているが、この時期に属する施輪陶器などは出土していない。わずかにⅡ-487のようなやや古い形態の白磁が伴っている可能性がある。

12世紀代

I区SB15は4間×4間(72.57㎡)の総柱建物である。柱穴からは11世紀後半～12世紀前半にかけての須恵器(I-298)が出土している。II区ではこの時期に属する建物を特定することはできないが、II区SK35や埋没した流路の窪みやその南側の包含層から12世紀代の遺物が出土している。陶磁器はこの時期を代表する白磁Ⅳ類などがI・II区とも広い範囲で数多く出土している。大田郷はこのころまでには荘園化していたようで、仁平元年(1151)頃には藤原頼長領(「僧定寛書状」平安遺文4744-4746)であり、その後、後白河院領(「文覚書状案」神護寺文書)となっていた。

13世紀代

陶磁器からみると、II区では青磁の出土はほとんど見られず、13世紀にはこの区域には遺構は広がっていないと考えられる。I区ではA区を中心とした南側よりに青磁の出土が多く、13世紀代の遺構が見られる。I区SB17・18は柱筋をはば等しくしている。あるいは同一の建物であったかもしれない。SB18は梁行3間、桁行1間以上の総柱建物である。SB17は梁行2間、桁行2間以上の側柱建物である。いずれも柱穴から須恵器碗の破片が出土していることから、この時期のものにあたる可能性が高い。

14世紀代

陶磁器にはこの時期に該当する白磁Ⅳ類などが若干見られるが、東播系須恵器の捏鉢がほとんど見られないことから、ほとんど衰退しているものと考えられる。大田庄は建武2年(1335)には西園寺家領(「後醍醐天皇輪旨」西園寺家文書)となっていた。

15-16世紀代

東南隅でのみⅣ・Ⅴ期の備前焼が出土している。南東隅で検出されたピット群のなかに当時の遺構が含まれている可能性が高い。大田庄は15世紀後半から16世紀初頭にかけては三条西家領(「実隆公記)であった。

註

- (1) このような合口甕棺墓は、畿内およびその周辺では6～9世紀に点的にみられ(玉田芳英「十六坪周辺の土器埋納遺構」『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』1997年)、山田良三氏は渡来系の性格を考えている(山田良三「土師式合口甕棺墓について」『橿原考古学研究所論集 第四』1979年)。宮脇遺跡：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所「宮脇遺跡」1995年、高畑町遺跡：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所「高畑町遺跡(Ⅱ)」1999年
- (2) 黒崎直「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究論集Ⅵ』奈良国立文化財研究所 1980年
- (3) 岸本道昭「律令期建物群の検討」『小神芦原遺跡』1993年

第4節 亀田遺跡の竪穴住居について

はじめに

亀田遺跡では、弥生時代中期末から古墳時代後期にいたるまでの竪穴住居跡を総計65棟調査した。

とくに弥生時代の住居跡については、検出数もさることながら全容がわかるものも多く、好資料に恵まれた。なかでも、弥生時代中期後半の検出例が最も多く、33棟を数える。ほかに、弥生時代後期1棟、古墳時代前期3棟、古墳時代後期15棟を検出している。各住居跡の時期については、出土した土器を基準にしているが、なかには出土遺物量が少ないため位置づけが不確実なものもある。また全般に古墳時代の住居跡は遺存状況が悪い。

ここでは亀田遺跡における各時期ごとの竪穴住居跡の特徴を概観する。その方法としては、竪穴住居を構成する属性について着目したい。竪穴住居跡を分析する属性としては、平面形や床面積、主柱穴の本数、燃焼施設の構造などがある。

1. 竪穴住居の平面形態と面積

平面プラン 検出した竪穴住居跡は、円形、隅円方形、方形の3つに分類できる。円形と隅円方形は弥生時代の住居、方形は古墳時代の住居である。プランごとに面積を比較すると、隅円方形ならびに方形のものは30㎡以下に全て収まるが、円形の住居跡については10㎡以下から60㎡の間に分布する。

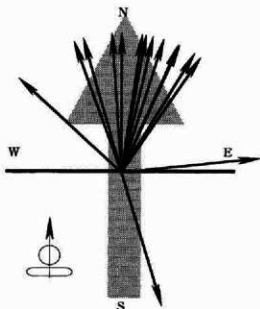
次に主柱穴の数と面積について見ていく。比較資料が豊富な弥生時代中期の住居を取り上げた。

円形住居跡は床面積30㎡以下と40㎡以上の2つのグループに分かれる。主柱穴の数を見ると、前者では14棟中11棟が4本柱で残りは2本、5本、6本であった。後者ではSH21を除けば5～8本の間に収まる。SH21については飛び抜けて広い柱間になっており、本来はもう少し間に柱があった可能性を想定してよい。このことから、柱の数を増やすことで円形住居跡の床面積を拡大することに成功していると言える。

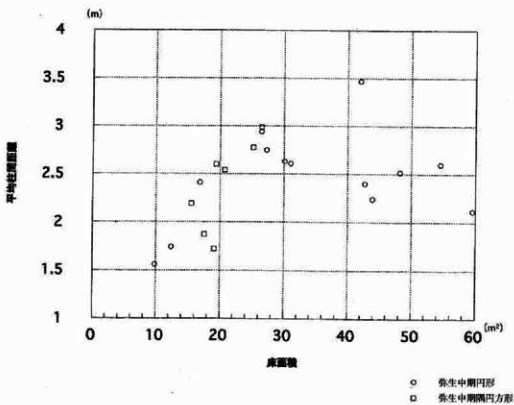
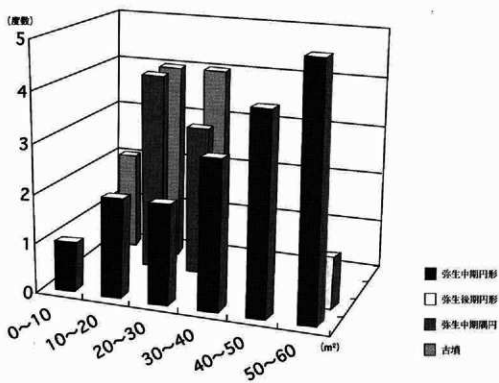
2. 燃焼施設

10形土坑 円形もしくは楕円形の土坑（土坑0）と葉巻形の長細い土坑（土坑1）を掘るもの。両側に一对の柱穴を伴うものがある。土坑0と土坑1の床面における配置状況は、土坑1を必ず南半側に構築する法則が知られる。しかしながら当遺跡ではNo. II SH30の中央土坑がS73°Eに主軸をとっており北側に土坑1を据える。ほぼ東西方向に主軸をとるNo. I SH11を除くと、主軸の方向は57～140度の範囲に収まり、70～90度の間に集中する。

単体土坑 円形の土坑が構築されている。構築される場所は中央と壁際の2カ所に類別できる。中央に位置するものなかには周囲に土手を伴うものや、両側に一对の柱穴を伴うものがある。壁際に構築さ



第35図 竪穴住居中央土坑主軸の方位



第36図 上：プラン時期別の床面積度数分布 下：弥生中期居住間と床面積の相関

れるのは古墳時代のものである。

カマド カマドを持つものは1棟のみ検出された。造り付けのもので、粘土を貼っただけの単純な構造である。

3. その他の施設

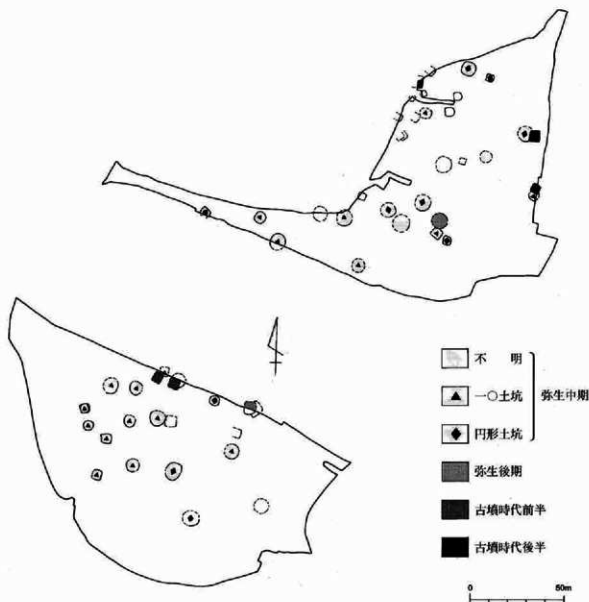
張り出し部 張り出し部を持つのは2棟だけで、いずれも床面積19mほどの隅円方形住居である。張り出し部が取り付く位置は南東隅と北西隅であり全く正反対であった。

溝 住居内の中央土坑に取り付く形で溝が造られている住居がみられる。これらの溝は、周壁溝に取り付いて取束するものと、屋外へ長くのびていくものがある。間仕切りや排水などの機能が想定されるが、特定できるような根拠を得ることはできなかった。

4. まとめ

以上竪穴住居を構成する要素について概観した。

亀田遺跡の竪穴住居跡は円形・隅円方形・方形からなる。円形、隅円方形のものは弥生時代、方形のものは古墳時代の所産である。弥生時代中期では円形住居については規模・柱穴数に多様性が見られる



第37図 時期別竪穴住居配置図

が、隅円方形の住居跡は四本柱で床面積30㎡以下に限られる。弥生後期で規模のわかるものは、床面積50㎡以上の大型円形住居1棟である。古墳時代の方形住居については、すべて柱数4本、床面積30㎡以下に収まる。

焼坑施設については以下のような変遷がたどれる。

弥生時代の中央土坑は10土坑と円形単独土坑がみられる。10土坑は弥生時代中期後半から後期にかけて播磨を中心に分布する中央土坑の一形態で、当遺跡でも多くの検出例が確認できた。弥生時代後期になると周堤を持つ円形土坑が現れる。古墳時代になると円形土坑は壁際に移動してつくられるようになり、その後カマドが出現する。

このような変化の流れは、播磨では玉津田中遺跡例、美乃利遺跡例、摂津では川除・藤ノ木遺跡例、有鼻遺跡例など、これまでの県内における検討成果を追認するものである。

参考文献

- 兵庫県教育委員会「川除・藤ノ木遺跡」兵庫県文化財調査報告第104冊 1992年
兵庫県教育委員会「玉津田中遺跡」-第6分冊-兵庫県文化財調査報告第135-6冊 1996年
兵庫県教育委員会「美乃利遺跡」兵庫県文化財調査報告第165冊 1997年
兵庫県教育委員会「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅳ」-有鼻遺跡（1）-兵庫県文化財調査報告第185冊 1999年

第5節 亀田遺跡出土の石器について

はじめに

亀田遺跡では実に1000点を超える石器が出土した。西播磨においてこれだけの量の石器がひとまとまりの資料として整理されたことはなく、この地域における弥生時代中期末の良好な資料を提示できるものとする。以下、Ⅰ・Ⅱ両地点をととして器種ごとに整理し、さらには石器組成、石材の利用と生産の問題などを検討したい。

1. 各器種の検討

ここでは、No.ⅠおよびNo.Ⅱの両地点より出土した石器資料について一括して整理する。分類基準なども示しておく。

石鏃

両地点をあわせて合計237点を数える。このうち製作途中の失敗品と考えられるものは19点ある。

分類基準

石鏃の型式設定は基部の形状を重視して、まず5つに分類した。併せて全体的な形態を規定する要素に注目し、細分を試みた。

1類：平基式石鏃

基部が直線的に形成されているもの。

- A：作用部が直線的に形成されるもの。
- B：作用部が緩やかに外湾して形成されるもの。

2類：凹基式石鏃

基部が内湾して形成されているもの。

- A：全長に占める抉りの割合が、20%以上のもの。いわゆる深い抉りを施すもので、縄文時代の石鏃に多く見られる技法である。

さらに作用部の形態によって3つに細分する。

- 1：作用部が直線的に形成されるもの
 - 2：作用部が内湾して形成されるもの
 - 3：作用部が外湾して形成されるもの
- B：全長に占める抉りの割合が、20%までに収まるもの。
 - 1：作用部が直線的に形成されるもの
 - 2：作用部が外湾して形成されるもの

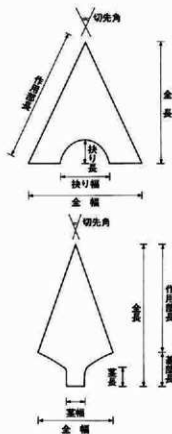
3類：円基式石鏃

基部が外湾して形成されているもの。水滴形の平面形を呈する。

4類：尖基式石鏃

基部が突出するが明瞭な茎部を形成しないもの。

- A：作用部が直線的に形成されるもの
- B：作用部が緩やかに外湾して形成されるもの



第38図 石鏃の計測方法

5類：有茎式石鏝

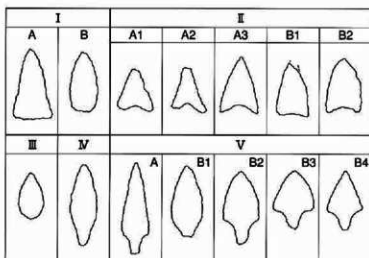
茎部を形成するもの。

A：作用部が直線的に形成され、切先角が30度以下の細身の石鏝。

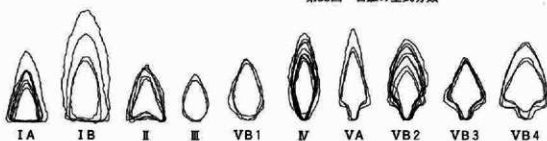
B：切先角が40度以上の石鏝

1：作用部が外湾し、逆刺がなく基部を緩やかに作り出しているもの。

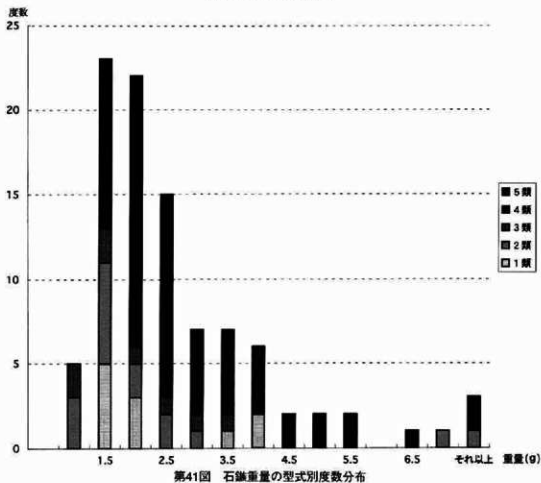
2：作用部が外湾し、逆刺の甘いもの。



第39図 石鏝の型式分類



第40図 石鏝の形態変移



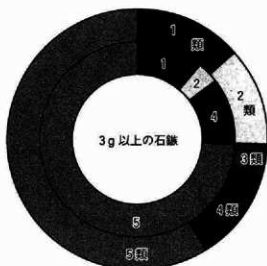
第41図 石鏝重量の型式別度数分布

3：作用部が外湾し、逆刺が鋭角に張り出すもの。

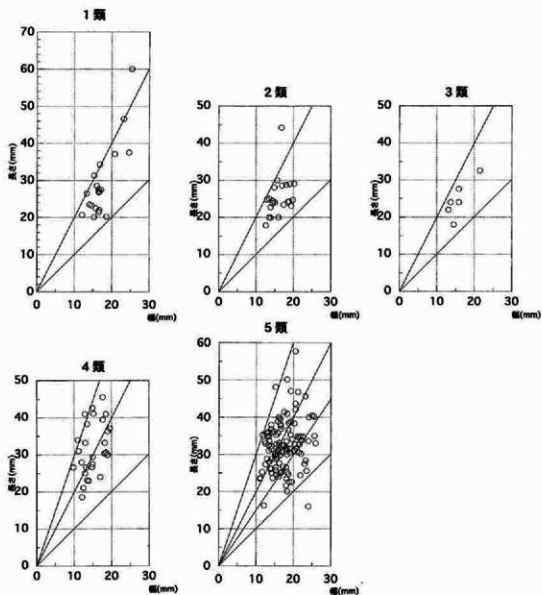
4：作用部が直線的に形成されるもの

以上の分類基準に従って出土資料をみると、1類13点(13%)、2類12点(12%)、3類4点(4%)、4類11点(11%)、5類57点(60%)である。なお、3g以上のものは1類3点、2類1点、3類は皆無で、4類は3点、5類が20点となっており、5類に大型品が多い。

石材 金山産が全体の95.8%を占める。二上山産の石材を用いるものは10点である。類型別に見ると2類が1点、4類が2点、5類が7点である。



第42図 石鏃の型式別組成比



第43図 石鏃型式別長幅比

打製石剣

完形品は1点のみで、切っ先と思われるもの10点、基部と考えられるもの2点が出土している。石材は全て金山産である。完形品の基部端面には風化した自然面が観察されるが、基部と考えているもの2点にはいずれもこの自然面が認められない。こうした打製石剣は二上山産の石材を用いた、肉厚の整美なものが畿内ではままだ見られるが、当遺跡出土のものはすべて金山産である。完形のもの1点で、事実報告でも触れたように薄く剥離する金山産石材の性質に制約されて、縦断面形は「く」の字形を呈している。

石錐

分類 装着部分の形状と錐身の作り出しの有無によって、大別した。

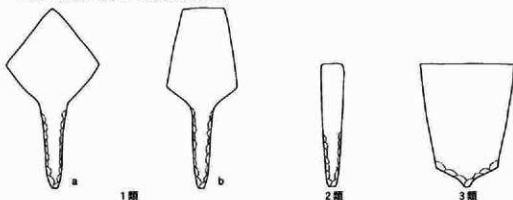
1類：作用部と装着部が明瞭に分かれる。

a. 装着部の両側が強く張り出し、菱形を呈する。

b. 装着部の両側が緩やかに張り出す。

2類：明瞭な装着部を持たない。

3類：不定形の剥片の先端を利用する。

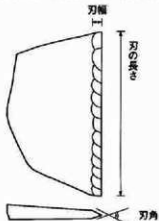


第44回 石錐の型式分類

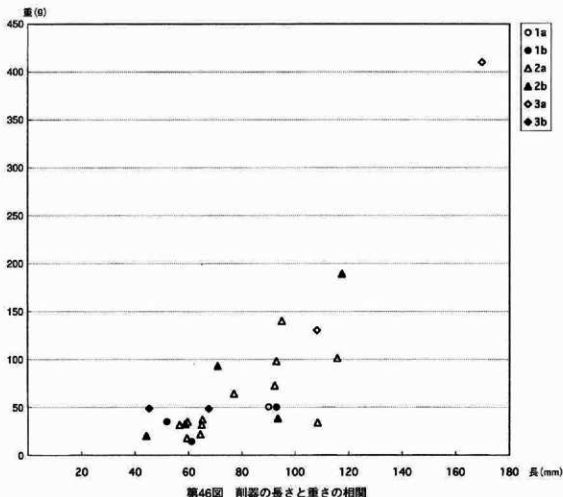
ここで注意しておきたいのは錐部（作用部）の構造である。1・2類と3類を比較したとき長さにおいてその差は明白である。これは加工対象の差異を示すものと考えられる。すなわち、1・2類の錐が一定の径を有する深い孔を穿つためのものであるのに対し、3類は開口部が広く深くなるにつれ径を狭める孔を穿つものである。推測の域を出ないが、たとえば前者は木工を後者は石器などへの穿孔をおこなった可能性をあげておきたい。

削器

連続した剥離調整が認められる石器。分類にあたっては、主要な刃部の形態（直線・外湾・内湾）、調整の部位（剥離面終端・炭断面）、調整をおこなう面（両面・腹面・背面）、背縁の調整の有無などを観察の対象とした。使用法は手に持って何かを切ったり削ったりしたものとして推測される。重量の分布を見ると、150g以下のものがほとんどである。1点400g強のものがあるが、他のものとは機能などを異にする可能性が考えられる。



第45回 削器の計測方法

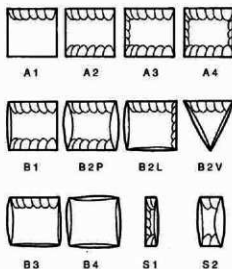


楔形石器

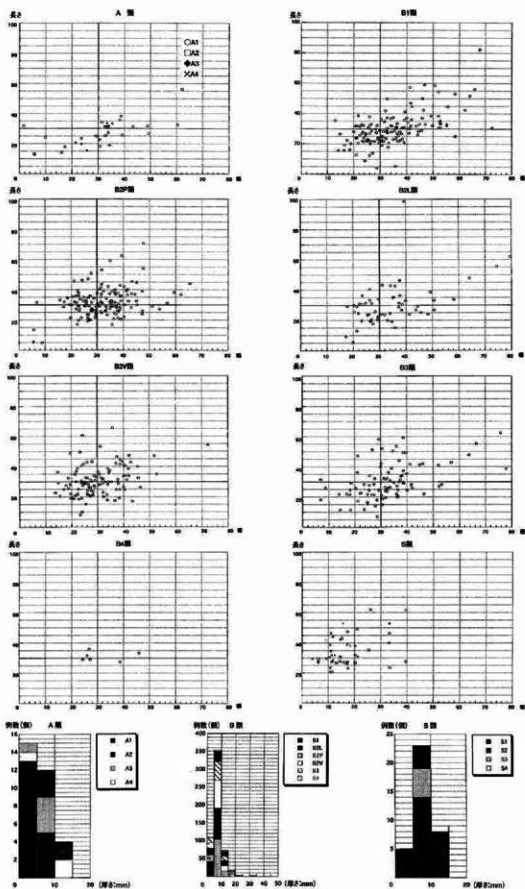
分類基準

1つ以上の縁辺に、微細な階段状剥離の観察可能なもの。平面形は方形及び長方形のもの以外に、不整形なものが多いが、これを使用による形態の変化として理解する (山本 1998)。分類にあたっては、裁断面の有無でそれぞれA類とB類に大別し、A類については階段状剥離を有する縁辺の数で、B類については裁断面を有する縁辺の数およびその配置で細分する。特に一辺もしくは向かい合う長辺に裁断面があり、スポール状の形態と認めたものについて、S類とした。ここに示した分類はあくまで形態上のものであり、使用に耐えうるか否かはまた別の問題である。

楔形石器の個体数把握の問題については先学の指摘するとおり、「製作・使用の過程で剪断が起り、数個体に分割されることがある。」(岡村1983) ため、今回の整理の中で分類・把握した点数を全て道具としてカウントすることはできない。現状で楔として使用可能な状態にないと判断されるものを削片としてとらえる。



第47図 楔形石器の型式分類



第48図 楔形石器類型別長幅比散布図と厚みの度数分布

そこで、長さあるいは幅について3cmを「しきい値」として、道具として認定する際の指標としたい。その振り所としては、使用方法を類推するに、利き手に敲打具を持ちもう一方の手で楔形石器を支えつつ被加工物にあてて加撃する、といった状況が想定でき、楔として使用するためには、最低親指の太さを超えていなければならないと考えるからである。

状態

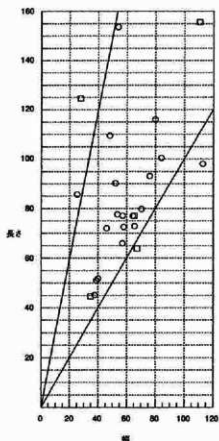
使用によって形状が変化しと考えられるのは、剪断面を持つB類である。このうち階段状剥離を持つ緑辺が、平行して残存するB2P類については依然、道具として使用することが可能である。その他のB類のものは基本的に破損したために使用できなくなった状態とみるが、なかには継続して使っているものもある。例えばB2V類では剪断面を有する2辺がなす頂点に階段状剥離をもつものがある。こうした状況はB2L類、B3類でも同様で、一部のものに階段状剥離を残す緑辺に対する剪断面の一部に階段状剥離が認められる。

敲石・磨石

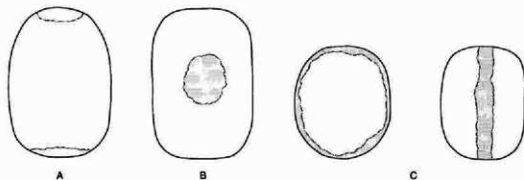
分類

- A：長軸の端部に敲打部があるもの、片方（1類）か両方（2類）に細分する。
- B：体部中央に敲打部があるもの、片面か両面かで1類と2類に細分する。
- C：側面に帯状に敲打部が形成されるもの。
- D：その他、不定形の礫を利用するものなど。

A類は長大な礫に、一方C類は球状の礫にみられることが多いようである。B類はそれ単独で現れるものは1点で、AまたはCのどちらかと共存する場合が多い。礫のサイズによって把持の方法が異なることに起因するものであろう。また、C類としたものは使用痕として形成されたのではなく、意図的に作り出したものと考えられる。



第49図 敲石と磨石の長幅比



第50図 敲石の敲打位置の類型

磨製石斧

出土した磨製石斧の内訳は大型蛤刃石斧が15点、扁平両刃石斧が2点、磨製両刃石斧1点、柱状片刃石斧が10点、扁平片刃石斧が3点である。伐採斧と加工斧で見ると、17:14といった比率となる。

伐採斧

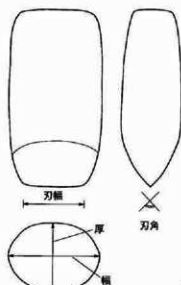
伐採斧と考えられるものは全て破損品であった。このため全体的な形態を把握したいが、随所に見られる特徴から以下のような傾向を指摘できる。

大型蛤刃石斧

横断面形の扁平率が0.6以上の、やや正円に近い形態をとる。最大幅と刃幅がほぼ同じものと、刃幅の方が狭くなる形態のものがある。刃部は直線あるいは緩やかに外湾する。

扁平両刃石斧

横断面形の扁平率が0.5前後の扁平な形態をとる。全体のわかる資料はないが、大型蛤刃石斧に匹敵する大きさが推測できることから伐採斧と考える。



第51図 石斧の計測方法



横断面



刃幅



基部

第52図 伐採斧の部分ごとの形態変移

加工斧

柱状片刃石斧

平面長方形、断面長方形を呈する片刃の磨製石斧。装着のための袢りを有するものはない。1点を除きすべて黒色片岩製である。

磨製両刃石斧

平面形は両側辺が緩やかに張り出し、断面形態は正円に近い楕円形を呈する。刃部は両面から研ぎ出すが、片側からやや強く研ぎだしているため、側面から見ると刃先が中心からずれて大きく偏っている。伐採斧では側面から見たときに刃先が中心線から大きくずれることはないこと、側面の形態がむしろ柱状片刃石斧に近いことから、加工斧として捉えたい。

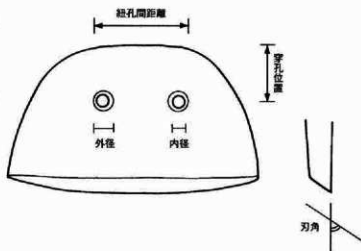
扁平片刃石斧

平面形態は幅広の長方形を呈する、薄身の片刃石斧。

石慮丁

石慮丁は4点出土した。いずれも磨製石慮丁である。形態は長方形もしくは楕円形態のものが1点、

直線刃半月形態の破片が3点である。削器に分類した(S59)は器表に摩滅による光沢が顕著に認められたため、稲の収穫によるコーングロスの発達とみだが、高倍率下の顕微鏡観察では、イネ科植物収穫の証左は得られなかった。



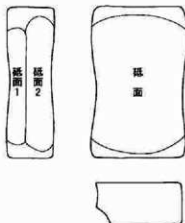
第53図 石慮丁の計測方法

石皿・台石

15点出土した。石皿と分類したものは、扁平な円盤を利用して、表面に摩滅による凹みもしくは平坦面が認められるものである。

砥石

33点出土している。図化したのは14点である。共存遺物がほとんどないために、確実な時期を押しえられなかった。石材を見ると6点が在地産で、残る8点は高砂市宝殿付近から入手している。



第54図 砥面の認識

2. 石器組成

第63表は器種別の出土点数と組成率を示したものである。この組成率が亀田遺跡の生業形態を如実に示すものとして捉えることは危険であるが、いくつか傾向を指摘しておく。

・磨製石慮丁が少ないこと

石器組成全体を見ると武器の比率が全体の3割弱、工具の比率

第63表 器種別出土点数

機能	器種	点数	組成率	機能	器種	点数	組成率
狩猟具 ・ 武器	石鎌	235	28.2%	調理具 ・ 加工具	石皿	9	1.1%
	磨製石鎌	2	0.2%		砥石	38	4.6%
	打製石剣	13	1.6%		すり石	19	2.3%
工具	石錐	17	2.0%		凹み石	4	0.5%
	削器	103	12.4%		台石	5	0.6%
	楔形石器	189 (665)	22.7%		(砥石)	33	
	加工痕ある剥片	97	11.6%	祭祀具	磨製石剣	3	0.4%
	使用痕ある剥片	61	7.3%	石屑	石核	2	
	磨製石斧	31	3.7%		分割原石	3	
農具	磨製石慮丁	4	0.5%	剥片	多量		
漁労具	石錐	4	0.5%				

が6割弱。農具である石廬丁が出土した石器の中で占めている割合は低い。この時期の集落における同様の傾向は、立地条件は異なるものの三田盆地の遺跡において提示されており、その背景に、集落の生業における水稲耕作の比重、代替産物の存在、などの問題が想定されている。4点という数字が多いか少ないかという評価は、播磨地方が打製石廬丁を併用する地域であることを念頭に置いて下さねばならないであろう。ただ、定型化した打製石廬丁の出土は認められない。

・削器が比較的多く出土していること

出土した削器は、定型化したものではなく大きさもまちまちである。これらの削器の中に穂道具が含まれている可能性は考えられる。削器の機能を特定することは難しいが、固定的な使用方法ではなく、「切る」、「削る」といった作業を要するあらゆる局面で用いられていたものと推察される。また、形態差と機能差はイコールではなく、その相関は弱い。むしろ、得られた剥片の形態に規定されている部分が多いと思われる。

・多量の楔形石器の存在

分類基準にもよるが、同じ方法でおこなった三田市有鼻遺跡でも180点出土しており、同時期の集落において一般的に用いられたものと考えられる。いわゆる階段状剥離が認められる剥片の数は600点を超えるが、指でつまむのに十分な大きさを有するものに限れば189点に絞られる。この器種は、剥片を成形してつくり出すのではなく、剥片を楔として使用し使い捨てるといったサイクルの中で生じるものと考えられる。

・銅剣型石剣の存在

銅剣型石剣は畿内を中心として分布し、西播磨地域における出土は当遺跡がその2例目となる。精神的文化の波及を示すものとして注目される。

出土した2点の銅剣型石剣は質の良い黒色の砂質頁岩とやや質の悪い明るい灰色を呈する粘板岩をそれぞれ用いている。このうち、黒色の砂質頁岩製のものは龍野市域でも採取できるが、西播磨地域での出土例が極めて少なく主体的な生産がおこなわれていた可能性は現時点では低いと言わざるを得ない。畿内地方で製作されたものが持ち込まれたものと考えたい。

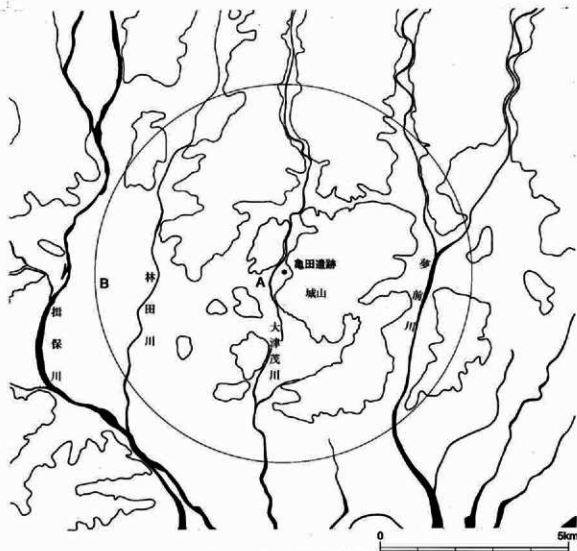
3. 亀田遺跡における石器生産

ここでは出土した石器の石材利用状況を把握し、さらに産地との関係から地域全体の石器生産について触れておく。

産地の分類

出土した石器に利用されている石材を産地との距離によって以下の3つに分けることができる。

1. 遺跡の周辺 遺跡の周りを取り囲む山あるいは川原などで採取可能な石材。(産地分類A)
花崗岩、花崗斑岩、閃雲母花崗岩、アブライト、花崗閃緑岩(城山など)
流紋岩質火砕岩、流紋岩質凝灰岩、凝灰質砂岩(大津茂川川原)
2. 遺跡の近隣 遺跡を中心に半径5kmほどの範囲で採取可能な石材。(産地分類B)
閃緑岩、斑輝岩、黒色砂質頁岩、安山岩質火砕岩、チャート(林田川川原)
凝灰質砂岩、石英斑岩、流紋岩質火砕岩、流紋岩、ヒン岩(揖保川川原)
黒色粘板岩、(砂質頁岩)(龍野層群)
3. 遠隔地の石材(産地分類C)



第55図 亀田遺跡と石材産地

サヌカイト（金山、岩屋、二上山）
結晶片岩、黒色片岩（徳島市域など）
凝灰岩（神戸層群）
凝灰岩（宝殿付近）

石材利用の実態と石器の生産

ここでは、亀田遺跡を中心に、当該地域の石器生産の状況についての把握をおこないたい。
まず始めに、石材産地と器種との相関を確認しておこう。
産地分類Aとした石材を利用するのは、白石、敲石、磨石、石鏝といった礫石器の類である。
産地分類Bに属する石材を利用するのは、大型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、砥石の一部である。
産地分類Cに属する石材を利用するのは、打製石器類、柱状片刃石斧、磨製石筥丁である。

遺跡周辺および近隣の石材利用

亀田遺跡は大津茂川から揖保川流域にわたる揖龍平野の北東端に位置する。この地域でほかに石材の鑑定がおこなわれている例は養久山・前地遺跡（奥田1995）がある。ここでの石材利用状況を見ておきたい。出土した器種は石鏝、打製石筥丁、削器、石斧、磨石、白石、投弾、扶人柱状片刃石斧である。これらの石器に用いられた石材のうち、磨製石器に関しては全て揖保川の河原で採取された可能性が高いことが示唆されている。打製石器はおそらく讃岐産のサヌカイトであろう。器種と石材の相関を整理しておく、いわゆる礫石器、石斧、柱状片刃石斧ともに遺跡の近隣より入手しているということになる。

亀田遺跡との主な相違点は、礫石器、および柱状片刃石斧の入手地点である。また、共通しているのは磨製石斧（伐採斧）の石材採取地点である。

礫石器はそれぞれの遺跡の周辺で獲得している。これらの石器がそれほど材質を選ばないうえ、必要にして十分なものが近隣で採れるためである。集落の近隣で全く石が拾えないような条件でもないかぎり、白石に用いるような大きな礫をわざわざ運搬することはなかったであろう。

磨製石斧は共に揖保川～林田川流域から石材を入手していた状況が確認できる。弥生時代における磨製石斧の製作は、福岡県今山遺跡（下條1985）、北九州市の高機型石斧（梅崎1998）、長野県榎田遺跡（町田1999）などのように良質の石材産地近辺で生産されたものが配布される状況が見られる。これらの石斧の流通圏は一様には広い。

さて、揖龍地域の場合はどうか。まずその流通圏を確認しておきたい。揖龍平野では亀田遺跡、養久山・前地遺跡といった東西の辺境より出土していることから、ほぼ全域に行き渡っていたと考えてよからう。ただ、夢前川以東へ輸出されるといったような、地域を超えての流通は現時点では確認できていない。今後の資料の増加を待ちたい。そこで問題となるのは、石斧の石材がこの揖龍地域の各集落にどのような形でたらされたか、あるいはどこで製品に加工されたか、という点である。まず、石材が採取地点である揖保川、林田川の流域で、石斧製作を集中的におこなった状況を確認できる事例はない。むしろ、当地域における石斧生産が川原石を原材料としていたこと、すなわち、比較的広汎な地域に散布する礫を拾得する状況が想定されるため、石材産地の独占的な支配がおこなわれていたことは考えにくいことから、産地を共同利用し、製品化は各集落単位でおこなっていたものと考えたい。

遠隔地の石材利用

打製石器はサヌカイトを利用するが、そのほとんどは讃岐産のものである。出土した分割原石には、No. I S149・150のような手のひら大の、No. I S151のような大型のもの、大きさにいくつかわりエーションが見られる。これは産出地において、こうした幾種類かの分割原石が搬出された事を示すものと思われ、同様の傾向は玉津田中遺跡でも見られる。

さて、出土したサヌカイトにはわずかではあるが、「松の木遺跡群」と呼ばれるサヌカイトの一群がみられる。これについては、今後の事例増加を待ちたい。やはり少数ながら認められるのは二上山産の一群である。現時点で確認できるのはすべて製品で、石鏃10点、石鏃2点、楔形石器6点、剥片石器2点である。ここで、二上山産石材が、持ち込まれた契機について整理しておきたい。

ここで注目したいのは、5 Aと分類した石鏃である。この切っ先の鋭い肉厚の石鏃は、全て二上山産の石材を用いており、同様の型式は讃岐産では見られない。この石鏃の由来については、3つの理由が考えられる。

- (1) 二上山産の石材を入手し集落内で加工した
- (2) 戦闘により射ちこまれた
- (3) 製品が持ち込まれた。

当遺跡では、剥片および剥片石器には二上山産の石材はほとんど含まれていない。たしかに楔形石器を含めると8点二上山産の剥片石器は存在するのであるが、出土した讃岐産剥片の総量からすると、微々たる量と言わざるを得ない。つまり、恒常的な石器素材として安定した供給がおこなわれていたことは到底想定し得ないのである。このため(1)に理由を求めるのは難しい。(2)に理由を求めるにしても、やはり絶対的な出土量が少ないこと、打製石剣には畿内的な特徴を示すものが全く見られないことから、積極的に考えにくい。そうすると(3)の理由を想定するのが最も妥当である。とくに、銅剣型石剣の存在を考慮すれば、この地域が畿内的な精神世界に組み込まれていたことは十分に首肯し得る。かつ土器の様相を見ても、非常に畿内色が穏やかに浸透している状況が伺われるのである。同時期の集落である前出の養久山・前地遺跡でも絵画土器の出土を根拠に畿内との強い結びつきが想定されている(岸本1998)。このような東方からの物質・精神両面での文化的な波及がこの地域まで達するようになったことを示すもの理解される。

磨製石器では、柱状片刃石斧と石応丁が遠隔地の石材を用いて製作されている。柱状片刃石斧は方柱状の形状をつくり出さねばならないため、石材の指向性が非常に高い器種であるといえる。このため、畿内地方では全般に結晶片岩が採用されており、サヌカイトと同様その流通網が確立されていたと考えやすい。ただサヌカイトと異なるのは、分割原石が流通するのではなく製品そのものが選ばれた可能性が高い点である。これは分割原石、そしてチップなど製作時の石屑を消費地で確認できないためである。当遺跡でもNo. I S107のように大型のものが出土しているが、こうした大型品は石材が潤沢に存在する産出地近くにその製作地があったと考えたい。(西口2000)

石応丁については、1点は近隣で採取可能な粘板岩を用いるが、残る3点についてはすべて結晶片岩を利用している。石応丁の生産は、徳島から石材を搬入しておこなっていたことになるが、こうした遠方の石材に依存する生産状況が恒常的なものであると結論づけることには慎重でありたい。例えば畿内地方では、石包丁の製作にあたって共通の石材選択をおこなう地域をブロックとして認識することができ(高木1998)、亀田遺跡周辺での製作および石材選択状況の認識が困難であるため、当遺跡の状況

を客観的に位置づけることが難しいからである。また、打製石包丁などの、穂摘みの機能を有すると考えられている他の器種との関係や役割分担が具体的に把握されていないため、当地域における磨製石包丁の穂摘具としての評価が定まっていないことも、出土量の少ない中で結論を急ぎたくない理由である。西播磨全域での磨製石包丁の生産状況のなかで、改めて評価したい。

銅剣型石剣の製作地が、地元かあるいは畿内地方のいずれと捉えるかは畿内という文化圏との相対性を測る意味で重要な問題である。石材産出地を見るといずれも能野層群より採取可能とされるが、No. II S21のような良質のものが入手できるかどうか、またその製作技術が簡単に共有されるようなものであるかどうか、こうした懸念から、地元生産をおこなっていたと断言することは避けておきたい。いずれにせよ、祭祀を介した共通の精神世界に触れる状況は留意されていたとみてよい。

3. まとめ

以上、亀田遺跡出土石器について概観した。

器種構成に関しては多寡はあるものの、畿内地方の集落とほぼ同じと見ることができる。欠落している器種としては、大型直縁刃石器、環状石斧、畿内型尖頭器があげられる。組成のなかでは、削器や加工痕ある剥片などの打製工具類が比較的重きを占めていることが指摘できる。

生産と流通に関しては、石材の産地特定をおこなったことで次のような成果が得られた。打製石器に関して、サヌカイトについてはそのほとんどが讃岐産のものを利用する。例えば、淡路産の石材が極めて少ないなど、東播磨の美乃利遺跡、玉津田中遺跡とは異なる様相を呈している。二上山産に関しても石材を入手して当地で加工していたとは考えにくい。当遺跡、ひいては当地域が讃岐との太いパイプを持っていたことを示唆するものであろう。磨製石器では、礫石器は遺跡周辺から、伐採斧は近隣から、加工斧は遠方からそれぞれ石材を入手していたことが確認できた。器種とその石材産出地との関係を把握できたことは大きな成果である。当地域の石器生産体制を解明する一助となろう。

対して今後追求すべきは、当遺跡はもちろん近隣でもはっきりとした工房としての性格を有する事例が発見されていないことから、その具体的な姿の解明である。伐採斧の製作状況をより具体的に示すことや、先に挙げた磨製石包丁の評価などが挙げられる。これは石器組成の中で高い割合を呈する、削器を始めとした打製の工具との機能分担なども視野に入れて考えていかなければならないであろう。

今回、西播磨においてまとまった資料を提示することができた。この成果が今後の西播磨地域の弥生石器研究の一助となれば幸いである。

(引用・参考文献)

- 山本 誠1998「石器」『佃遺跡』兵庫県教育委員会
岡村道雄1983「楔形石器」『縄文時代の研究』5—道具と技術—雄山閣
奥田 尚1995「養久山・前地遺跡出土石器の石種とその採取地」『養久山・前地遺跡』龍野市教育委員会
下條信行1985「伐採斧」『弥生文化の研究』5—道具と技術—雄山閣
梅崎恵司1998「東北部九州における高機型伐採石斧の生産と流通」『網干善教先生古希記念考古学論集』
上巻 関西大学文学部
町田勝則1999「磨製石斧の評価」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—長野市内その10—榎田遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センターほか

- 菅榮太郎1985「石線資料の型式および製作技法の編年的検討」〔長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅲ〕
（財）大阪市文化財協会
- 岸本道昭1998「絵画土器の復元と諸問題」〔養久山・前地遺跡〕熊野市教育委員会
- 西口陽一2000「緑色(黒色)片岩製柱状片刃石斧」〔あまのともしび〕原口正三先生古希記念論集
原口正三先生の古希を祝う集い事務局編
- 高木芳史1998「畿内地方の石包丁の生産と流通」〔国家形成期の考古学〕大阪大学考古学研究室
楠宣田佳男1999「石器」〔北摂ニュータウン内遺跡発掘調査報告書Ⅳ〕
一有鼻遺跡(1) 一兵庫県教育委員会
- 高木芳史2000「石器」〔北摂ニュータウン内遺跡発掘調査報告書Ⅴ〕
一有鼻遺跡(2) 一兵庫県教育委員会
- 菱田淳子1998「石器」〔美乃利遺跡〕兵庫県教育委員会

第6節 亀田遺跡出土石庖丁の使用痕分析

はじめに

近畿地方ではかつて松山氏が石器の機能解明に対する新しいアプローチとして使用痕分析を提示した(松山1992a・1992b・1995)ものの、その後、この手法を用いた研究、分析、観察がおこなわれた例はほとんどない。齋野氏による大型直縁刃石器の研究(齋野1994・1995)、あるいは、齋野・松山・山村氏らによる大型石包丁の使用痕研究(齋野他1999)などのなかで若干の資料が扱われているに過ぎない。

筆者は、分析の多角化によって石器の理解が深化するものと考えている。使用痕の観察、分析をおこなうことで、従来盛行している形態や製作技術などの分析検討だけでは実証しにくい、「石器の機能」に立ち入って考察することが可能になる。

こうした立場から、出土した石庖丁について、金属顕微鏡をもちいた使用痕観察・分析をおこなった。いわゆる高倍率法と言われる方法で、使用光沢面の観察により機能、使用対象物を推定する。

資料の概要

分析の対象としたのは、磨製石庖丁3点である。石材はNo.Ⅱ S53・55が結晶片岩、NO.Ⅰ S114が粘板岩である。

使用痕観察の方法

分析の方法

観察はまず全体を概観したうえで、光沢強度分布を把握するために一応の基準を設定した。無、弱、中、強の4段階で図示する。片面を等間隔に8カ所走査し光沢の有無、強弱を記録していった。また、光沢面の分類については阿子島、梶原による分類(梶原・阿子島1981、阿子島1989)を参考にしている。強度分布図作成にあたっては以下の基準に沿った。

無・・・光沢が認められない

微・・・小さいパッチが点在する(20ミクロン程度以下)

弱・・・小さいパッチがまとまって点在する、光沢が点在する(100ミクロン以下)

中・・・大型のパッチが点在する。(100ミクロン以上)、パッチが連続して面をなす。

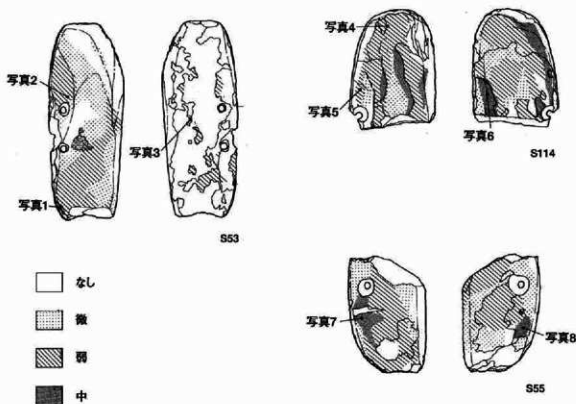
使用痕の観察には落射照明装置付金属顕微鏡(OLYMPAS BX60, BX30M)をもちい、100倍、200倍、500倍の各倍率で観察をおこなった。観察対象は使用光沢面(ポリッシュ)である。各資料とも、観察前にエタノールによる洗浄をおこない、手脂などの汚れを取り除いた。写真撮影は顕微鏡用撮影装置SC35、撮影レンズはPE2.5を使用し、フィルムはISO400リバーサルフィルム(FUJICHROME)を使用した。

実際の観察にあたっては、刃部と背部の間を走査し光沢面の有無を観察・記録した。確認した使用光沢について、その特徴、分布範囲について記録し、写真撮影をおこなった。

観察の結果

資料1 磨製石庖丁(S53) 結晶片岩製

ほぼ完形の石庖丁である。両端は直線的で、刃部と背縁は緩やかに外湾する。刃部は両刃で刃角60°を測る。



第56図 磨製石虎丁の使用痕強度分布図

両面にわたって使用痕光沢面が認められた。これらはすべてBタイプに識別された。明るくなめらかな光沢面をもつ全体に丸みを帯びたパッチ状のものである。

a面では体部の左上半、細孔右上部部に相対的に強い光沢が分布する。刃部では左端および中央で使用痕光沢面が認められる。

b面は風化などのため器表の剥落が著しく、本来形成された使用光沢面の多くを失っているものと思われる。ただ、原初の面が遺存している部分では使用痕光沢面が広がっていることが多い。刃部は体部に比べると遺存状況は良いが、使用痕光沢面は見られなかった。研ぎ直しなどによるものと推察される。

資料2 磨製石虎丁 (S55) 結晶片岩製

およそ半分を欠失している。端部は2次的に折損したものである。直線刃半月形態に復元できる。刃部は両面から研ぎ出すがa面側にやや強く刃をつけてある。刃角60°を測る。

両面にわたって使用痕光沢面が認められた。Bタイプと、Bの接続する状態のものが確認された。Bタイプとしたものは明るくなめらかな光沢面をもつパッチ状のものである。

a面では刃部中央から体部中央、そして右上端部の体部と背縁がなす稜線付近にかけて使用痕光沢面が広がっている。

b面は体部のほぼ全面に使用痕光沢面が広がっているが、刃部にはまったく見られなかった。

両面とも100ミクロンを超える大型のパッチや、小さいパッチが接続するものは見られるが、接続して広く面を形成することはない。

資料3 磨製石包丁(S114) 粘板岩製

半分を欠失している。千枚岩質の石材で劈開性が高い、このため剥落した箇所も多く器表面はやや凹凸がある。刃部は両面から研ぎだしているが、刃付けはb面に大きく偏っておこなわれている。刃角53°を測る。刃先は欠けており遺存していなかった。

両面にわたって使用痕光沢面が認められた。AタイプとBタイプ、およびBタイプの連続する状態のものが確認された。Bタイプとしたものは明るくなめらかな光沢面をもつパッチ状のものである。当資料では表面に現れる節理面のなす筋に沿って使用痕光沢面が発達する状況がうかがわれた。

a面では縁辺を除くほぼ全ての箇所で使用痕光沢面が広がっている。刃先は欠失しているものの稜線から刃面にかけて使用痕光沢面が発達する。

b面は体部中央で使用痕光沢面が広がる。刃部にはまったく見られなかった。

まとめ

- ・タイプA、Bの使用痕光沢が認められたことから、イネ科植物の収穫をおこなったことが推測される。
- ・使用時の操作については、半損品あるいは遺存状況の悪さもあり、観察された使用痕から積極的に復元するのは困難であった。

今回の観察では非常に強い光沢が広がる箇所が認められた。相当使い込まれたものと思われるが、今後、実験を重ねることでその形成にかかる時間を把握し、出土遺物の使用頻度なども掴むことができよう。また、石材ごとに使用痕光沢の発達過程の差異を認識する必要もある。観察事例が増えれば、その比較検討をおこなうことで石器の使用に関する研究は大きく飛躍するであろう。今後、近畿地方でも使用痕観察事例が増加することを期待したい。

参考文献

- 松山 聡 1992a 「石包丁の使用痕」[第31回埋蔵文化財研究集会 弥生時代の石器—その始まりと終り—]
第6分冊 発表要旨・追加資料
- 1992b 「石包丁の使用痕」[大阪文化財研究] 第3号 (財) 大阪文化財センター
- 1995 「石器の使用痕分析」[研究紀要] vol.2 (財) 大阪文化財センター
- 斎野裕彦 1993 「弥生時代の大型直縁刃石器(上)」[弥生文化博物館研究報告]2 大阪府立弥生文化博物館
- 1994 「弥生時代の大型直縁刃石器(下)」[弥生文化博物館研究報告]3 大阪府立弥生文化博物館
- 斎野裕彦・松山聡・山村信榮 1999 「大型石包丁の使用痕分析」[古文化談叢] 42 九州古文化研究会
- 須藤隆・阿子島香 1984 「下ノ内浦遺跡SK2土壌出土の石包丁」[仙台市高遠鉄道関係遺跡調査概報3]
仙台市文化財調査報告書69 仙台市教育委員会
- 須藤隆・阿子島香 1984 「富沢水田遺跡泉崎前地区出土石包丁の使用痕」[富沢水田遺跡]
第1博病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書 仙台市教育委員会
- 阿子島香 1989 「石器の使用痕」考古学ライブラリー56 ニューサイエンス社
- 梶原洋・阿子島香 1981 「頁岩石器の実験使用痕研究—ポリッシュを中心とした機能推定の試み—」

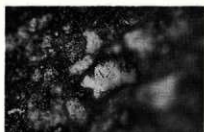


写真1

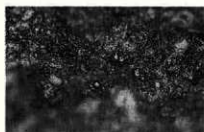


写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

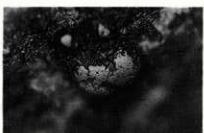


写真7



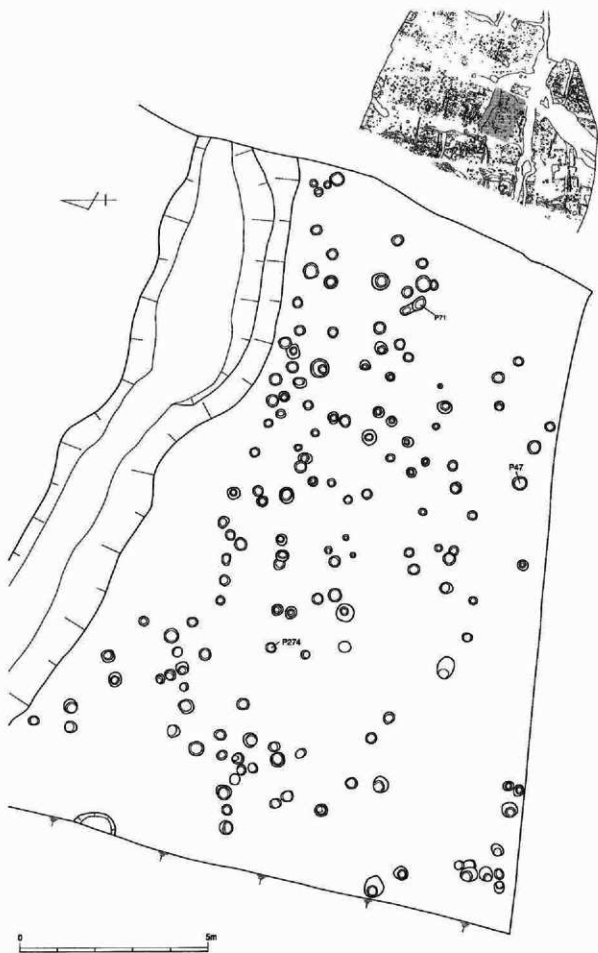
写真8

第57図 顕微鏡写真

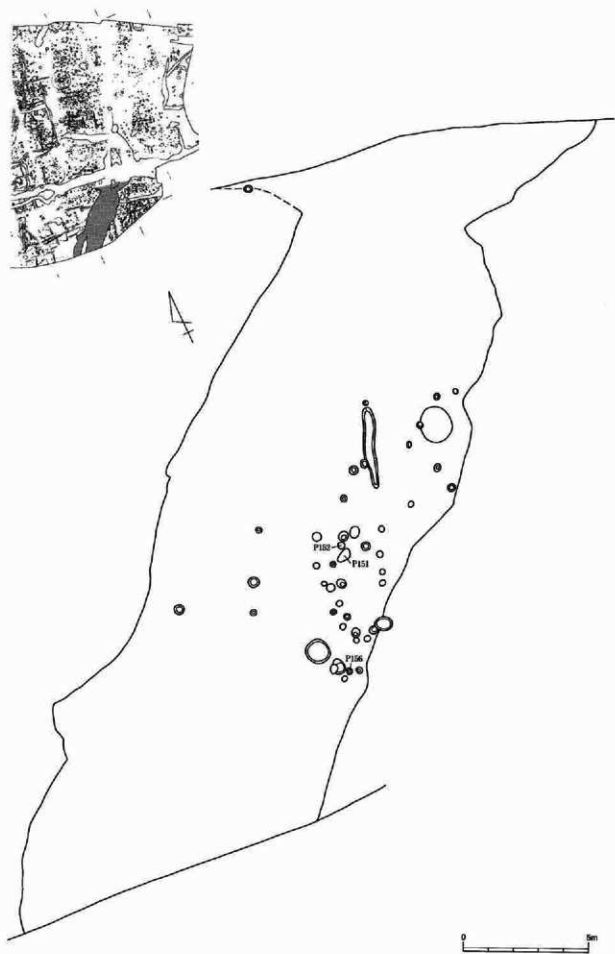


圖 版

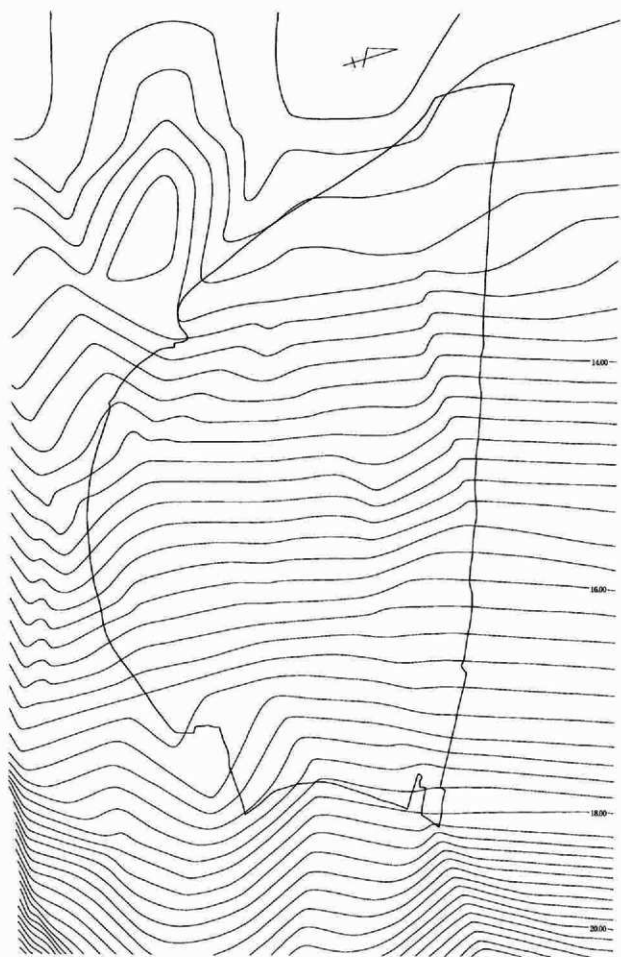




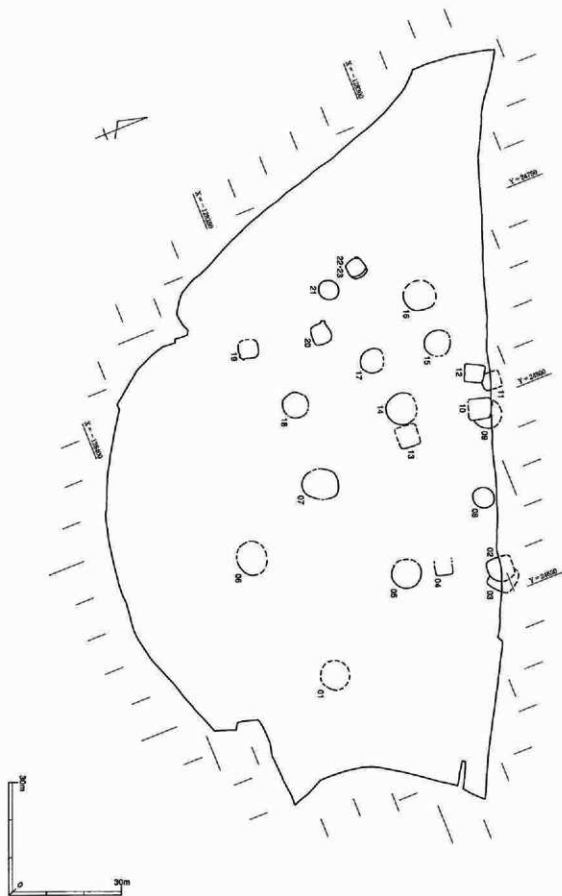
上層遺構 1



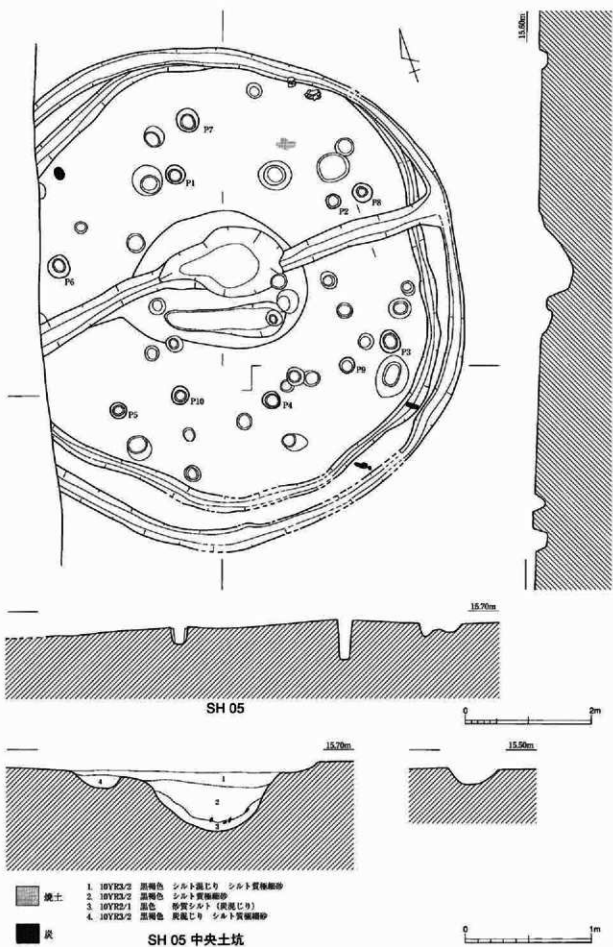
上層遺構 2

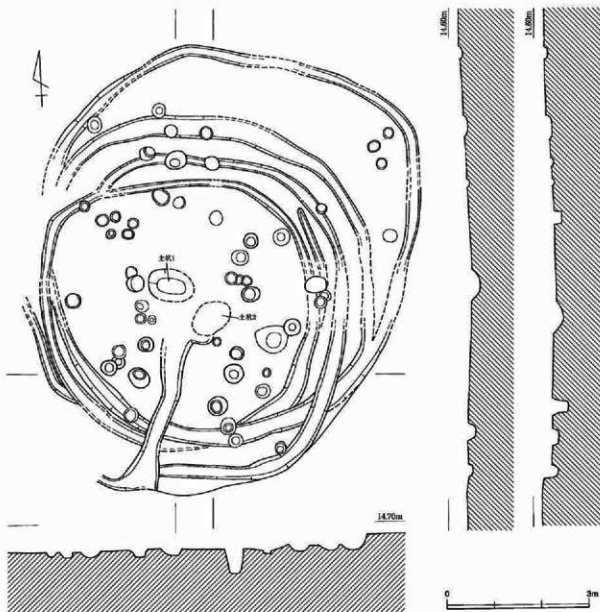


亀田遺跡微地形図

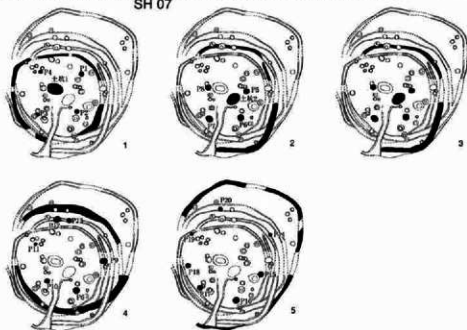


竖穴住居配置图

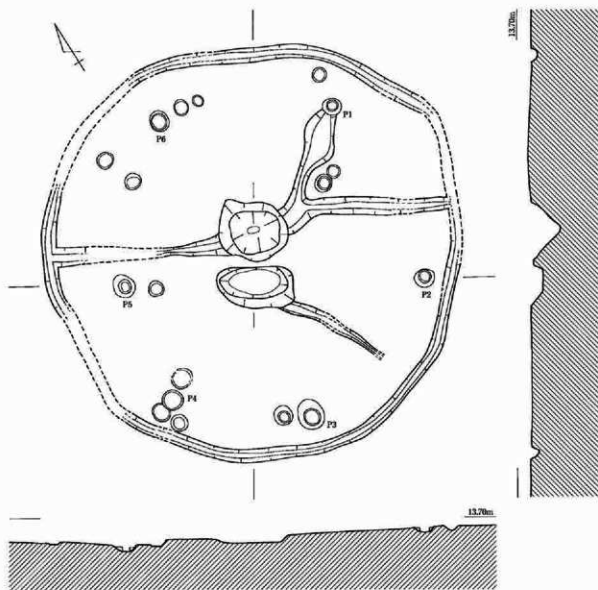




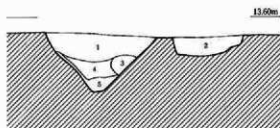
SH 07



竪穴住居2 SH 07建て替え変遷図



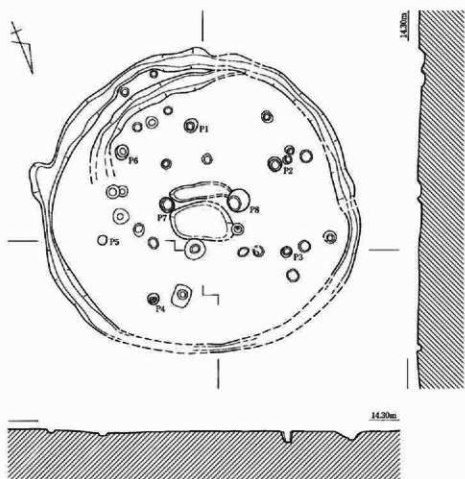
SH 15



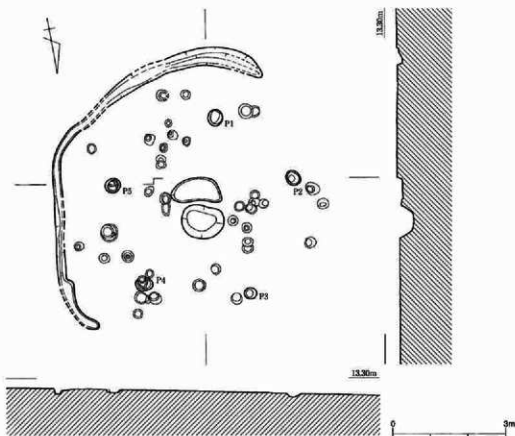
SH 15 中央土坑



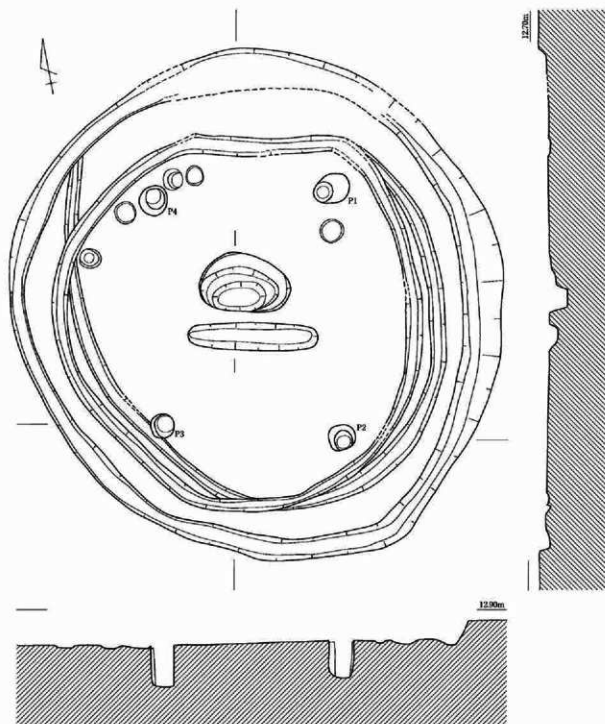
1. 5YR2/2 黒褐色 直径2-3mmロームブロックを多く含む
中～細砂混じりシルト質細砂
2. 5YR2/1 黒褐色 直径2-5mm, 3-5cm大ロームブロック,
中～細砂混じりシルト質細砂
(最少量含む)
3. 中～粗砂 (シルト混じり) 堆山ブロック
4. 10YR2/2 緑褐色 細砂～微細砂混シルト質細砂
5. 10YR2/2 黒褐色 シルト質細砂



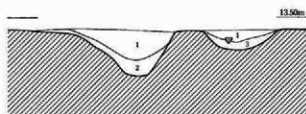
SH 14



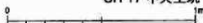
SH 16



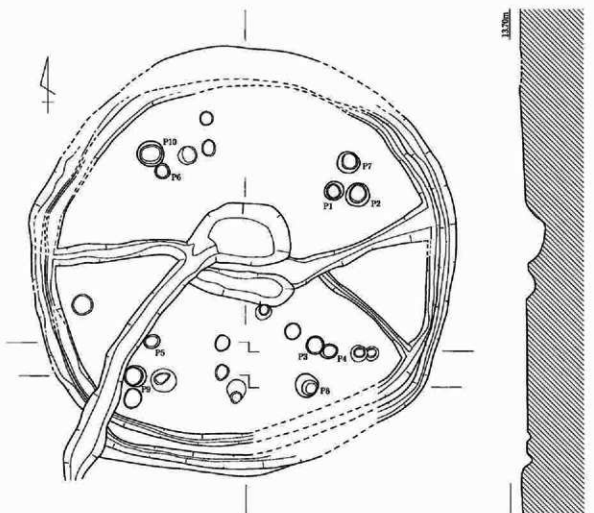
SH 17



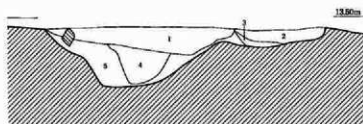
SH 17 中央土坑



1. 10YR5/6 黄褐色 シルト質細砂 (塵少量含む)
2. 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト
3. 10YR2/2 黒褐色 砂質シルト (炭粒)

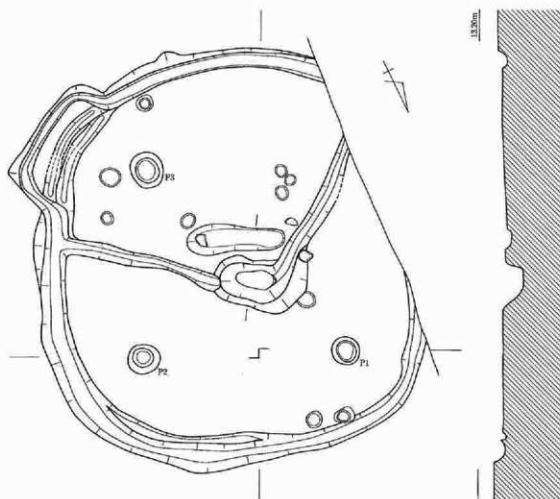


SH 18

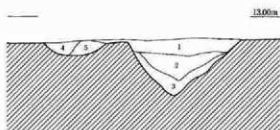


SH 18 中央土坑

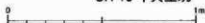
1. 5YR5/6 暗明褐色 シルト質微細砂 (砂礫 直径2-3mm少し含む)
2. 5YR5/1 黄灰色 シルト質微細砂
3. 5YR5/1 黄灰色 シルト質微細砂 炭をやや多く含む
4. 5YR5/1 黄灰色 シルト質微細砂 炭少量含む
5. 5YR5/1 黄灰色 シルト質微細砂 (5YR5/2 灰褐色 シルト質微細砂を含む、炭も少量含む)



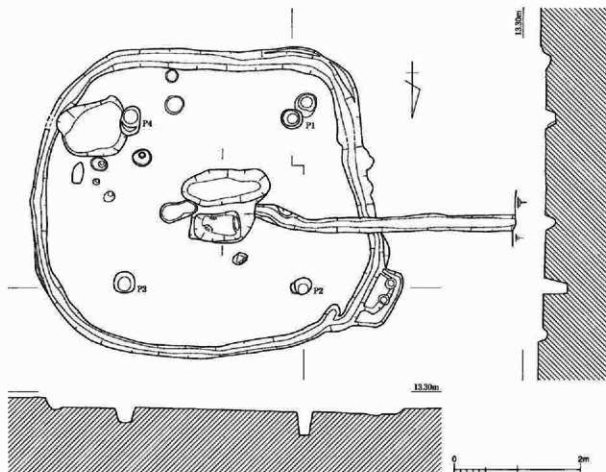
SH 19



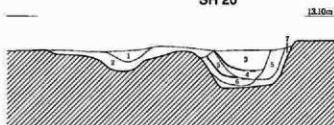
SH 19 中央土坑



1. 10YR4/4-6 褐色 シルト混じり(暗灰色) 粗砂、ロームブロック混シルト質細砂
2. 10YR3/1 黄褐色 粗砂、ロームブロック混砂質シルト
3. 2.5Y4/1 黄灰色 灰混じり、粗砂少量混入、無機砂質シルト
4. 10YR3/3 暗灰色 粗砂、ロームブロック少量混、灰混じり砂質シルト
5. 10YR4/4-6 褐色 粗砂、ロームブロック少量混、シルト質細砂

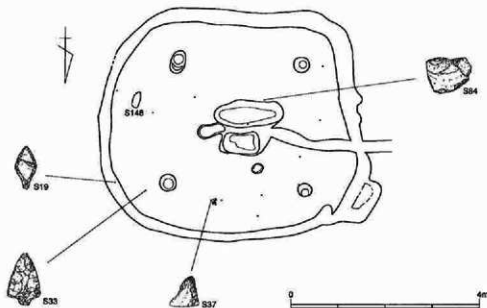


SH 20



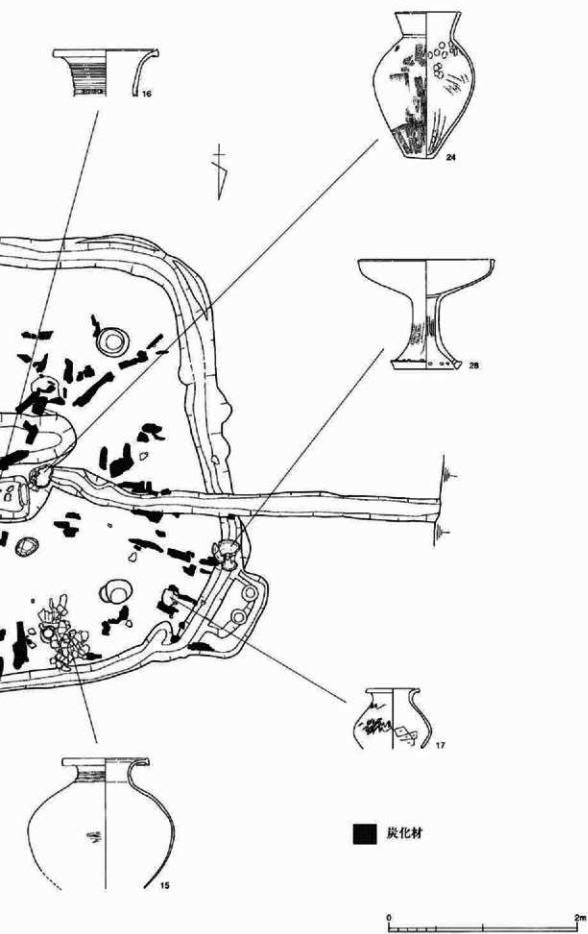
SH 20 中央土坑

- 13.10m
1. 7.5YR2/3 黒褐色 細砂～中砂 (粗砂若干含む) 炭粒粘土粒etc
 2. 7.5YR2/1 黒色 シルト質細砂 (中砂含む) 炭粒、4～60mm大礫
 3. 10YR5/2 灰黄褐色 細砂 (中礫砂含む) 炭土粒、炭粒が少量含まれ、堆山ブロック状の土が混入
 4. 10YR5/3 にごり黄褐色 細砂～中砂 炭粒、粘土粒少量
 5. 10YR4/4 褐色 中砂 (粗砂含む) 炭粒、粘土粒少量
 6. 10YR2/3 黒褐色 細砂～中砂 (粗砂含む) 炭粒、炭土粒
 7. 7.5YR3/1 黒褐色 細砂 (中砂含む)

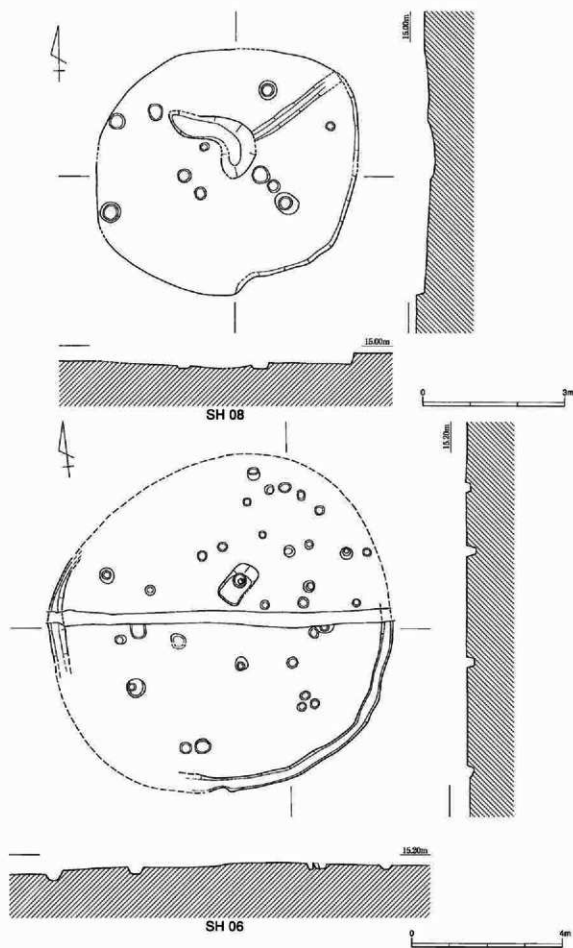


SH 20 石器およびサヌカイト剥片出土位置図

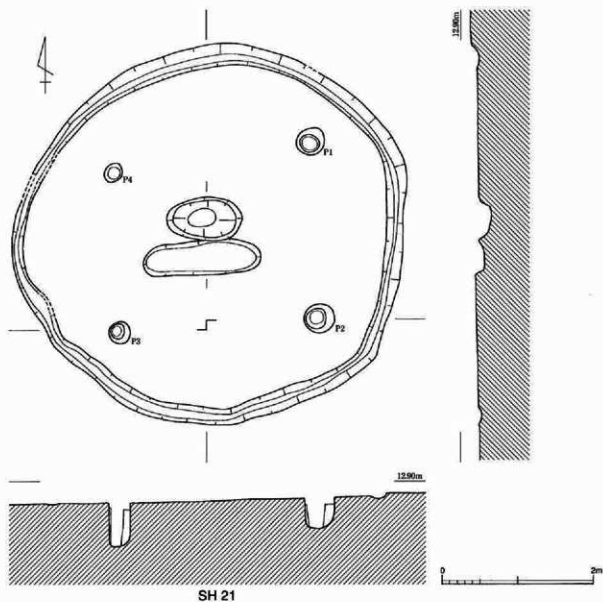




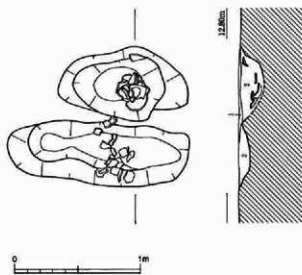
竪穴住居・SH 20遺物および炭化材出土状況



竪穴住居9

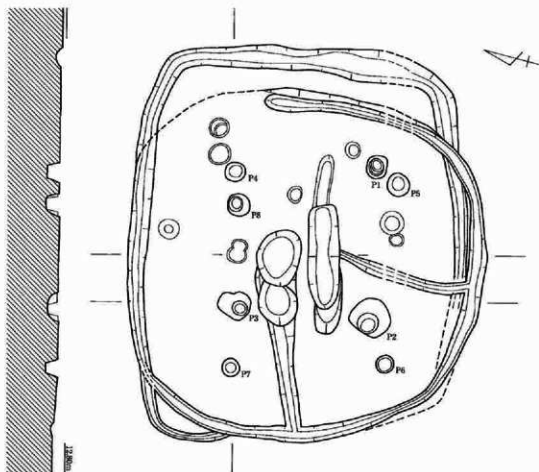


SH 21

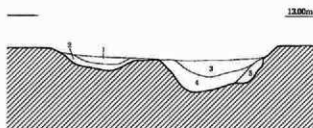


SH 21 中央土坑遺物出土状況

- 1. 包含層
- 2. 75YR2/2 棕褐色 砂質シルト
- 3. 75YR4/2 灰褐色 砂質シルト

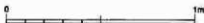


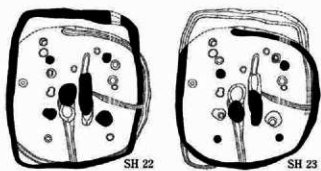
SH 22-23



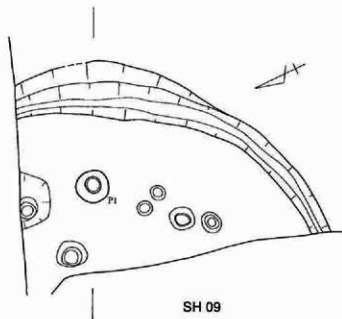
SH 22-23 中央土坑

- 1. 10YR4/2 灰青褐色 細砂 (中粗砂含む)
- 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト質細砂 (中粗砂含む)
- 3. 10YR2/3 暗褐色 細砂 (中粗砂含む)
- 4. 10YR2/1 黒色 シルト質細砂 (中粗砂含む)
- 5. 10YR3/1 黒褐色 細細砂 (中粗砂含む)

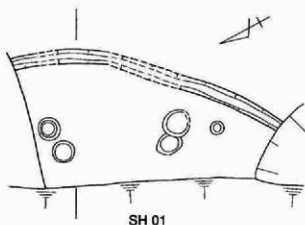




SH 22, 23 建て替え変遷図

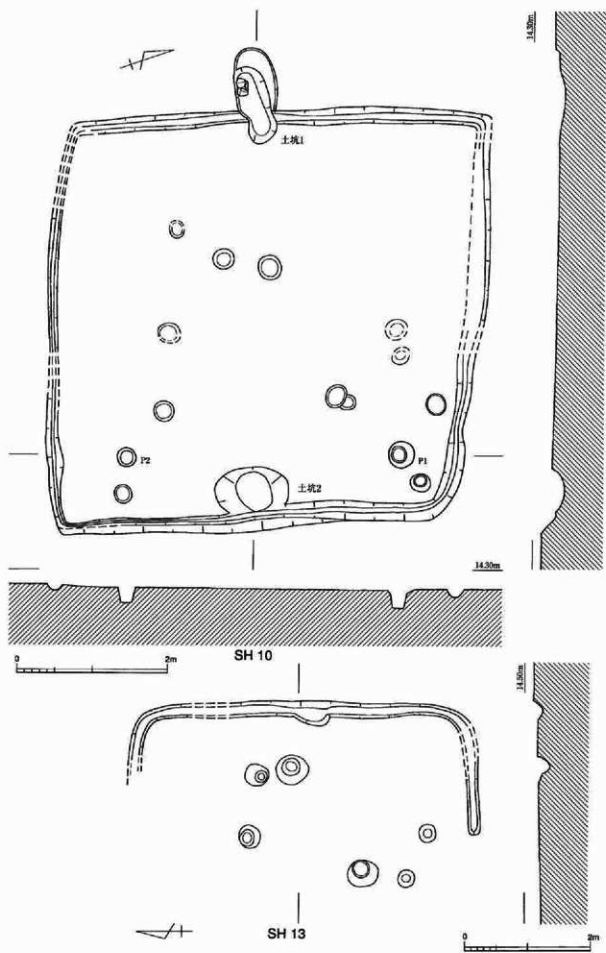


SH 09

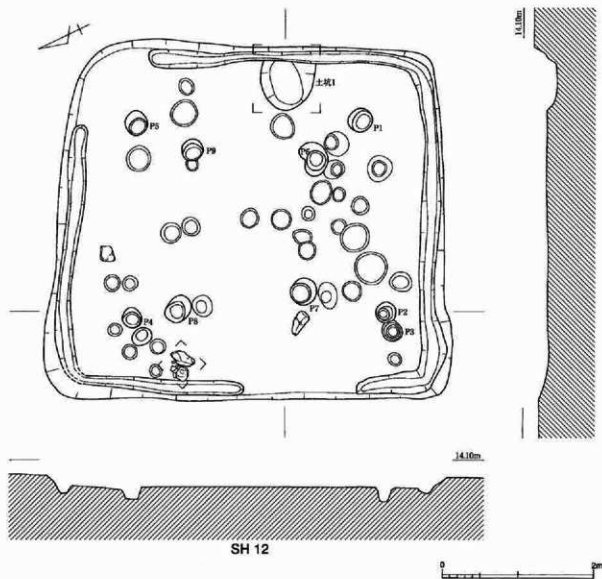


SH 01

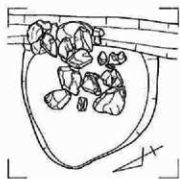




竖穴住居 13

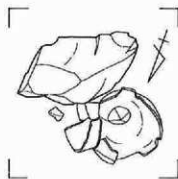


SH 12



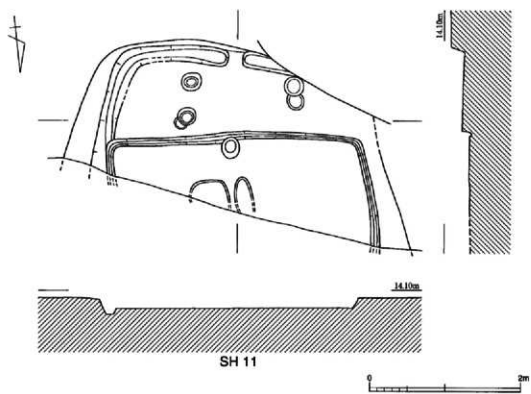
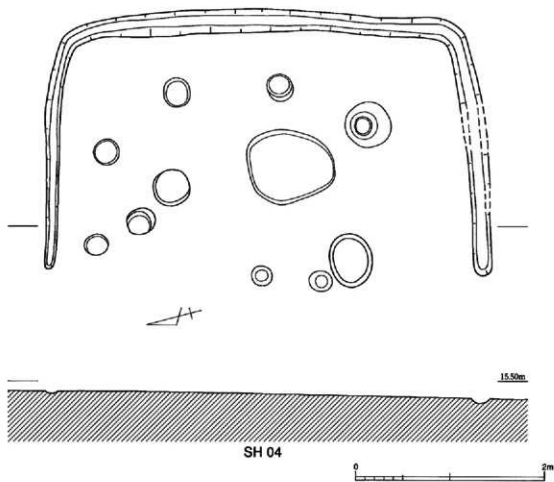
0 50cm

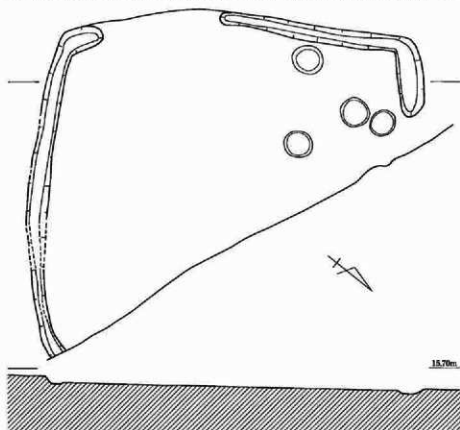
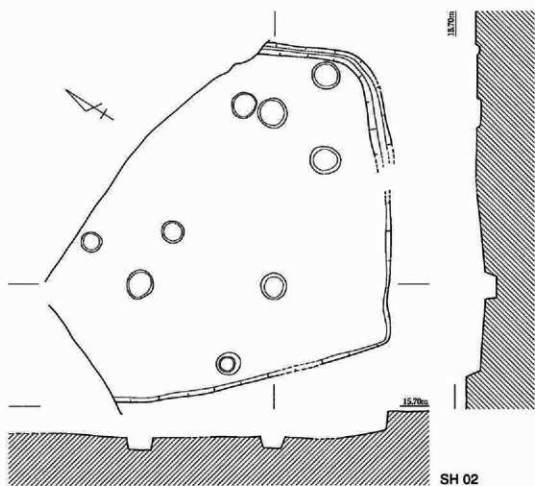
土坑1 上面礫および遺物出土状況



0 30cm

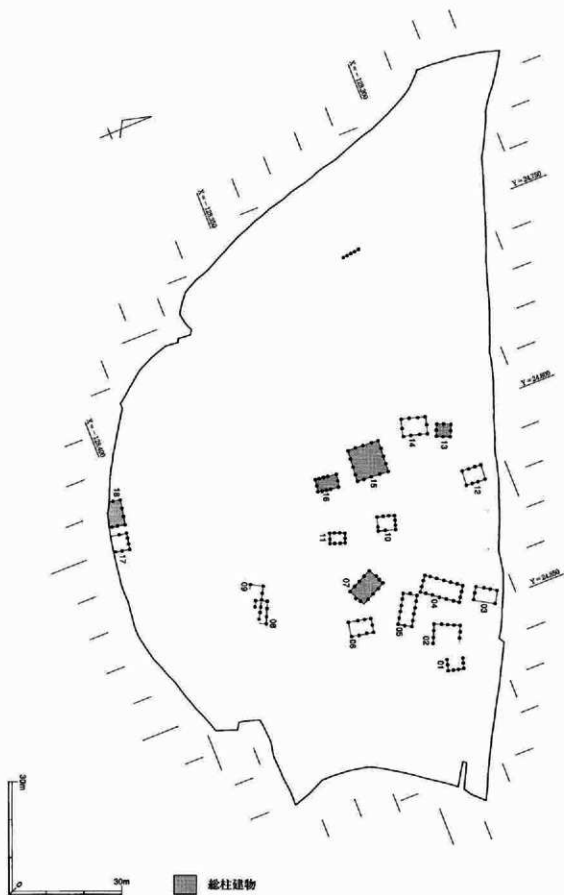
床面遺物出土状況



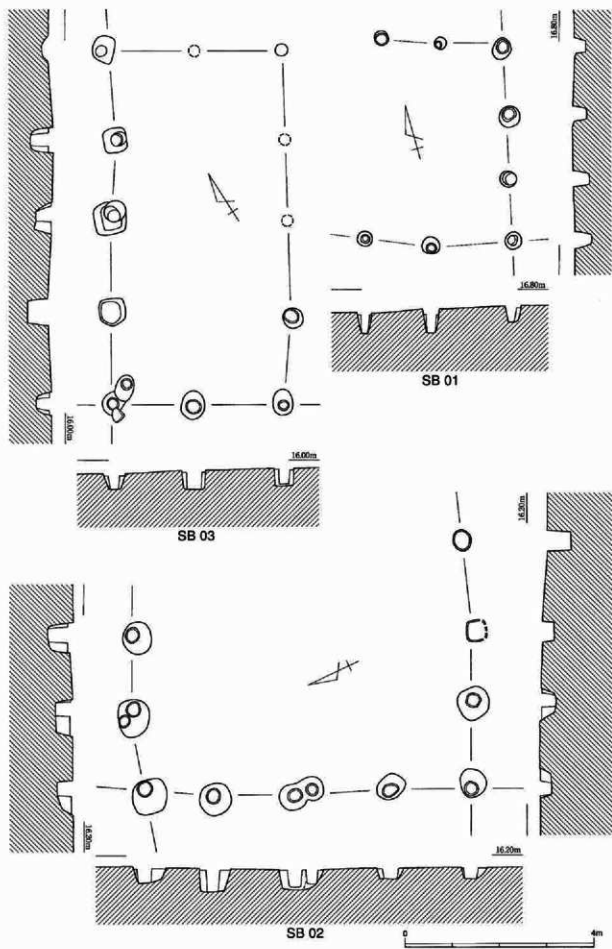


SH 03

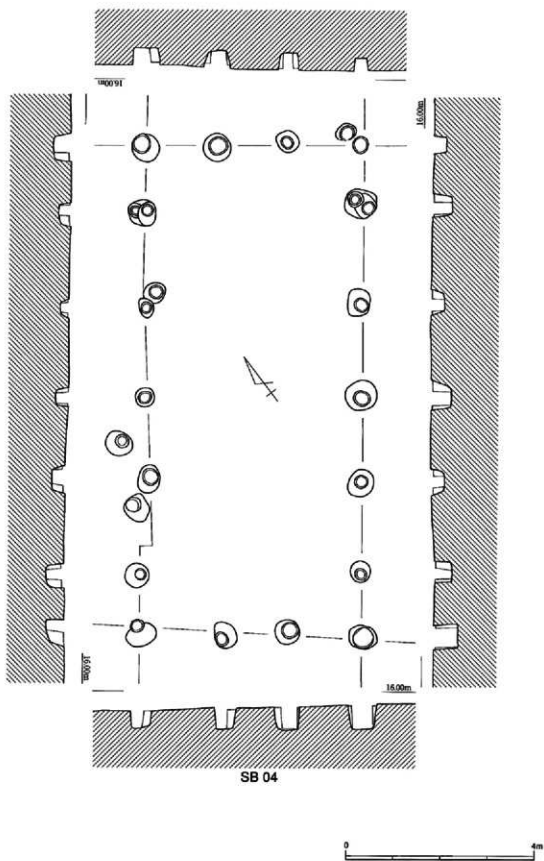




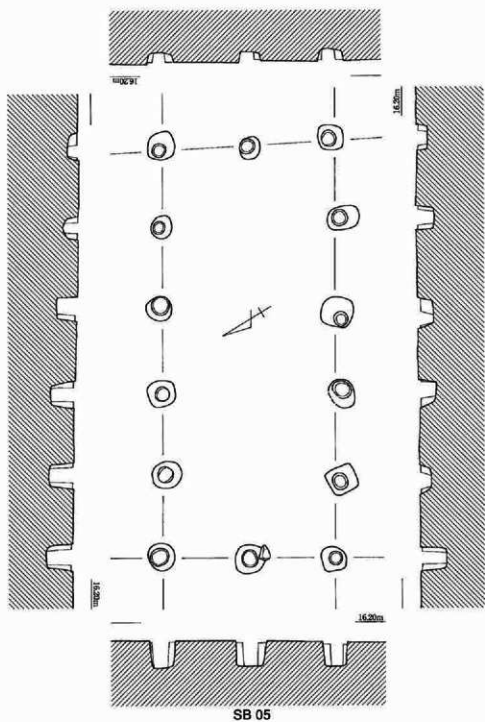
掘立柱建物配置図



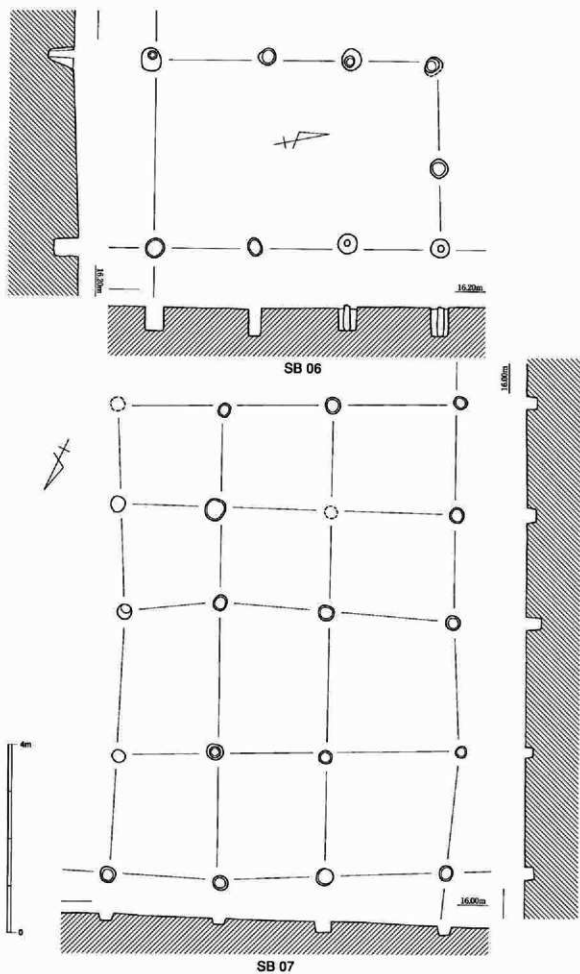
掘立柱建物 1



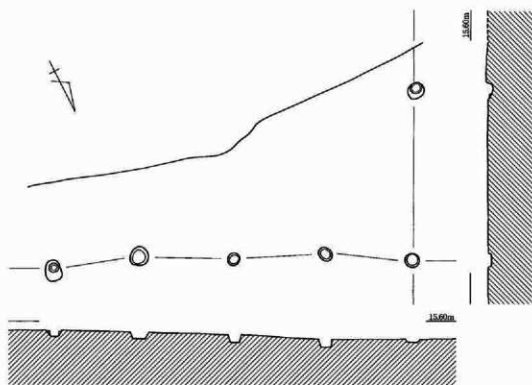
掘立柱建物2



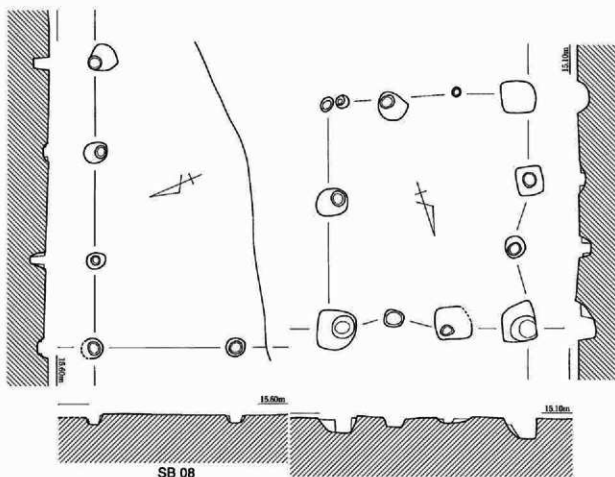
掘立柱建物 3



獨立柱建物 4



SB 09

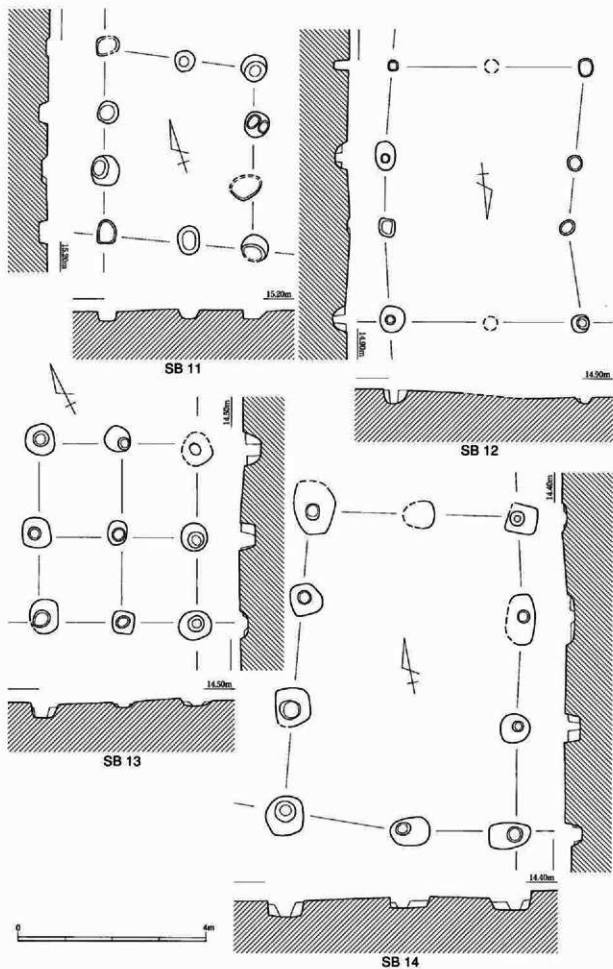


SB 08

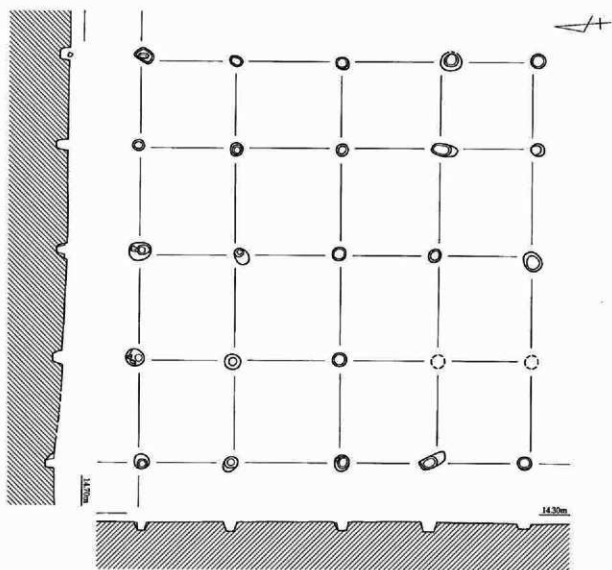
SB 10



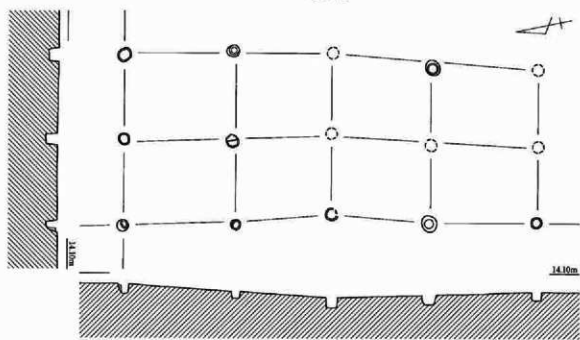
掘立柱建物 5



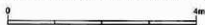
振立柱建物6



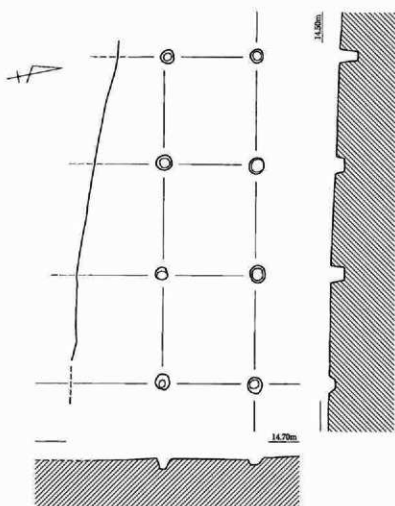
SB 15



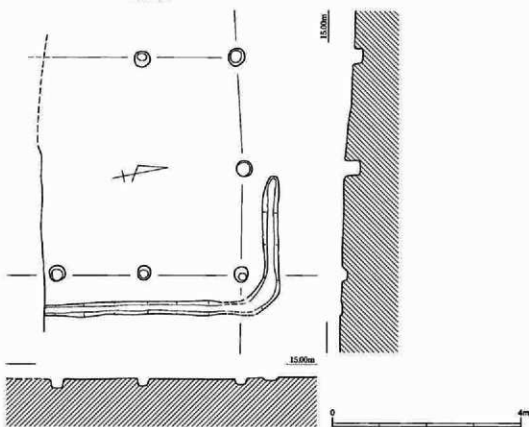
SB 16



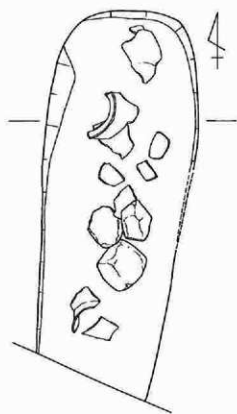
掘立柱建物 7



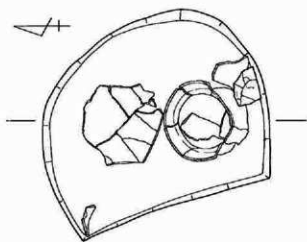
SB 18



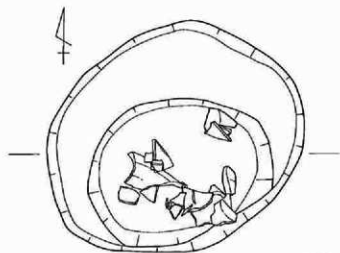
SB 17



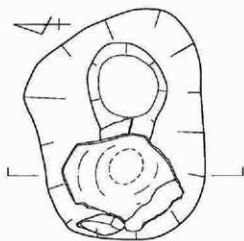
SK 207



SX 06

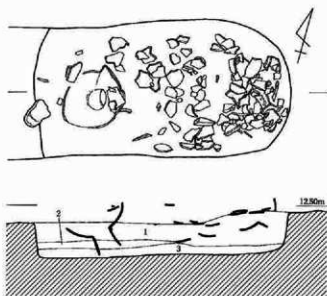


SK 357



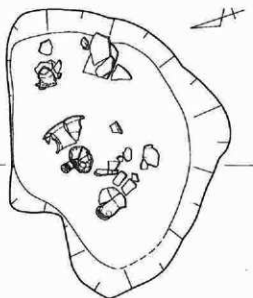
SK 356





SK 455

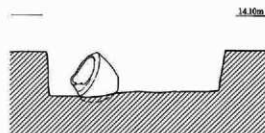
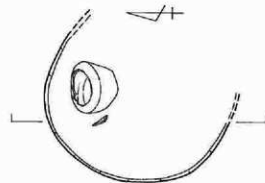
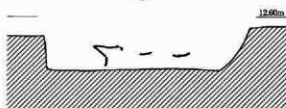
- 1. 2/2 灰褐色 中砂混練砂灰多し
- 2. 2/2 灰褐色 中砂混練砂 (ベース混じりか?)
- 3. 2/1 褐色 中砂混ソルト質練砂



SK 458

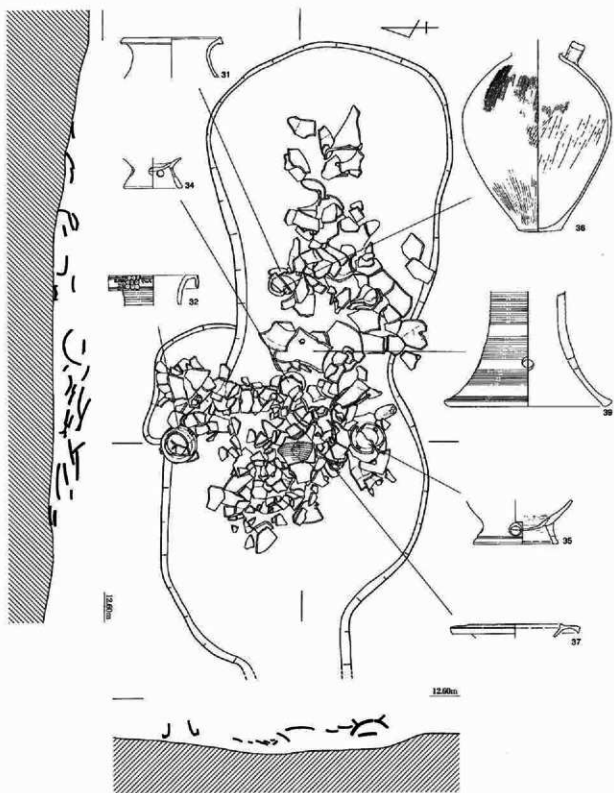


SK 251



SK 359

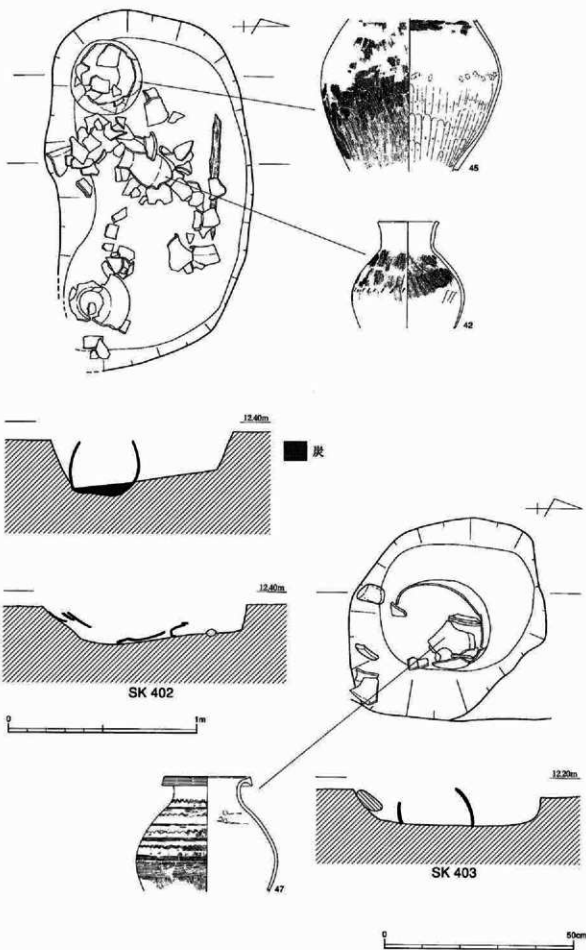




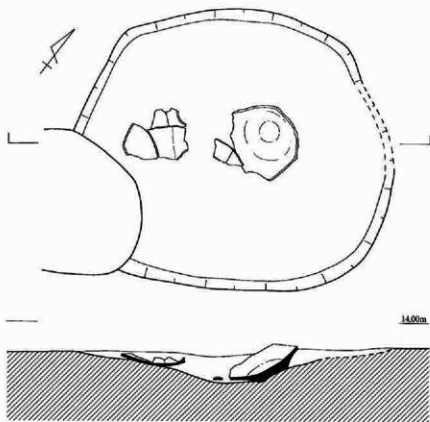
SK 401



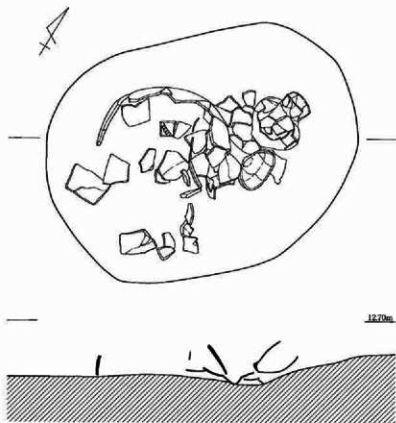
土坑3



土坑4

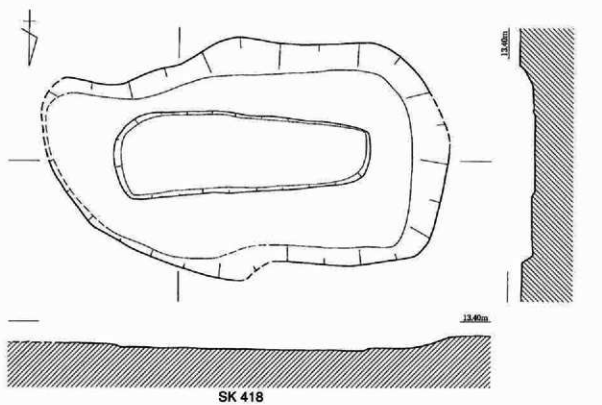
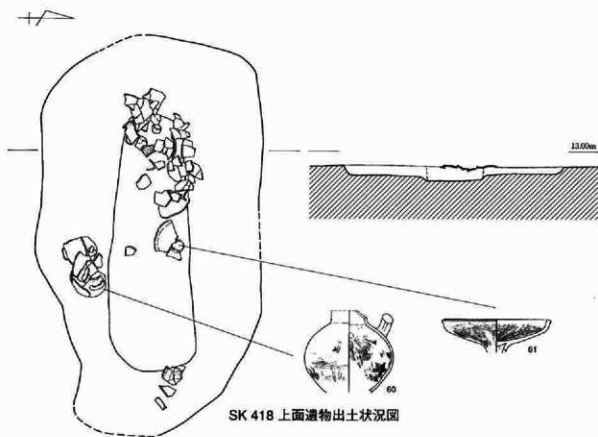


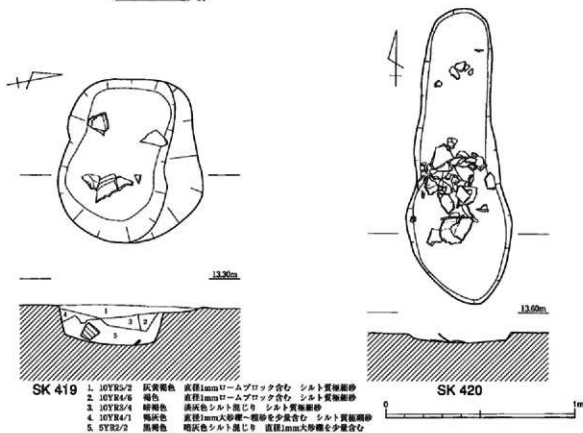
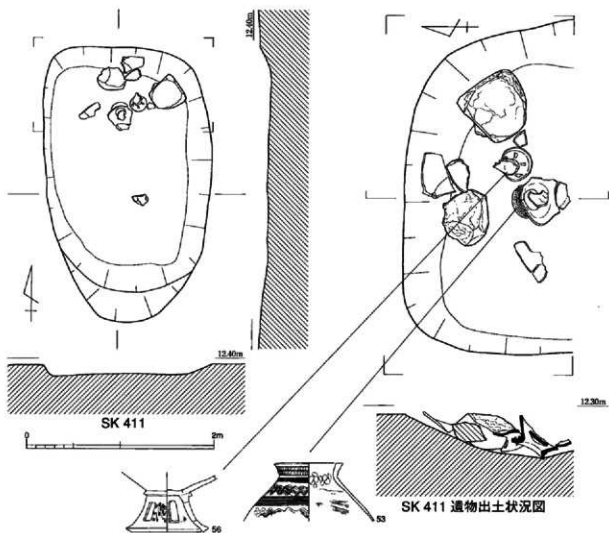
SK 363



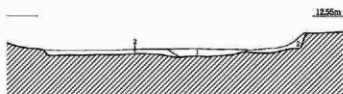
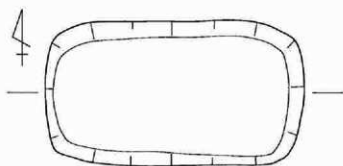
SK 415





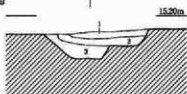
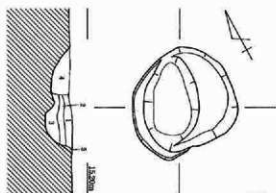


1. 10YR3/2 灰黄褐色 直径1mmロームブロック含む シルト質細砂
2. 10YR4/6 褐色 直径1mmロームブロック含む シルト質細砂
3. 10YR3/4 暗褐色 淡灰色シルト混じり シルト質細砂
4. 10YR4/1 暗灰色 直径1mm大砂礫～粗砂を少量含む シルト質細砂
5. 5YR2/2 黒褐色 暗灰色シルト混じり 直径1mm大砂礫を少量含む



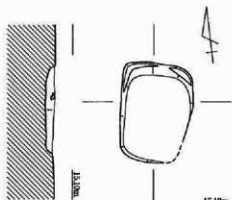
1. 7.5YR6/4 にぶい褐色 砂質シルト (酸化層)
2. 7.5YR6/2 灰褐色 中一級砂

SK 404



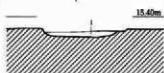
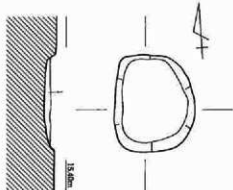
SK 110

1. 10YR3/4 暗褐色 細砂一中砂
2. 7.5YR1.7/1 黒色 炭
3. 10YR4/4 褐色 細砂一中砂
4. 控丸 細砂一級
5. 2.5YR4/8 赤褐色 (酸化層)



SK 111

1. 5YR1.7/1 黒色 炭
2. 5YR7/8 褐色 (酸化層)



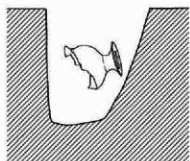
SK 112

1. 10YR3/4 暗褐色 細砂一中砂 (5YR1.7/1 黒色 炭も多く含む)

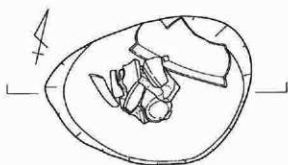




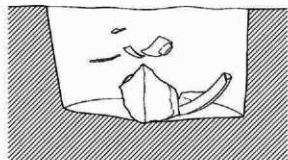
15.20m



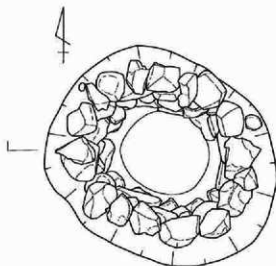
C区 P548



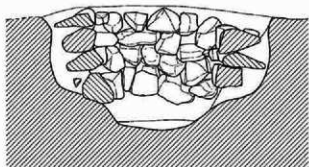
15.60m



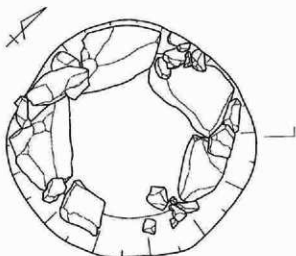
A区 P151



15.40m



SE 601

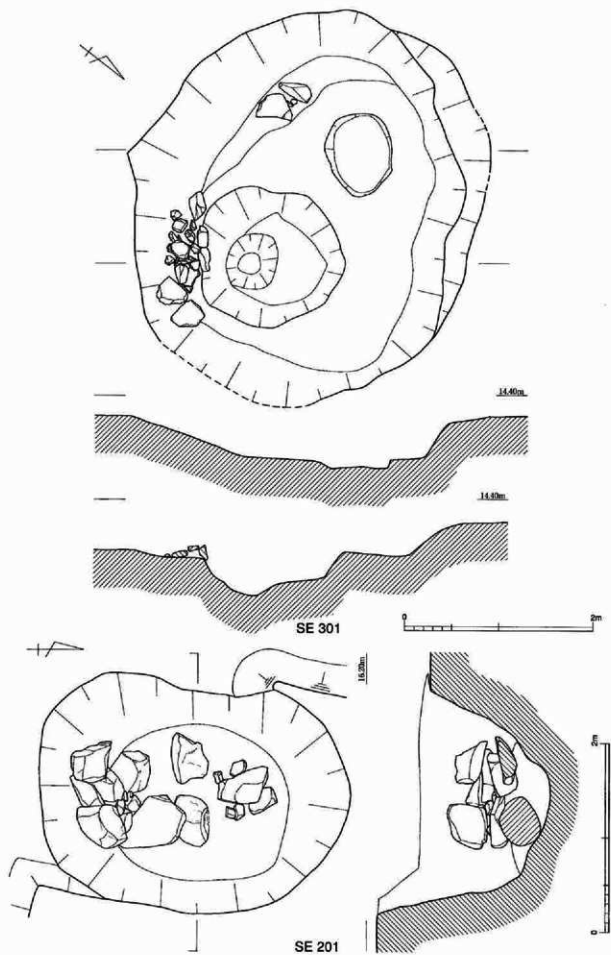


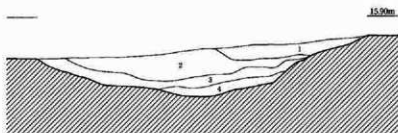
13.50m



SE 101

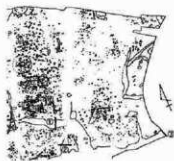




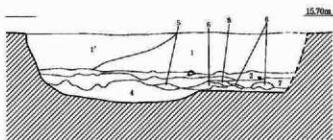


1. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質細砂 (風化した粗砂混)
2. シルト (ロームブロック混)
3. シルト混じり微細砂 (粗砂混)
4. シルト

①SD 1001

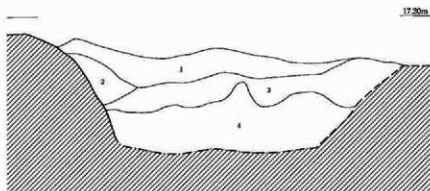


(SD 1001,1002,流路)
セクション位置図



1. 10YR4/2 灰黄褐色 粗砂混 シルト混じり中～細砂
1. 粘土混入
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色 中砂混 シルト混じり細砂
3. 10Y2.5/1 黒褐色 直径1mm大ロームブロック混、粗砂混シルト質細砂
4. シルト層
5. 2.5Y5/2 灰黄色 シルト混じり中砂
6. 5P2/1 青灰色 中砂混 砂質シルト
7. 2.5Y6/2 灰黄色 シルト若干混じり中～粗砂混

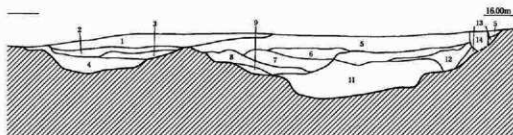
②SD 1002



1. 10Y2.5/1 黒灰色 シルト混じり 細砂～粗砂 Fe・O₂多い
2. 2.5Y2/1 黄灰色 シルト混じり 粗砂 (腐食む)
3. 10Y2.5/1 黒褐色 シルト～粗砂 (腐食む)
4. 2.5Y4/1 黄灰色 粗砂 (準大一人涙次の礫を多く含む)

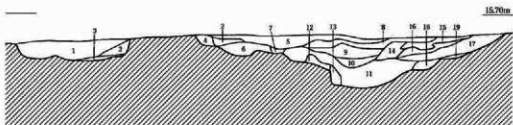
③流路





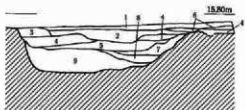
- | | |
|--------------------------------------|--|
| 1. 10YR5/4 土いり黄褐色 細砂 (粗砂含む) | 9. 10YR4/4 褐色 細砂～中砂 |
| 2. 10YR5/2 灰黄褐色 極細砂～細砂 (粗砂含む) | 10. 10YR5/2 灰黄褐色 極細砂～細砂 (粗砂含む) |
| 3. 10YR7/1 灰白色 中砂～粗砂 | 11. 10YR6/1 黒褐色 粗砂～礫 (礫大から人頭大の礫 多量に含む) |
| 4. 10YR6/2 灰黄褐色 粗砂～礫 (東洋系珪藻類含む) | 12. 10YR2/2 黒褐色 シルト混じり粗砂 (粗砂、小礫含む) |
| 5. 10YR4/6 褐色 細砂 | 13. 10YR5/4 土いり黄褐色 中砂～粗砂 |
| 6. 10YR6/2 灰黄褐色 細砂～中砂 (粗砂、礫、含む) | 14. 10YR4/4 褐色 中砂～粗砂 (炭屑混入) |
| 7. 10YR5/3 土いり黄褐色 中砂～粗砂 (礫大の礫を多量に含む) | |
| 8. 10YR6/3 土いり黄褐色 極細砂～細砂 (粗砂含む) | |

①SD 1002



- | | |
|-------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 10YR3/4 暗褐色 粗砂 (礫大の礫混じる) | 11. 10YR5/4 土いり黄褐色 粗砂 (礫大一人頭大の礫混じる) |
| 2. 10YR4/4 褐色 中砂～粗砂 | 12. 2.5Y5/3 黄褐色 シルト～細砂 |
| 3. 10YR3/3 暗褐色 中砂～粗砂 | 13. 5Y5/1 灰色 細砂～中砂 |
| 4. 10YR5/4 土いり黄褐色 細砂 | 14. 7.5YR3/3 暗褐色 粗砂 (礫大の礫多く含む) |
| 5. 10YR5/2 灰黄褐色 細砂 (粗砂、粗礫を含む) | 15. 7.5YR4/6 褐色 中砂 |
| 6. 10YR4/4 褐色 細砂～中砂 (粗砂、礫混じる) | 16. 10YR5/4 土いり黄褐色 極細砂～細砂 |
| 7. 10YR2/2 黒褐色 シルト (中砂～粗砂混じる) | 17. 10YR2/3 黒褐色 シルト (細砂～粗砂混じる) |
| 8. 7.5YR4/3 褐色 細砂～中砂 | 18. 2.5Y4/1 黄褐色 シルト～中砂 |
| 9. 10YR4/2 灰黄褐色 粗砂 (シルト粗砂含む) | 19. 7.5YR4/4 褐色 粗砂 |
| 10. 10YR2/2 黒褐色 シルト～粗砂 | |

②SD 1002



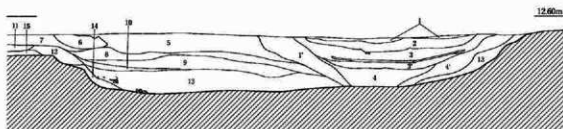
- | |
|--|
| 1. 2.5Y6/1 黄灰色 細砂～中砂 4～60mm大礫、60～250mm大礫が少量 |
| 2. 10YR5/1 褐色 シルト混粗砂 4～60mm大礫 |
| 3. 2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂 (中砂含む)、Fe、Mn |
| 4. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粗砂 (粗砂含む) 4～60mm大礫、Fe、Mn |
| 5. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混中粗砂 炭、4～60mm大礫、MnO ₂ 殻+粗砂 |
| 6. 2.5Y6/2 黄灰色 細砂 (中粗砂含む) |
| 7. 10YR5/6 黄褐色 シルト質細砂+10YR2/2 出河色シルト質粗砂のラミネーション |
| 8. 10YR2/1 黒色 シルト (中粗砂含む) 4～60mm大礫、60～250mm大礫 |
| 9. 5Y4/1 灰色 極細砂+2.5Y5/1 黄灰色 中粗砂のラミネーション 多量の60～250mm大礫混入 |

③SD 1002



SD 1002 セクション位置図



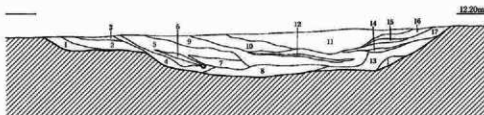


- | | | | | | |
|---------------|--------|----------|-------------|------|-----------------|
| 1. 10YR4/2 | にぶい灰褐色 | 極細砂 | 8. 10YR5/1 | 黄灰色 | シルト質細砂 |
| 2. 10YR4/16/2 | 黄褐色 | 極細砂混中～粗砂 | 9. 10YR3/4 | 暗褐色 | 細砂～小礫 (ツミナー) |
| 3. 10YR12/1 | 黒色 | 粘土 | 10. 10YR3/1 | 黄褐色 | 細砂、シルトツミナー (木片) |
| 7. 10YR17/1 | 黒色 | 細砂ツミナー | 11. 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 極細砂混中砂～小礫 |
| 4. 10YR3/1 | 黒褐色 | 細砂ツミナー | 12. 10YR4/1 | 黄灰色 | 中砂混、細砂 |
| 4. 10YR3/1 | 黒褐色 | 細砂ツミナー多 | 13. 10YR3/1 | 黄褐色 | シルト質細砂ツミナー |
| 5. 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 細砂～中砂 | 14. 10YR2/2 | 黄褐色 | 中砂混シルト13に混 |
| 6. 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 極細砂～細砂 | 15. 10YR3/1 | 黄褐色 | 中砂混極細砂～細砂 |
| 7. 10YR3/2 | 黄褐色 | 粗砂～粗礫 | | | |

①SD 1003

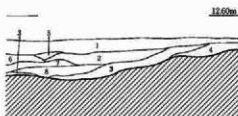


SD 1003, 1005, 1006
セクション位置図



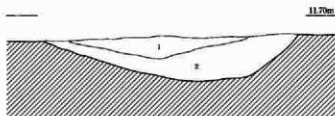
- | | | | | | |
|-------------|-----------|------------------|--------------|--------------|-------------|
| 1. S10G4/1 | 暗黄灰色 | 粗砂混砂質シルト (ベース) | 10. ビート層 | 中～細砂混 | |
| 2. 7.5YR4/2 | 灰褐色 | シルト混じり中～細砂 | 11. 7.5YR4/1 | 黄灰色 | シルトロームブロック混 |
| 3. 7.5YR6/3 | にぶい褐色 | 中～粗砂 (ビートのツミナー混) | 12. ビート層 | | |
| 4. 7.5YR6/3 | にぶい褐色 | 中～粗砂 | 13. ビート層 | | |
| 5. ビート層 | 中～細砂ツミナー混 | | 14. 5YR/3 | 淡黄色 | 中～粗砂 |
| 6. 7.5GY7/1 | 暗緑灰色 | 粗～中砂 | 15. 14と19混 | (粗砂混) | |
| 7. 7.5GY7/1 | 暗緑灰色 | 粗～中砂 (ビートのツミナー混) | 16. 10YR5/3 | にぶい黄褐色 (粗砂混) | |
| 8. 砂礫 | 直径10cm | | 17. 13と同質 | | |
| 9. 7.5GY7/1 | 暗緑灰色 | 粗～中砂 | | | |

②SD 1003



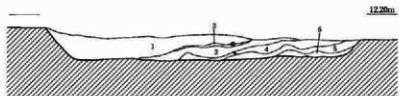
- | | | |
|-------------|------|---------------|
| 1. 2.5Y5/2 | 暗灰黄色 | シルト質極細砂 (包含層) |
| 2. 2.5Y3/1 | 黒褐色 | シルト |
| 3. 10YR3/3 | 暗褐色 | 細砂 |
| 4. 7.5YR6/2 | 灰褐色 | 礫混中砂～粗砂 |
| 5. 10YR3/3 | 暗褐色 | 粗砂混、細砂～極細砂 |
| 6. 7.5YR6/2 | 灰褐色 | 礫混粗砂～粗砂 |
| 7. 10YR3/4 | 暗褐色 | 粗砂混、シルト質極細砂 |
| 8. 2.5Y3/1 | 黒褐色 | 礫、粗砂混シルト |

③SD 1003



- | | | |
|------------|--------|--------------|
| 1. 2.5Y4/1 | 黄灰色 | 粗～細砂混シルト質粗細砂 |
| 2. 5Y2/2 | オリーブ黒色 | 礫、礫物混砂質シルト |

④SD 1005

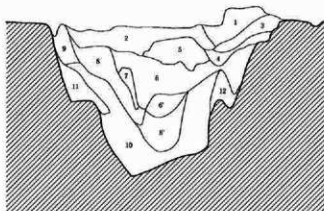


- | | | |
|-----------------------|------------------------|------------|
| 1. 砂礫層 | | |
| 2. 5Y5/1 | 灰色 (礫物混体層) | シルト混じり中～粗砂 |
| 3. 5Y7/2 | 灰白色 | 粗～細砂 |
| 4. シルト混じり粗～細砂 (礫物混体層) | | |
| 5. 5Y5/2 | 灰オリーブ色 (礫物混体層のブロックを含む) | 粗～粗砂 |
| 6. 5Y4/1 | 灰色 (上面がシルト：礫物混体層) | シルト混じり中～粗砂 |

⑤SD 1006



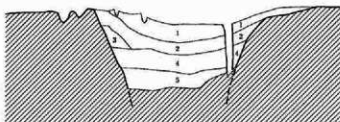
12.40m



- | | | | |
|-----------------|--------------|-----------------|-------------------|
| 1. 10YR5/2 灰黄褐色 | 細～粗砂ラミナ | 7. 7.5Y4/1 灰色 | シルト質細砂 (ベースブロック?) |
| 2. 10YR4/1 黄灰色 | シルト質細砂 | 8. 10YR2/1 紫褐色 | シルト～粗砂ラミナ |
| 3. 10YR2/1 紫褐色 | シルト質細砂ラミナ 互. | | シルト |
| 4. 10YR2/1 紫褐色 | 細～粗砂ラミナ | 9. 10YR2/1 紫褐色 | シルト～粗砂ラミナ |
| 5. 10YR4/1 黄灰色 | 細砂～中砂ラミナ | 10. 10YR4/1 黄灰色 | 粗砂～中砂 |
| 6. 10YR4/1 黄灰色 | シルト～粗砂ラミナ | 11. 10YR2/1 紫褐色 | シルト～粗砂 |
| 6. | シルト | 12. 10YR4/1 黄灰色 | 中～粗砂 |

SD 1004

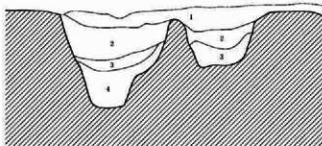
12.20m



- | | | |
|----------------|----------|-------------------------|
| 1. 10YR4/1 黄灰色 | 粘質シルト | FeO ₃ , Mn含む |
| 2. 10YR2/2 紫褐色 | 粘質シルト | |
| 3. 2.5Y6/1 黄灰色 | 細細砂 | |
| 4. 2.5Y6/2 灰黄色 | 粘質シルト | FeO ₃ 含む |
| 5. 2.5Y4/1 黄灰色 | シルト混じり粘土 | 炭化物含む |

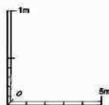
SD 501

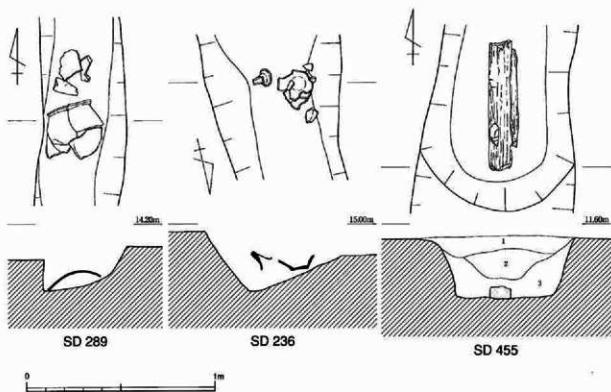
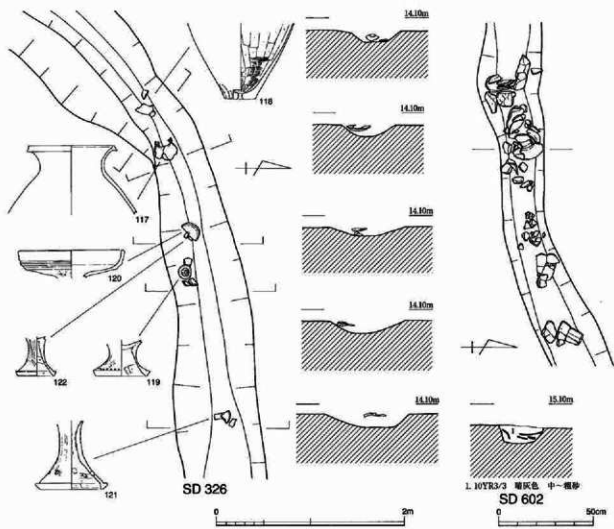
12.40m

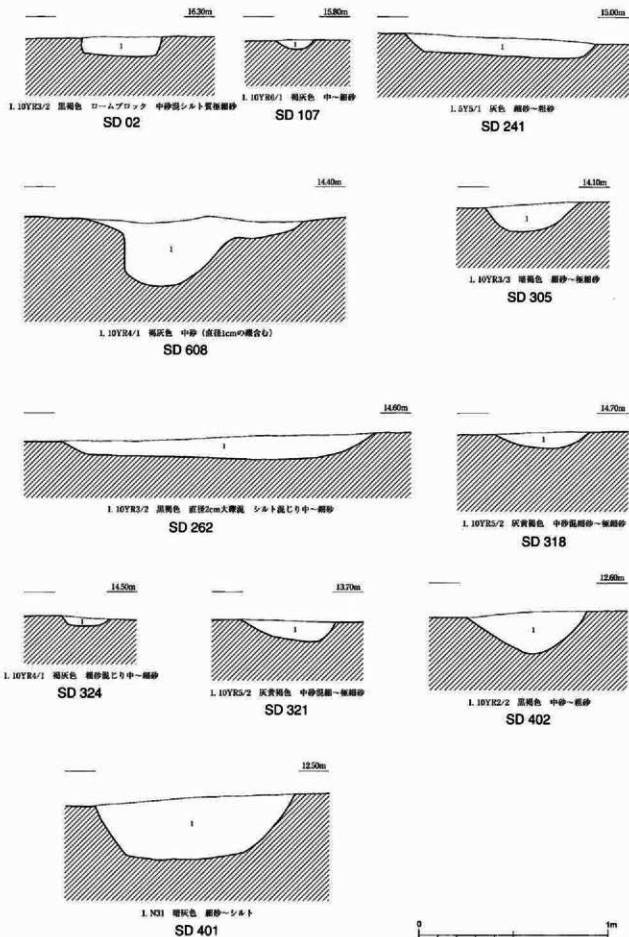


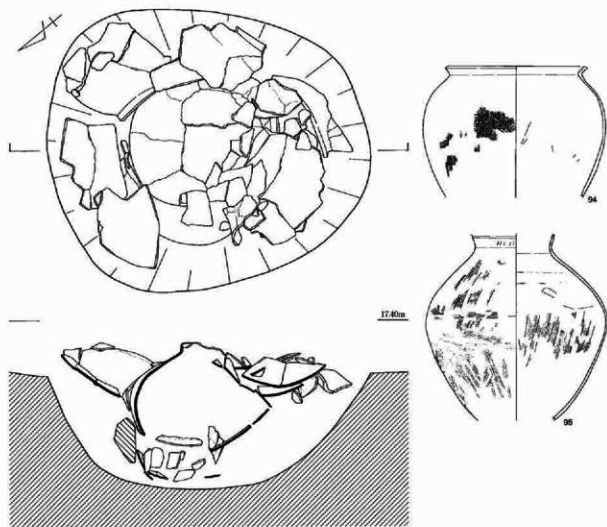
- | | | |
|----------------|-----------------|-------------------------|
| 1. 5YR/1 灰色 | 細細砂 | Mn, FeO ₃ 含む |
| 2. 5Y6/1 灰色 | 細砂～粗細砂 | Mn多量に含む |
| 3. 5Y6/1 灰色 | 細砂 (細細砂, 粗砂混じり) | Mn, FeO ₃ 含む |
| 4. 10YR4/1 黄灰色 | 粘質シルト (砂混じり) | 炭化物含む |

SD 502・503

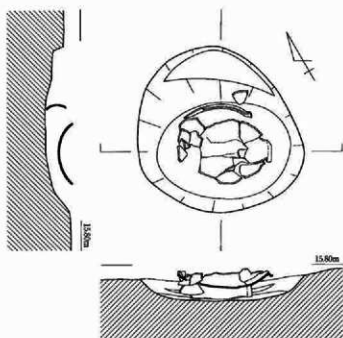






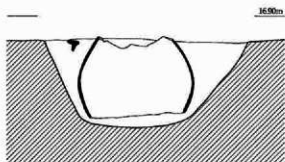
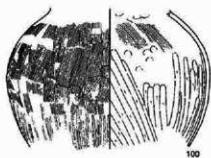
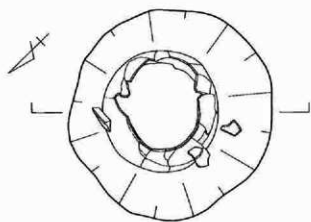


ST 01

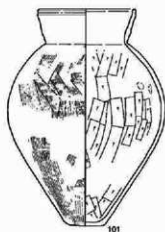
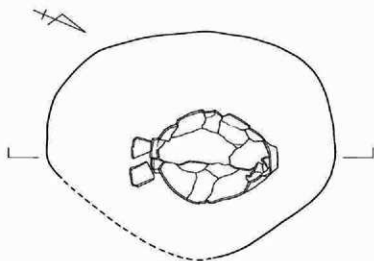


ST 02



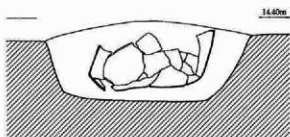
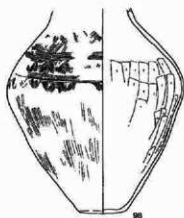
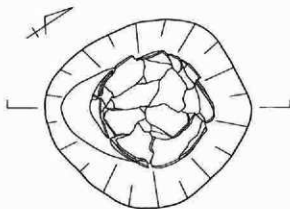


ST 03

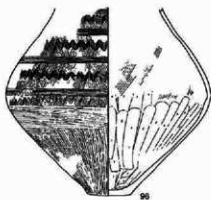
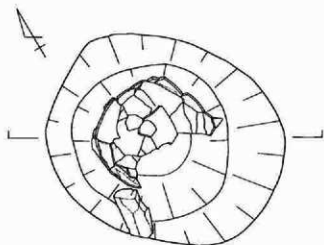


ST 04



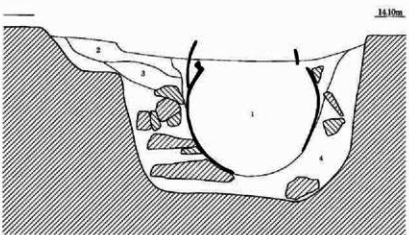
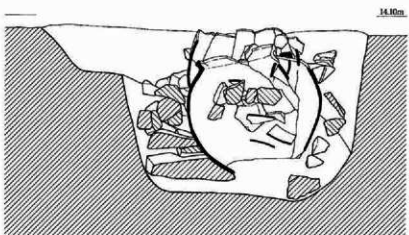
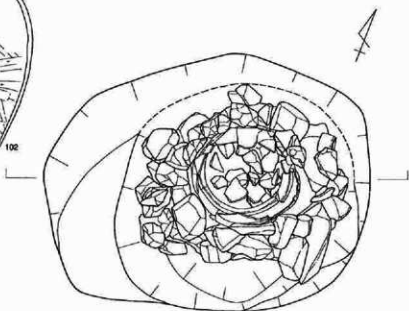
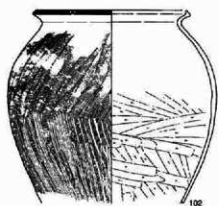


ST 05



ST 07

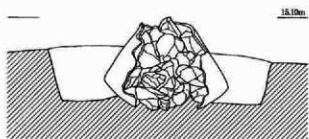
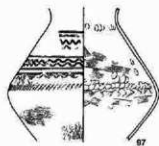
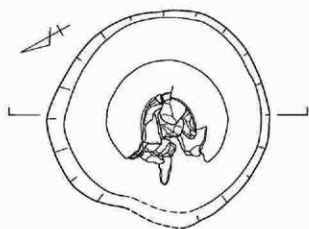




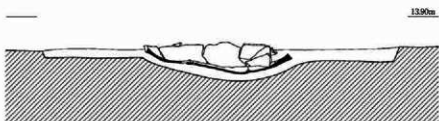
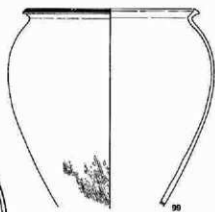
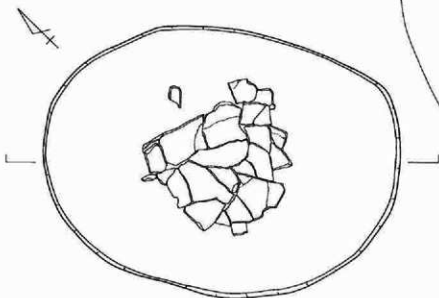
- 1. 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂 (粗砂含む)
- 2. 7.5YR5/2 明褐色 中砂 (粗砂含む)
- 3. 10YR6/3 にぶい黄褐色 細砂 (中粗砂含む)
- 4. 7.5YR4/4 黄色 細砂 (中粗砂含む)

ST 06



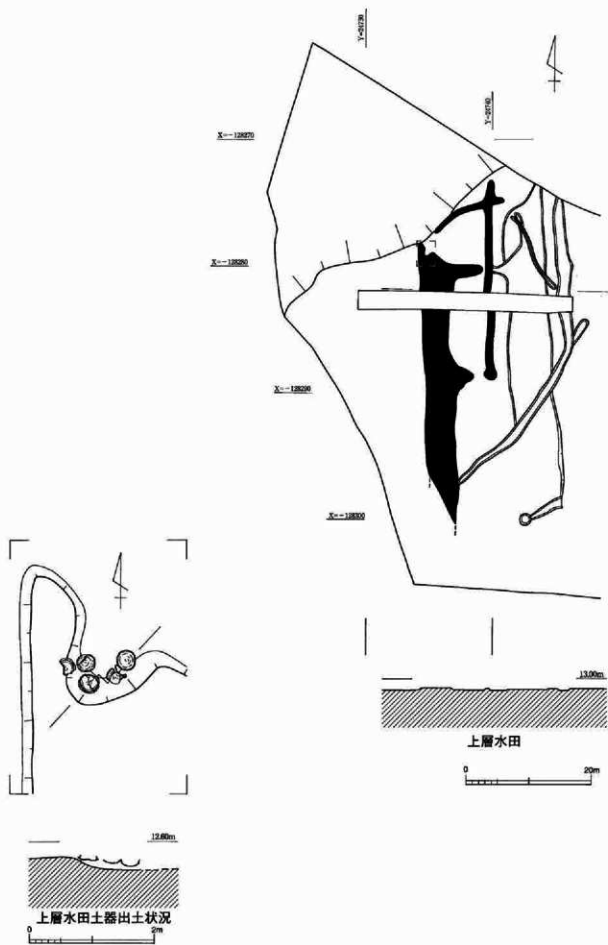


ST 08

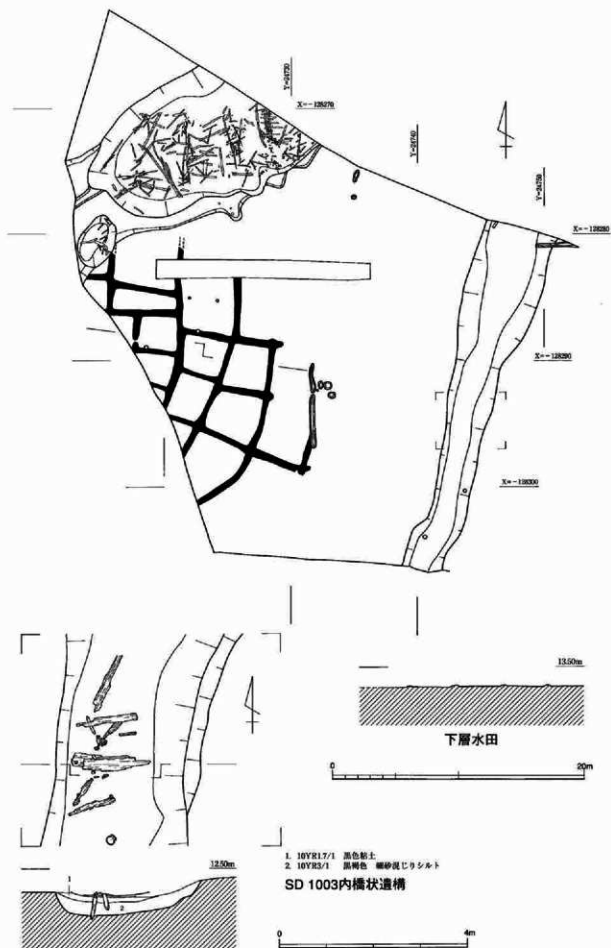


ST 09

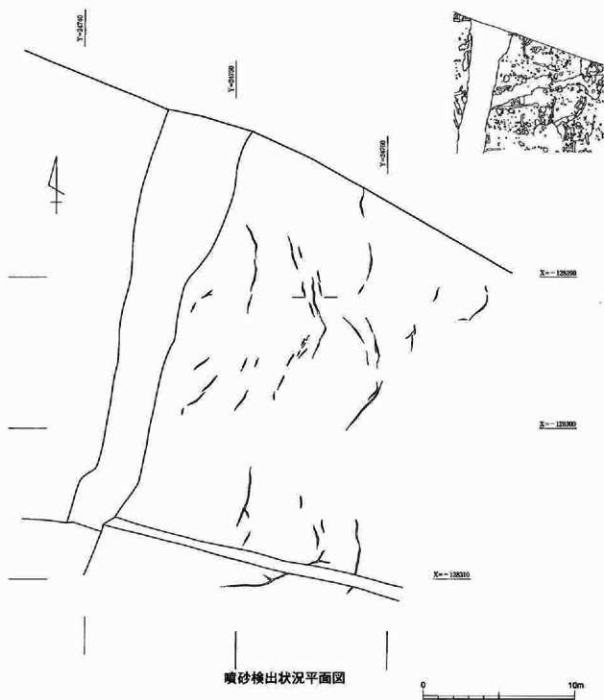




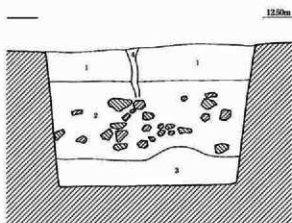
上層水田と土器出土状況



下層水田及び橋状遺構

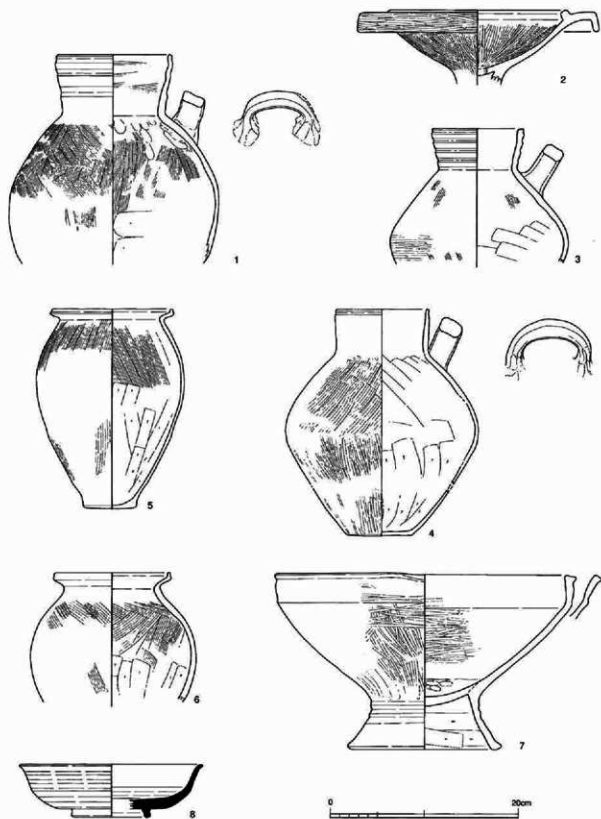


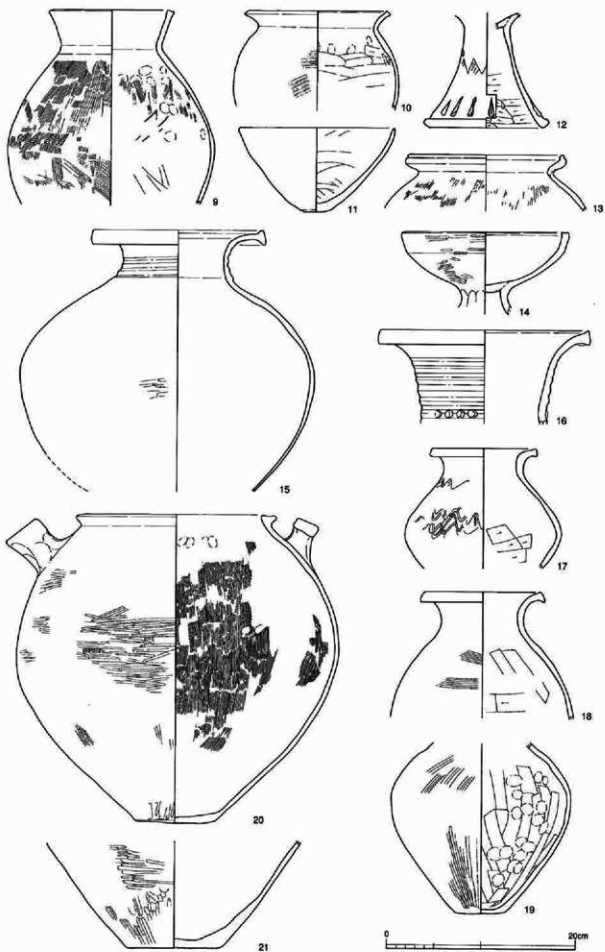
噴砂検出状況平面図



噴砂断面図

1. 7.5YR3/1 深褐色 中砂混じり赤黒砂
2. 7.5YR4/2 褐色 細砂混じり中砂（中礫含む）
3. 7.5YR3/3 暗褐色 細砂～中砂
4. 7.5YR5/1 灰白色 シルト混細砂～中砂

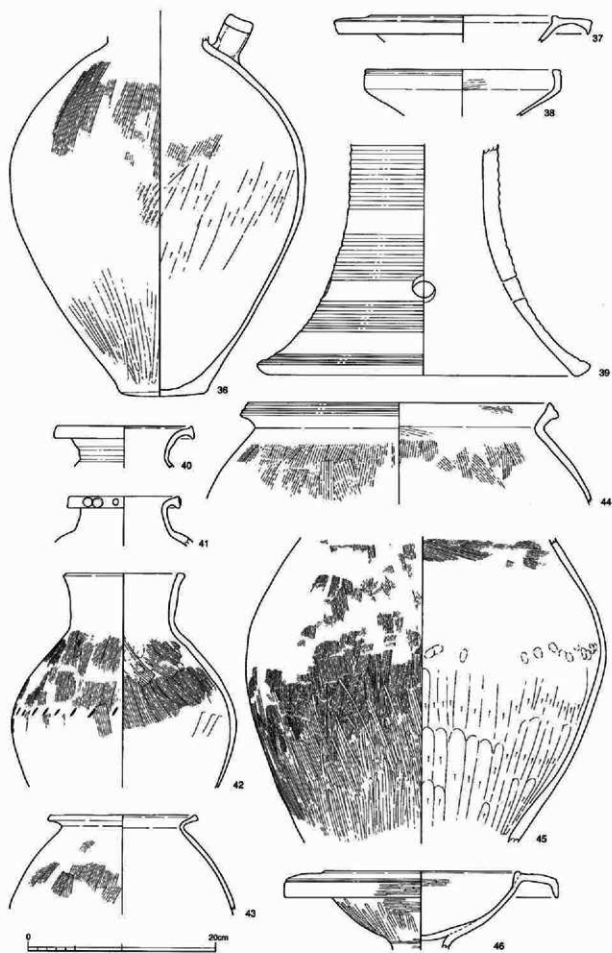




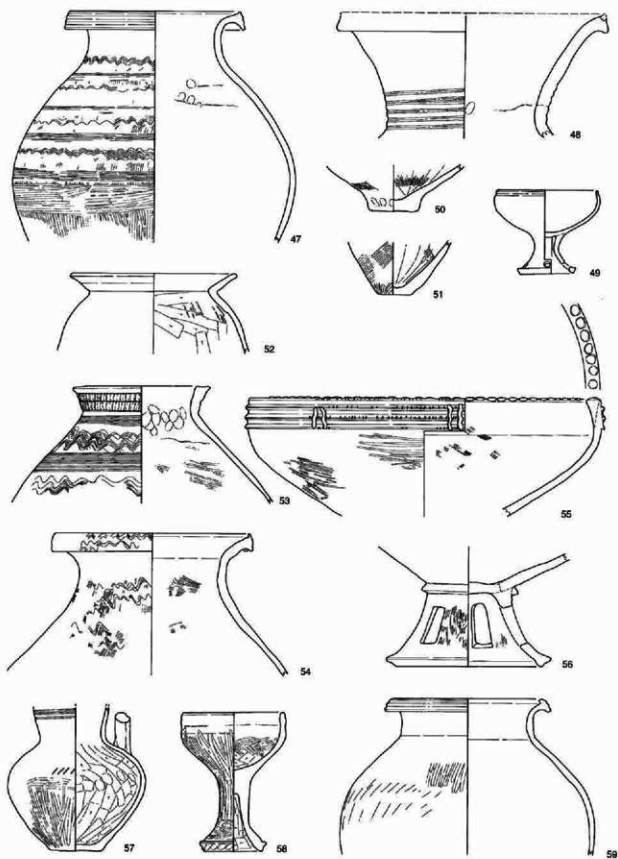
弥生時代の土器1 (竪穴住居)



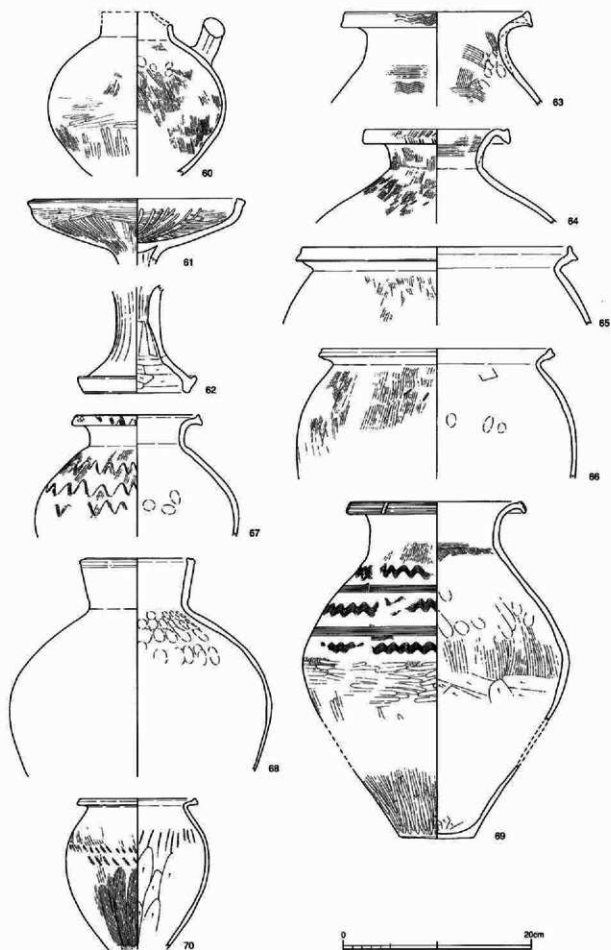
弥生時代の土器2 (竪穴住居・土坑)



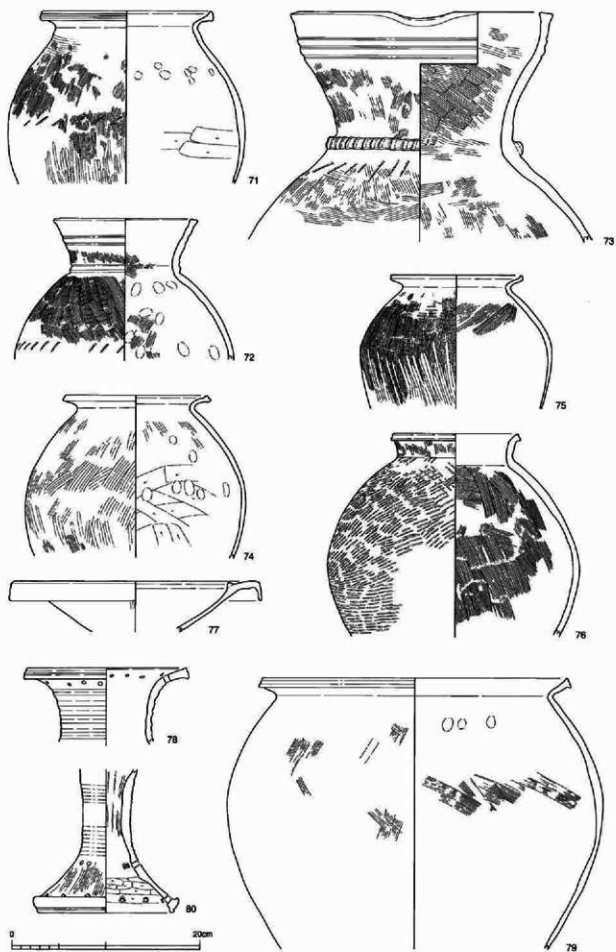
弥生時代の土器3 (土坑)



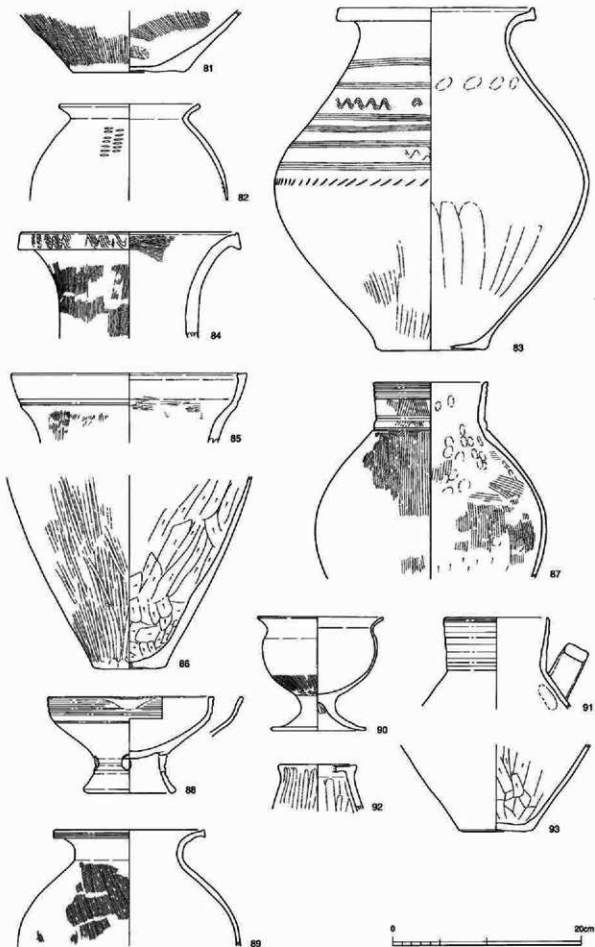
弥生時代の土器 4 (土坑)



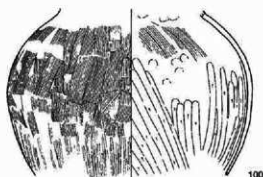
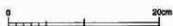
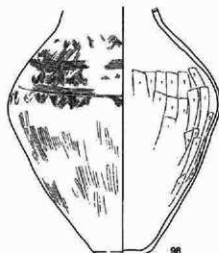
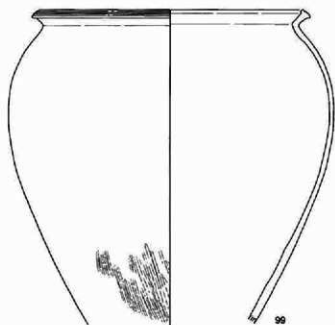
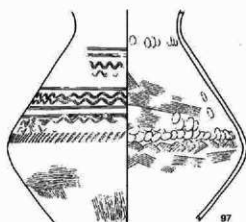
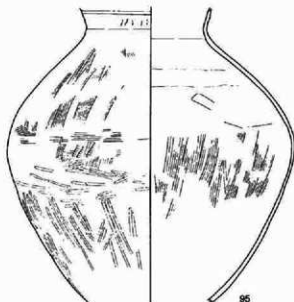
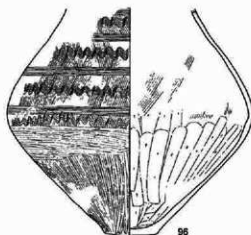
弥生時代の土器5 (土坑)



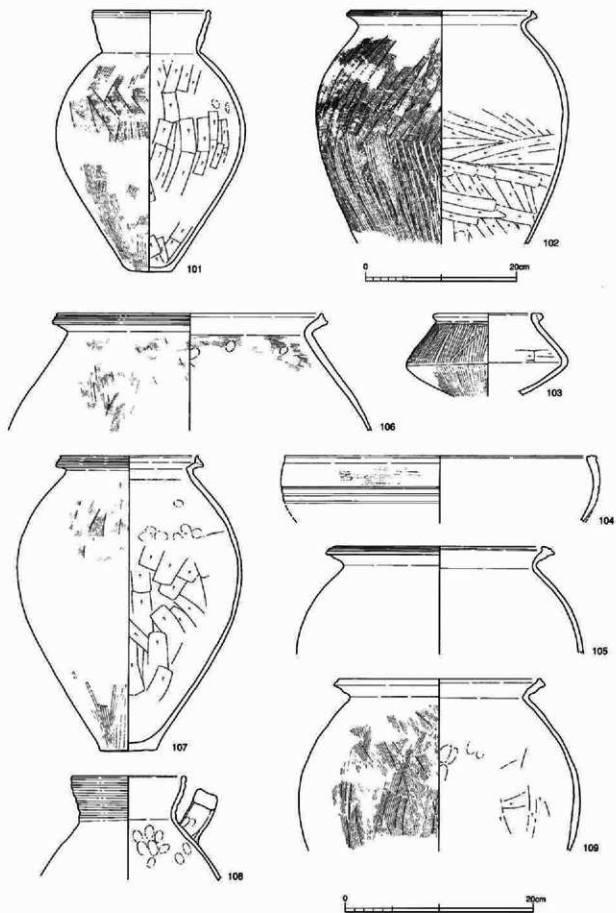
弥生時代の土器6（土坑）



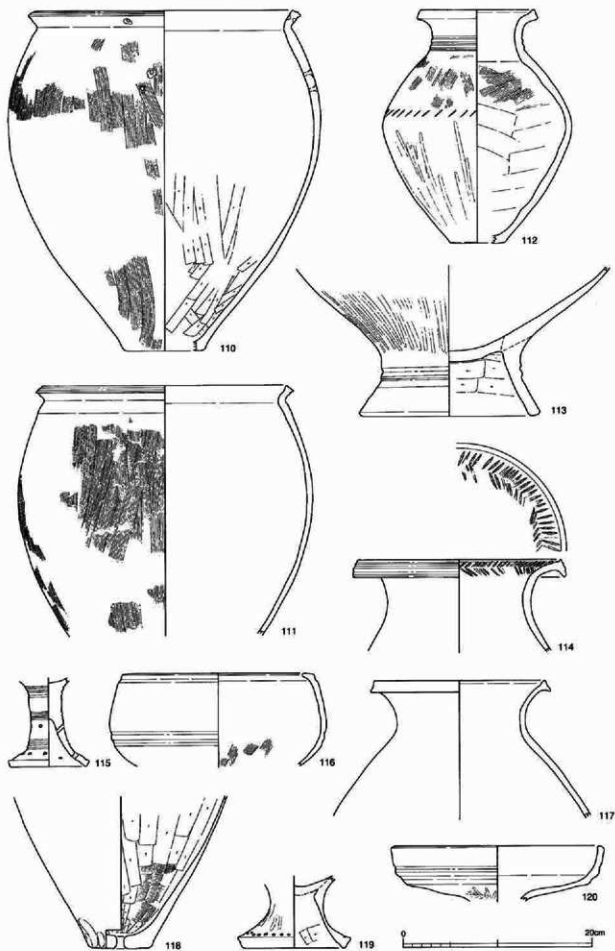
弥生時代の土器7 (土坑・ビット)



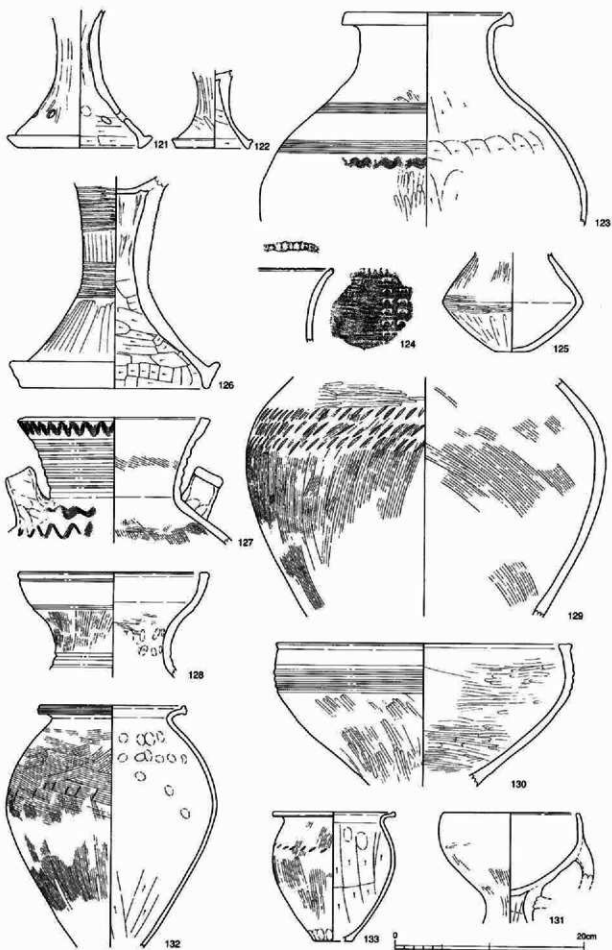
弥生時代の土器B (ビット・埋設土器)



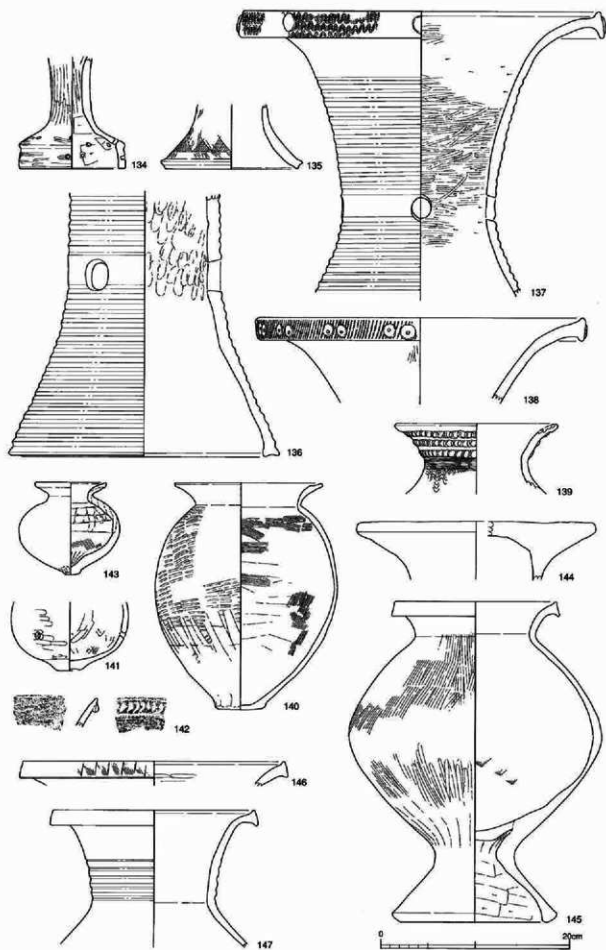
弥生時代の土器9（埋設土器・溝）



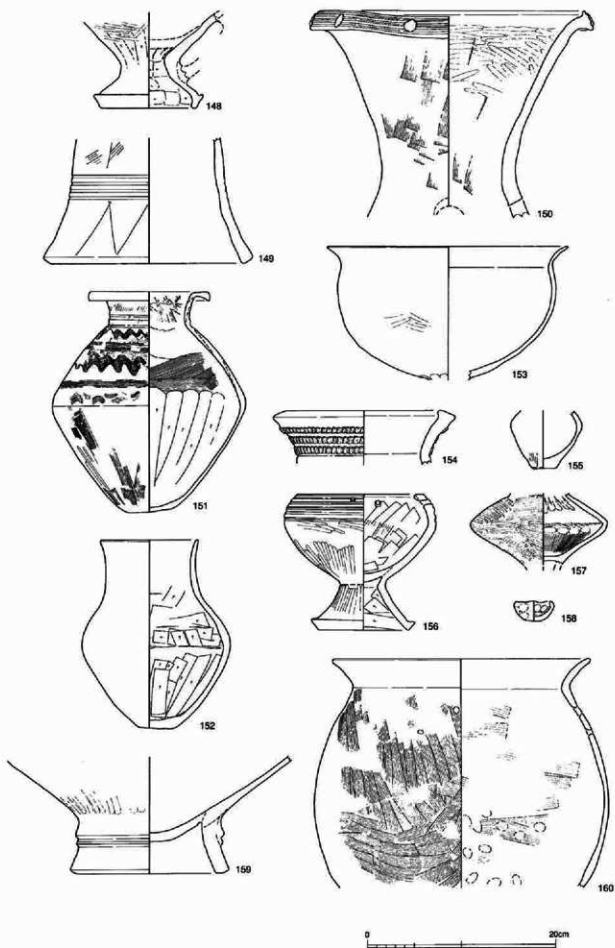
弥生時代の土器 10 (溝)



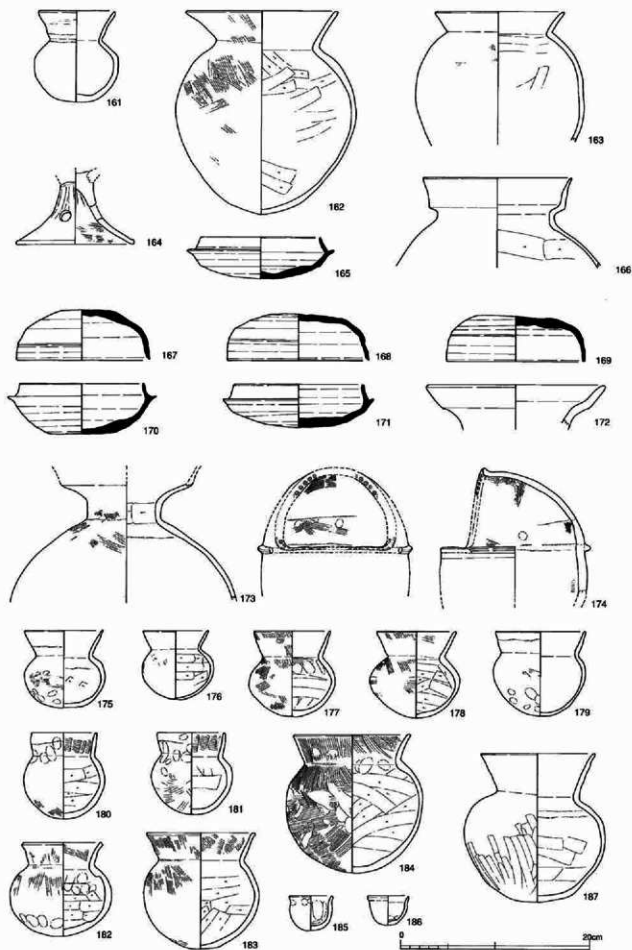
弥生時代の土器 11 (溝・流路)



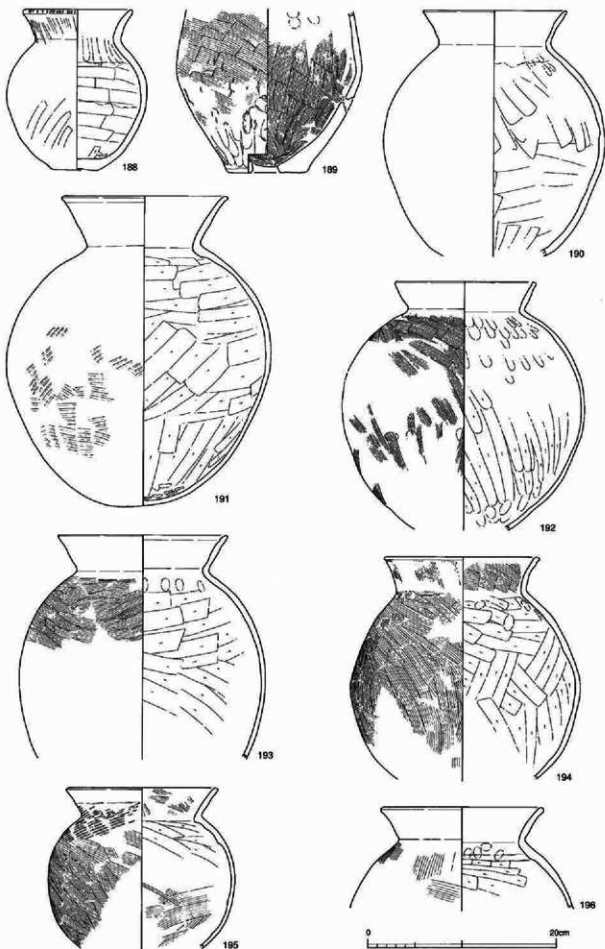
弥生時代の土器12（流路・包含層）



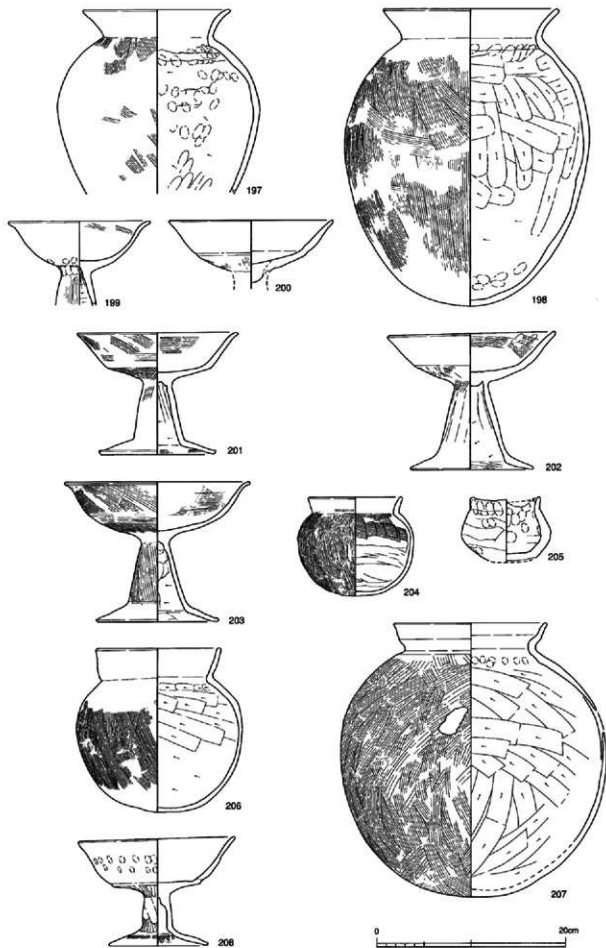
弥生時代の土器13（包含層）



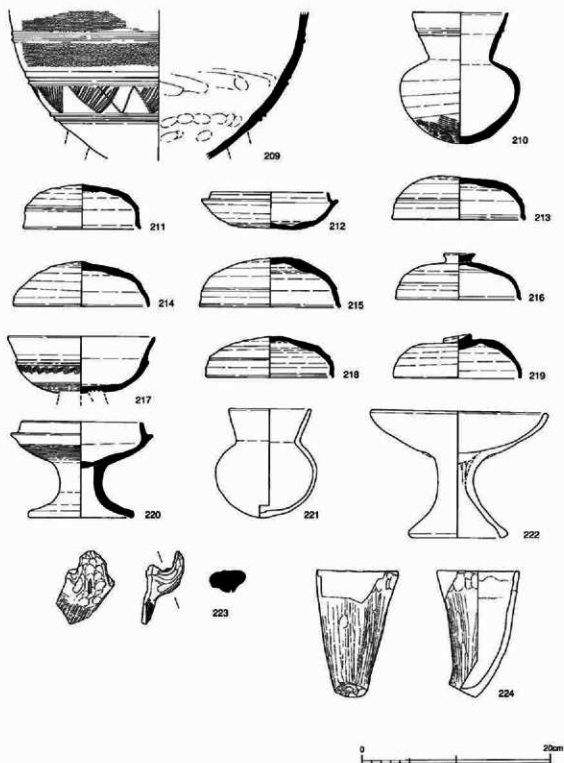
古墳時代の土器1 (竪穴住居・土坑・水田・溝・流路)

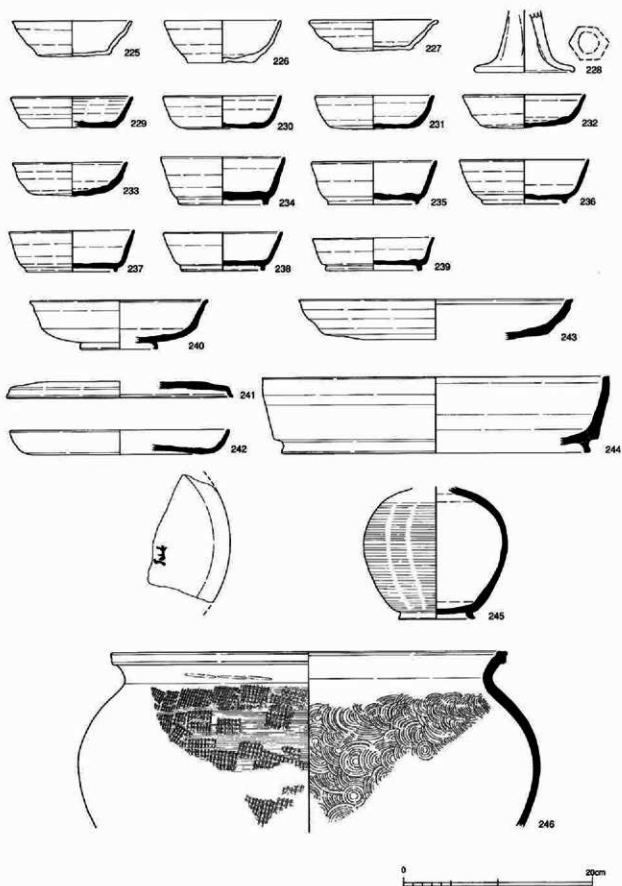


古墳時代の土器2 (流路)

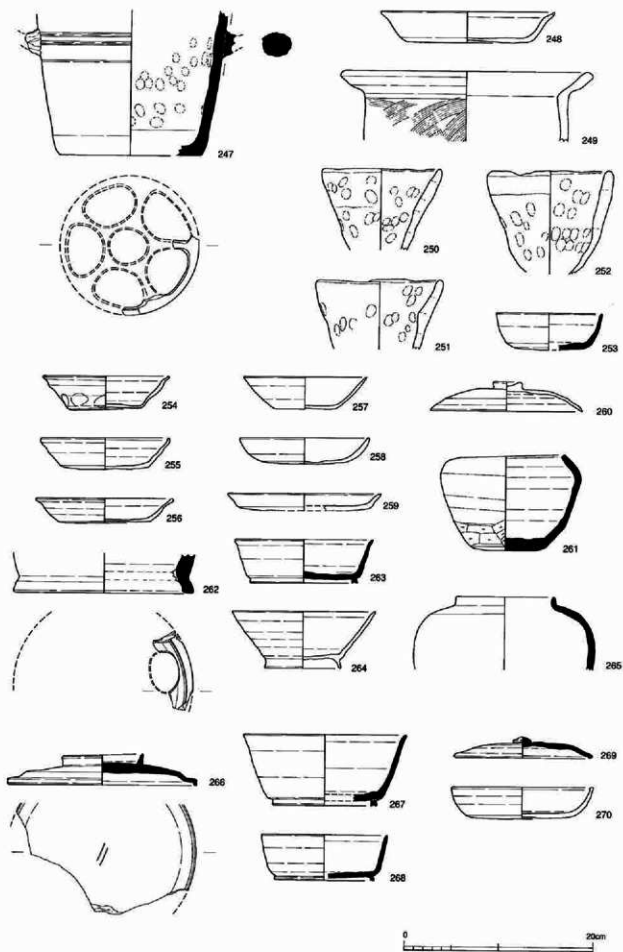


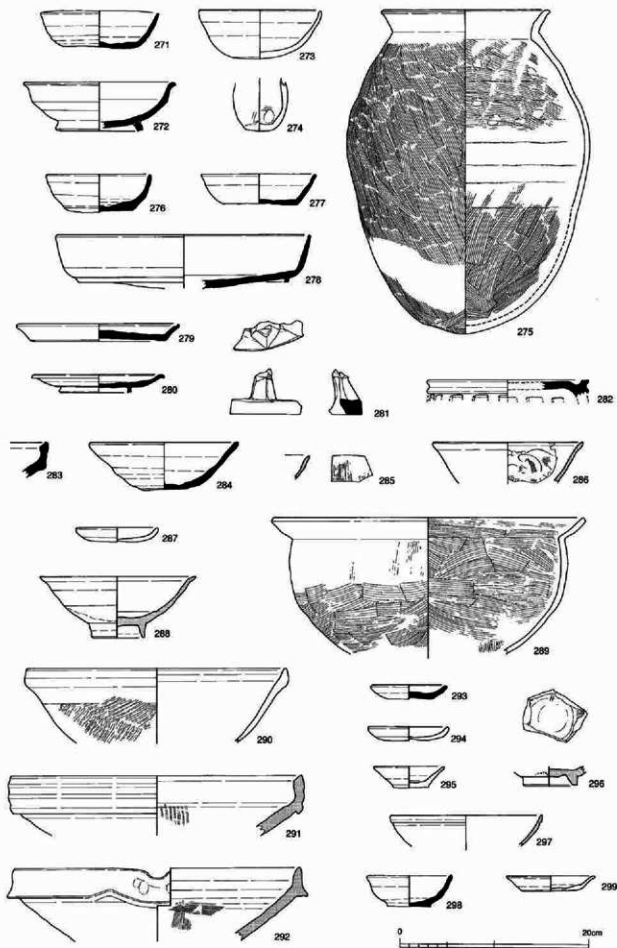
古墳時代の土器3（流路）



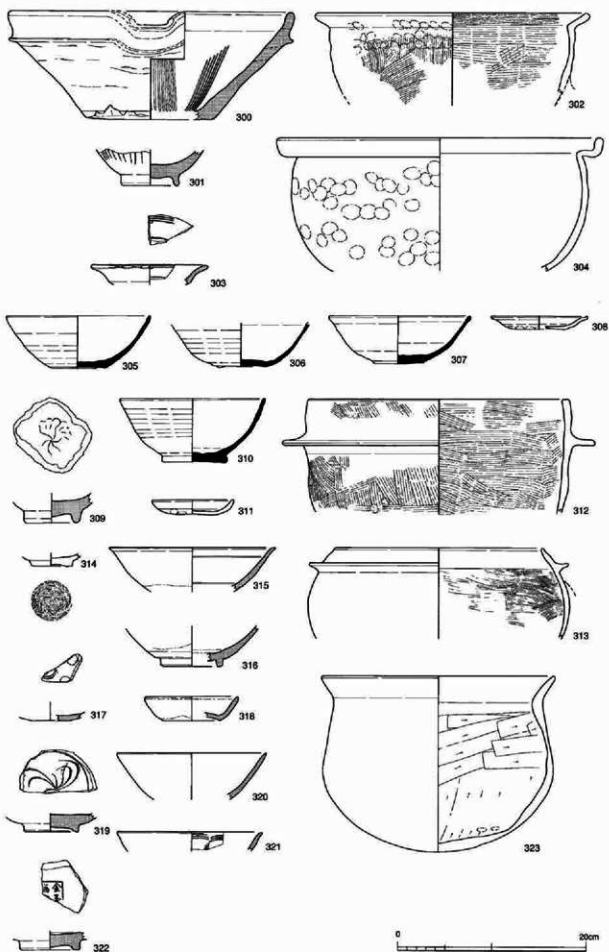


奈良時代の土器1 (井戸・土坑)

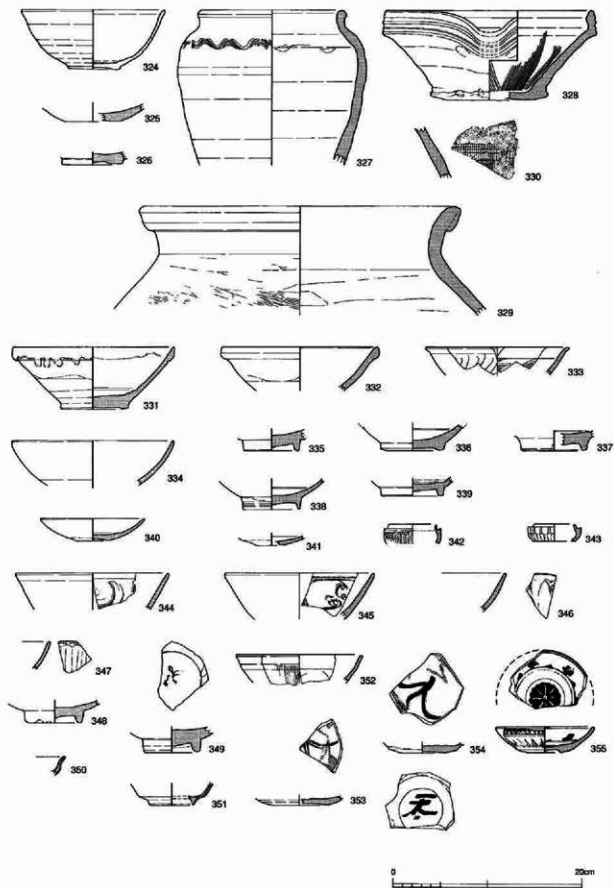




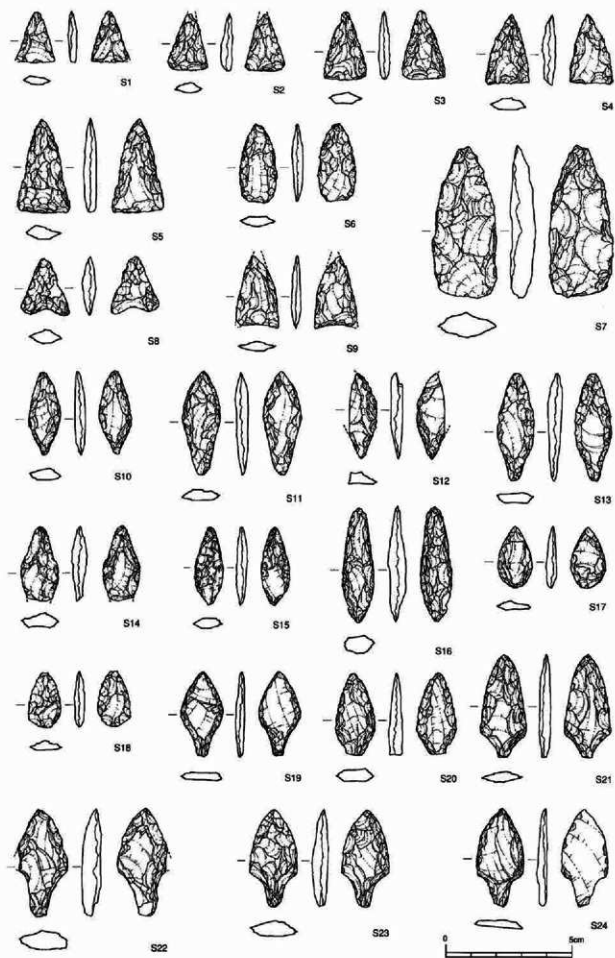
奈良時代の土器3（流路・包含層）／ 平安時代以降の土器1（ビット）



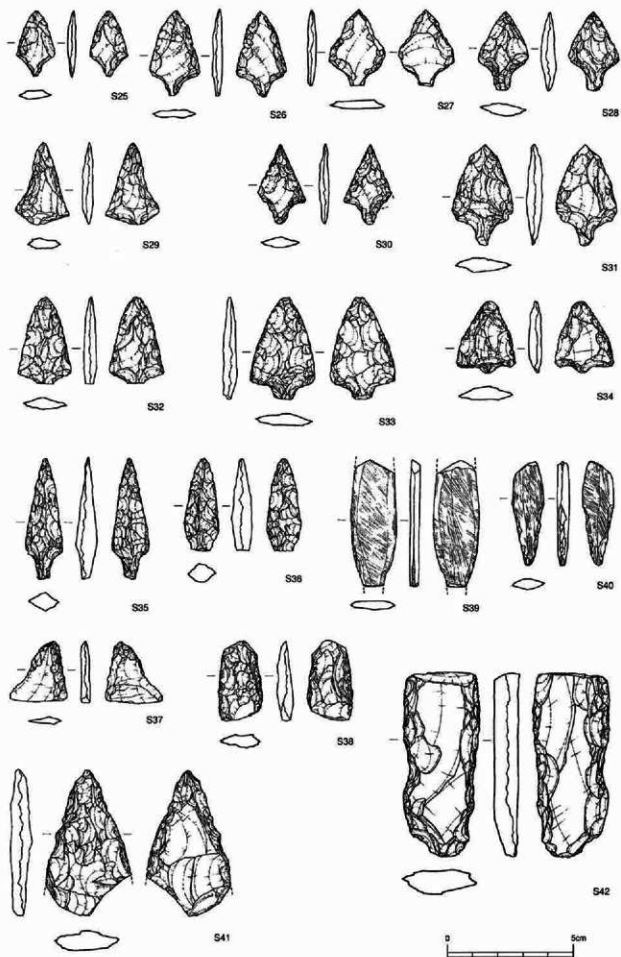
平安時代以降の土器2 (土坑・溝・流路)



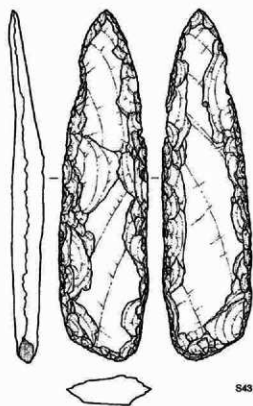
平安時代以降の土器3 (包含層)



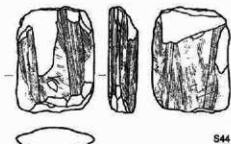
打製石鏃 1



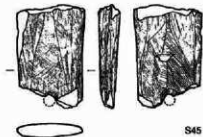
打製石鏃2・磨製石鏃・打製石剣1



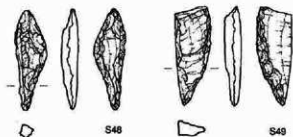
S43



S44

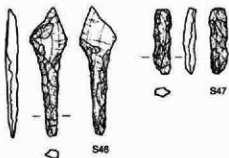


S45



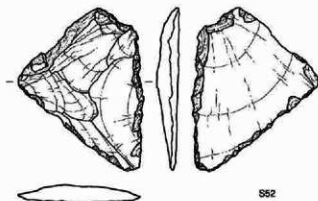
S46

S49

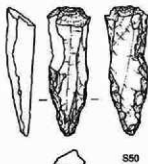


S48

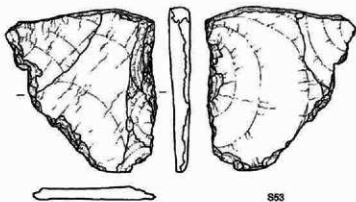
S47



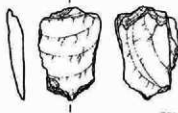
S52



S50

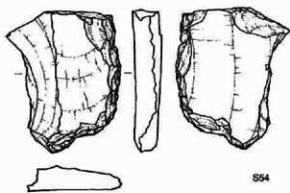


S53

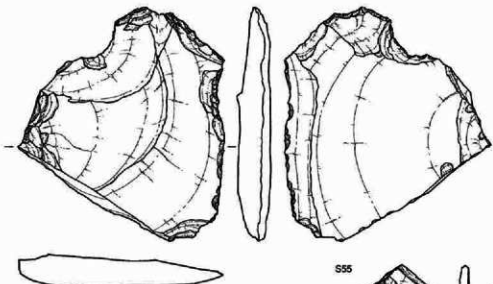


S51

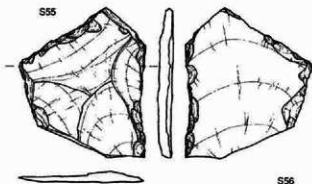




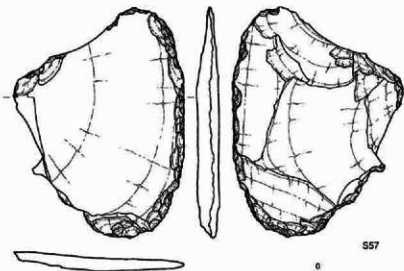
S54



S55

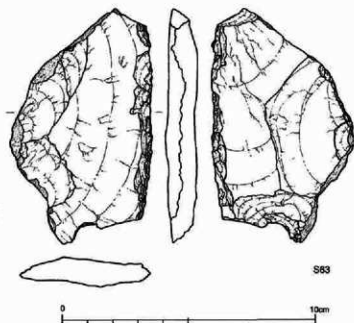
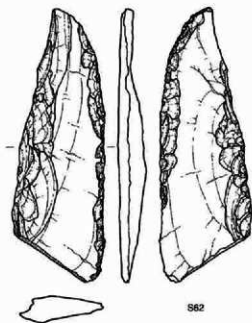
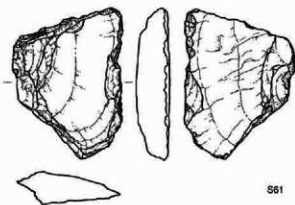
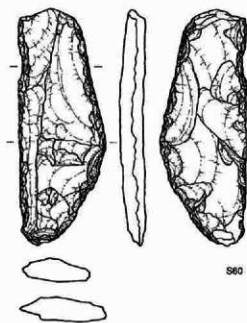
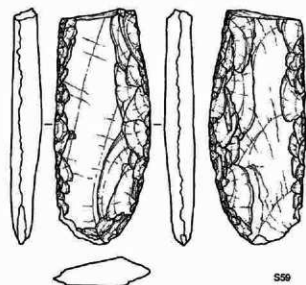
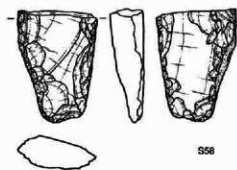


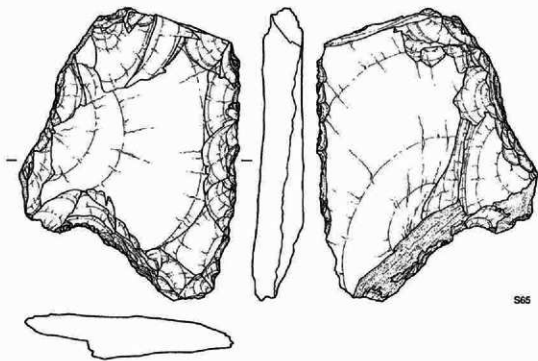
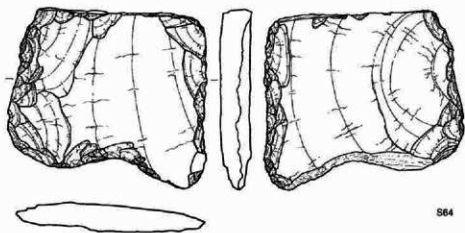
S56



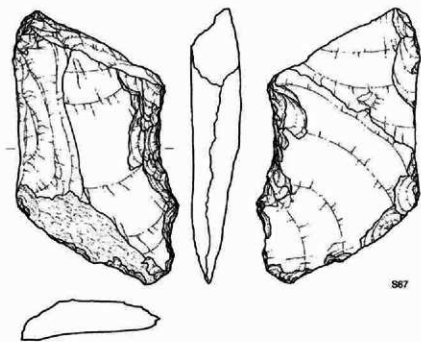
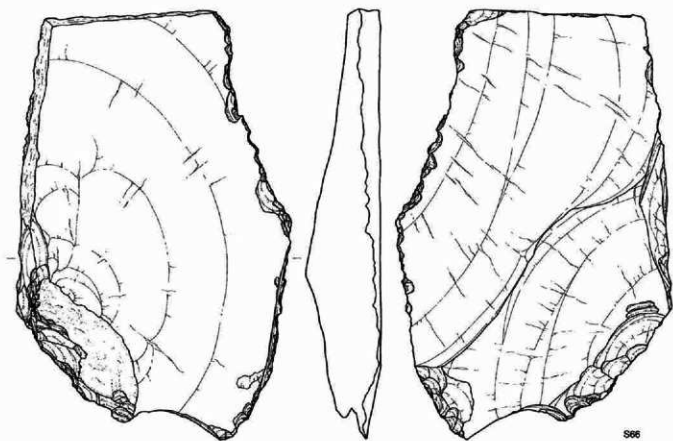
S57

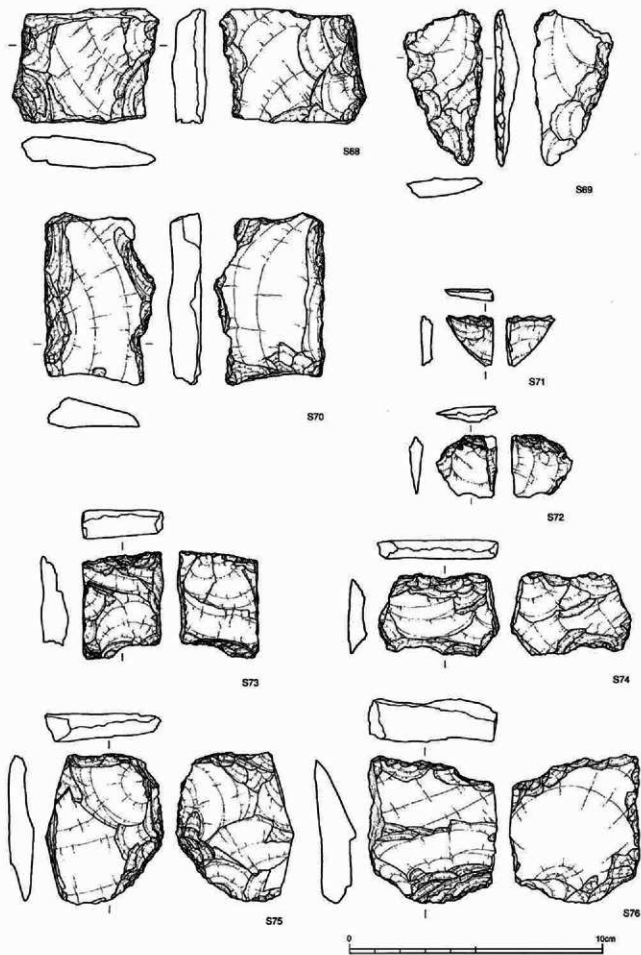




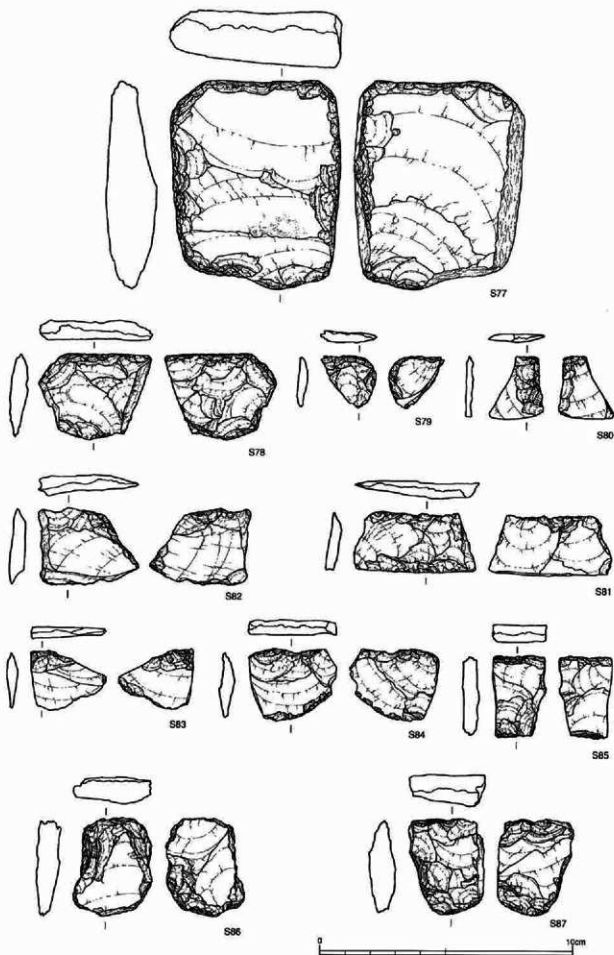


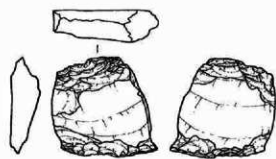
削器 4



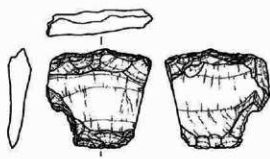


削器6·楔形石器1

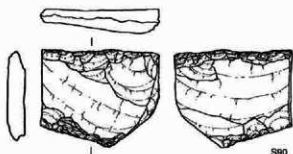




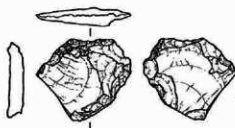
S88



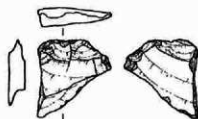
S89



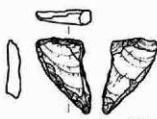
S90



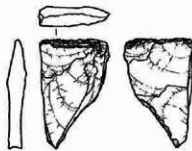
S91



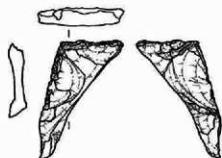
S92



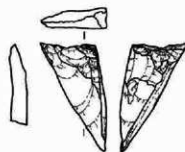
S93



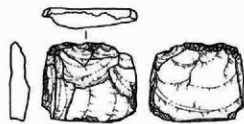
S94



S95



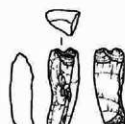
S96



S97

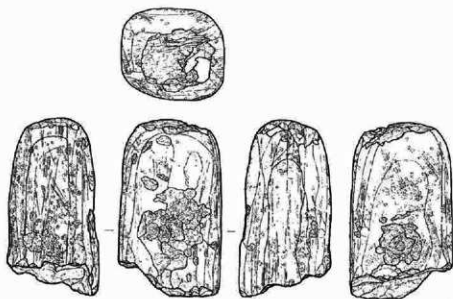


S98

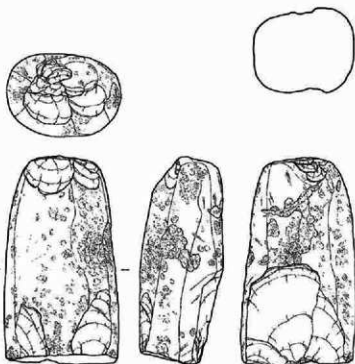


S99

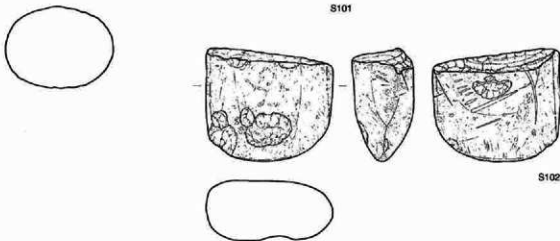




S100

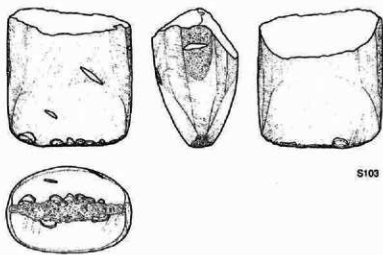


S101

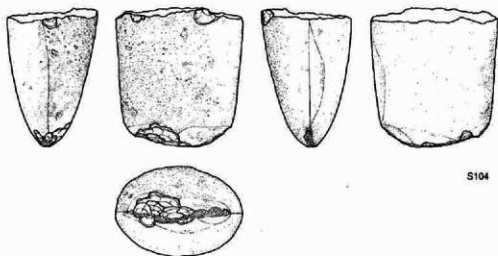


S102

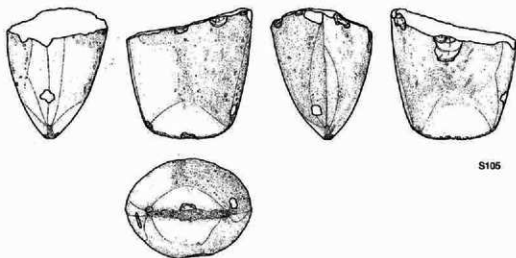




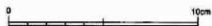
S103

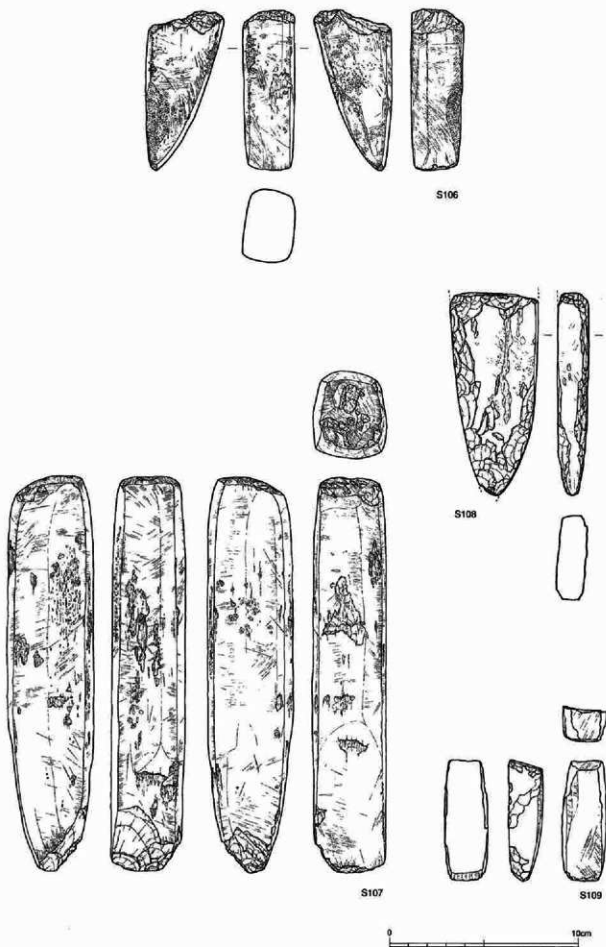


S104

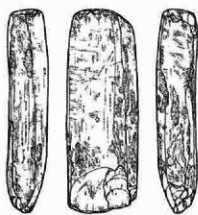


S105

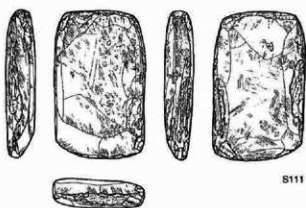




磨製石斧 3



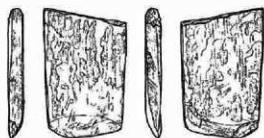
S110



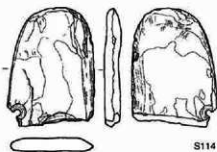
S111



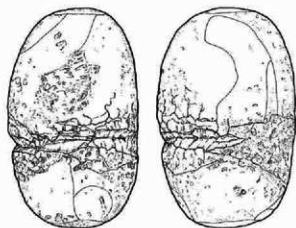
S112



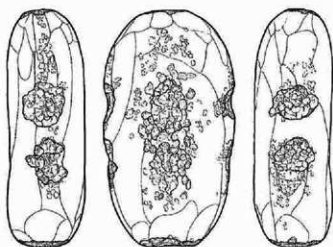
S113



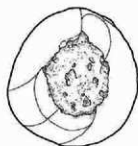
S114

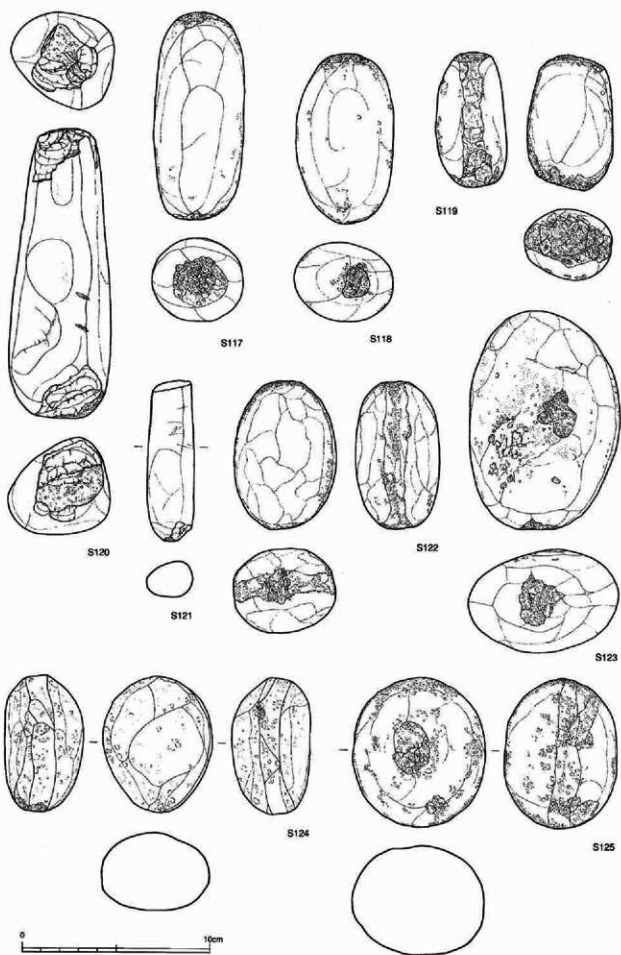


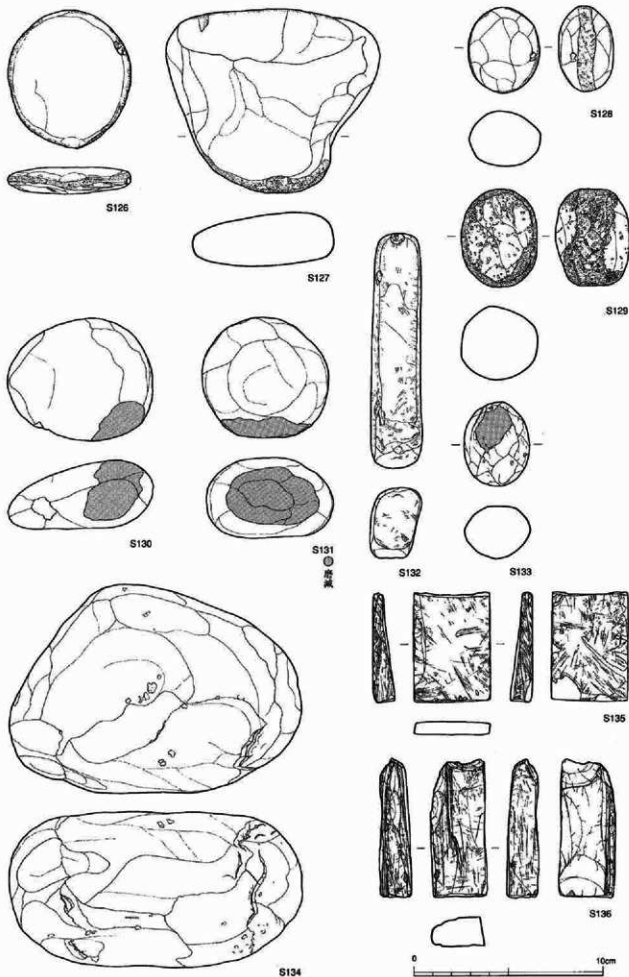
S115



S116

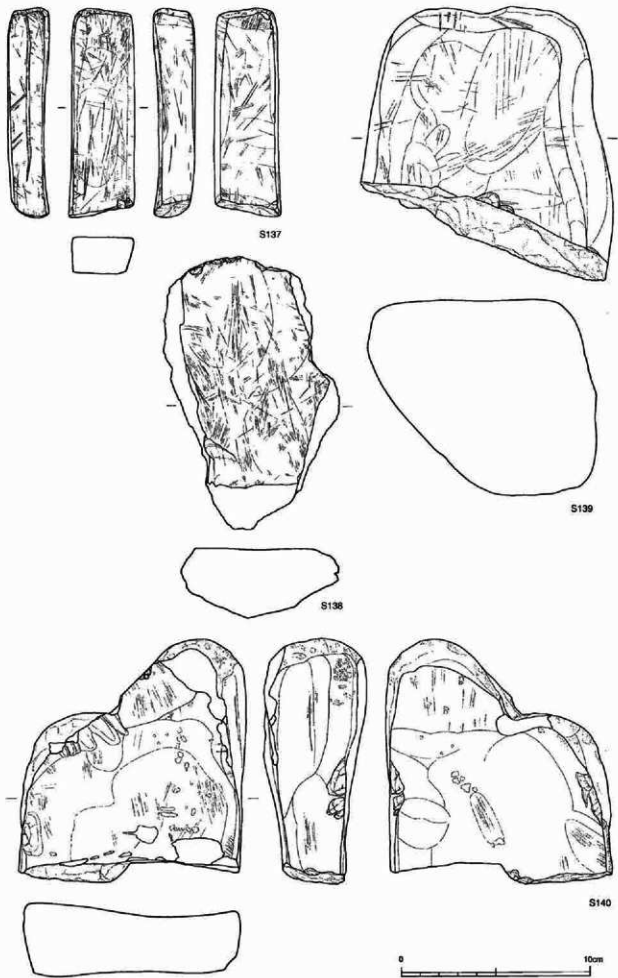




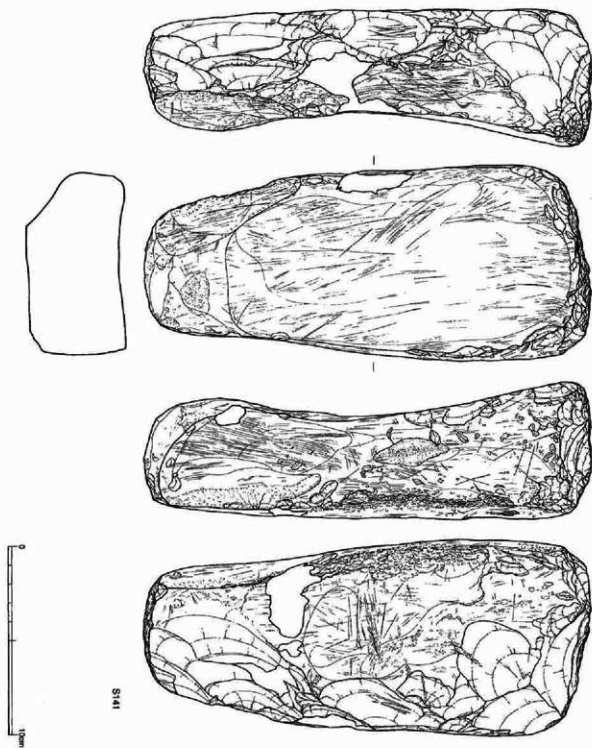


◎ 磨面

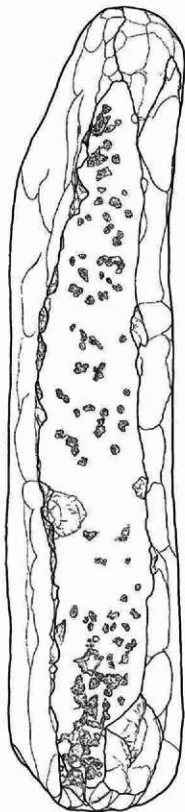
敲石・すり石2・砥石1



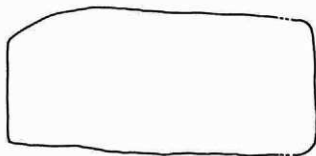
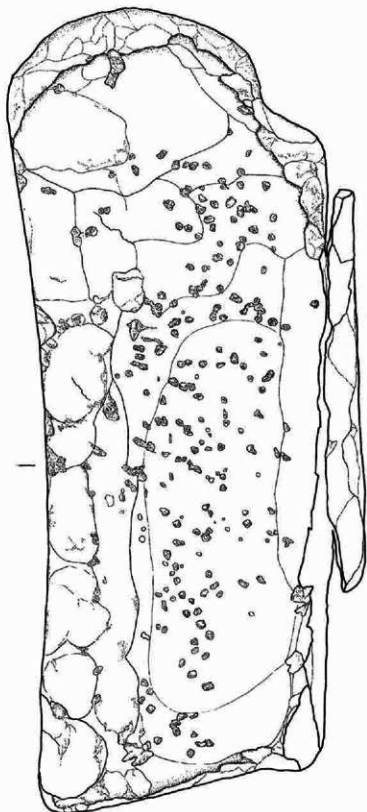
磁石2



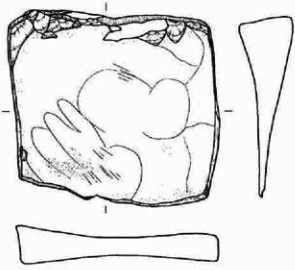
砥石3



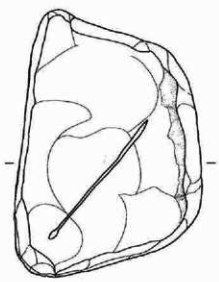
S142



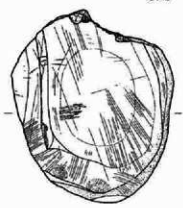
砾石4



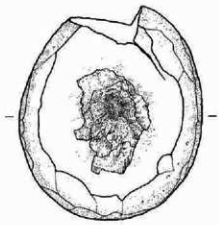
S143



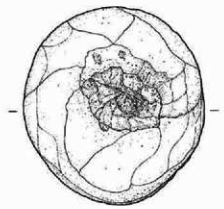
S144



S145

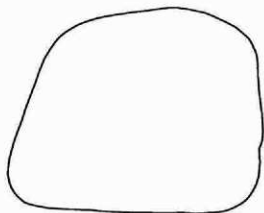
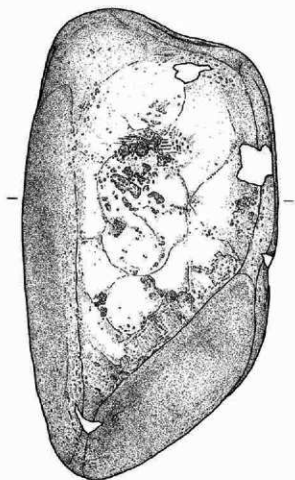


S147



S146

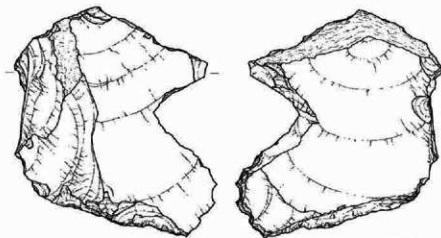




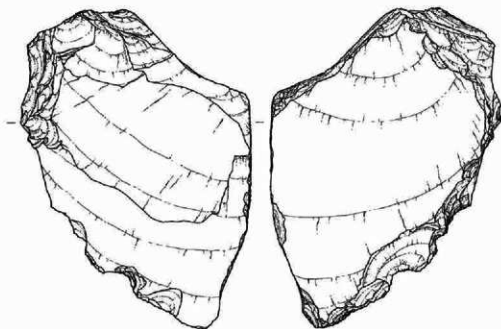
S148



台石

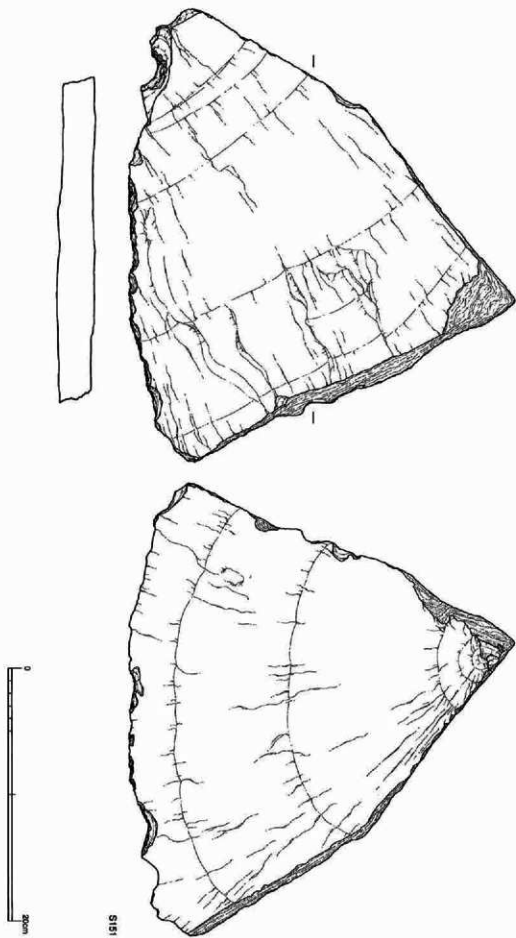


S148

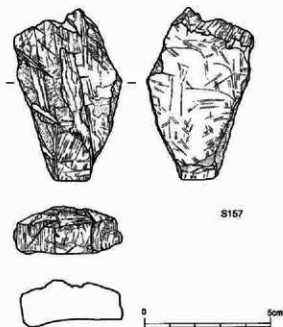
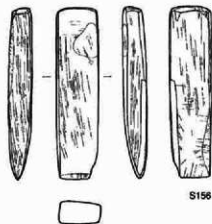
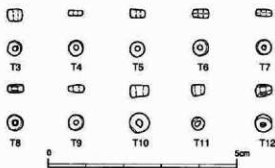
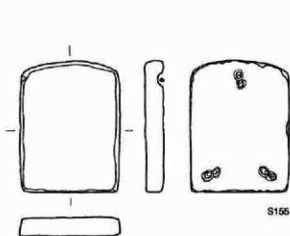
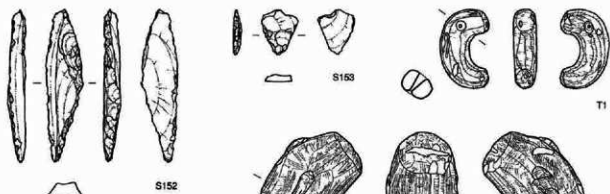


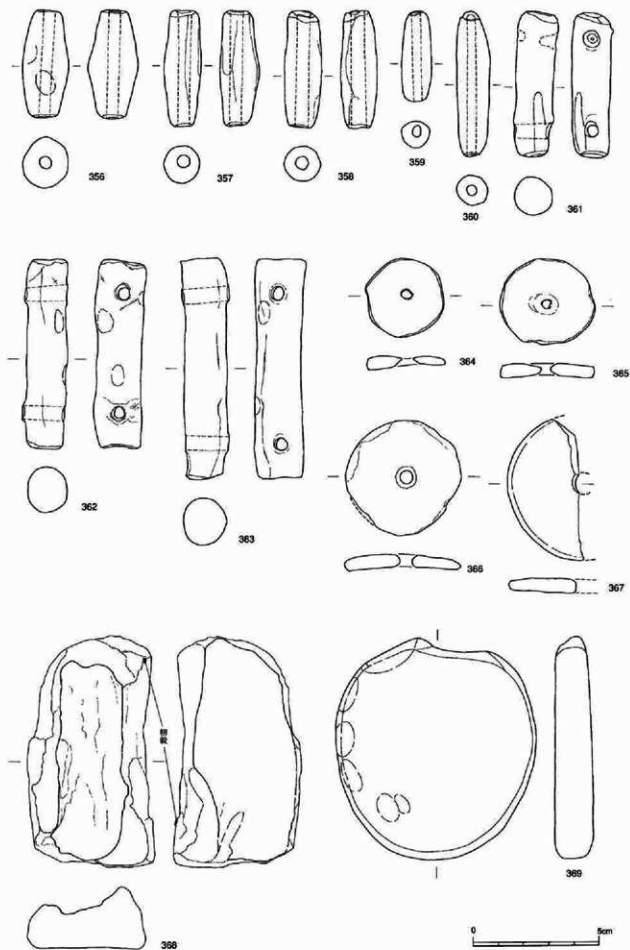
S150



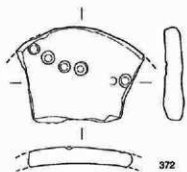
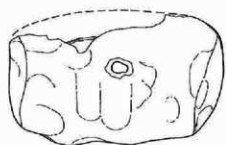


分割原石2

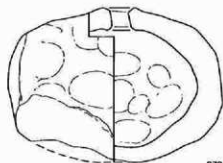




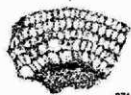
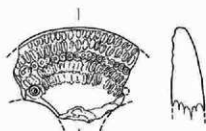
土製品 1 (土錘・有孔円盤・不明品)



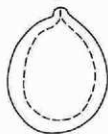
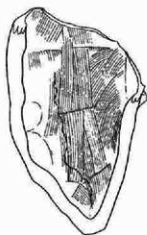
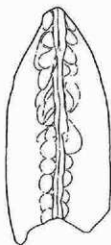
372



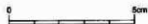
370



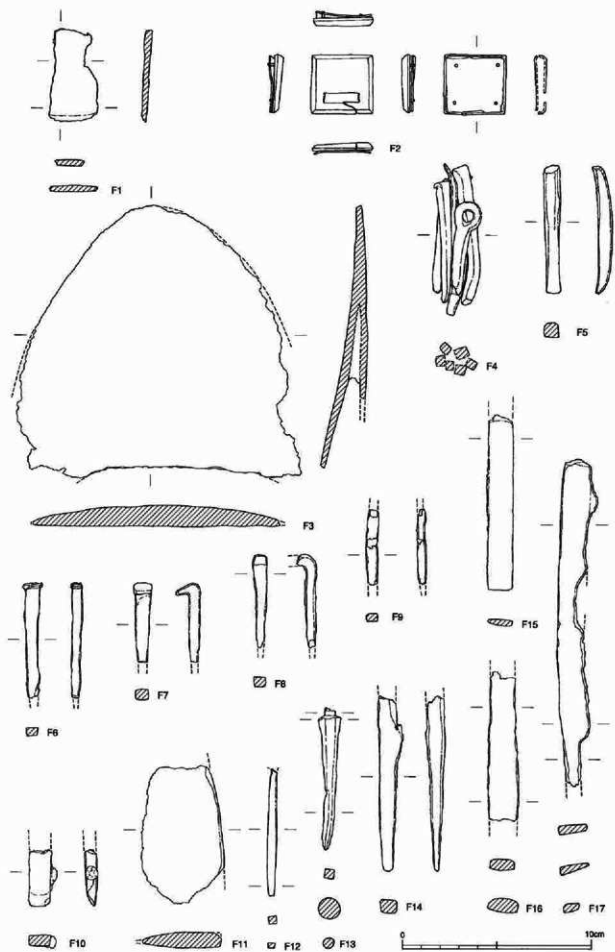
371



373



土製品2 (樽形・分銅形・皮袋形)





C1



C2



C3



C4



C5



C5裏



C6



C7



C8



C9



C9裏



C10



C11



C12



C13



C14



C15



C16



C17



C18



C19



C20



C21



C22



C23



C24





C25



C26



C27



C28



C29



C30



C31



C32



C33



C34



C35



C36



C37



C38



C39



C40



C41



C42



C43



C44



C45



C46



C47





C48



C49



C50



C51



C52



C53



C54



C55



C56



C57



C58



C59



C60



C61



C62



C63



C64



C65



C66



C67



C68



C69



C70



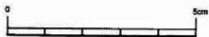
C71



C72



C73





C74



C75



C76



C77



C78



C79



C80



C81



C82



C83



C84



C85



C86



C87



C88



C89



C90



C91



C92



C93



C94



C95



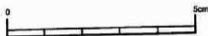
C96

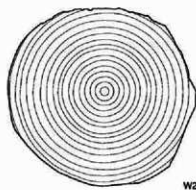
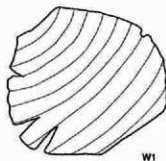
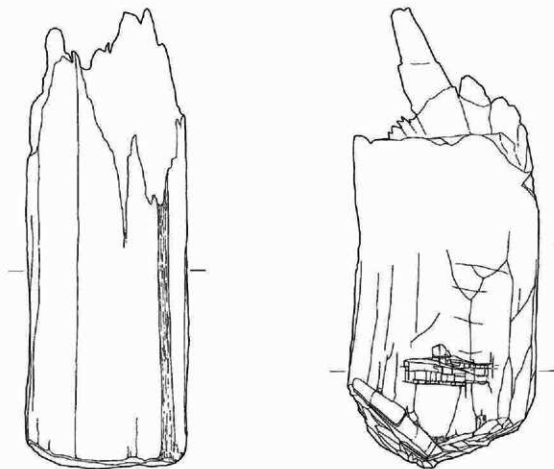


C97

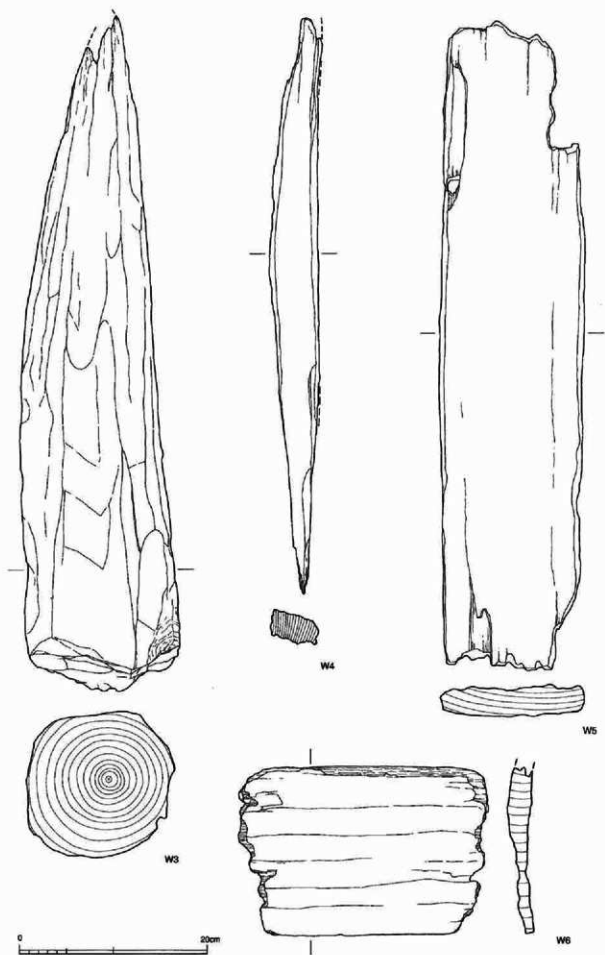


C98

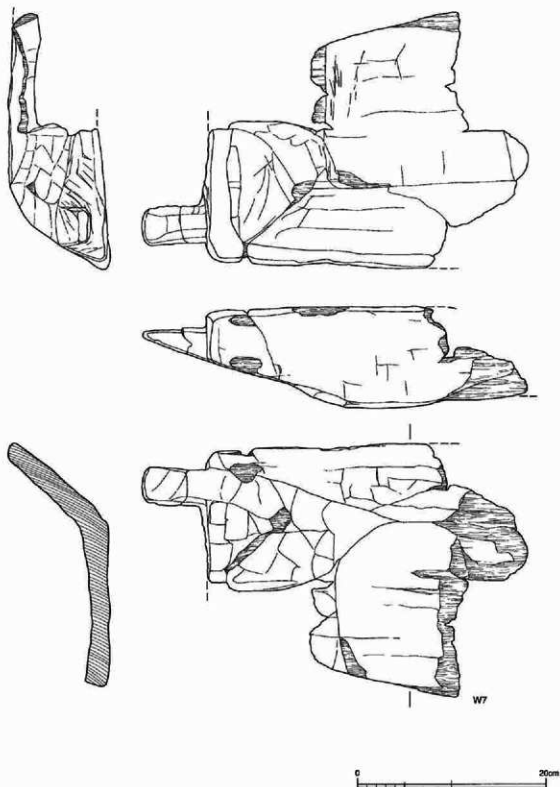




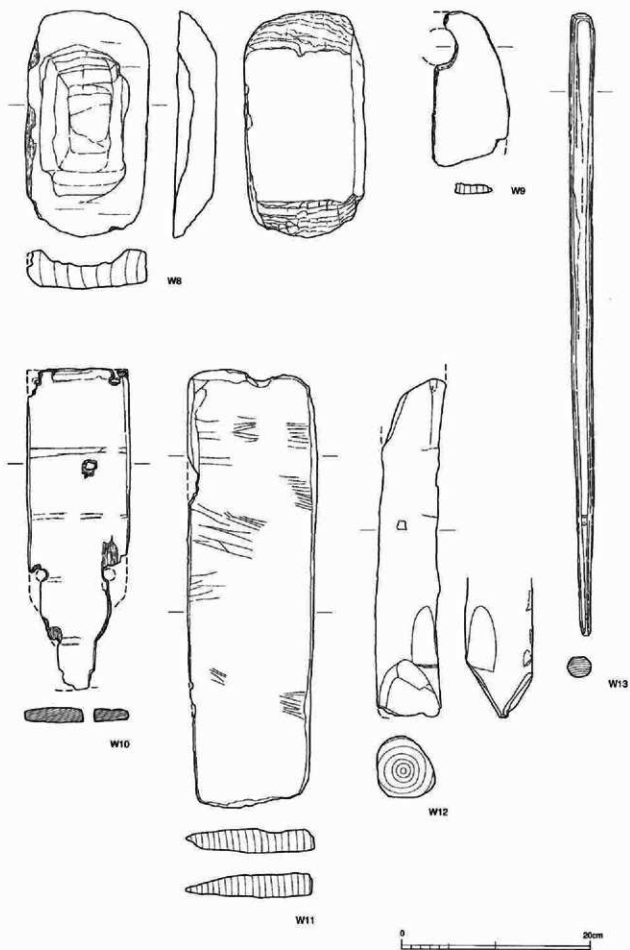
木器1 (ビット)



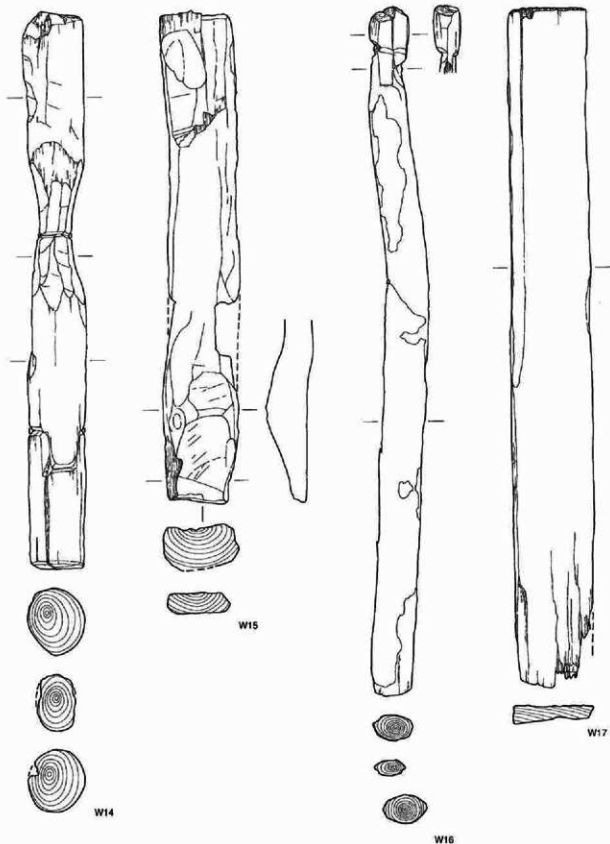
木器2 (ビット・土坑)



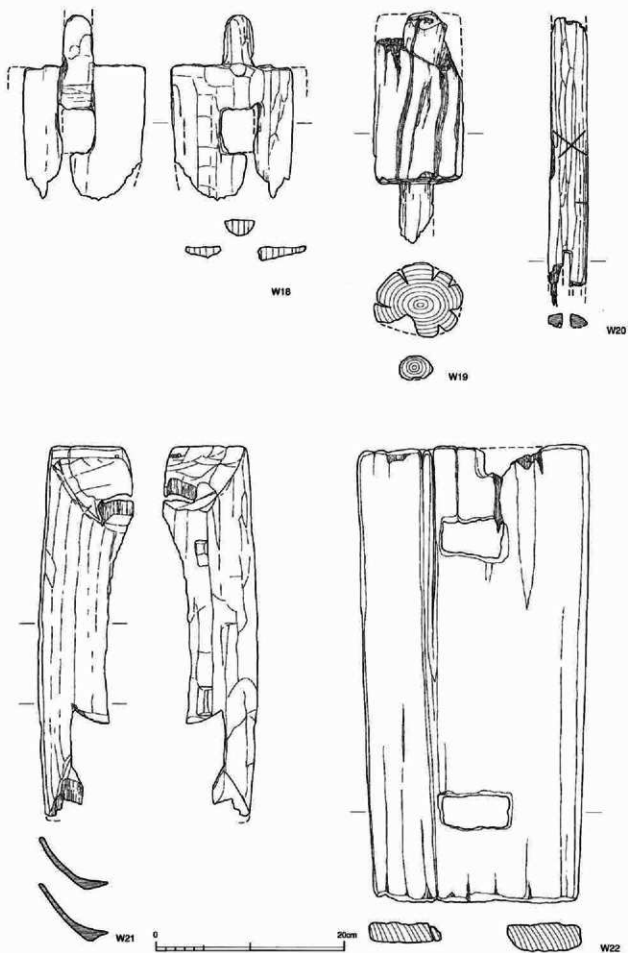
木器3 (流路)



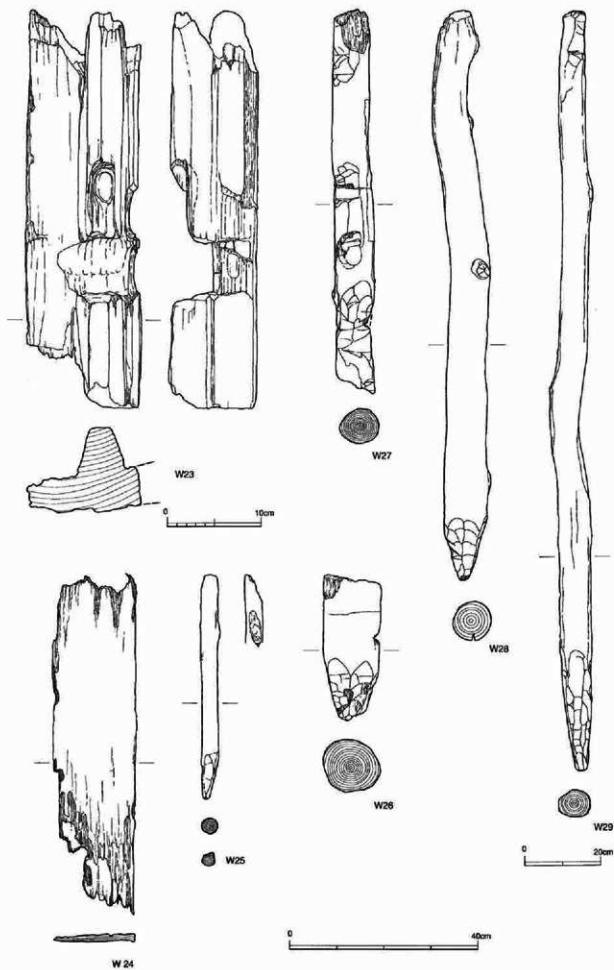
木器4 (流路)



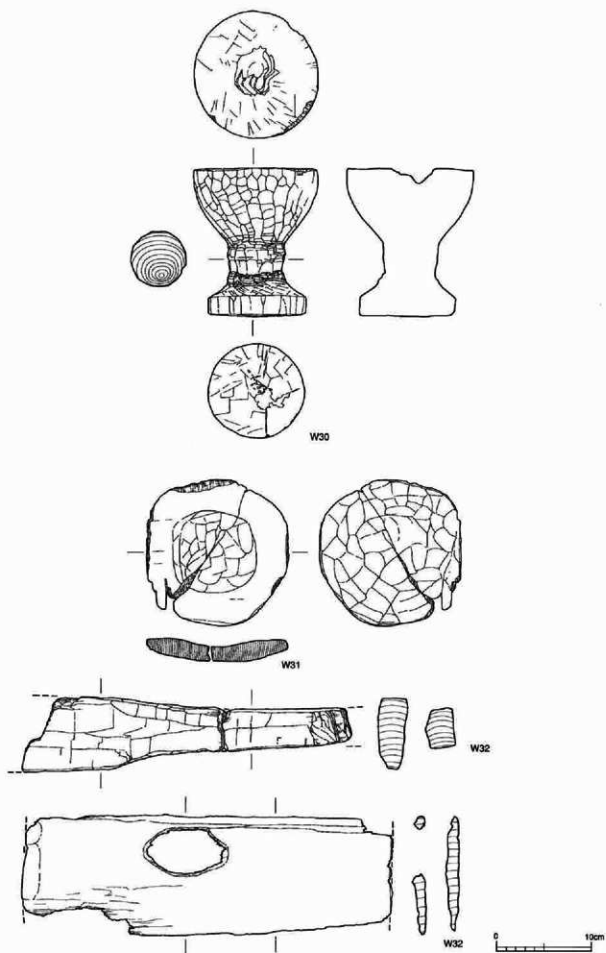
木器5 (流路)



木器6 (流路)



木器7 (流路)



木器B (流路)

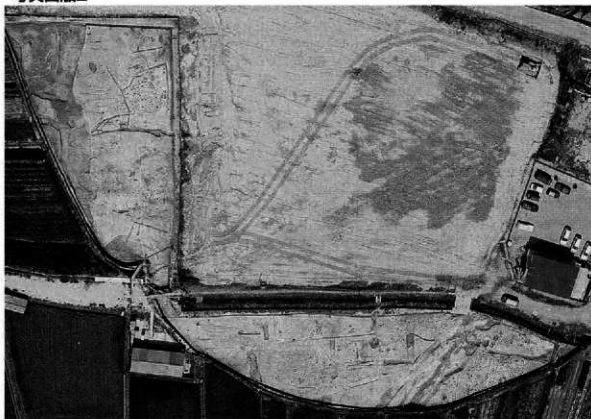
写真図版



遺跡遠景
(南から)



No. 1 地点全景
(東から)



A・D区全景
(真上から)



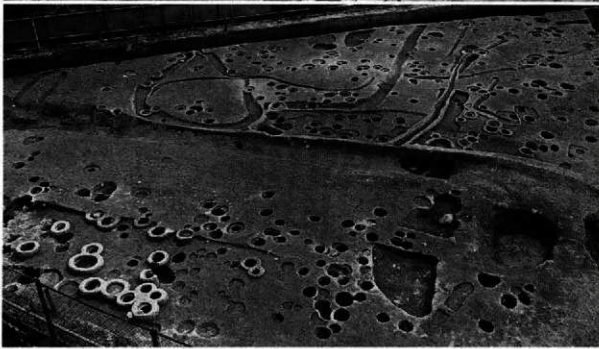
A区全景
(東から)



A区東半部全景
(南から)



A区流路西遺構群
(東から)



A区流路东遺構群
(北から)

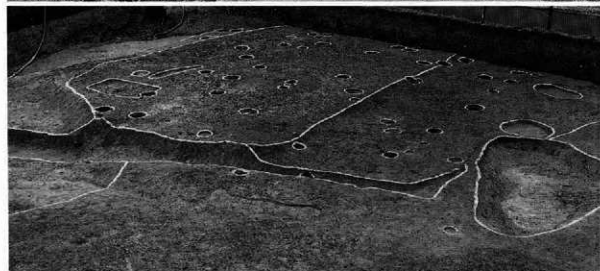


A区流路上面遺構群
(北から)

写真図版4



B-1・4区
(東から)



B-4区南端遺構群
(北東から)



B-2区
(東から)



B-2区
(南から)



B・C-1区
(西から)



B-3区
(北から)



B-3区
(西から)



B-3区南半
(東から)



B-7・8区
(北から)



B-7・8区
(南から)



B-7区
上面遺構群 (西から)



C区北半遺構群
(南から)



C区 (南から)



D区 (東から)



D区 (南から)



D-5・7区
(南から)



D-4・6区
(東から)



D-4・6区
(北から)



D-4区南半
(北東から)



左
E区東半 (西から)



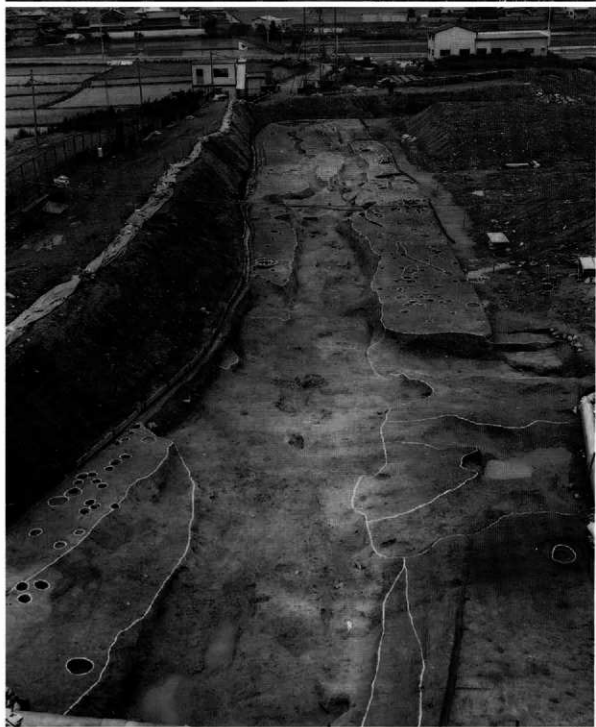
右
E区西半 (東から)



E区全景 (南から)



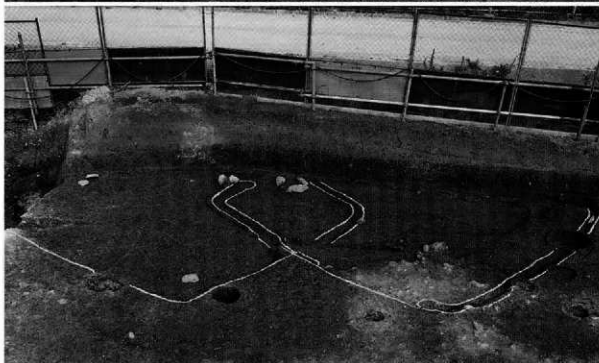
F区全景（南から）



F区西半（東から）



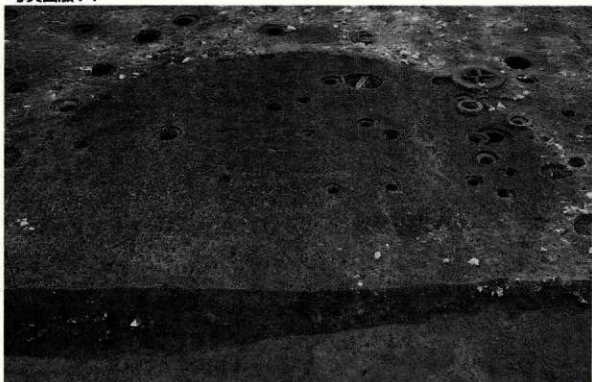
SH01 (西から)



SH02・03 (南から)



SH04 (西から)



SH05検出状況
(西から)



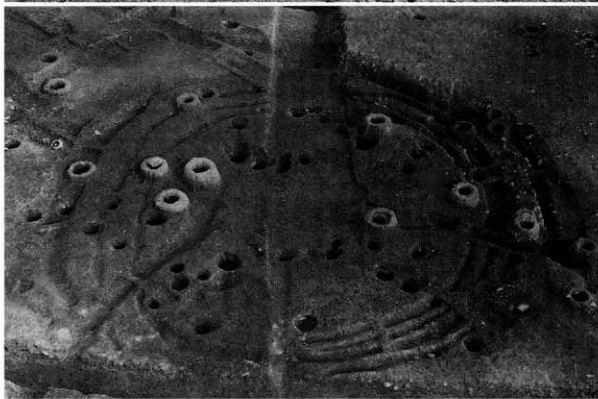
SH05 (西から)



SH05中央土坑
(東から)



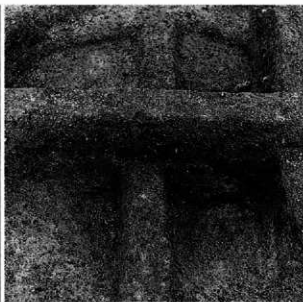
SH06 (北から)



SH07 (東から)



SH09・10 (南から)



左
SH09周壁溝内
石斧出土状況
(南から)

右
SH10内土坑
セクション (南から)



SH11 (北から)



SH12 (南から)



左
SH12内土坑
上面土器、及び礫
出土状況（西から）



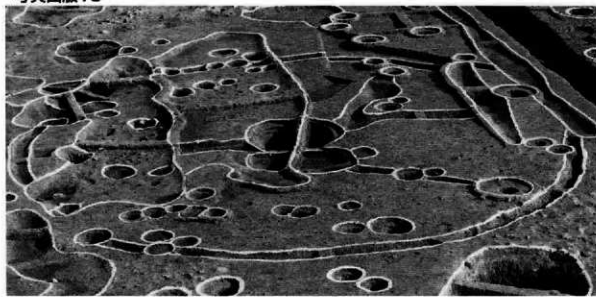
右
SH12床面
古墳時代土師器
出土状況（西から）



SH13（西から）



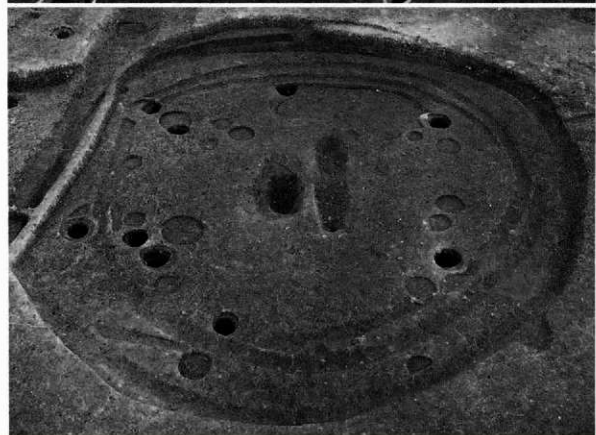
SH14（北から）



SH15 (南から)



SH16 (北から)



SH17 (西から)



左上
SH15中央土坑
(西から)



右上
SH17作業風景



左下
SH17中央土坑
(西から)



右下
SH18中央土坑
(西から)



SH18 (西から)



SH18と排水溝
(北西から)



SH19検出状況
(北西から)



SH19 (北東から)



左
SH19中央土坑
(南東から)



右
SH20
作業風景



SH20検出状況
(西から)



SH20炭化材・遺物
出土状況 (西から)



SH20
炭化材配置状況
(西から)



SH20 (西から)



SH20中央土坑
(東から)



SH21~23
(東から)



SH21検出状況
(西から)



SH21 (南から)



SH21中央土坑
(南から)



SH22・23 (北から)



左
SH21中央土坑
(東から)



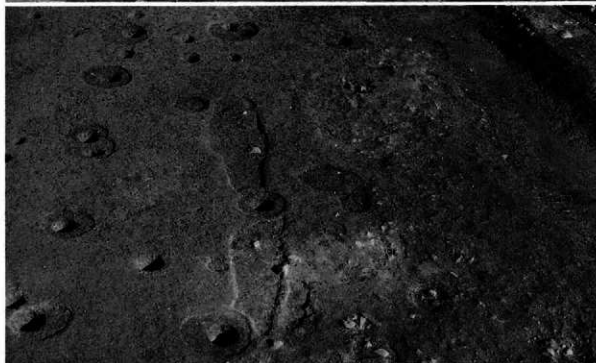
右
SH22・23
中央土坑 (西から)



調査区北東
掘立柱建物跡群
(西から)



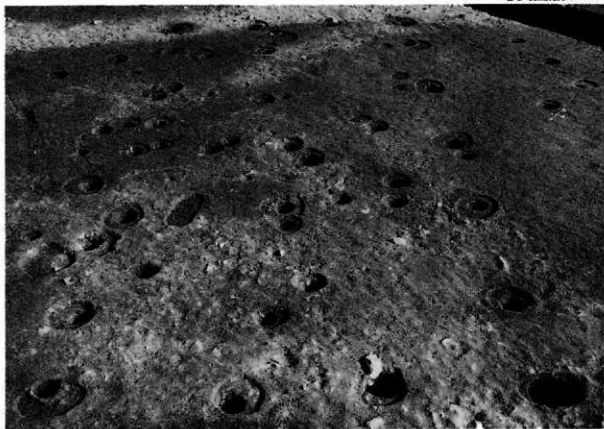
SB01 (西から)



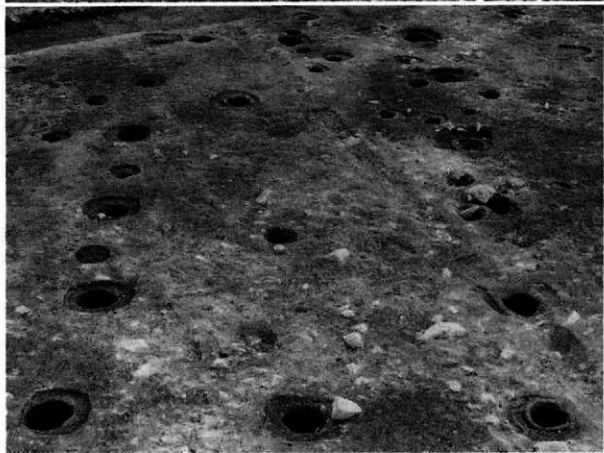
SB02 (南から)



SB03 (南から)



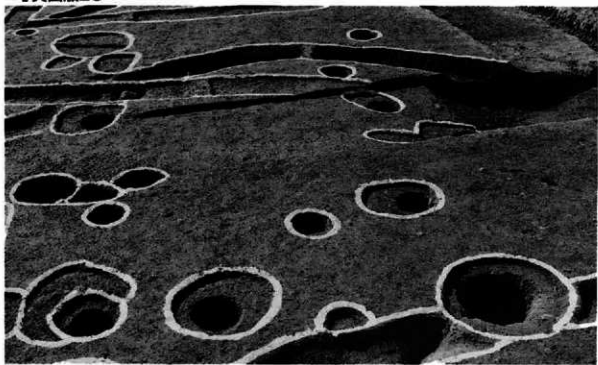
SB04 (南から)



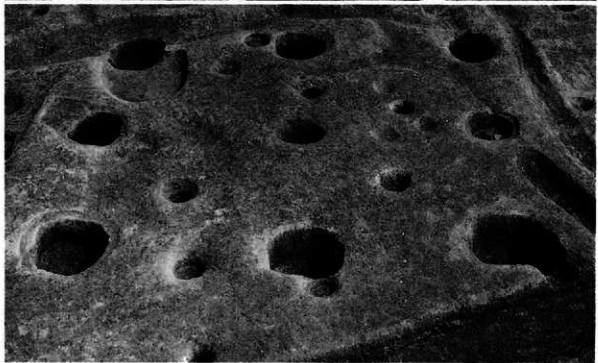
SB05 (西から)



SB10 (南から)



SB11 (南から)



SB13 (西から)



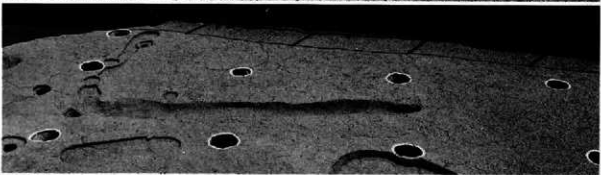
SB14 (南から)



SB15 (南から)



SB17 (北から)



SB18 (北から)



SB17・18 (西から)



左上
SK207 (北東から)

右上
SX06 (西から)

左下
SK357 (南から)

右下
SK356 (南から)



SK458 (北から)



左
SK455 (西から)

右
SK455 (南東から)



左
SK458 (東から)



右
SK459 (北から)



SK251 (西から)



左上
SK251 (北東から)

左下
SK251 セクション
(西から)

右
SK418 (南から)



SK401
弥生土器出土状況
(西から)



左・右
出土状況アップ



左
SK402
弥生土器出土状況
(東から)



右
SK402
棺材出土状況
(東から)



左
SK402
弥生土器完掘状況
(東から)

右
SK403 (東から)



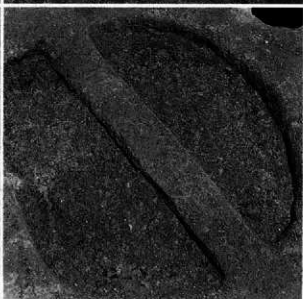
SK411 (東から)



左上
SK411
出土状況アップ

左下
SK419
出土状況アップ

右
SK420 (南から)



左上
SK404 (西から)

右上
SK412 (南西から)

左下
SK111 (東から)

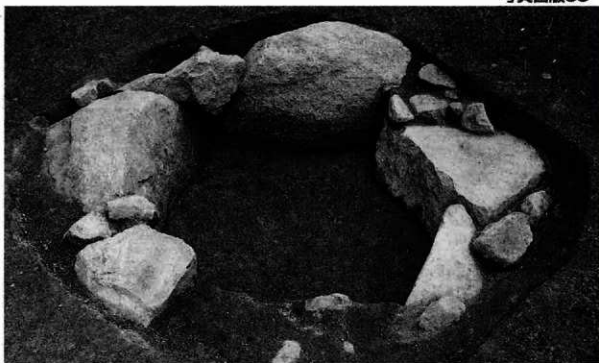
右下
SK410 (西から)



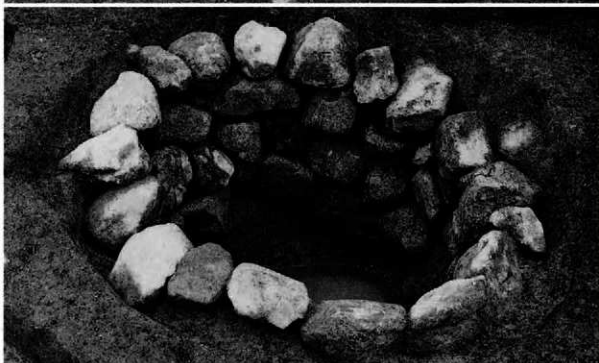
左
P548 (西から)

中
P151上面
(西から)

右
P151下面
(西から)



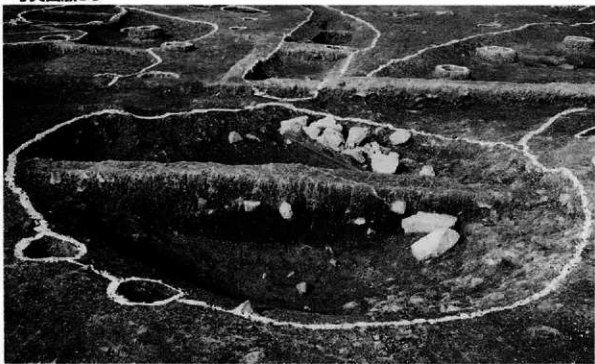
SE101 (南から)



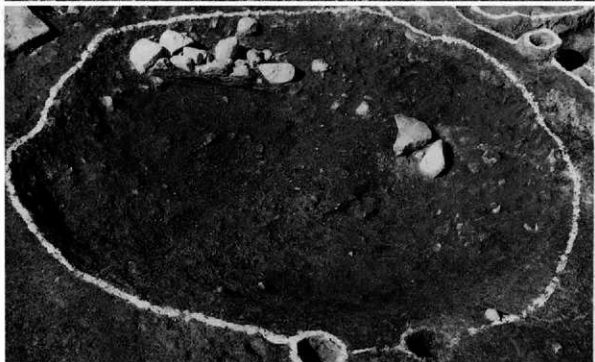
SE601 (南から)



SE201 (南から)



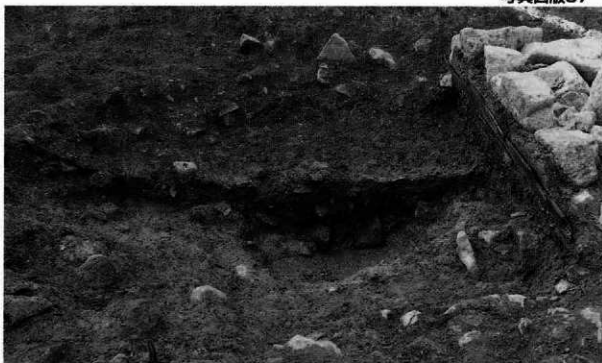
SE301
セクション (東から)



SE301
敷石・粹材検出状況
(東から)



SE301
完掘状況 (東から)



SE301

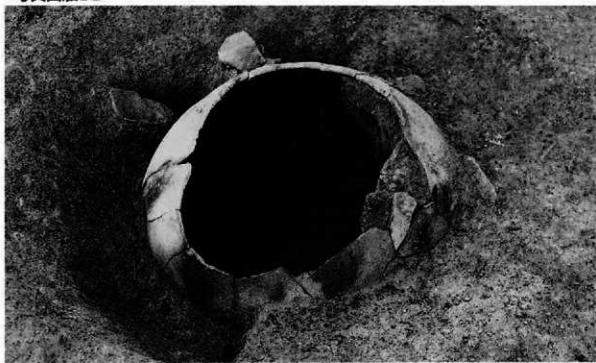
井戸枠内埋土

セクション (東から)



ST01 (北から)

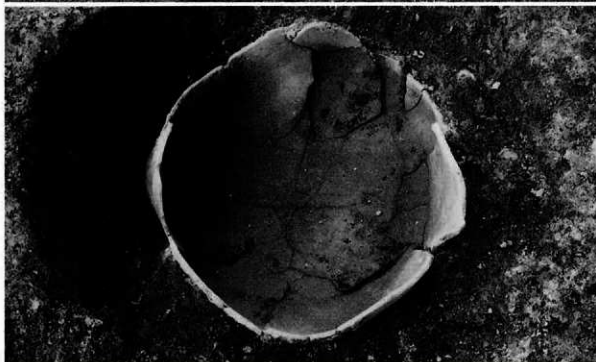
左
ST01棺身 (西から)右
ST02 (北から)



ST03 (東から)



ST04 (南から)



ST05 (南東から)



ST06 (東から)



ST06
断ち割り状況
(南から)



左
ST06 (南上から)



右
ST06 完掘状況
(南から)

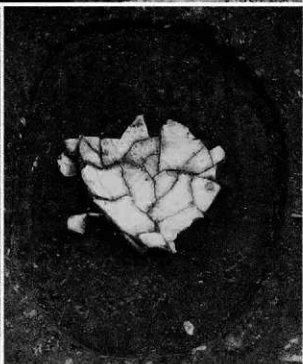


左
ST07 (南から)

右
ST08
磔埋積状況 (西から)

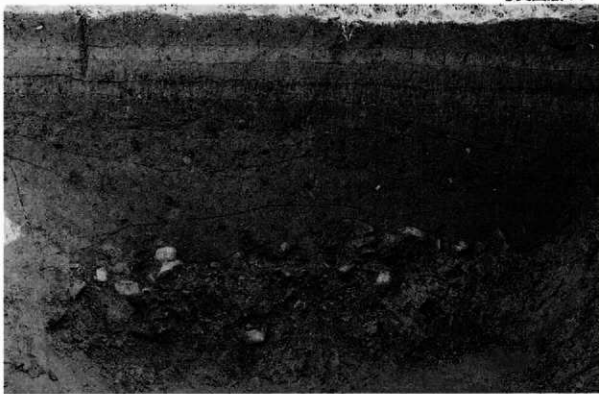


ST08 (西上から)



左
ST08
磔除去後状況
(西から)

右
ST09 (西から)



流路
東端セクション
(西から)



SD1001
(北西から)



SD1002西屑
製塩土器出土状況
(南から)



SD1002西層
セクション
(南から)



SD1002南半
(北東から)



左
SD1001
セクション
(西から)



右
SD1002 南端②
西側セクション
(南から)

SD1002 ②
セクション
(南西から)

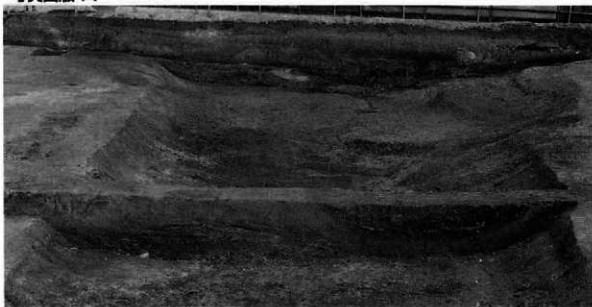


SD1002 ①
北側セクション
(南東から)

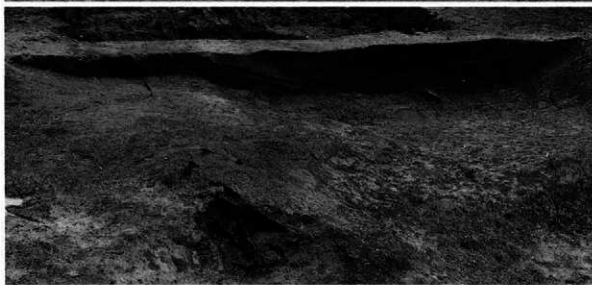


SD1003 (南から)





SD1003 ①
北端セクション
(南から)



SD1003 ②
中央セクション
手前はわずかに遺存
する構
(南から)



SD1003 ③
南端セクション
(南から)



左上
SD1005 ⑤
セクション (東から)



左下
SD1006 ④
セクション (東から)



右
SD1003
古墳時代土師器
出土状況遠景
(南西から)



SD1003
古墳時代土師器
出土状況（東から）

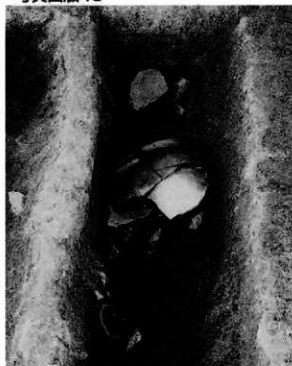


左
古墳時代土師器
出土状況（南から）

右
掘削作業風景

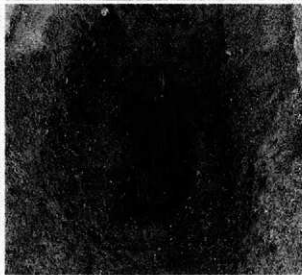


SD326
遺物出土状況
（北から）



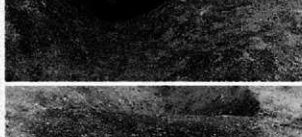
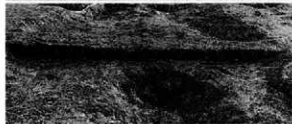
左
SD289
遺物出土状況
(南から)

右
SD602
遺物出土状況
(東から)



左
SD236
遺物出土状況
(南から)

右
SD455
遺物出土状況
(南から)



左上
SD262 (北から)

左中
SD318 (北から)

左下
SD401 (西から)

右上
SD608 (西から)

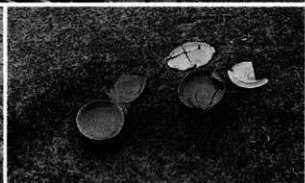
右下
SD402 (南から)



上層水田面
(北から)



左
上層水田畦畔肩部分
須恵器出土状況
(北から)



右
上層水田畦畔肩部分
須恵器出土状況近景



下層水田面
(南東から)



SD1003内
橋脚状遺構
(南から)



SD1003内
橋脚状遺構
(東から)



SD1003内
橋脚状遺構
断ち割り状況
(南から)

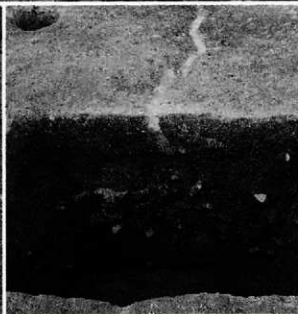


SD1004
(南から)



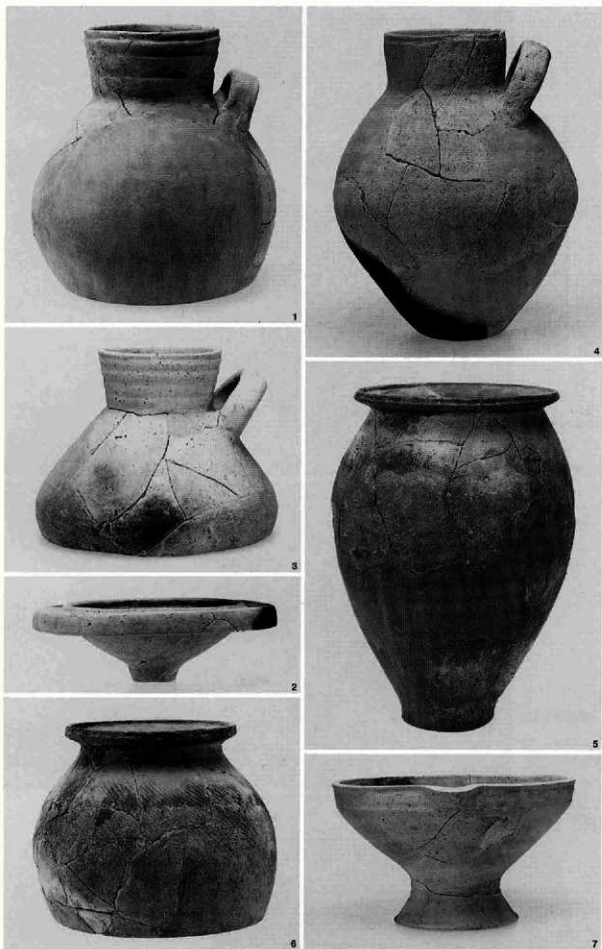
左
噴砂の調査

右
噴砂断ち割り
断面



銅銭出土状況





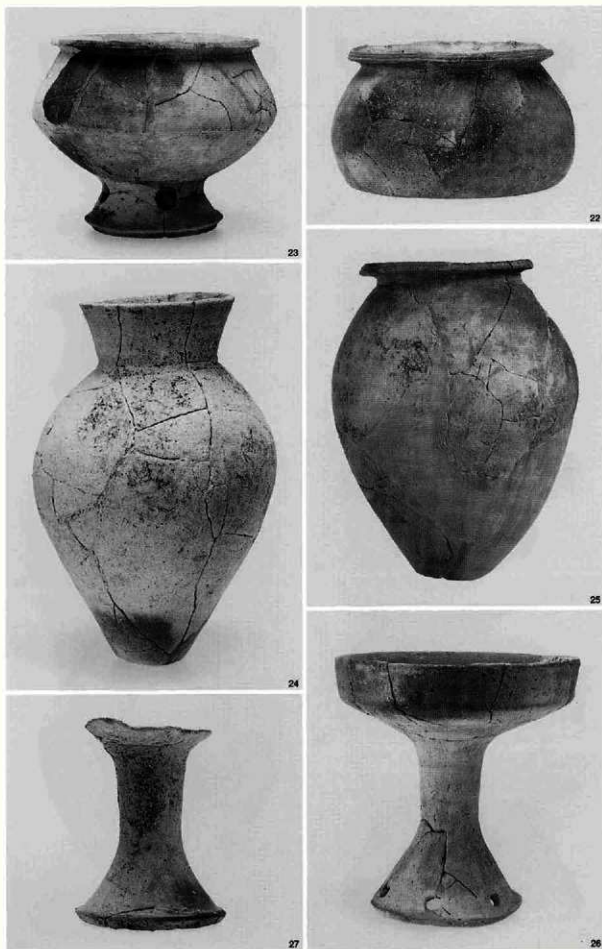
確認調査出土土器 1



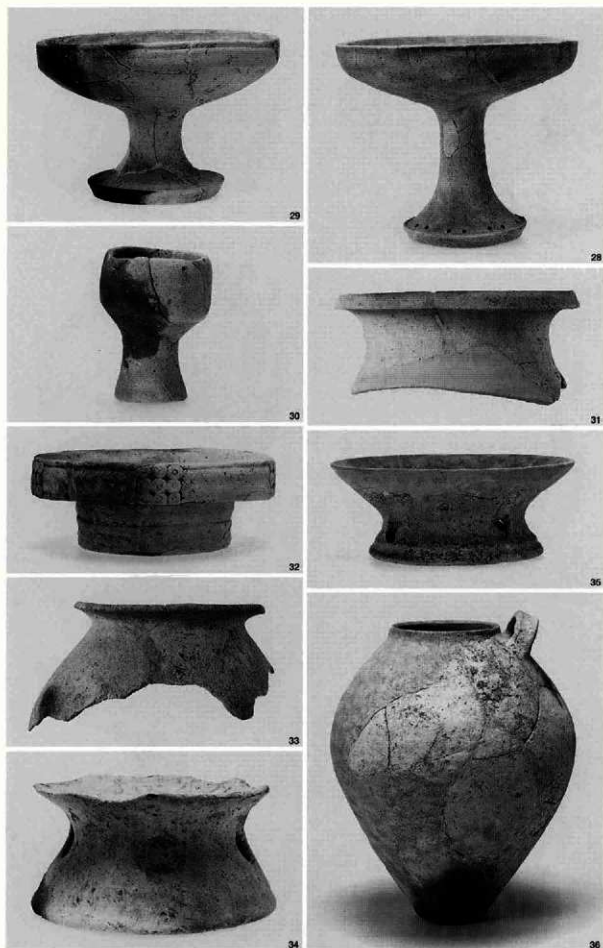
確認調査出土土器 2・弥生時代の土器 1 (竪穴住居)



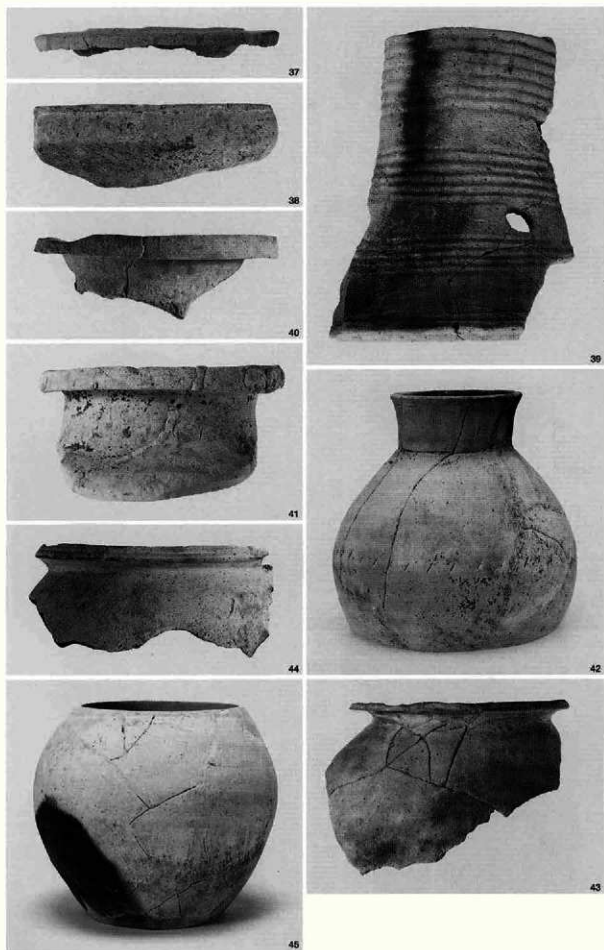
弥生時代の土器 2 (竪穴住居)



弥生時代の土器 3 (竪穴住居)



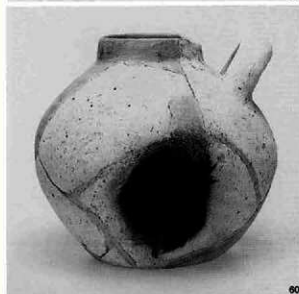
弥生時代の土器 4 (竪穴住居・土坑)



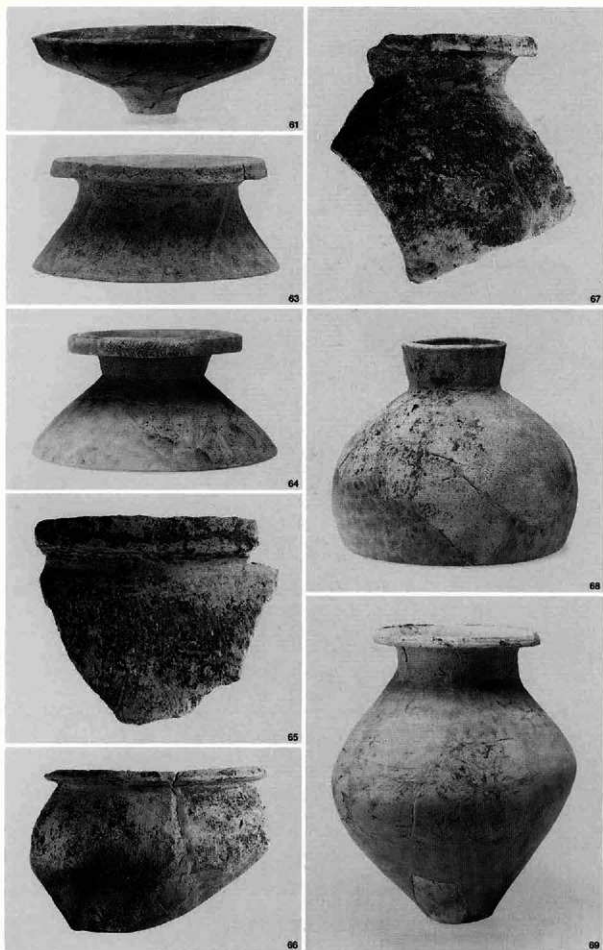
弥生時代の土器 5 (土坑)



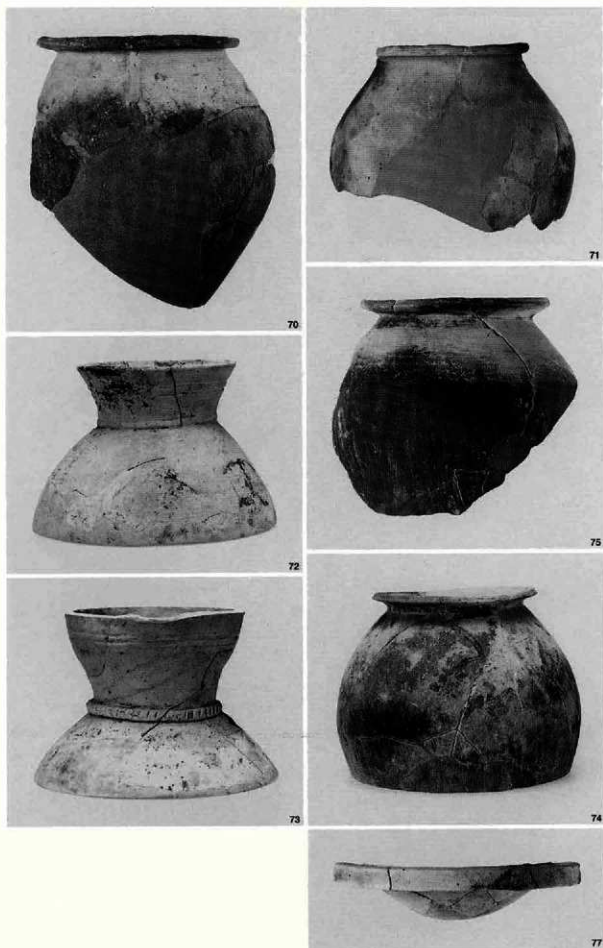
弥生時代の土器 6 (土坑)



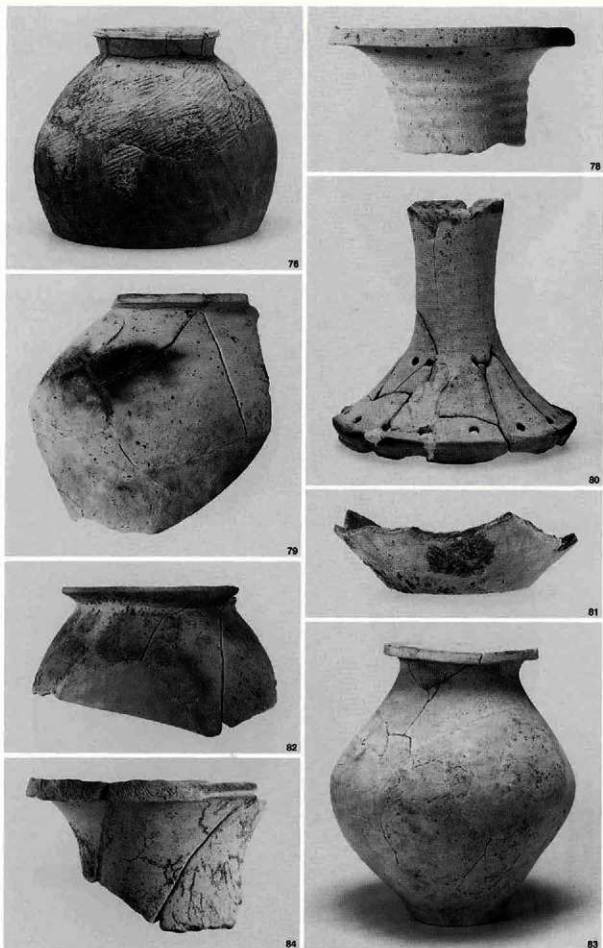
弥生時代の土器 7 (土坑)



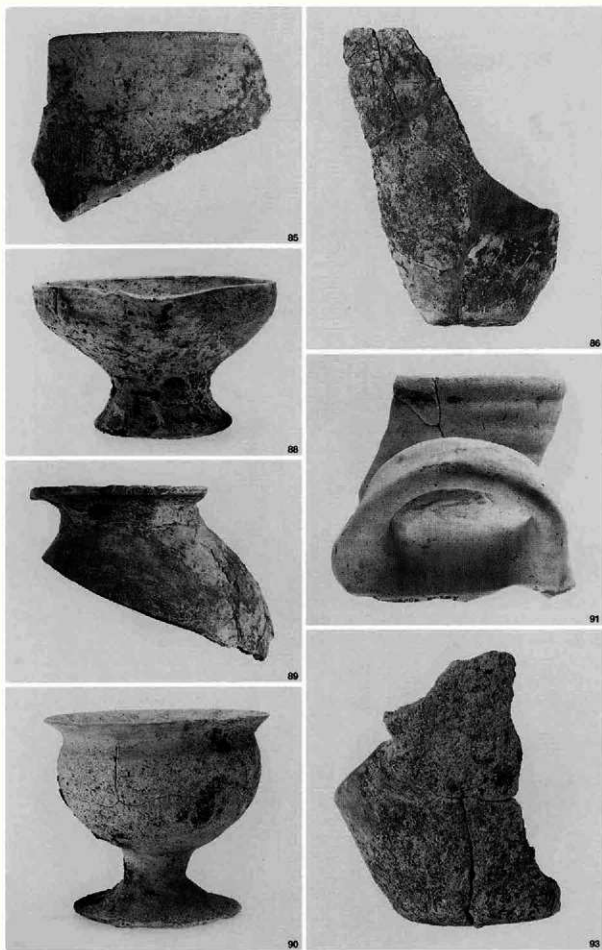
弥生時代の土器 8 (土坑)



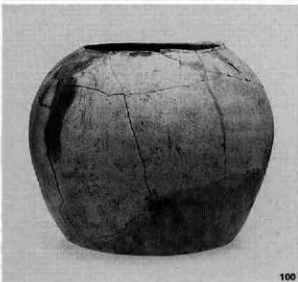
弥生時代の土器9（土坑）



弥生時代の土器10 (土坑・ピット)



弥生時代の土器11 (ピット)



弥生時代の土器12 (埋設土器)



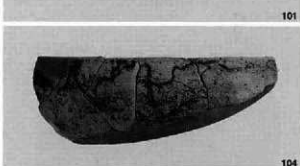
99



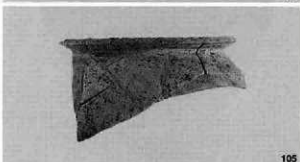
101



102



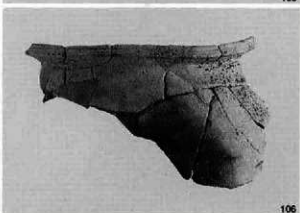
104



105

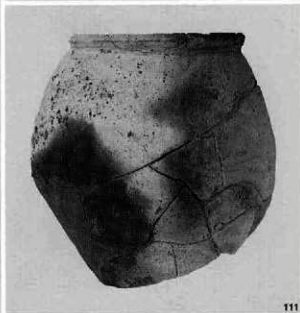
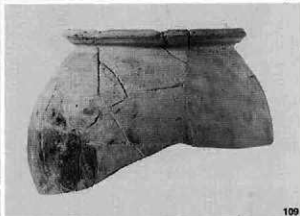


103

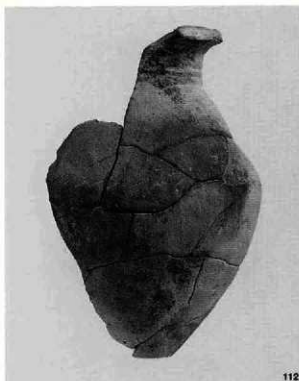


106

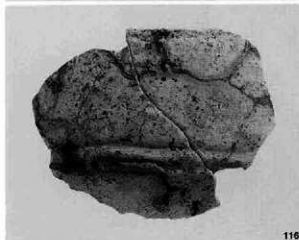
弥生時代の土器13 (埋設土器・溝)



弥生時代の土器14 (溝)



112



116



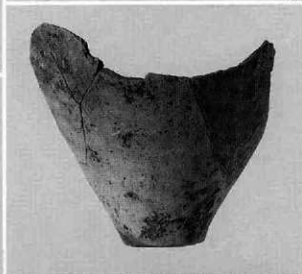
117



120



115



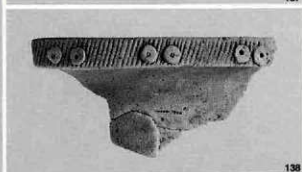
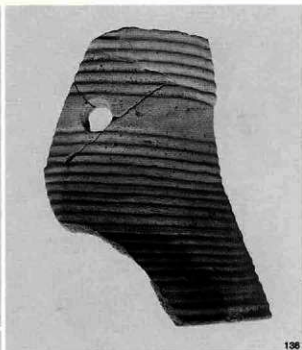
118

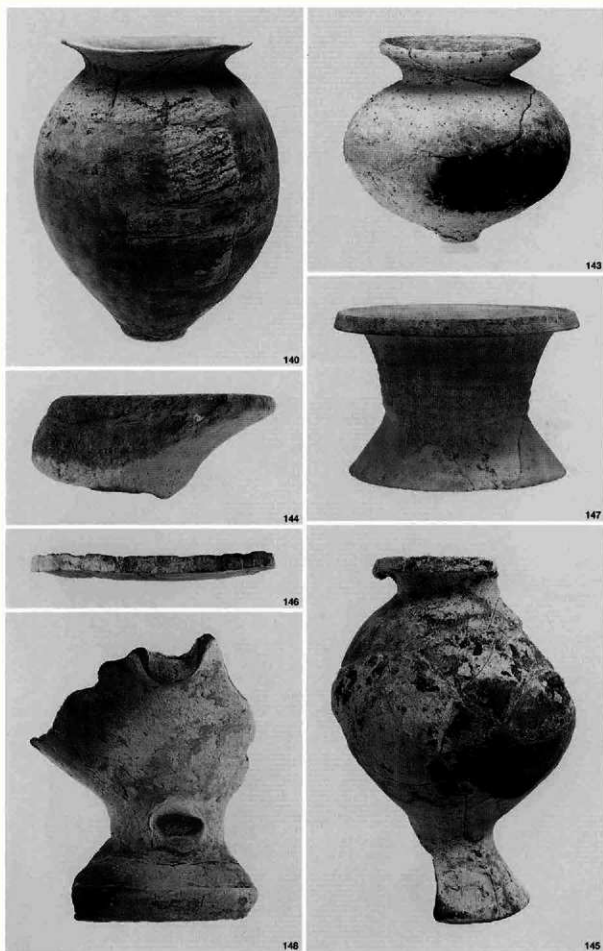
弥生時代の土器15 (溝)





弥生時代の土器17 (流路)

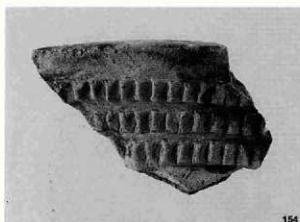




弥生時代の土器19 (流路・包含層)



弥生時代の土器20 (包含層)



154



156



157

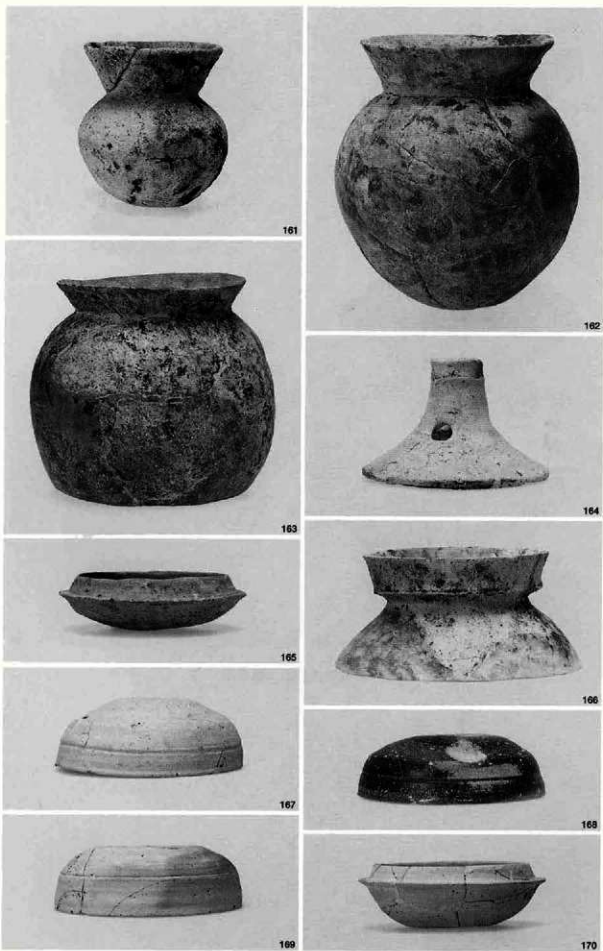


159



160

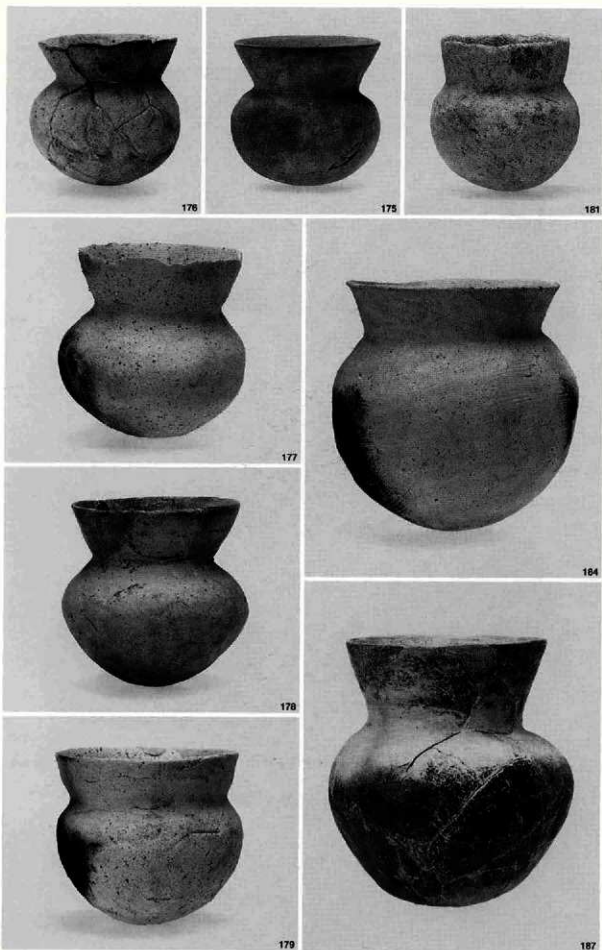
弥生時代の土器21 (包含層)



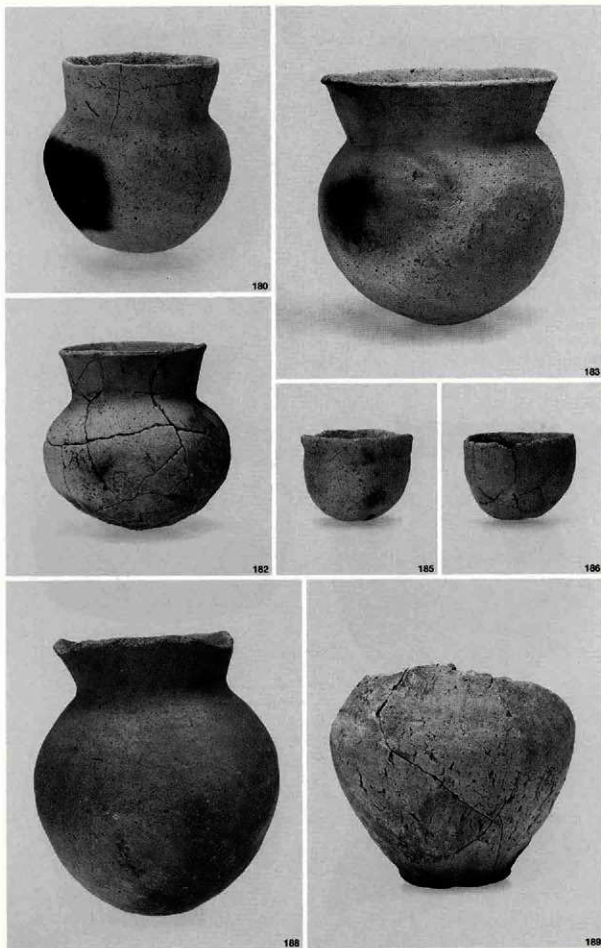
古墳時代の土器1（壜穴住居・土坑・水田）



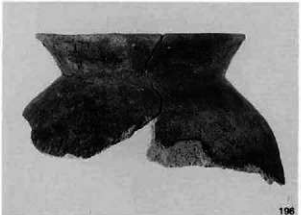
古墳時代の土器 2 (溝)



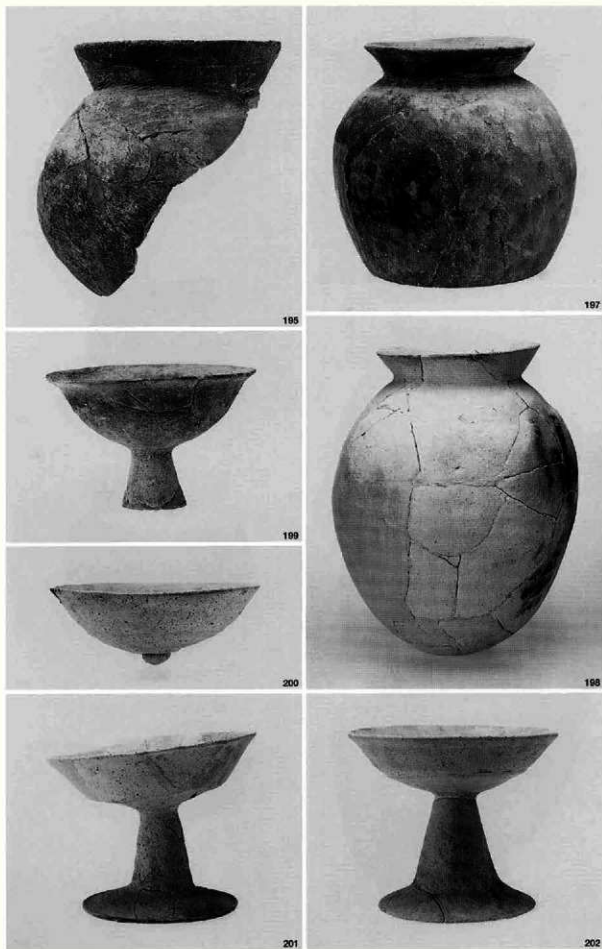
古墳時代の土器 3 (流路)



古墳時代の土器 4 (流路)



古墳時代の土器 5 (流路)



古墳時代の土器6 (流路)



203



204



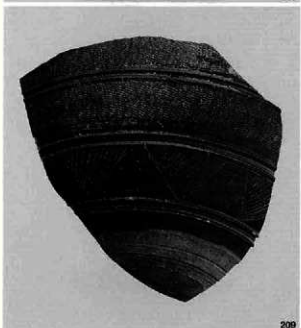
207



205



208

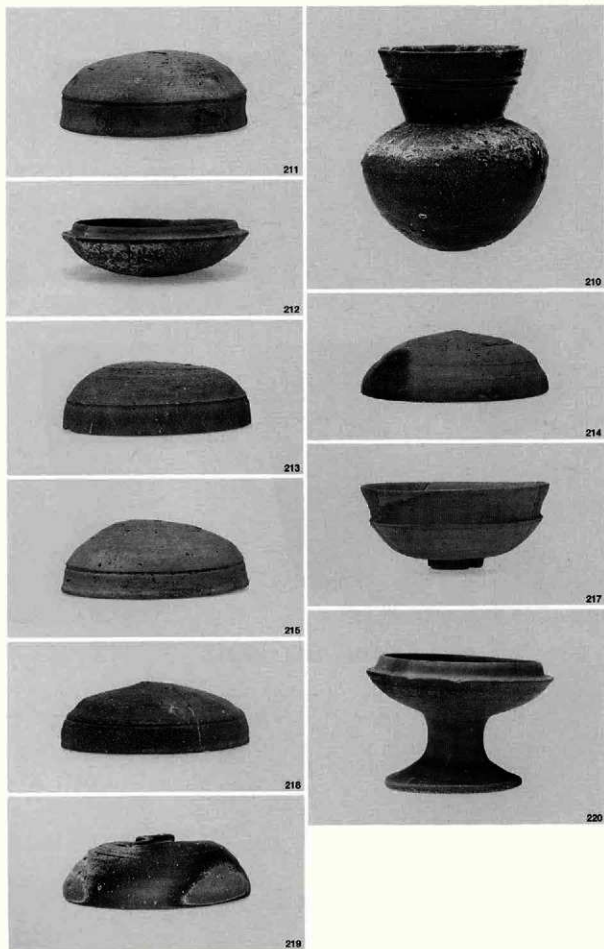


209

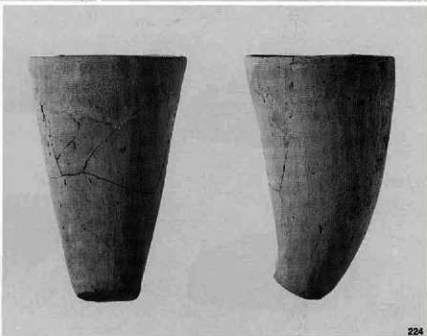


206

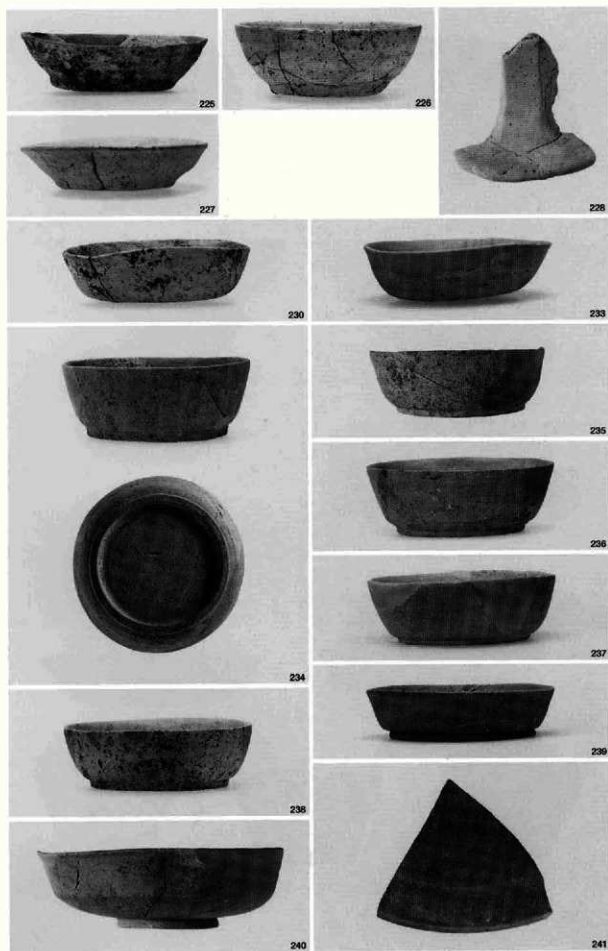
古墳時代の土器7 (流路)



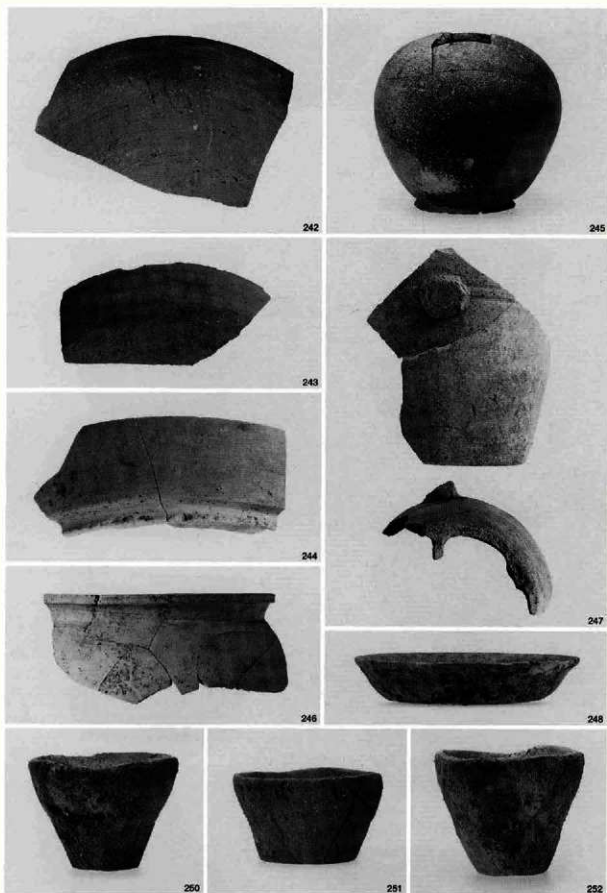
古墳時代の土器 8 (流路)

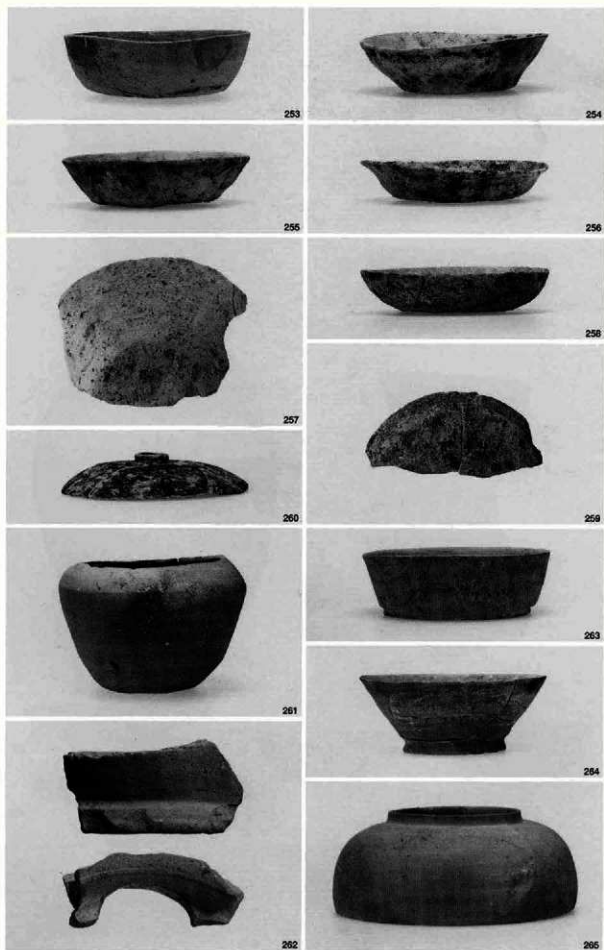


古墳時代の土器 9 (包含層)

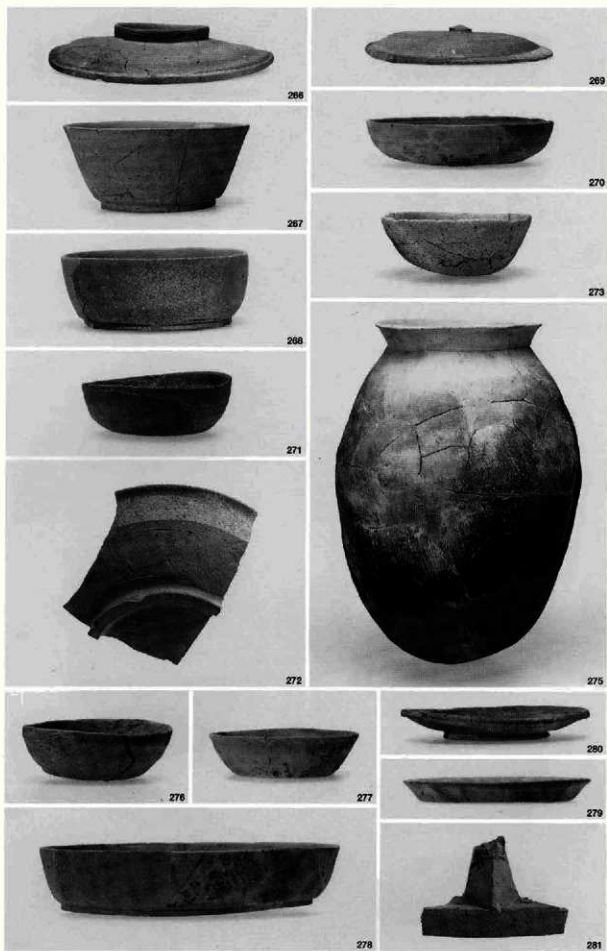


奈良時代の土器 1 (井戸・土坑)

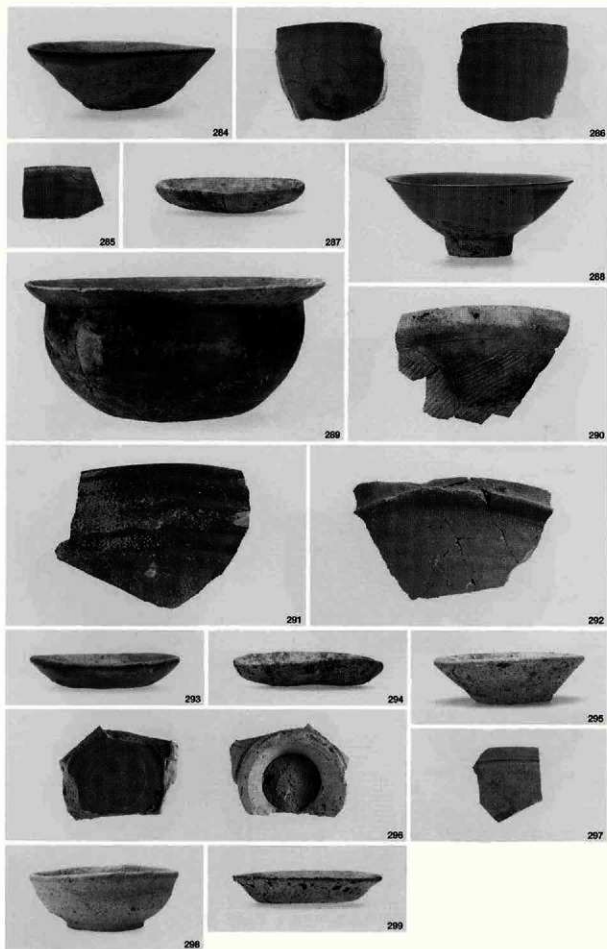




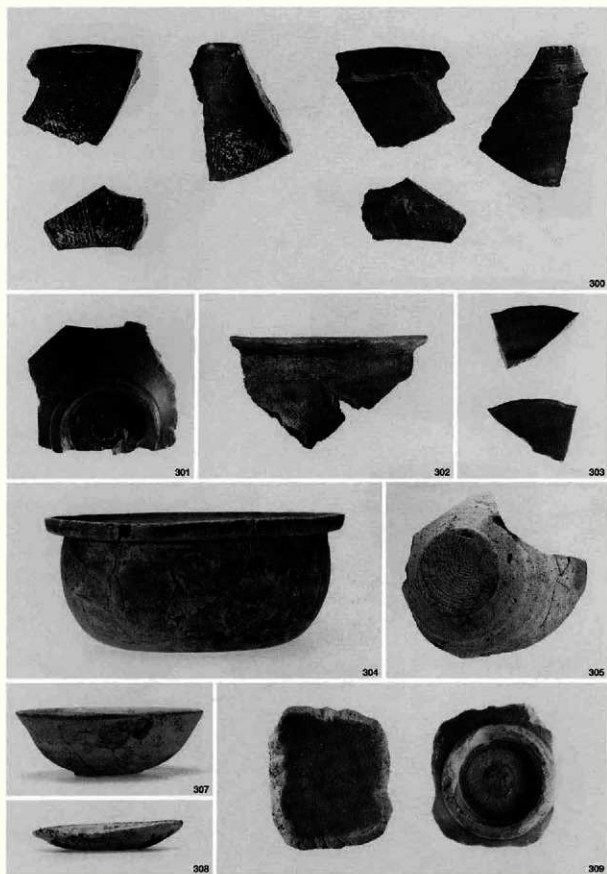
奈良時代の土器 3 (土坑・溝)



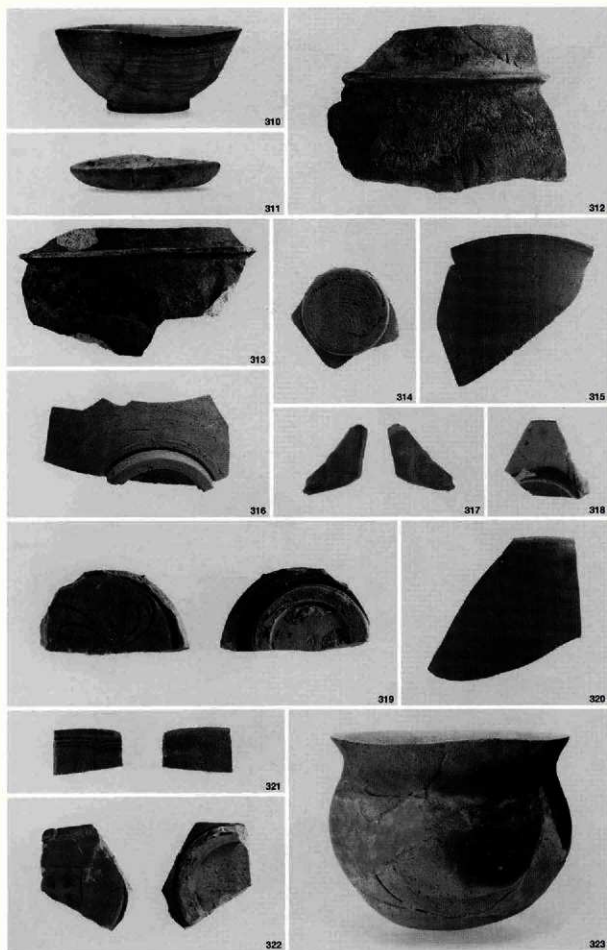
奈良時代の土器4 (流路・包含層)



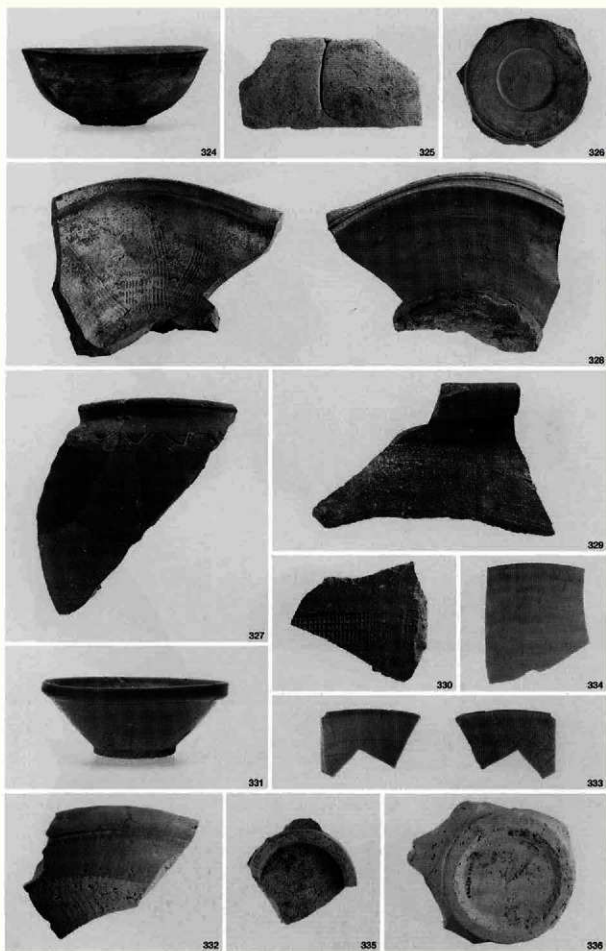
平安時代以降の土器1 (ピット)



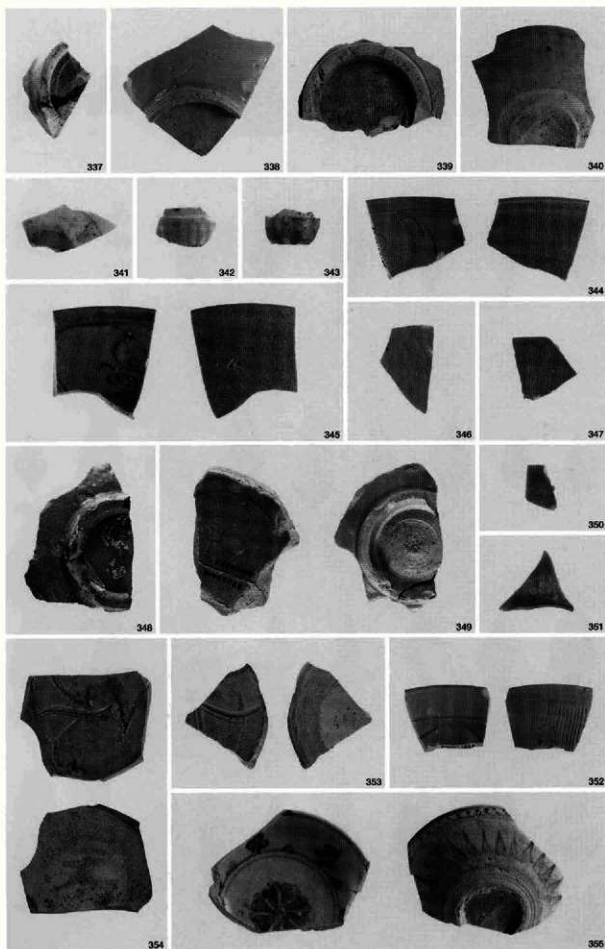
平安時代以降の土器 2 (土坑・溝)



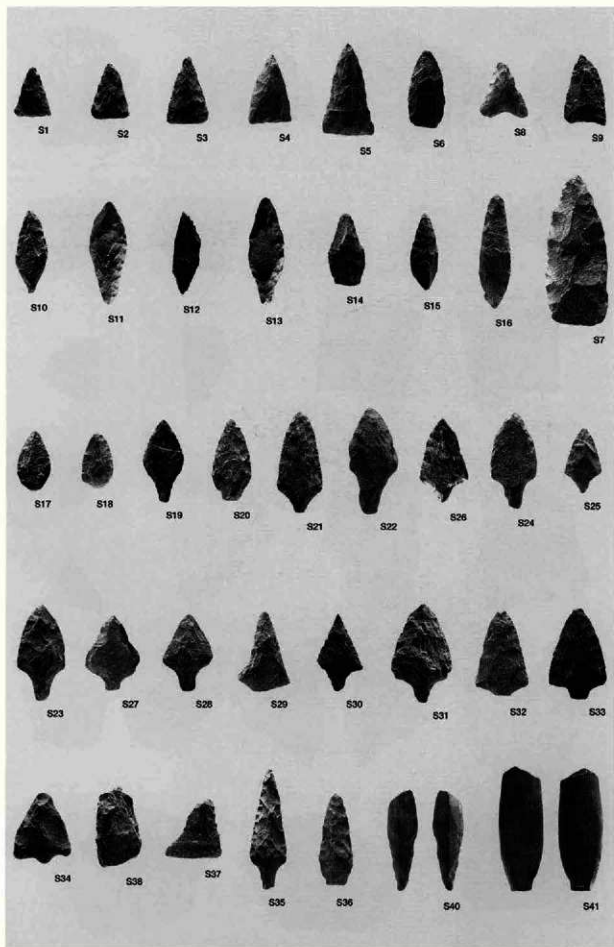
平安時代以降の土器 3 (流路)



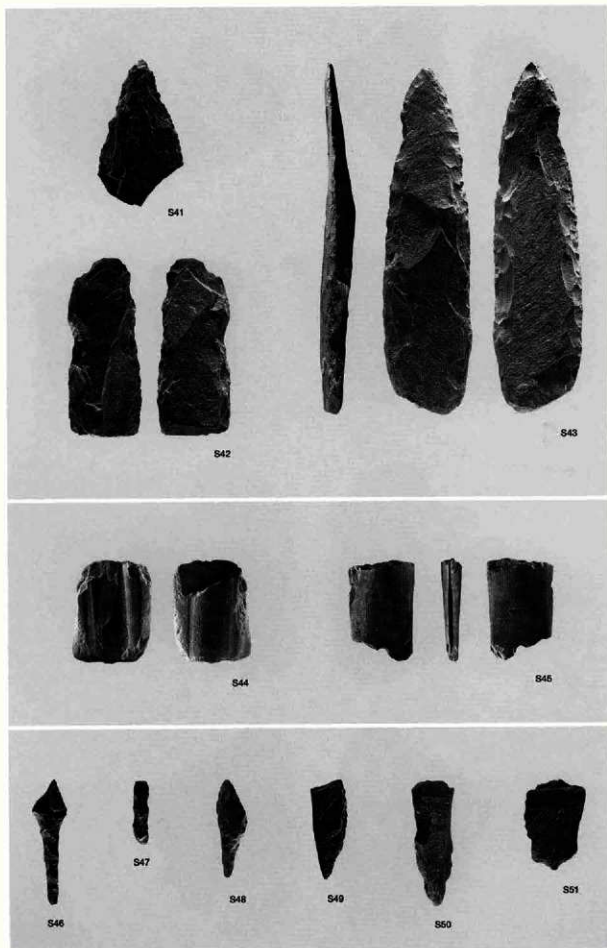
平安時代以降の土器4 (包含層)



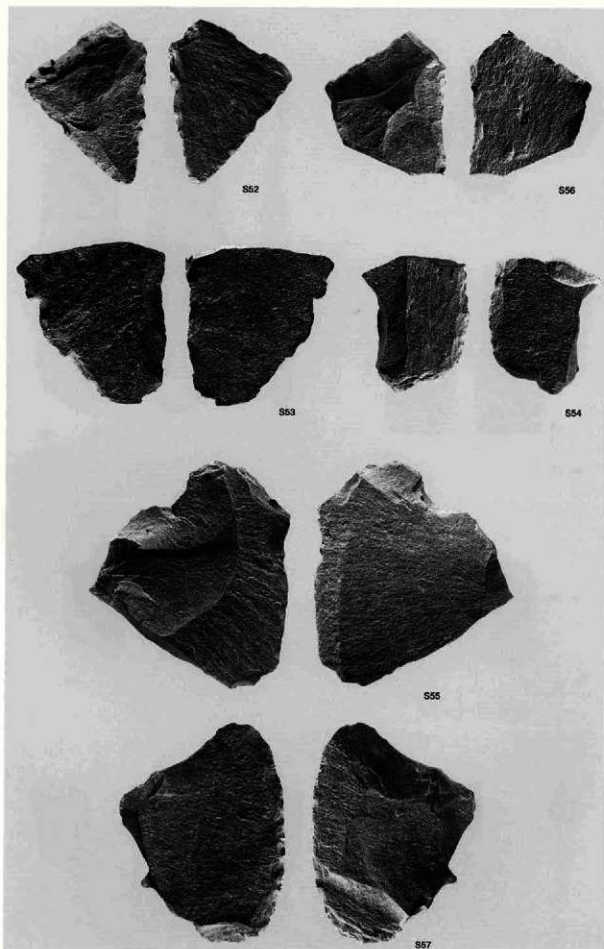
平安時代以降の土器 5 (包含層)



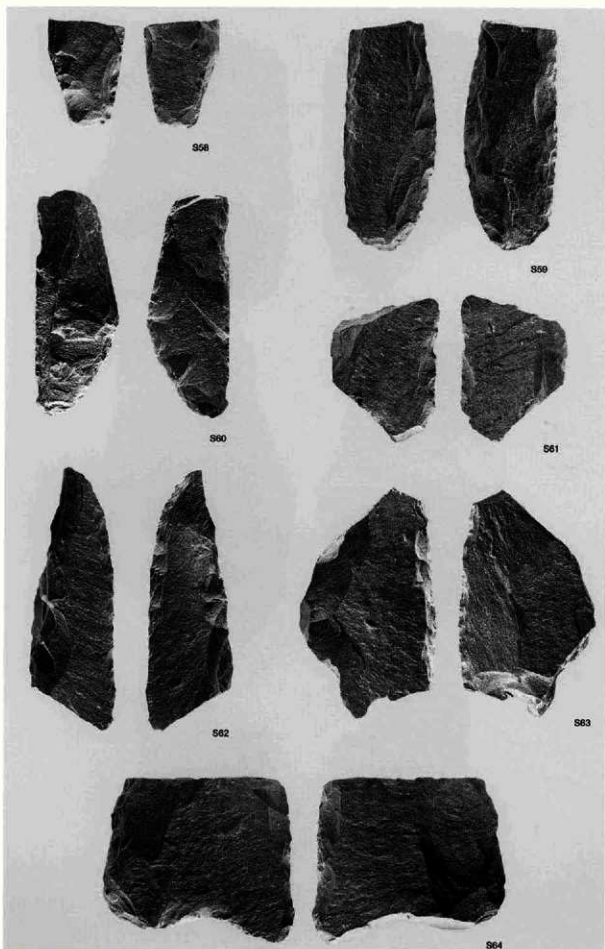
石鏃 (打製・磨製)



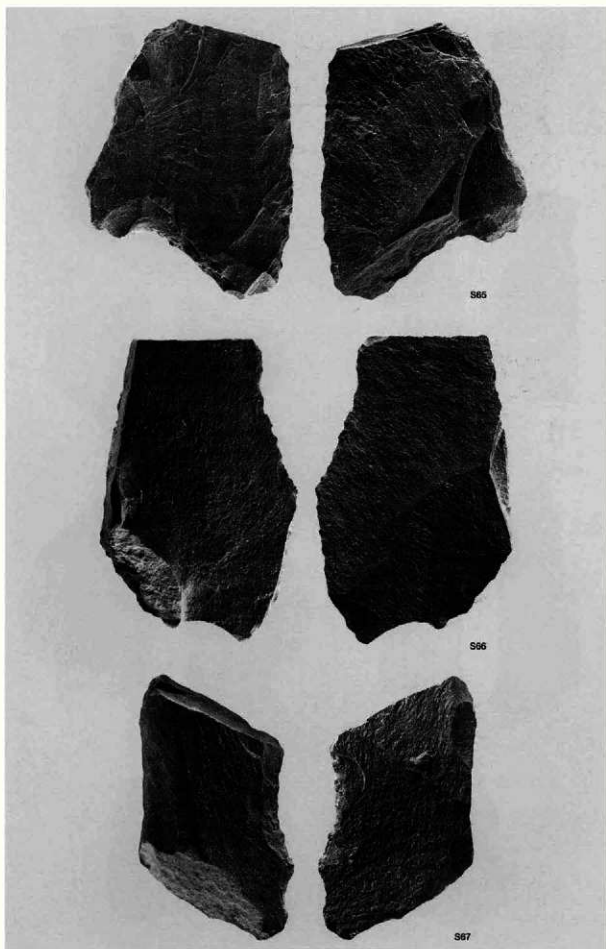
尖頭器・打製石剣・磨製石剣（銅劍型・鉄劍型）・石錐

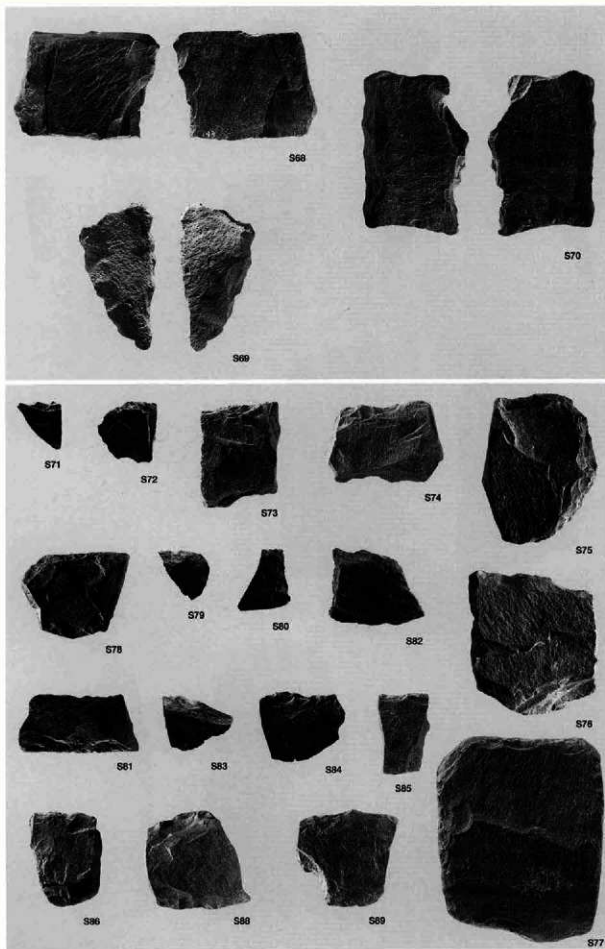


剂器1

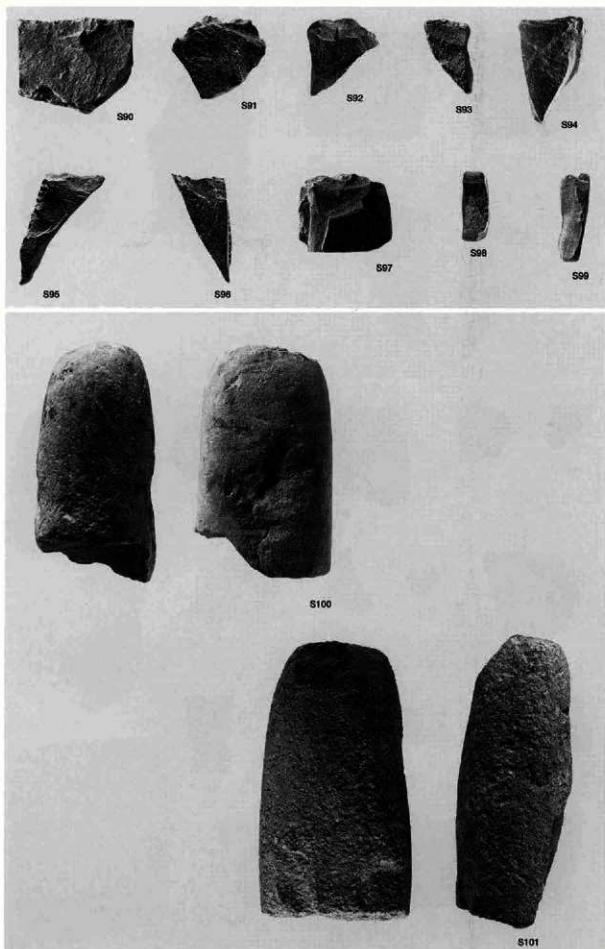


石器 2

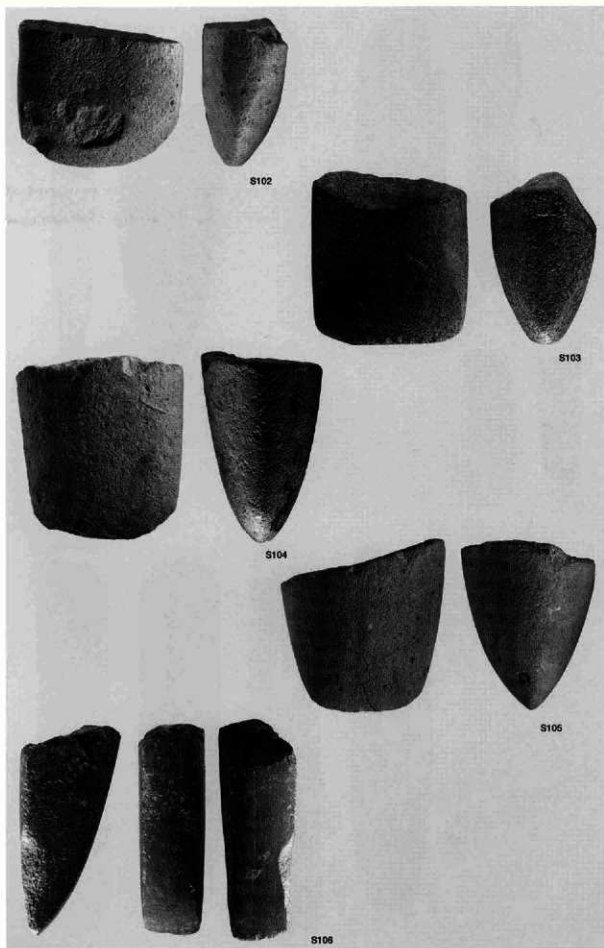




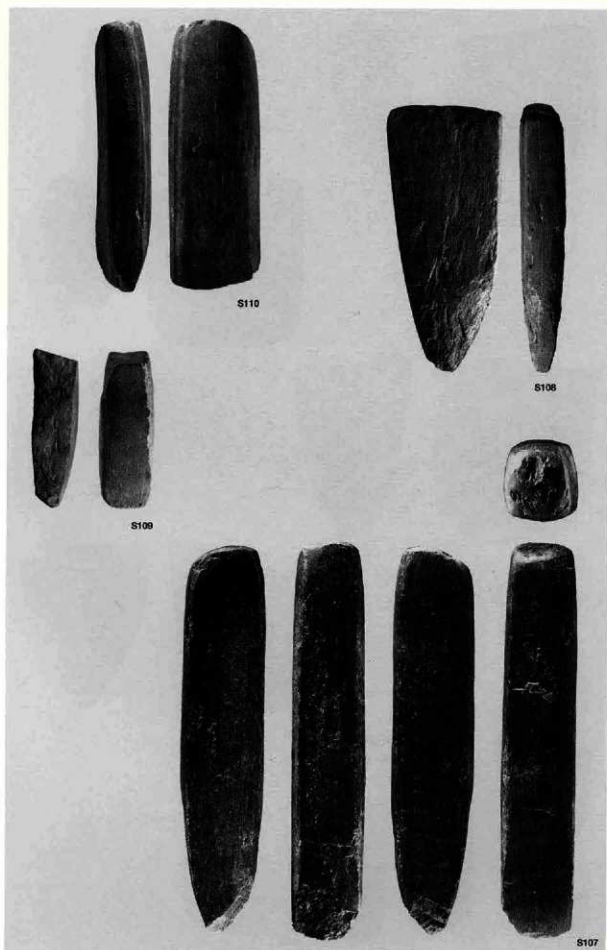
削器4・楔形石器1



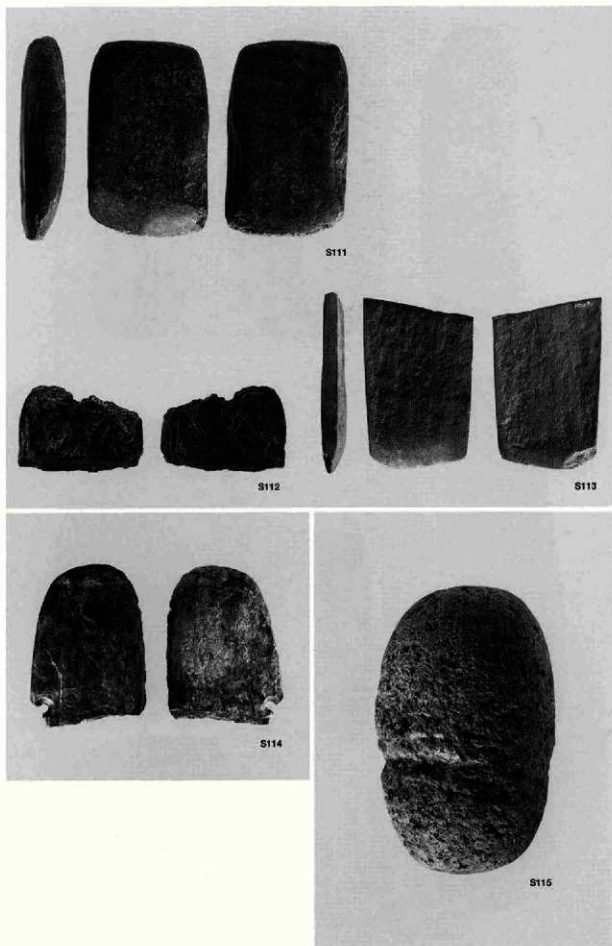
楔形石器 2・磨製石斧 1 (伐採斧)



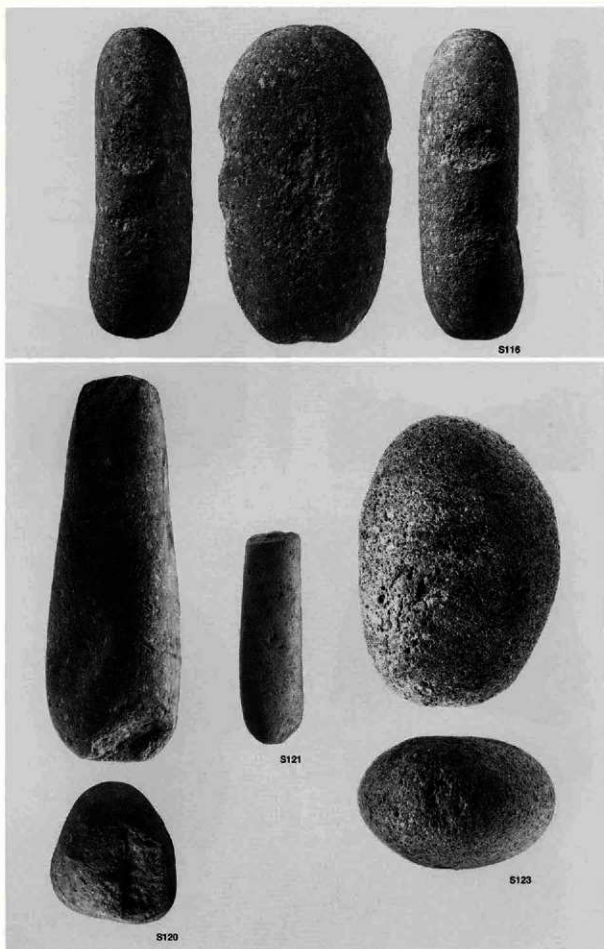
磨製石斧 2 (伐採斧・加工斧)



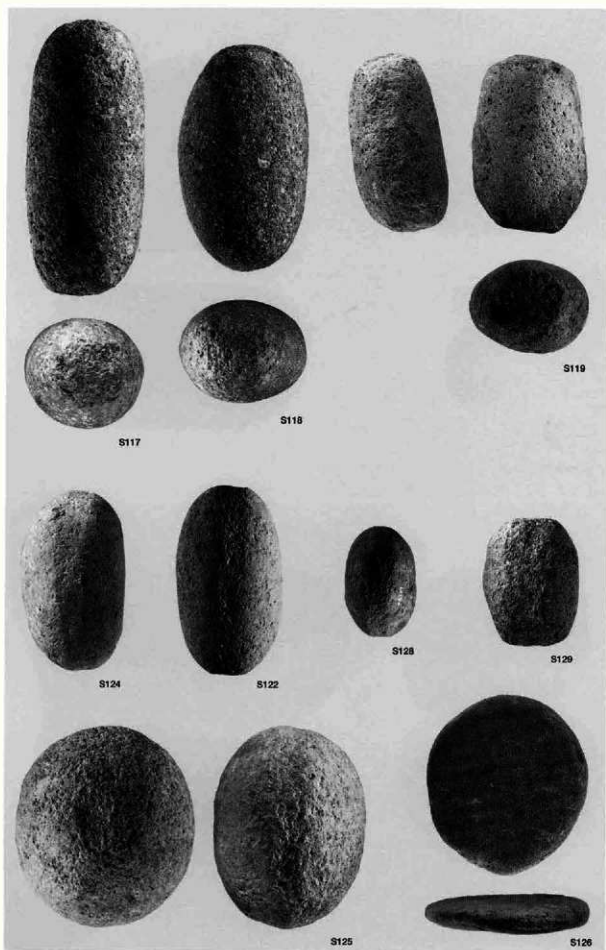
磨製石斧 3 (加工斧)

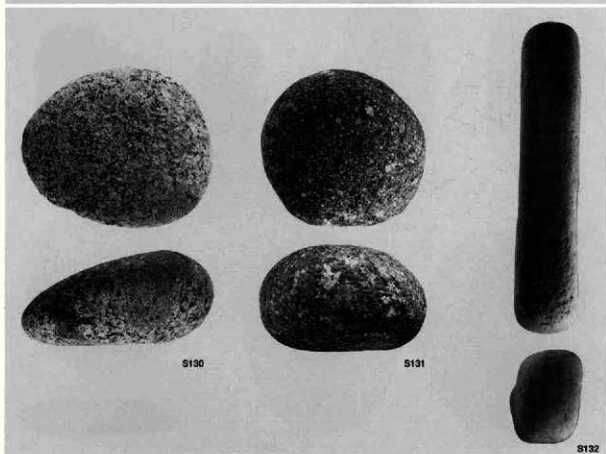
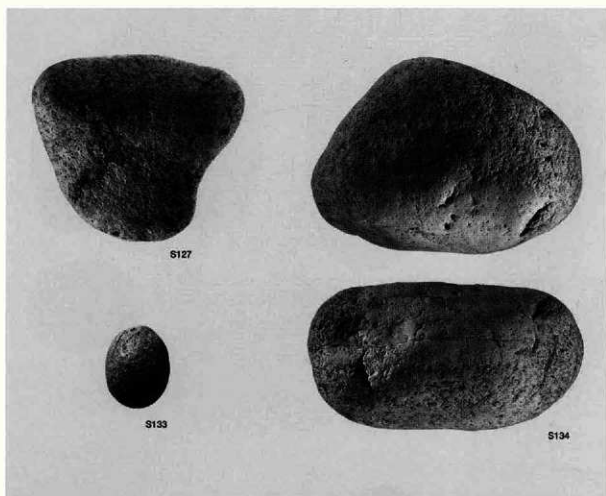


磨製石斧4（加工斧）・磨製石庖丁・石錘1

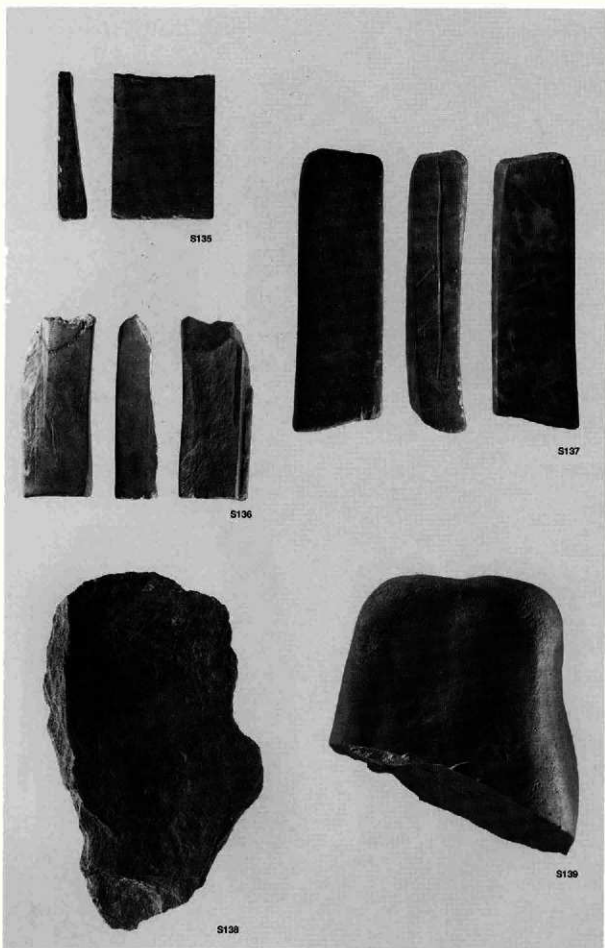


石錘 2・敲石 1

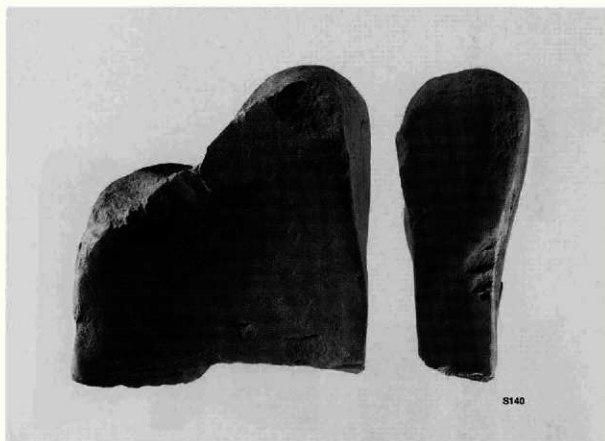




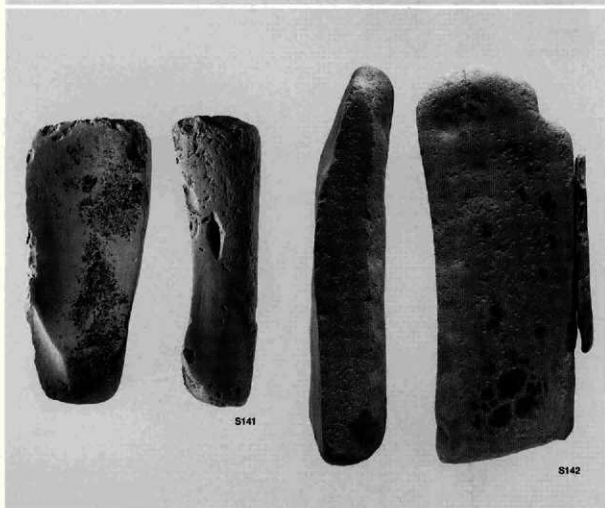
磨石



砥石 1

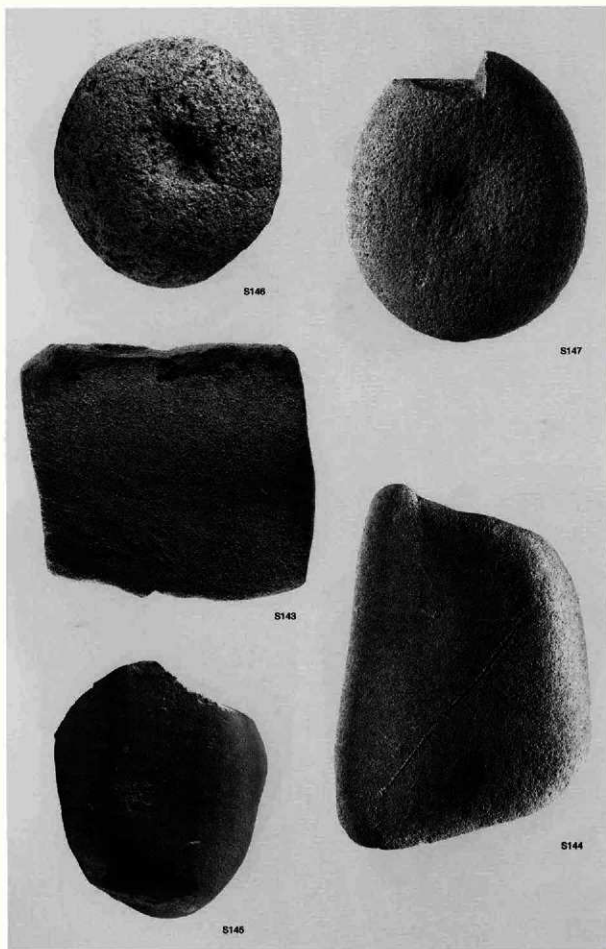


S140

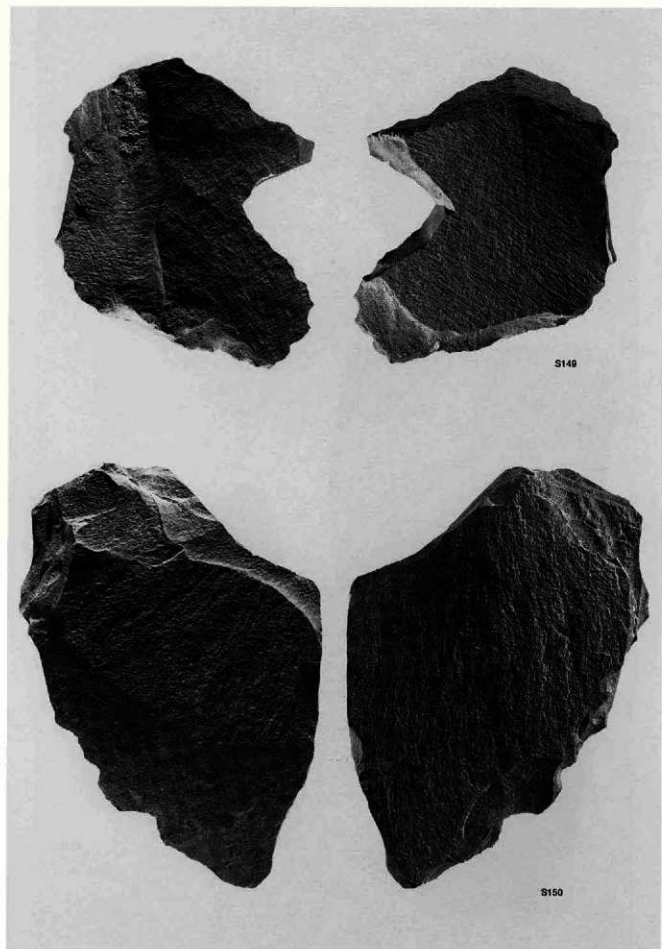


S141

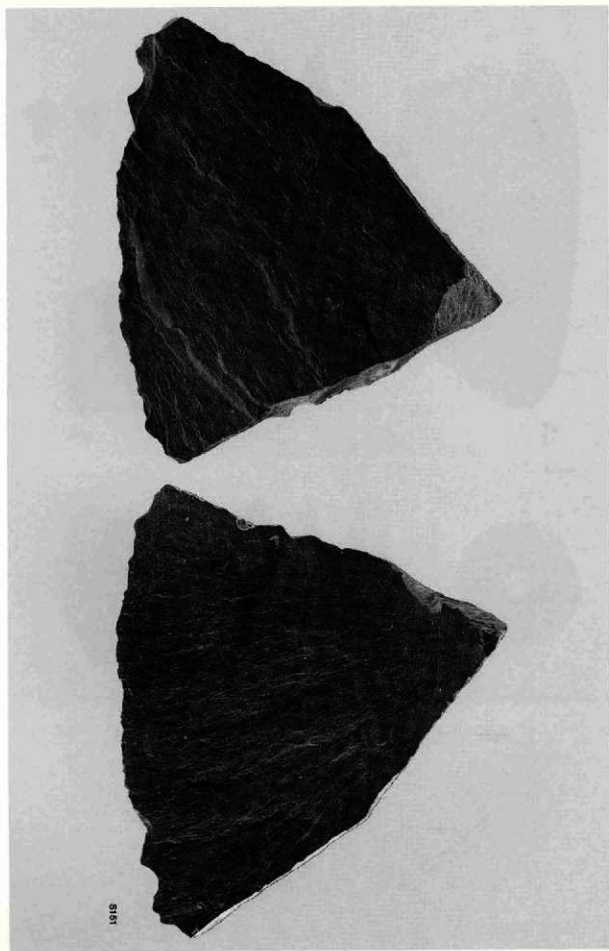
S142



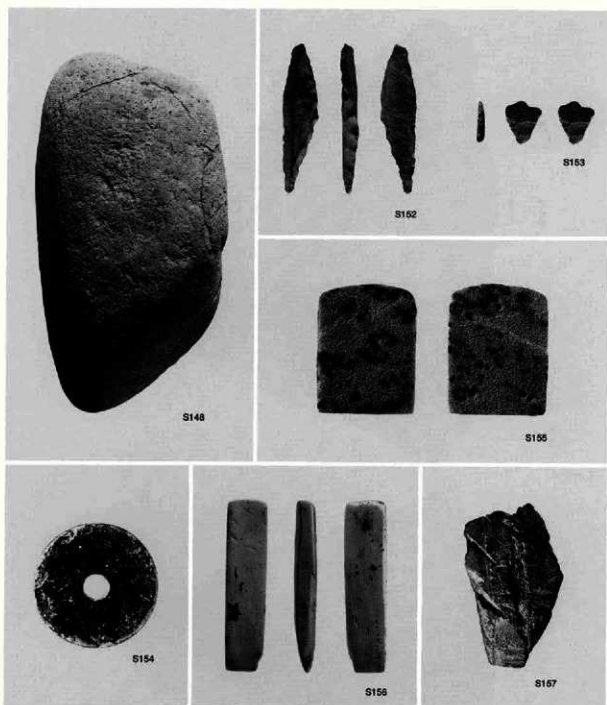
凹石・石皿



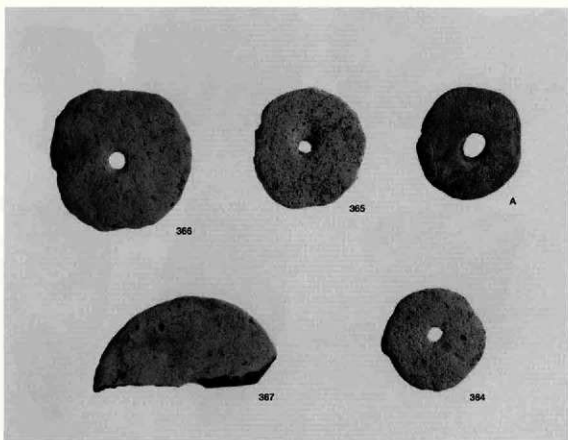
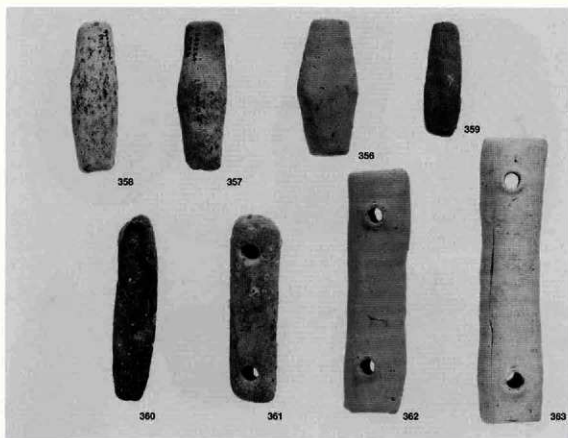
分割原石 1



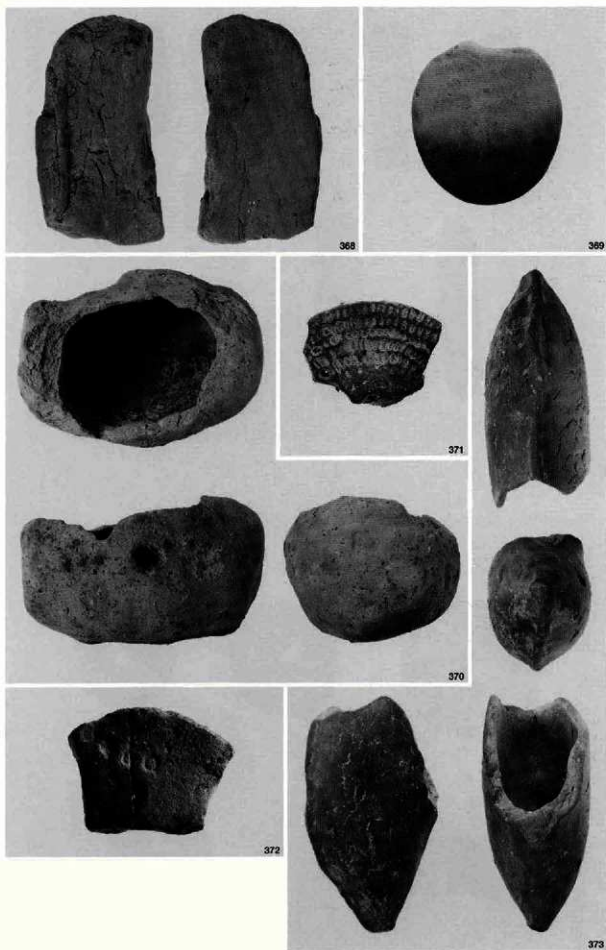
分割原石2

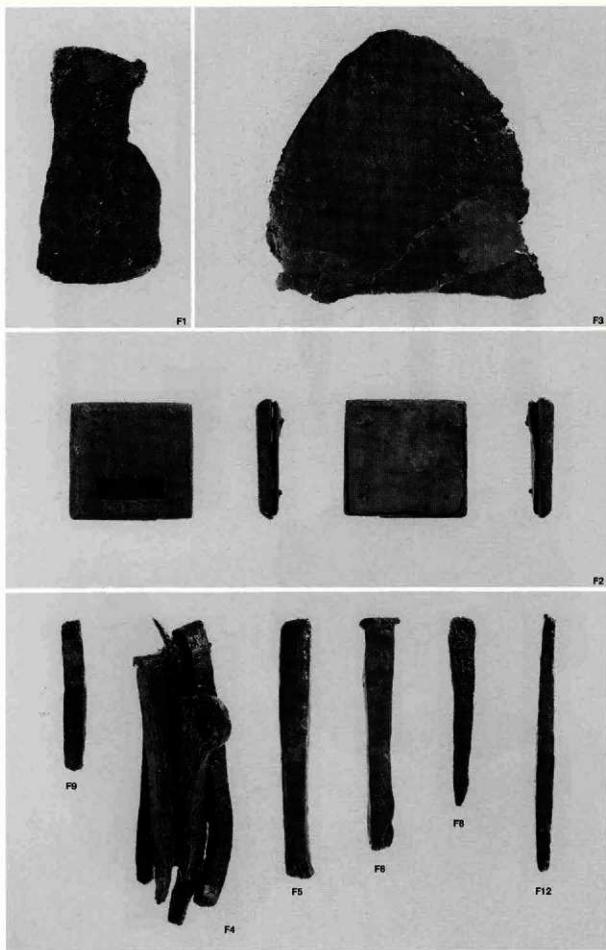


台石・ナイフ形石器・石帯・石製紡錘車・盤状石製品・石鍋

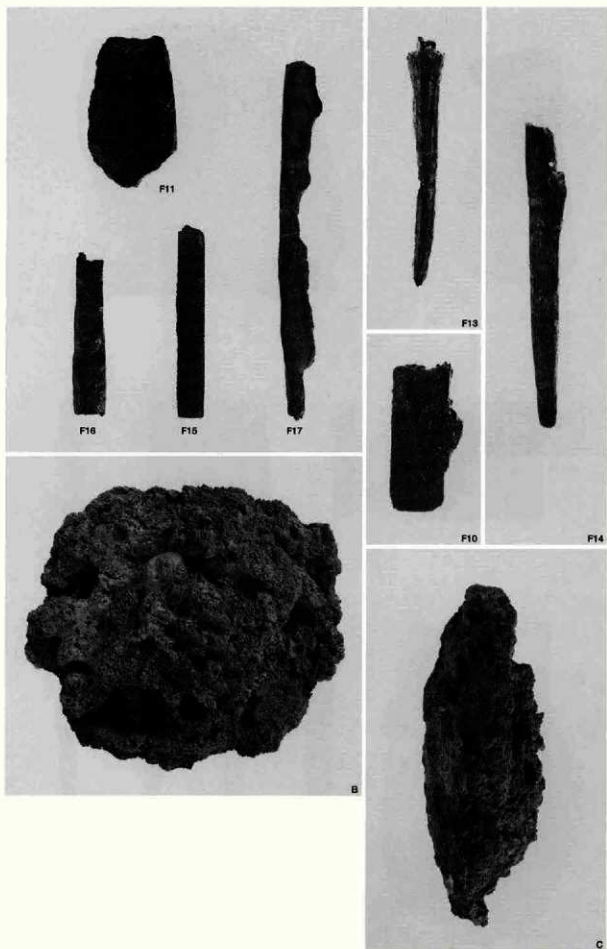


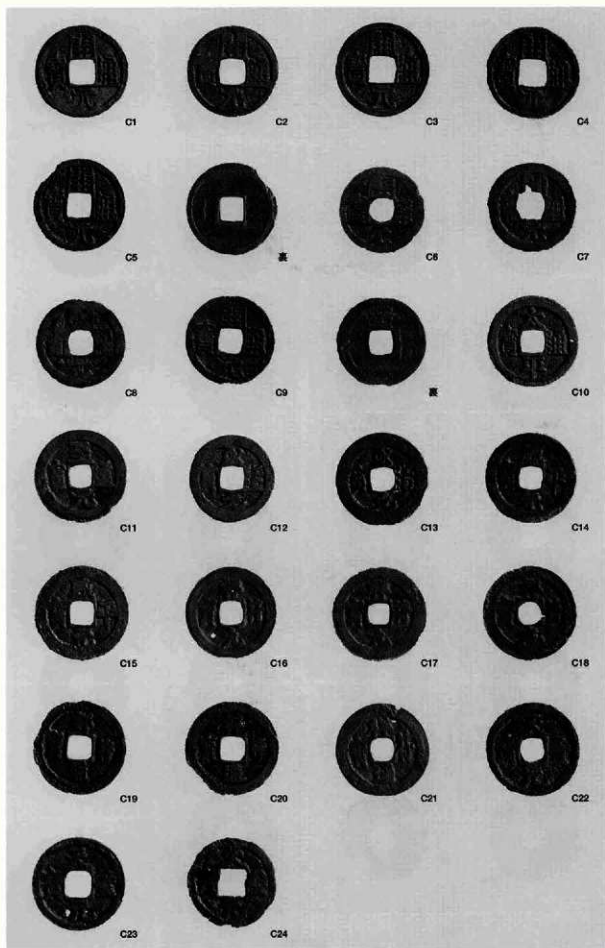
土製品1 (上:土錘, 下:有孔円盤)



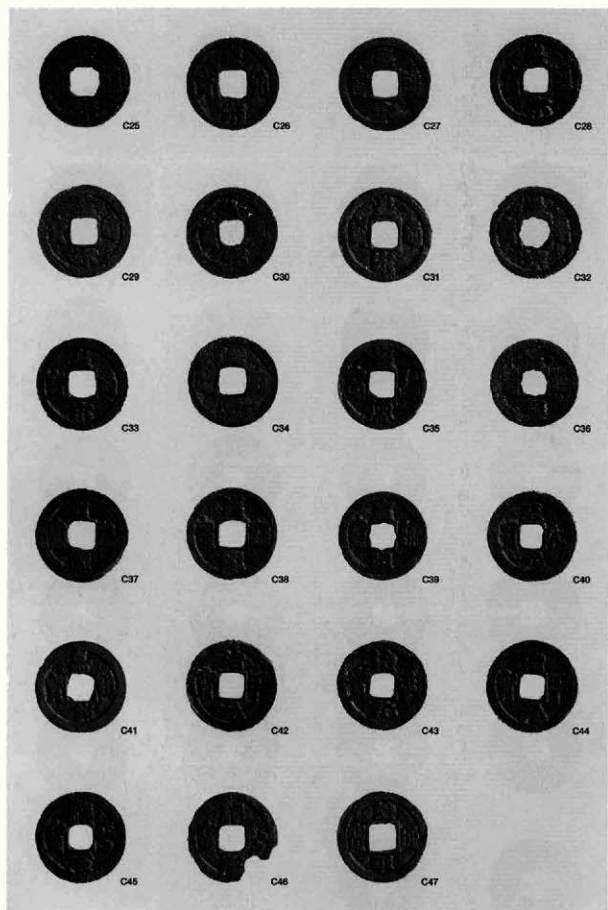


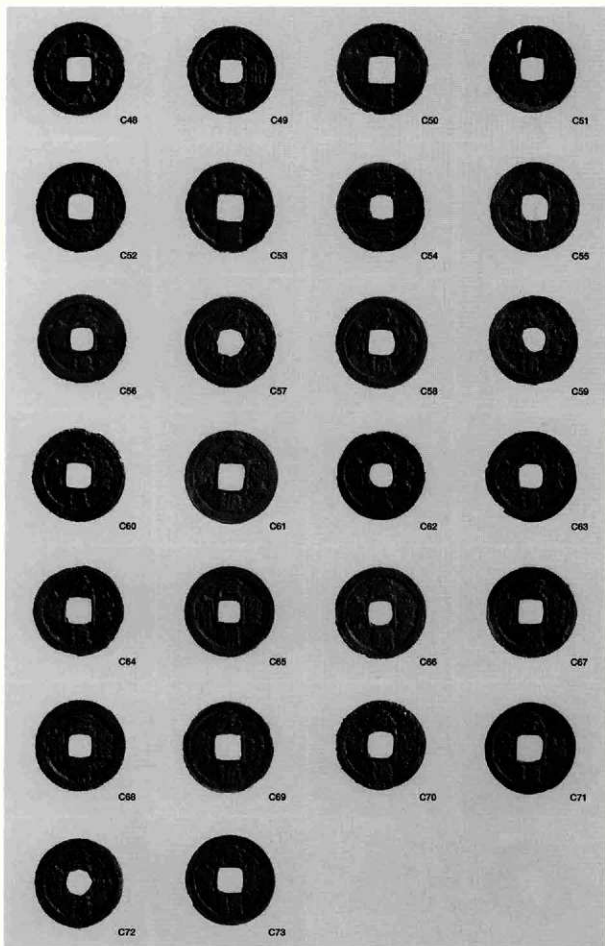
金属器 1

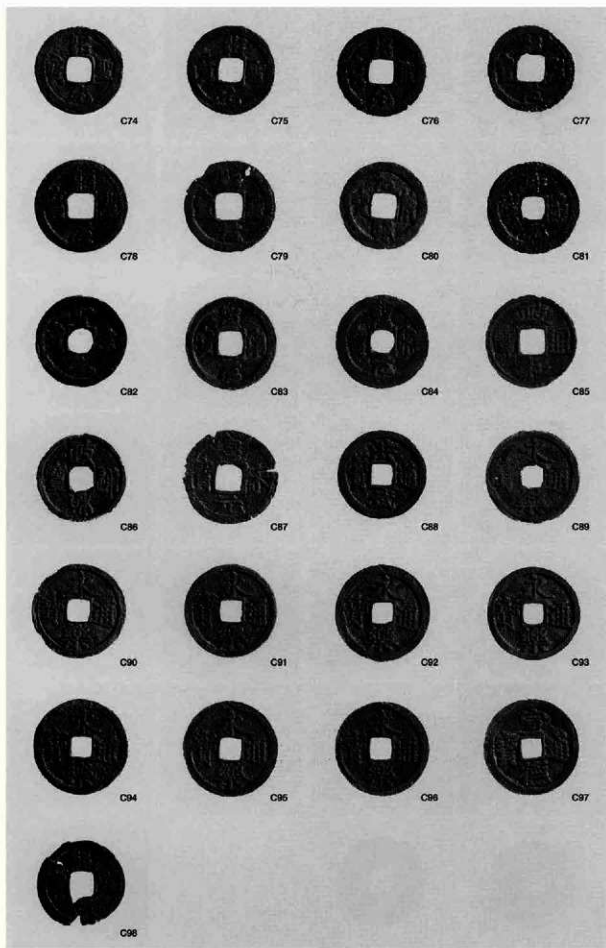


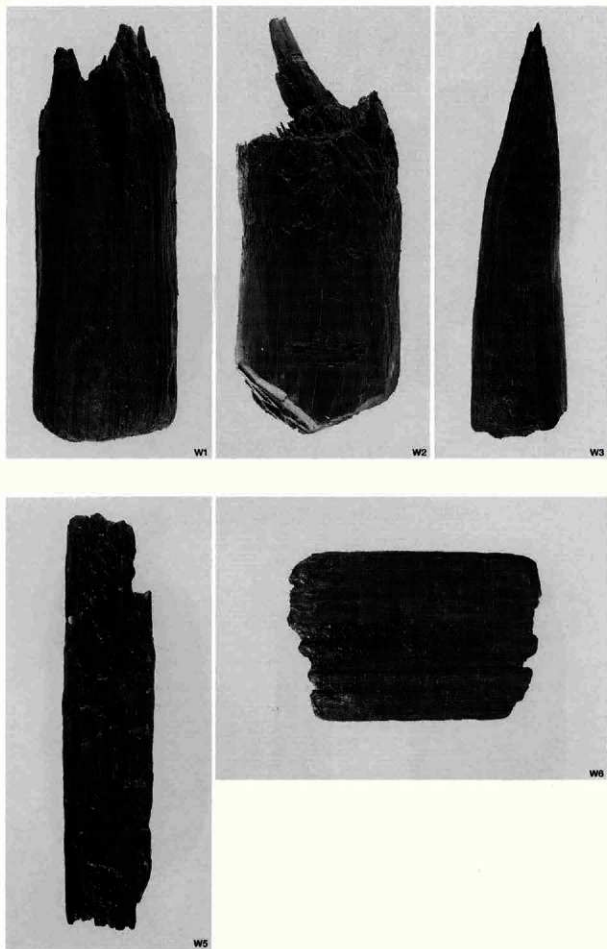


銅錢 1

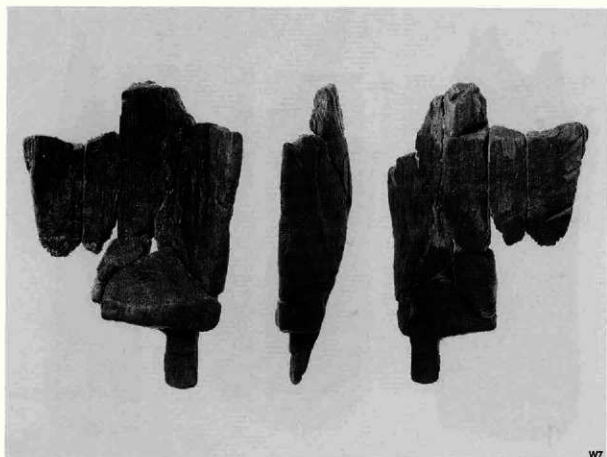




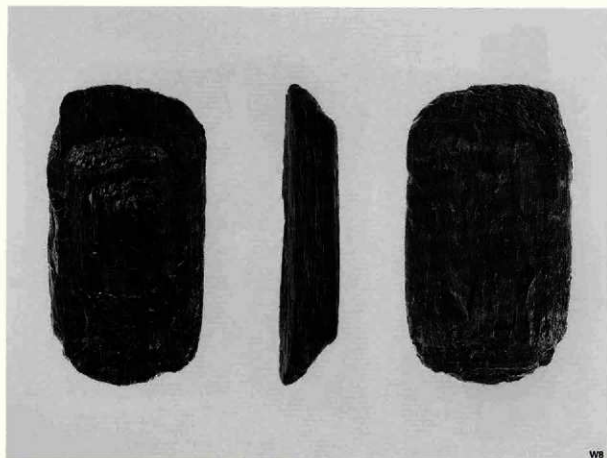




木器1 (ビット・土坑)

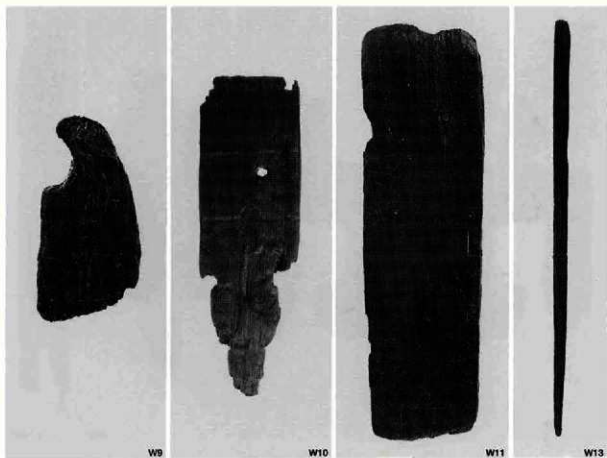


W7

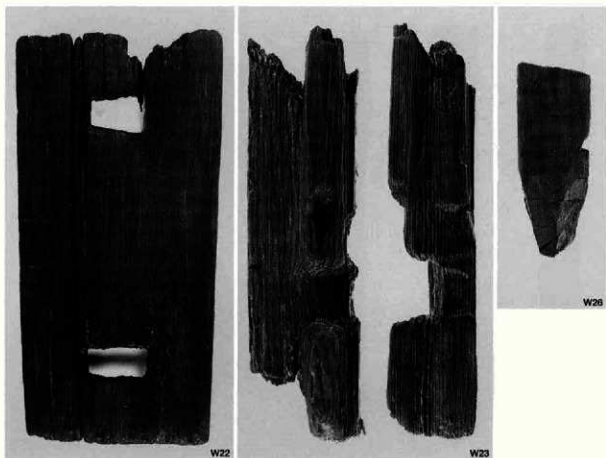
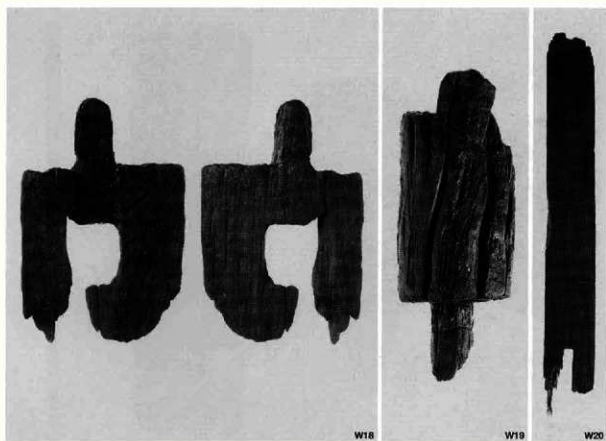


W8

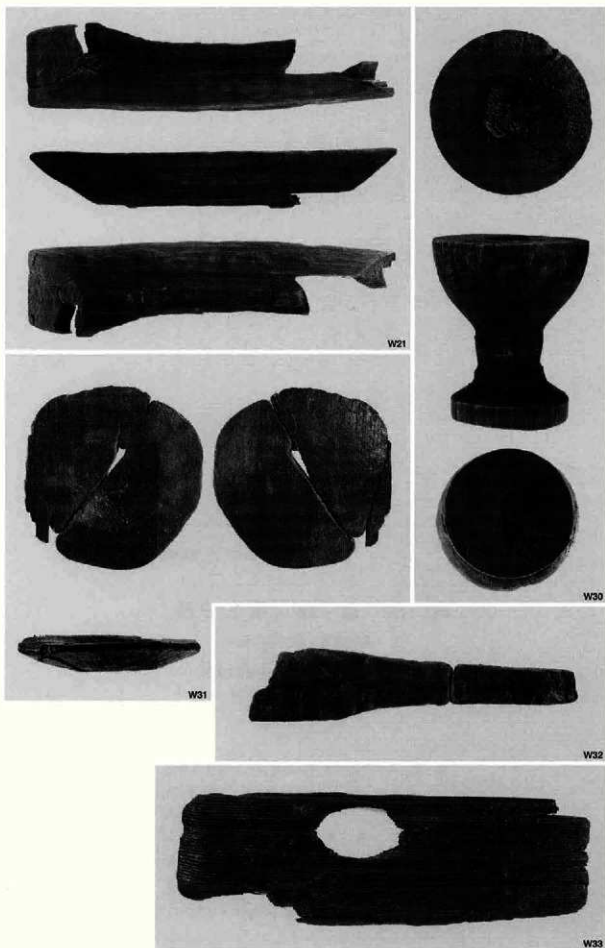
木器2 (流路)



木器 3 (流路)



木器 4 (流路)



木器5 (流路)

兵庫県文化財調査報告書 第209冊

亀田遺跡(第2分冊)

— 亀田遺跡Ⅰ地点の調査 —

太子竜野バイパス関係 埋蔵文化財調査報告書

平成12年11月発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒652-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 福田印刷工業株式会社

〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6-3
